

アンデッド・アポカリ  
プス　～ゾンビに嫌わ  
れた俺が行く終末世界  
～

波羅僧羯諦.

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ゾンビパニックの起きた世界を生き抜く、主人公の恭平とその最愛の妻、美香。

美香の死と裏切りの疑惑により恭平は失意に陥った。

死んでゾンビになろうとするが死ねず、なぜかゾンビに嫌われるという能力を得る。

能力と共に人外的な力も得た恭平は、その優位性を使って好きに生きていくと決意する。

大量のゾンビ、巨大な獣、狂気に支配された人間。

混乱を極めた世界で、世紀末覇者と化した恭平の行く先は……。

小説家になろう様にも投稿しています。

# 目次

第一話 始まり 1

第二話 避難所へ 16

第三話 崩壊の足音 35

第四話 人の本質 50

第五話 地獄の音 64

第六話 狂気の末に 83

第七話 脱出 104

第八話 感染 120

第九話 出会い 138

第十話 狂った世界で 156

第十一話 目覚め 174

第十二話 死別 192

第十三話 決意 214

第十四話 童貞を捨てる 233

第十五話 百貨店へ 255

第十六話 大掃除 277

第十七話 地下食料品売り場 296

第十八話 人として 313

第十九話 幼獣 330

第二十話 獣たち 352

第二十一話 ショットガン 370

第二十二話 協力 385

第二十三話 決戦、赤カブト 402

第二十四話 事後処理 419

第二十五話 宇宙人、再び 440

第三十七話	邂逅	703
第三十六話	山下美香はかく語りき	673
第三十五話	再会	649
第三十四話	事の真相	623
第三十三話	集合	597
第三十二話	ラ・ミステイカ	574
第三十一話	義妹	555
第三十話	美香を探して	533
第二十九話	決別	511
第二十八話	奪取	496
第二十七話	米軍基地	480
第二十六話	共同体	459

第三十八話	うさぎさん	732
第三十九話	感染拡大	765



## 第一話 始まり

世界は唐突にあっけなく終わりを迎えた。

死者が歩き、生者を襲い、そして歩く死者の仲間入りをさせる。

そんな映画でよくあるゾンビアポカリプスが現実に起きてしまったのだ。

今思えば予兆はあった。

テレビやネットで連日、海外のニュースが取り上げられていた。

「中国で薬品工場が爆発」

「パリで大規模暴動発生」

「中東でバイオテロ。死者行方不明者十万人以上」

「米国で猟奇殺人が多発」

「インドで新種の狂犬病発生か」

正直に言うところ「ああ、海外終わってんな」としか思わなかった。

海外の出来事なんて所詮は対岸の火事。

誰も真剣に考えたりはしなかっただろう。

あるニュースが流れるまでは。

「羽田空港が自衛隊により閉鎖される。犯人は細菌兵器を使用か？」

そこからのパニックはひどかった。

東京都内から避難をする車で高速道路が麻痺。

各地で車両事故が発生し、サイレンが鳴らない日はなかった。

政府が国家非常事態宣言を発令し、家から出ないようにとの避難指示が出された。

コンビニやスーパーから商品が消え、街からは人が消えた。

俺の勤めていた会社からも自宅待機の連絡が来て、妻の美香と二人、自宅のアパートの一室に閉じこもる生活が続く。

「ねえ見てよ、恭平。これフェイクかな？」

「えーどれどれ。うわっ、俺こういう動画苦手なんだけど。美香知ってて見せたでしょ」  
その頃になると、動画サイトなどに歩く死体が人を食っている映像が流れるようになった。

そしてようやく、世界が終わり始めているのだと理解した。

窓の外からは毎日のように人とも獣ともつかない叫び声や唸り声が聞こえるようになった。

ある夜、外が異様に明るいのでカーテンを少し開けて外を見れば車や家が燃えていた。



消防に電話をするも当然繋がらない。

火の勢いは激しく、いつこのアパートに飛び火するかわからない。

人食いのゾンビがいるかもしれないが、ここにいたら火に巻かれて死んでしまう。

俺と美香は当面生きていく為に役立ちそうなものをリュックに詰め、外に出る準備を始めた。

ゾンビゲームなどで主な武器となる銃器などあるわけがないから、俺はゴルフクラブを美香は柄の長いモップを持つことにした。

市のホームページに市役所を防災対策拠点にしたと書かれていたので、市役所を目指す。

スマホの地図のアプリでルート案内をしてみると、自宅のアパートから市役所まで四キロほど。

火事で歩けない場所が多そうなので、狭い路地を避け広い通りを行く。

通りには乗り捨てられた車がおびただしい数あり、四車線道路が一車線になるほどだった。

ゾンビの生態がわからないので、懐中電灯を照らすことも控えて静かに歩く。

通りの店や建物の灯りは消えているが街灯が点いているので真っ暗闇ではない。

「恭平、見て」

「なんだ？」

美香の指差す方を見れば道路脇に止まったバス内で暴れる人影が見えた。

窓が汚れてよく見えないが、抵抗する一人の女性を何人かが捕まえようとしている。捕まえる側が人なのかゾンビなのかはわからないが、ただ事ではないことだけは理解できた。

やがて、女性が捕まると、断末魔の絶叫が鳴り渡った。

「早く行こう、恭平。静かに。見つからないように」

「あ、ああ」

呆然としている俺の手をひいて歩き出す美香。

闇の中の惨劇に凍てついた心が、美香の手のひらから伝わる温かさで解けていく。

こんな状況でも冷静に行動ができる美香がとても頼もしく感じる。

俺たちは音を極力たてないようにして市役所までの暗い道を歩いた。

「恭平、止まって」

「どうした。ヤツらか？」

通りの先が車で狭くなっており、そこに佇む人が二人ほどいた。

ゆらゆらと揺れているそれは、なるほど、ゾンビらしい動きだ。

ライトの点いたままになった車に照らされてその様子がよくわかる。

サラリーマンだったのだろうか。

白いワイシャツはところどころ血で赤く染まっている。

白眼が黄色く濁り、だらしなく開けた口からは涎を垂らしていた。

「注意を引いてみる」

「どうやって？ 危なくないか？」

「任せて」

どうしてうちの奥さんはこうも漢気に溢れているのだろう。

内心で頼りない自分にへこんでいると、美香が足元に落ちていたハイヒールを拾った。

「きつとこれを履いていたら逃げられないから脱いだのね。ま、ちょうど良いわ」

「なにがちょうど良いんだ？」

「こうするのよ」

美香の腕から放たれたハイヒールは、曲線を描き、脇に停まっている車のボンネットにゴンと落ちた。

前方のゾンビがピクリと反応し、音のした方へとゆつくりと移動をする。

なるほど。ヤツらゾンビは音を頼りにしているようだ。

「今よ。ゆつくり、静かに」

「わかった」

まるで映画やドラマで見る特殊部隊のように動く。

まあこれは自分の中でだけであって、はたから見たら鈍臭そうな男がワタワタ動いているのだろうけど。

音のした方へゆっくり歩くゾンビの後ろを、静かに通り過ぎようとした、が。

「ウウウアア……」

「グアアアア……!!」

「くそ、気づかれたわ」

二人のゾンビがこちらを振り向き、鼻と眉間にしわを寄せ唸り声をあげた。

先ほどよりも早く歩いてくるゾンビを見て、ぞわりと背中に寒気が走る。

明らかに、ヒトではないなにか。

人間の形をしているのに、明らかにそれとは異なる。

息がうまくできなくなり、思考が働かなくなった。

この時になってようやく本当の意味で、ゾンビや人食いの意味がわかったのだろう。

体が拒否反応を起こし、恐怖で身がすくんでしまった。

俺も、食われてしまうのか。

「恭平。恭平！　ゾンビが集まってくる！　走って！」

「う、あ、ああ」

美香の声で我にかえった。

今は逃げることに集中しないと本当に死ぬ。

腰の引けている俺の手を掴み、美香が先導して走っていく。

どこにこんなな潜んでいたのかと思える量のゾンビを振り切って、市役所までの道を必死に走る。

時折車の陰から出てくるゾンビは、美香の持つモップに押されてよろめいていた。

俺はその隙に走り抜けるだけ。

ある程度ゾンビとの距離が離れたところで、美香から「恭平」と声がかかった。

「もう少し、ゆっくり。早歩きくらいに」

「そうだな、流石に息が続かない……」

「体力つけないとね」

「そうだな……」

俺はお前と違ってずっと文系の部活だったんだよ、なんて言い訳が心の中に浮かぶ。

上背があるがヒョロい俺のどこを美香は気に入っただのか。

もつと筋肉質で頼りがいのある体には憧れる。

「人が居るわよ」

「本当だ」

市役所近くになると、前方に俺たちと同じように避難してきたのか、何人かの人が歩いている。

お婆さんを背負った男性、小学生が二人、ギャアギャアとうるさい高校生グループ。

高校生グループは他の人の姿が見えて安心したのか、声が大きくなっている。

「これ、マズくないか？」

「うん、マズい。後ろ見てみてよ」

「後ろ？ うわっ」

振り返ればたくさんのゾンビが、通りをこちらに向かってきている。

声に誘われて来たヤツも居れば、俺と美香を追ってきたヤツも居るだろう。

ヤツらの執着心はヒグマ並なのかもしれない。

「どうしたらいいと思う？」

「市役所まで走る」

「他の人は？」

「騒いでいるヤツらは見捨てる。子供は助ける」

「あの老人は？」

「家族が助ける」

「んー、まあ緊急事態だし仕方ないか……」

美香のわかりやすい指示に従い行動に移す。

できるだけ安心させられるような笑顔を作り、小学生の方へ近づく。

低学年と高学年の女の子二人だった。

「やあ、君たちは二人だけで避難しているのかい？」

「私たちも市役所に避難しているんだけど一緒に行くこっか」

「あ、はい。よろしくお願ひします……」

高学年の子は返事を返してくれたが、低学年の子は不安そうにこちらを見上げていた。

良く見ればスカートから出ている膝が血だらけだ。

「転んじやったのかい？ 痛そうだね。おじさんがおぶつてあげようか？」

「え、あ、あの、えと」

「良いのよ。足痛くて歩けないでしょ？」

「すみません、ありがとうございます……」

高学年の子に笑顔を向けてから低学年の子をおぶる。

背中にしよっていたリュックは美香が持つてくれた。

美香が高学年の子にそと耳打ちをしている。

後ろからゾンビが来ていることを伝えたのだろう。

「え、いや……。早く逃げないと……！」

「静かに、冷静に。大声を上げたらゾンビがよって来るからね」

「は、はい」

「それじゃ、気持ち早めに歩くよ」

美香の早歩きに高学年の女の子はついていけず軽く小走りになっていた。

俺も低学年の女の子とはいえ一人一人をおぶりながら早歩きするのはとても辛かった。

さきほどのお婆さんを背負った男性を思い出し、尊敬の念を抱く。

重いリュックを二つ持った美香が誰よりも早く歩く姿にも感服する。

うるさい集団とだいぶ離れたところで、前を歩いていた美香が「嘘……」と呟いた。

「美香、どうし……」

どうした？ と続けたかったが、俺の口から言葉は出てこなかった。

市役所が、大量のゾンビに囲まれていたからだ。

「どうしようか？」

「考えてる。……できれば朝になって明るくなってから市役所の様子を見たいわ」

「なるほど。どこかで一晩あかすことになるのか」

市役所前の通りは、少し寂れた個人商店が並んでいる。



少し先に頑丈そうなシャッターの下りたバイクショップを見つけた。

「あそこにしよう。あのシャッターならそうそう壊されることはなさそうだ」

「そうね。でもどうやって入ろう？ きつと鍵が閉まっている」

「壁際に俺が立つから、足場にして登って二階の窓から侵入できないかな」

「やってみましょう」

おぶっていた女の子を降ろし、美香からリュックを受け取る。

周りを警戒しつつバイクショップまで行く。

車が停まっている場所は、隙間にゾンビがいないかを入念に確認して進む。

幸いなことに、一人のゾンビとも会わずに済んだ。

バイクショップのインターホンを押してみるも何の反応もなし。

物音もしないから、中にゾンビはいなさそうだった。

「この辺のゾンビは皆、市役所に集まっているのかも」

「そういうえば市役所に近づくとつれゾンビを見る回数が減ったな」

「ということは相当数のゾンビがあそこにいるってことかあ。きついね」

「まあ、朝になってから確認すればいい。今は一刻も早く安全な屋内に避難したいよ」

「そうね。あ、恭平、そこ。そこに立ってて」

「了解」

登りやすいように中腰になり足を開く。

美香が俺の太ももに足をかけ、肩に乗り、二階の窓の格子を掴んだので、足を持ちぐつと背伸びをして持ち上げてやる。

美香の引つ張る力と俺の押す力が合わさると、意外と簡単に二階の窓からの侵入に成功してしまった。

「やった。窓の鍵が開いている。ちよつと待ってて、玄関開けてくる」  
「気をつけて」

美香は「わかった」と言うの家の中に入っていった。

一分もしないうちに、カチャと玄関の扉が開いた。

「早いな。ちゃんと警戒した？」

「うん、したした。ほら早く入って」

バイクショップの中は、一階に店舗と作業場があり、二階に仮眠室と倉庫と簡易的なキッチン、一畳くらいのシャワー室があった。

持ち主もゾンビもおらず、綺麗なものだった。

「とりあえず、その子の治療しちやおつか。薬箱見つけた」

「そうだな」

背負っていたリュックを仮眠室に置き、薬箱から消毒液や化膿止めを出す。

女の子にはシャワー室で美香に足を洗ってもらおう。

「痛い?」

「ううん。平気だよ!」

「偉いね。何年生?」

「二年生!」

笑顔で美香に返事をする女の子。

元気に話す様は微笑ましいが、人食いゾンビから身を隠しているというこの状況ではもう少し声を小さくして欲しいと思った。

人差し指を立てて口に置く仕草を見ると、女の子は「あつ」と言っ慌てて口を押さえた。

素直で賢い子だ。

女の子の治療も終わり、改めて二人と向き合う。

簡易式キッチンにはテーブルもあつたので、そこで。

「ええと、そう言えば自己紹介をしていなかったね。俺は山下恭平やましたきようへい。おじさんでもなんでも好きなように呼んでね」

「私は山下美香やましたみか。私たちは夫婦なの。お姉さんって呼んでね」

「あ、はい、えっと、飯塚優子いづかゆうこです。よろしくお願します」

「飯塚恵理奈です！」

高学年の子は優子ちゃんで、低学年の子が恵理奈ちゃんね。覚えた。

二人は地域住民と一緒に集団で避難していたところをゾンビに襲われ、両親とはぐれてしまった。

避難先は市役所だったので、両親と合流できるだろうと二人だけで向かっていると、ろを、俺たちに声をかけられたそうだ。

「うん。きつとご両親は市役所の中で待っているはずだよ」

「朝になったらすぐ行くから、優子ちゃんと恵理奈ちゃんはもう寝ちやいなさい？」

「うん、もう恵理奈ねむい……」

「あの、でもお布団ひとつしかないけど、お二人はどうするんですか」

優子ちゃんが心配そうに聞いてきた。

正直、寝ることとか考えていなかったが安心させるべく笑いながら言う。

「大人は少し寝なくても平気なのさ」

「下にソファがあつたから、そこで寝るわよ」

「うん。下のソファで寝るから平気なのさ」

「ぶつ、ふふふ。わかりました。じゃあおやすみなさい」

優子ちゃんが笑いながらそう言ってきたので「おやすみ」と返す。

張り詰めた顔をしていたから少し心配だったが、これで少しでもリラックスできれば良いけど。

仮眠室に行く二人を見送ると、美香がため息を吐いた。

「優子ちゃんが笑ってくれて良かった。妹を守るために必死だったのね。まだ小さいのに。かわいそう」

「そうだね。守ってやらないと」

「うん。ご両親に届けるまでは……、せめて市役所での安全が確保できるまでは私たちが守るよ」

「ああ」

決意をする美香の横顔を見て、いろいろと考えてしまう。

俺と美香の付き合いは美香が十八歳の時からだから七年。

子供ができたら結婚をしようと約束していたが中々恵まれず、七回目の交際記念日に婚姻届を役所に提出。その一週間後にゾンビパニックが起きた。

実は新婚だったのだ。

妊娠なんてしたらゾンビから逃げられず死んでしまうかもしれない。

理性では理解していても本能はそうではなかったのだろう。

その夜、このような状況だというのに、久しぶりに美香と燃え上がった。

## 第二話 避難所へ

翌朝、狭いソファで重なるようにして寝ていた美香の下から這い出て、シャワー室へ向かう。

辺りはまだ薄暗い。

壁にかけられた時計を見ると朝の五時だった。

シャワーで汗や汚れを流し、新しい下着に着替える。

四日分の着替えしか持ってこないから、市役所に入れたら洗濯をさせてもらおう。

窓を開けて一服をする。起き抜けに吸う一本は、至福の味だ。

煙草の煙をくゆらせながら、そういえばと自宅アパートの方をしてみる。

手元から上がる白煙の向こうには、建物群の間から黒煙が立ち上っていた。

車線を埋めていた車に引火し始めたら、この街全てが火の海になるだろう。

そうなったら火事からゾンビから追われ逃げ続けることになる。

現在火の手は見えないので、そんな惨状にならないことを祈るばかりだ。

市役所の方からはゾンビのうめき声が続いている。

人間という餌を前にしてお預けを食らっている怨嗟の声か、はたまた獲物にありつけた歓喜の声か。

前者である事を願うばかりだ。

「おはよ。ちゃんと寝れた？」

「ああ、おはよう。眠気はないな」

「そ。私シャワー浴びるね」

煙草を二本吸い終わる頃に美香が起きてきた。

美香は少しダルそうだったが、シャワーを浴びればすつきりするだろう。

もうすぐ朝の六時になる。

昨晚、何も食わずに寝たから腹の虫がうるさい。

何か食べられる物がないかとキツチンを探す。

ドアがひとつしかない冷蔵庫にはお中元で貰えそうな分厚い塊のベーコンがあった。

他にビールがたたくさんと種類がいくつもある缶詰。

このバイクショップの持ち主は晩酌を嗜んでいたようだ。

「すみません。平和になったらお返しするので」

ベーコンと缶詰をいくつか頂戴する。

キツチンの上の棚からは缶パン、いやパン缶が出てきた。

これもお中元で貰うような箱に入っていて、味が五種類もあって驚く。

俺や美香は酒のつまみのような缶詰とペーコンで良いとしても、恵理奈ちゃんのような小さい女の子には不向きに思えて、胃に優しいものが欲しいところだった。

このパン缶はありがたい。

ペーコンを一人分で一センチの厚さに切り分ける。

残りが二十センチ近くあったので、ラップで包んでリュックの中にしてしまう。

パン缶も二十個あったので、朝食用に一人一缶用意してあとはリュックにしまう。

冷蔵庫の缶詰も詰めると、リュックがパンパンだ。

オイルサーディンとサバ味噌缶をコンロで直接あたためると、あたりにいい匂いが漂った。

「あ、良いね。お酒欲しくなるやつ」

シャワーを終えた美香が髪をタオルで拭きながらやって来た。

「冷蔵庫にビールがあるんだよなあ」

「うわ、その情報はいらなかった。我慢できるかわかんない」

くだらないことを言いながら笑いあう。

「朝飯作っちゃうからさ、子供たち起こしてきてよ」

「ん、了解」



美香が仮眠室に行ったのを見送り、パソコンを焼き始める。

このパソコンでパソコンエッグを作ったら絶対に美味しいのに、冷蔵庫に卵は無かった。

朝食では予想に反して子供たちの缶詰とパソコンに対する食いつきが良かった。

追加の缶詰とパソコンをペロリと平らげた子供たちは、今はシャワーを浴びている。

俺と美香はバイクショップの屋上に出て、市役所の様子を窺っていた。

「やっぱり囲まれているわね」

「うん。でもバリケードがちゃんとしてある。きつと中に人がいるんだよ」

「でもあれじゃ外からの入り口が無くなっちゃって入れないでしょ。ゾンビも居るし」

「そうだな。どうやって入るか、か」

市役所のバリケードは、大型トラックや大型バスを並べ、その隙間から単管パイプを突き出す形で補強しているようだ。

あのトラックやバスを乗り越えるのは、できなくは無いが時間がかかるだろう。

もたもたしていたら、ゾンビの仲間入りは間違いなさそうだった。

「とりあえずこの家に使えそうな物がないか探してみよう」

「そうね。バイクでバリケード飛び越えられるかもしれないし」

そんなのスタントマンじゃないんだから、さすがに無理だろう。

美香も本気で言っているわけではなさそうだけど。

「モトクロスタイプのほうが飛べそうよね」

……本気なのかもしれない。

美香は二階の倉庫を、俺は一階の店舗と作業場を探すことにした。

店舗にはバイクの他にヘルメットやブーツなどが置いてあった。

なるほど。身を守るのに使えるかもしれない。

ゾンビが人を食うのは、感染させて仲間を増やそうとしているという説をネットで見た。

ヤツらに噛まれたら絶対に感染して死ぬらしい。

感染した状態で死ぬとヤツらの仲間入りは確定らしいから、なにがなんでも噛まれないように対策をしないと。

続いて作業場に行く。

「これは、すごいな……」

それを見て思わず呟いてしまった。

ワークベンチ横のハンガーに吊るされているそれは、どうやらライダースーツを改造

したもののようだった。

肩や背中、腕に足に腹に胸に、あらゆる所にゴツイ装甲が取り付けられていたのだ。明らかにバイク用のプロテクターにしては物々しい。

似ているものを探すとすると、ゴツサムシテイで活躍するダークヒーローの着ているスーツが一番近いかもしれない。

これを着れば全身を守れそうだが、コスプレをしているようで着るのに勇気がいる。結局無難に普通のライダースーツとヘルメット、ブーツを持ち二階へとあがる。

するとそこには、下で見つけたゴツイスーツに身を包んだ美香がいた。

「あ、恭平。これ良くない?」

「あ、ああ。良いと思うよ。このブーツとヘルメットで無敵感が増すんじゃない?」

「良いわね」

美香の着るスーツはレディース用なのだろうか?

体にピッタリ張り付いているように見えて少しだけエロティックだ。

プロテクターの部分は、硬質のプラスチックでできているようだ。

下で見つけたスーツには鉄板がふんだんに使われていたが。

美香がこれまたゴツイブーツを選んで履きコスプレは完成した。

「うわあああ、お姉さん覆面ライダーみたい!」

「かつこいいです」

シャワーから出てきた二人が美香を褒めると、美香は空手の正拳突きポーズを決めた。

気に入っているようだ。

美香の着ているスーツのグローブには、甲の部分と指の部分に固そうな鉄の補強がされている。

中学高校と空手をやっていた美香にあんなので殴られたら、ゾンビと言わず人間ですらいちコロだろう。

「恭平もこれに着替えようよ」

美香が、俺が面食らって避けたゴツイスーツを手に笑顔で言った。

「ええ……。コスプレみたいで嫌なだけ……」

「でもほら、バイクで飛んで着地失敗したとき、それ着てれば無事っぽそうじゃない？」  
あれ。美香、本当にバイクで飛ぼうとしてるのか？

いやいや。素人には無理だろう。

俺が余程変な顔をしていたのか「冗談よ」と美香が言った。

「うーん、バリケードを乗り越えるときにゾンビと取っ組み合うかもしれないし、この際羞恥心は捨てるか」

「命と天秤にかけられるもんじゃありませんよ。さすがに子供用のスーツは無かったから私たちが盾になって守らないと」

美香が本当にヒーローに見えた。

映画で見たことのある女ダークヒーローのような出で立ちも相まって頼もしさが増す。

スーツを着てみたら、思いのほか軽くて驚いた。

プロテクター部分は動きを阻害しないし、良いかもしれない。

ただフルフェイスヘルメットは慣れていないからか、頭が重く感じて歩きづらかった。

「見てみて。これ可愛くない？」

「かわいい！ ねこさん！」

恵理奈ちゃんになにやら自慢しているのは、耳のついたフルフェイスヘルメットをかぶった美香だった。

あんな物もあるんだ、と感心した。

バイクの趣味は俺にはわからない世界だった。

美香はヘルメットの目の部分——バイザーと言うのだろうか——が黒塗りになっていて顔が見えない。

ゴツイスーツと揃うと威圧感がすさまじい。

俺のヘルメットはミラー加工というのがされているらしく、バイザーの部分が反射している。

美香と二人、再び屋上まで出る。

市役所の方を見ると、なにやらバリケードの上に人影が見えた。

「人だ。何をしているんだ？」

「バリケードの補強っぼいね」

トラックやバスの上に単管パイプで骨組みを作っている。

その上にベニヤ板を固定して、壁のようなものができていく。

バリケードの上で働く人たちに手を振ってみる。

「ああ、くそ、気付いてくれない」

「そりやすぐ下にゾンビがウヨウヨしてるんだもんね。こっちを見るわけ無いか」

「大声を出したらゾンビが反応しそうだ。何か気付かせるものないかな。レーザーとか」

「確か発炎筒があつたはず。持ってくるわ」

美香が持つてきた発炎筒に火をつけ、手を高く振り回す。

気付いてくれるか。

「あ、手を振ってる。気付いた」

「よし、いいぞ」

バスの上で作業していた人が、なにやらベニヤを掲げている。

そこには緑のペンキで『少シマテ』と書かれていた。

「待てばいいのかしら？」

「そうだな。オーケー、と」

頭の上に手で大きな丸を作ると、バリケードを作る人たちは撤収していった。

しばらく待つと、市役所の方からエンジン音が聞こえた。

巨大なクレーンが起き上がり、アームをぐんぐん伸ばしていく。

そのクレーンが籠を吊り上げていく。

籠の中には人が一人乗っている。

クレーンはバリケードの外三十メートルくらいのところまでアームを伸ばし止ま  
てしまった。

籠は三階建てくらいの高さに吊ってある。

「あれで入るってこと？」

「そうみたいだ……」

バリケードの上に三人ほどまたやってきた。

三人はそれぞれベニヤ板を持ち上げている。

そこには『コノ距離限界』『来レバ入レル』『来レルカ?』と書かれていた。

「行けると思う?」

「ここから三百メートルくらい? いけるんじゃないかな。バイクですぐでしょ」

「いや、バイクは音がするからダメだろ……」

バリケードの上の人と籠の中にいる人に、手で作った丸を見せてから手を振り家の中に入る。

「優子ちゃん、恵理奈ちゃん。急で悪いけど準備しよつか」

「市役所の中と連絡が取れてね。迎えが来てるんだ」

「迎えですか?」

「そ。高いところ平気?」

「平気だよ!」

「私は少し苦手です」

「そつか。私は好き」

美香よ……。なんのフォローにもなっていないぞ。

使えそうな物いくつかを、店舗にあったバックバックに詰め込み二人に渡す。

恵理奈ちゃんには小さめで軽い物を。優子ちゃんには大人用の大きめな物を。



「重いかもしれないけど、持てる?」

「うん!」

「まだ持てますよ」

「いや、走るのに支障がでるかもしれないからね。それくらいにしておこう」

俺と美香のリュックは登山用の大き目の物。

それ一杯に、ビールを詰め込む美香。

先ほどの探索で、美香が倉庫でダンボールに入ったビールを見つけた。

ビールの箱はあと二箱ほどあったが、俺のリュックはもう食料でパンパンだ。

「頼む。それだけは死守してくれ」

「任せて」

ビールの飲めない生活など考えられない俺と美香は、あえて重い枷を背負うのであった。

玄関を少しだけ開けて外の様子を窺う。

市役所の方から車のクラクションの音が聞こえた。

中の人音が音でゾンビを引き付けてくれているのだろう。

「よし、いない。行けそうだ」

「じゃあ優子ちゃん、恵理奈ちゃん。二人は恭平の後ろを離れないように歩いてね」

「は、はい」

「わかった」

「後ろはお姉さんが守るからね」

そう言つて美香が耳のついたフルフェイスヘルメットのバイザーを下ろす。

俺もバイザーを下ろして手に持つモップに力を込める。

美香いわく、ゾンビは叩くとか刺すとかよりも押しのけるほうが有効らしい。

なんでもゾンビサバイバルブックに書いてあつたそうだ。

こんなゾンビパニックが起きるなんて思つてもなかつた頃に出版された本で、美香はその類（たぐい）の本を愛読していた。

そして「もしゾンビに襲われたら」とか「ホームセンターは鉄板」とかを楽しそうに妄想していた。

「恭平は優しいけどヒョロくて頼りがいがないから私が守る」だとか好き勝手言つてくれたものだ。

まさか実践に活かされるとは、その時は思いもしなかつた。

そしてこんなにも美香が頼りになるとは。

その本の著者も想像だけでゾンビの対策を考え、それが本当に有効なのだから感服す

る。

静かに、辺りを警戒しながら歩く。

クレーンに吊られた籠が見えた。

中の人が手を振っていたので振り返す。

よし。あの人も見張りをしてくれるだろうし安全度が増した。

籠が吊られている場所まで三十メートルのところまできた。

「あ、籠が下がってきた」

「ほんとだ。すごいね」

優子ちゃんと恵理奈ちゃんが小声で無邪気にそう話していた。

俺と美香は黙ったまま辺りを警戒する。

「スラー、スラー、はい、ストップ。ちよい待ちで」

中の人になにやらクレーンに指示をしている。

籠は鉄の網で作られていて、大きさが二メートル四方のものだった。

立ち上がっている部分は一メートルほどある。

その籠からとび職の格好をしたお兄さんがピョンと降りてきた。

「どうも。無事でよかったよ。これで全員？」

「はい、そうですね」

「いや、あんたたちすぐえ強そうな格好だね。お嬢ちゃんたちも良く頑張ったな」

「は、はい」

「がんばったよ!」

「はは、元気だ。じゃあ乗せてあげるからね」

そう言つて気の上さそうなお兄さんが恵理奈ちゃんを持ち上げて籠の中におろした。

恵理奈ちゃんは嬉しそうにしている。

「ちよつと失礼」

「ひゃ」

優子ちゃんをお姫様抱っこして籠の中に入れるお兄さん。

優子ちゃんは顔が真っ赤になっていた。

「あんたも持ち上げる?」

「やつてくれんの?」

「はは、冗談だよ」

気さくなお兄さんに支えられ、籠の中に入る。

美香は綺麗にピヨンと飛び乗ってきた。

運動神経が良くてうらやましい。

お兄さんも飛び乗り、無線機をいじる。

「聞こえる？ うん、乗った。ゆっくりゴーヘイで」

籠が、ゆつくりと持ち上がる。

「動いた！」

「は、はうう……」

恵理奈ちゃんは嬉しそうにしているが優子ちゃんは怖がっていた。

「あー！ 待つて!!」

「行かないで!!」

通りの先から声がした。

見れば二人の女子高生がゾンビに追われている。

「恭平！ 行くよ！」

「あ、ああ！」

「あ、ちよ、飛ぶな！ 待つて！ 今下げるから！」

お兄さんが慌てて無線機に指示を出す。

背負っていたリュックを置き、優子ちゃんと恵理奈ちゃんに「ここで待つてね」と

告げて籠から飛ぶ。

足にジンとした痛み。

二メートルくらいの高さでも足は痛むようだ。

「走るよー！」

「ああー！」

走り出した美香の後を追うように駆け出す。

女子高生まで百メートルほど。

女子高生の片方は足を引きずっている。

それにもう一人が肩を貸しているせいで歩みが遅い。

距離はあと五十メートルくらいか。

美香の足が速い。

少し距離が開いた。

車の脇からゾンビが。

女子高生に襲い掛かろうとしている。

ダメだ。間に合わない。

「オツリアー!!」

美香の飛び蹴りでゾンビが吹っ飛んだ。

今のうちだ。

「おぶるぞー！ お前は走れー！」

「う、うん！」

「わかった!」

「美香! 周りよろしく!」

「モツプ貸して!」

「そこ置いてある!」

「オツケー!」

女子高生をおぶって走る。

息がきつい。

女子小学生と比べたら、当然のことだが女子高生は重い。

周りから十数人のゾンビが迫ってきている。

まだこんなにいたのか。

「もうちょいだ! 頑張れ!」

少し地面から浮いた籠の中からお兄さんが身を乗り出し、前を走っていた女子高生の手を引つ張り上げた。

「よし! よく頑張った!」

「この子を……」

「任せろ!」

女子高生をお兄さんに預ける。

美香はゾンビをモップで押して転ばしている。

「あんたも乗って！ おい、お姉さんも！」

「わかったわ！」

俺と美香がなだれ込むように籠に乗り込む。

もうゾンビがすぐそこだ。

「おい！ 上げろ！ ゴーヘイ、ゴーヘイ！」

お兄さんが無線機に怒鳴ると、籠がグンつと勢いよく持ち上がる。

鉄の網の隙間から見えるゾンビたちが、悔しそうにこちらへ手を伸ばしていた。



## 第三話 崩壊の足音

「マジ助かった……」

「ガチでやばみざわだった……」

「マジあざまる〜」

「あざまる水産だよね」

クレーンで吊られた籠の中、女子高生二人がよくわからないことを言っていた。

頭にハテナを浮かべていると、とび職のお兄さんが「お前らなあ……」と言った。

お兄さんは女子高生の言葉がわかるんだなあと感じっていると、突然、美香が女子高生たちを思い切りビンタした。

女子高生はビンタが強すぎたのか尻餅をついて驚いた顔をしている。

「え、ええ、なにすんだよ!」

「つてーな!」

「黙れ。黙らないと落とす」

「はあ!?!」

「意味わかんないんだけどっ!」

「おいおい、暴れないでくれよ……。あんま安定してないんだから」

「美香、いきなり叩くのはちよつと……」

「ごめん。このクソガキらがウザくて」

「お前の方がウザいし！」

「コスプレ女！」

「うっ……」

やはりはたから見たらコスプレに見えるのか……。

思わぬところで心にダメージを負った。

「もうちよいオヤゴーコースラー、オツケー、そんなまゆつくり右旋回。あ？ ああ、なんでもねえよ」

とび職のお兄さんが無線に専門用語で指示出しをしている。

無線の通話を切ったお兄さんが女子高生たちに「お前らさあ」と声をかけた。

「叩かれた意味わかんねえの？ この人らいなかつたら死んでたかもしれねえんだぞ？」

「だからお礼言つたじゃん！」

「そしたら叩かれたんだって！」

「あんなにお礼じゃねえんだよ。そんぐらいわかんねえのかよ。時と場合をわきまえ

ろって言ってるの」

美香は腕を組み女子高生たちを見下ろしている。

お兄さんの言っているのはド正論だ。

最近の若い子の喋り方はわからないと俺は諦めていた。

ただ言われてみれば確かにこういう非常事態の時くらい、普通のまともな喋り方をするべきなのだろう。

女子高生もそれが理解できたのか「うう」とうめき声をもらすだけで反論をやめた。

「あ、ありがとう、ございました」

「おかげで助かりました。ありがとうございます」

「うん、よし。良いよ。私も叩いてごめんね。それより足のケガは？」

「あ、結愛ゆあが捻ひねっちゃって」

「足つくと痛くて……」

「そっか。避難所ついたら治療してもらおう。あと、あんたたち、避難所でもあんな喋り方してたら余計なヘイト集まるだけだからね。年配の方の中には私以上にひどいことをする人がいるかもしれないんだから」

「はい、気をつけます」

「すみませんでした……」

意外と素直な子たちなのかもしれない。

勝手に苦手意識を持っていたが、話せばわかる子もいるようだ。

美香は女子高生たちになにやら避難所にいるだろう癖のある人の対処法やらをレクチャーしだした。

二人は真剣な顔で聞いている。

「ケンカおわたの？」

「ああ、ごめんね、恵理奈ちゃん。ケンカじゃないけどもう終わったよ」

「ケンカは怖くてきらいだよ」

「うん。そうだね。良くないね」

恵理奈ちゃんが悲しそうな顔をしているので頭を撫でておく。

ふと優子ちゃんの様子を見ると、座り込んで青い顔をしながら震えていた。

「ああ、怖いって言ってたっけ。大丈夫？ おじさんに掴まる？」

「は、は、はい」

「ははは！ 大丈夫だよ、この籠はたまにしか落ちないから」

「たまに落ちるんですか!？」

「そういう冗談は今はやめてくれると助かるよ」

「ああ、ごめんごめん」

とび職のお兄さんのせいで、俺に掴まった優子ちゃんの震えがよりいっそう激しくなっていました。

「ほら、もう市役所の中に入ったから。あとは降りるだけだよ」

「は、はやく……」

優子ちゃんの願いに反して、籠はゆっくりと降下していく。

市役所の駐車場に籠がつくと、優子ちゃんは大きな安堵のため息を吐いた。

籠の周りにはベニヤ板を持ち上げていた職人さんを含めて、たくさんの方がいた。

用意してくれていた脚立を使い、籠から出る。

「いや、よかったよかった」

「よく無事だったなあ」

職人さんらが言うには、避難してきた人は二週間ぶりとのことだ。

羽田空港閉鎖からすぐにゾンビパニックが起き、それから既に二ヶ月が経っている。

避難者が少なくともおかしくない。

「ああ、お兄さんたち」

「ん？」

「いろいろわからないだろうから、担当の人の所まで案内するよ」

「ああ、助かるよ。ありがとう」

「いいって。あ、俺、佐藤讓さとうゆずるね。よろしく」

迎えに来てくれたとび職のお兄さん、佐藤くんが手を差し出してきたので握り返す。

「山下恭平です。こつちが妻の美香」

「よろしくね」

佐藤くんは美香とも握手を交わす。

「私は飯塚優子です」

「飯塚恵理奈だよ！」

「よろしくねー。っってお二人の娘さんじゃなかったんだ」

「私はまだ二十五歳ですので」

「俺とタメじゃないですか。マジかあ」

佐藤くんも二十五歳だったようだ。

「あ、あたしは三咲結愛みさきゆあ」

「あたしが愛理あいりね。見ての通り双子だよ」

「すごく似てるね！」

恵理奈ちゃんが双子の顔を見比べ笑顔で言う、「でしよ〜」と双子が声をそろえて笑顔で返した。

一通り自己紹介が済んだので、佐藤くんさとうに市役所内を案内してもらおうことに。

一階の正面入り口付近で、美香が隣に並んで脇を小突いてきた。

「恭平。バイザー下げて」

「え？　なんで？」

「良いから。あとできるだけ人前では言葉を喋らないで」

「お、おう。わかった」

美香の言うとおりにバイザーを下げる。

「何かあったら対応は私がするから。恭平は結愛と愛理を守る感じで」

「うん。具体的には？」

「二人の前に立って視線から庇うとか、いろいろ。とにかく、お願い」

「わかった」

美香がここまで言うくらいだ。

きつと何かがあるのだろう。

市役所の一階は、前に来た時と様変わりしていた。

受付のカウンターや待ち合い用の椅子が取っ払われ、ダンボールと布で区切られたブースがいくつも作られていた。

美香の言いたかった事はすぐにわかった。

布の隙間やダンボールの上から、何人もの避難者らしき男性たちが結愛と愛理、美香

をなめまわすように見ているのだ。

男性の視線から結愛たちの体を隠す位置に立ち、威圧するように顔を向ける。

何人かは見るのをやめたが、少なくとも数の男性がこちらを見続けていた。

「ちっ。ツゼえな」

佐藤くんがボソツと呟いたのが聞こえた。

市役所の二階も区切られたブースになっていたが、こちらにいるのは女性だけだった。

かなり剣呑な空気を感じる。

「俺と佐藤くんが睨まれてるな」

「まあ、仕方ないんだよなあ。悪いけど我慢してくれる？」

「何が起きたかは想像つくけど」

異様な雰囲気、子供たちは皆静かだった。

「ついたぜ。ちよつと呼んでくるから待っててくれ」

「ああ、わかった」

三階は良く見知った市役所の形を保っていた。

防災対策本部として機能しているらしく、たかさんの人が働いている。

「恭平、ありがとう。ここではヘルメットを取っておきましょうか」



「そうだね。さすがに怪しまれてる」

まるで銀行強盗でも見るかのような目で見られていたからな。

確かに顔も見えないヘルメットかぶった二人組みがいきなり現れたら怪しみもする。程なくして佐藤くんが担当者連れて戻ってきた。

佐藤くんはすぐに「んじゃ、俺仕事に戻るんで」と行ってしまった。

「ああ、どうも。新しく避難してきた方ですね。ご無事で何よりです」

「どうも。山下です。すみませんが医務室などはごさいませんか？ 連れがケガをしてしまいました」

「ごさいますよ。今案内させますので。ご自分で歩けますか？」

「あ、はい。肩借りるので大丈夫です」

「あたしが連れていきます」

双子は担当者が呼んだ案内の人に連れられて医務室に向かった。

美香が担当者に言うまで、あの結愛か愛理かのどちらかが足を捻挫しているなんてすっかり忘れていた。

慣れない場所で心に余裕がないからだろうか。

少し冷静になろう。

その後も美香と担当者間で話が進み、俺はたまに投げかけられる質問に答えるだけ

だった。

うちの奥さんが万能で優秀すぎて、ちよつとツライ。

途中で優子ちゃんが両親を探しに、職員と一緒に奥のパソコンのある場所へ行つた。

だが、ここに避難している人の中に両親の名前は無かつたそうだ。

優子ちゃんが涙をこらえていたがポロポロとこぼれてしまつていた。

どこかで無事で居てくれれば良いが。

この市役所の避難所には、職員を含めて現在百十五名が生活している。

生活スペースは男女で分かれているが、夫婦や家族などでまとまっても良いそうだ。

その際は二階奥のスペースを使うように言われた。

ただし二階は女性用の生活スペースなので、正しい配慮をするようにと念入りに注意

された。

あの剣呑な視線に晒されれば、嫌でも気をつけると思う。

風呂は外に仮設風呂が六つ用意されていて、一人の利用時間が二十分以内とのこと

だ。

食事は朝昼晩の三回、外で炊き出しが行われる。

洗濯機は八台が稼働しているらしく、空いていれば使っても良いが、終わるまでその

場所を離れるとのことだ。

「恭平、どうする?」

「んー、俺は一階で美香は二階で良いんじゃないか?」

「そうね。そうしましょうか」

先ほど二階を通ってきたが、あの女性たちの視線を浴びて針の筵むしらに座らされるような気持ちになった。

四六時中あの視線に晒されると思うと、さすがに勘弁してほしいと思ってしまう。

美香もそれがわかっていているのか、あつさり了承知してくれた。

「私は優子ちゃんたちと一緒にいようと思うからさ。なにかあつたらすぐに来て」

「オツケー。とりあえずブラブラしてみるから、十二時になったら外の炊き出しのところで落ちあおうか」

「うん、わかった」

二階で美香たちと別れ一階の男性用生活スペースへ向かう。

荷物もなく誰も使っていないと思われるブースが結構あるので、その一つへと入り布のカーテン閉める。

手に持っていたヘルメットを置きリュックを下ろす。

グローブやブーツを脱ぎスーツの上をはだけさせると、やっと人心地ひしこころついた。

ため息を一つ吐き、ポケットからタバコを出して啜すすえる。

「と、禁煙つて言つてたつけ」

市役所内は全館禁煙と言われたのを思い出した。

確か外に喫煙スペースがあつたはずだ。

脱いだばかりのブーツを履き、スーツに腕を通す。

ジツパーはおろしたままだ。

喫煙スペースには何人かの人が出た。

「お、佐藤くん、さつきぶり」

「あ、ども、山下さん」

職人数名と一緒に煙草を吸っている佐藤くんを見つけた。

佐藤くんはフィルター近くまで減つた煙草をもみ消すと、新しい一本を啜えた。

ヘビースモーカーなのかもしれない。

「山下さん、ここいろんなヤツがいるんでマジで気をつけといてよ」

「ああ、そうみたいだね」

「今は自衛隊の人がいるからマシになつたけど、前は相当ひどかつたからさ」

「自衛隊の人がいるの？」

「いるよ、四人。ただ全員喋らないし顔をマスクで隠してるので、どんな人かはわからな  
いんだけど」

「なんだかスワットとかの特殊部隊の人みたいだね」

「あー、そんな感じが近いかも」

佐藤くんいわく、自衛隊員たちは装甲車の中で寝泊りをしていてコミュニケーションをあまり取らないそうだ。

自衛隊員たちは市役所内の巡回を定期的にしてきているらしい。

「あの人らが来るまでは盗みや暴行が多発してて、ほんととひどかったんだよなあ」

「こんな状況だから皆どこかしらタガが外れてるのかもね」

殺しがないだけマシなのだろうか。

ここに避難してきた人たちはほぼ全員が、避難生活や集団生活のストレスだけでなく、もっとストレートに死のストレスをゾンビから感じたことだろう。

知人や友人、家族さえもが歩く死体になって襲いかかってくるストレスは、人の心を簡単に壊すのではないだろうか。

美香がゾンビになって襲ってくることを想像したが絶望感しかなく、たぶん俺はそのまま美香に噛まれてゾンビの仲間入りをするのは間違いない。

「マジであの小さい子たちとか女子高生たちから目を離さないようにしたほうが良いよ」

「自衛隊の人がいるのにいまだにそういう犯罪が？」

「……ちよつと前に一人で避難してきた中学生の女の子が行方不明になって、男の一部が外に出てつたつて言つてたんだよ。家族を探しに行つたつて」

「そいつらがなにかしたのか？」

「まず間違いないと思う。外をうろついているゾンビの中に、裸のその子がいたから」

「……なんてことだ」

「証拠隠滅のために外に放り出したんだろね。まあ自衛隊の人にそれを伝えたから監視の目が強くなつていふとは思うけど、万が一があるんで、ほんと気をつけてよ」

「ああ……。気をつけるよ」

なんとも胸糞の悪い話だ。

胸のちよつとやを一緒に吐き出すように煙草の煙を吐いた。

仕事をするという佐藤さんと別れ、市役所の敷地内をぶらつきながら考える。

女の子を殺した犯人がまだここにいる。

男の一部、ということとは複数の犯行なんだろうか。

美香たちをじつとりとした目で見えていた男性たちの顔を思い出して、嫌悪感を抱く。

女の子の事件が避難所全体に知られているから、女性たちも男性不信になっているのだろうか。

犯罪者たちは自衛隊員というわかりやすい力に押さえられて今は大人しくしているだけかもしれない。

常に警戒し決して一人にならないように言っておこう。

安全な避難所かと思っていたが、まさかゾンビ以外にも脅威があるとは思わなかった。

なんだか、堅牢そうに見えるこの避難所が、砂上さじょうの楼閣ろうかくであるかのように思えた。

## 第四話 人の本質

ぶらついてみてわかったが、避難所はかなり広い範囲をバリケードで囲われていた。大量のバスやトラック、乗用車までもを使って作られたバリケードは、今もなお増強されている。

佐藤くんのようなとび職の人が単管パイプで骨組みを作り、パイプに垂木を重ねて番線で縛る。

それを追いかける形で、大工さんらしき人がベニヤを何枚か重ねるように、パシユパシユと軽快な音を立てて釘打ち機で固定していく。

そのベニヤの裏に土を入れた土嚢を積み、さらに内側にまた単管パイプで骨組みを作っている。

何重にもなっているバリケードは、大型トラックが突っ込んできても壊れそうにな  
い。

彼等の洗練された効率的な動きは、見ていて気持ちが悪かった。

俺みたいな素人が下手に手を出したらかえって邪魔になってしまうのだろうか？

佐藤くんに手伝えることがないか聞いてみよう。



市庁舎の正面玄関横には炊き出し用の調理場が作られており、そこで何名かの女性が調理をしていた。

彼女らのように働いている人もいれば、生活スペースで何もしない人もいる。

働くのは強制ではないのかもしれないが、この状態が続くのは良くないだろう。

そう思えるくらいに、生活スペースにいる人は多すぎた。

「その貴方」

「はい？」

調理風景を見ていたら女性に声をかけられたので振り向く。

「うおっ！ あ、す、すみません。少し驚いてしまつて」

「別に構わない」

そこに立っていたのは、迷彩服に身を包み目出し帽とヘルメットで顔が隠れた自衛隊員だった。

その手にはどこかで見たような重そうなりユックと、これまたどこかで見たことのあるバイク用のヘルメットやグローブが持たれていた。

「あれ、それってもしかして俺のですか？」

「そう。盗まれていた。中身の確認を」

「え、あ、はい。えっと、盗まれていたのですか？」

「貴方のブースから出てきた男がこれらを持っていた。それを回収し届けた」  
「あ、ありがとうございます……」

荷物を受け取り、地面に下ろす。

自衛隊員は俺が荷物の確認をするのを黙って見ている。

身長は美香と同じくらいの一五五センチ程度だろうか。

体格は良いのだろうが、いろいろと装備のついたベストを着てよくわからない。

足のベルトについた拳銃や、肩から下げられているマシンガンタイプの銃が異様な雰囲気漂わせていた。

「とりあえず無くなっているものはなさそうです」

「そう。荷物や家族からは目を離さないことだ」

「は、はい。本当にありがとうございます」

「失礼する」

自衛隊員は市庁舎の方へと歩き去っていった。

本当に、映画やドラマで見える特殊部隊の人みたいだった。

ああいう人を実際にこの目で見ることになるなんて思ってもみなかった。

世界は変わってしまったのだと再認識させられた。

十二時になったので美香たちと合流する。

炊き出しを食べながら情報交換をした。

美香たちは優子ちゃん恵理奈ちゃん、それと双子も入れた五人で、同じブースで生活をしようとしたようだ。

それから結愛の足は骨折していたらしい。

簡単な添え木と包帯で固定されていて、なんとも痛々しかった。

「あとはね、覗きが異様に多いわ」

「覗き？ 女同士なのには？」

「うん。気付かれてないと思ってるのかな？ 区切りのダンボールの上からとか、布の

隙間からとか」

「オバサンにめっちゃジロジロ見られてたよね」

「あたし目があったよ。しばらく見詰め合っちゃったし」

「恵理奈たちとおしゃべりがしたかったのかな？」

「素直になれないんじゃない？ 知らないけど」

新参者だからある程度は見られても仕方がないとは言え、覗くのは問題だろう。

「ああ、そういえば俺も荷物を盗まれちゃってさ」

「荷物？ そこにあるじゃない。ずっと持って歩いてたんじゃないの？」

「いや、ブースに置いておいたんだけど、盗まれちゃったらしくて。自衛隊の人が持ってきてくれたんだ」

「ちよつと！ それ早く言つて欲しかった！」

「え？ あつ」

そうか。盗みを働くのが男性だとは限らない。

今、美香のリュックはブースに置きっぱなしだ。

あのリュックの中には……。

「恭平！ 行くわよー」

「ああー」

走り出す。

優子ちゃんたちは呆然としている。

人が多い。

階段を一段飛ばしで昇る。

美香が早い。

差が開いた。

美香の後を追う。

ブースは、あそこか。

「あった……い！」

「良かった……」

ブースの中にはちゃんとリュックが置いてあり、中身も無くなっておらず無事だった。

安堵のため息が出た。

ビールの安否確認のためだけにこんなに必死になるなんて、俺たちは人としてダメな部類なのかもしれない。

「ちよつと、アナタ！ 何しにきたの！ 出て行きなさい!!」

「うわ、つとと」

五十代くらいの女性に突然服を思い切り引っ張られ、バランスを崩して転んでしまっ

う。

女性が俺の服を掴んだままだったので一緒に巻き込んでしまった。

「きや、きやあああ！ なにするの！ 強姦魔！ 誰か助けて!! 犯される!!」

「いや、ちよつと落ち着いてください」

「誰か!! この男レイプ魔よ！ 助けて!!」

耳にキンキン響く女性の叫び声に人が集まりました。

「ちよつと、人の夫をレイプ魔呼ばわりしないでよ。ていうかその服を掴んだ手を離し

なさいよ」

美香がそう言うも女性は手を離さない。

それどころかグイグイと服を引っ張り暴れ出した。

「うわ、やめてくださいよ。離してください」

「いやああ!! 殺される! 犯される! 誰かこいつ殺して! 助けて!」

鬼気迫る形相で叫ぶ女性は、この世のものとは思えず不気味だった。

「おい、あんたたち! それ以上近寄ったら殴るよ!」

美香の怒鳴り声で気がつく。

俺の周りには十数名の女性たちが集まっていた。

その女性たちの手には凶器が握られている。

ハサミ、包丁、金づち、バット。

それらを強く握り締め、誰もが無表情にこちらを見ている。

「殺して! こいつを殺して! 殺せ! 早く殺せ! ガウウウ!!」

「ちよ、いたたたた、嘔まないで!」

「おい、ババア! 何してくれてんのよ!」

女性に噛まれた手を振りほどく。

美香が協力して引き剥がそうとしてくれているが、なかなか離れない。

ふと美香の後ろに人影が。

「美香っ！ 後ろ!!」

周りにいた女性の一人が美香にバットを振り下し。

「セイ!!」

瞬時に迎え撃った美香の拳により、バットが粉々に砕かれていた。

あの殴られたら痛そうなグローブ、食事の時にも外さないから気に入ってるんだなあと思っていたが、まさかこんな風に役に立つなんて。

半分以下になったバットを持った女性が「ひい」と声を上げて座り込む。

「やったわね？ 先に手を出したのはそっちだから。こっちは集団リンチされそうだし命の危険がある」

きつと美香の顔はそうとう恐ろしいことになっているのだろう。

周りにいた女性らはおろか、俺を掴んで離さなかつた女性すら美香から離れようと後ずさっている。

「死に物狂いで抵抗するから。次はバットじゃなくて顔を殴るから。腹でも腕でも良い。殺されるくらいなら殺してやるわ。誰からが良い？」

「ちよ、美香。落ち着け。もう大丈夫だろ」

「でも恭平。あいつらが刃物を持ち出してる時点で殺し合いもやむ無しだよ」

「やむ無しじゃないから。今はなんとかなるから、落ち着いて」

興奮状態の美香を抑えてから、床に座っていたのではもしもの時に動けないと思いい立ち上がる。

女性らを見ると誰もが怯えた顔をしている。

少し脅しておくか。

「えーと、すみません。まあこんな世の中だし、俺たち割とマジであなたたちのこと殺せると思うんで、もうちよっかい出さないでもらえますかね？」

女性らはうつむいて目を合わせない。

なんだか俺が悪者みたいだ。

「えーと……」

「もういいよ、恭平。あっちの奥の家族用のスペースに移ろう。あんたたち、次やつたらマジで容赦しないからね」

吐き捨てるようにして言う美香は、まだ怒りが収まらない様子で歩いていく。

その怒り具合は、大事な大事なビール様を忘れていることに気がつかないほどだった。

リュックを持ち美香のあとを追う。

女性らはその場から動かず、ただただこちらを見ているだけだった。



炊き出しの場所に戻ってくると、優子ちゃんの声が聞こえた。

「やめてください！ 恵理奈を離して！」

「ただ抱っこしてあげてるだけだよ。可愛いねえ。恵理奈ちゃんって言うのかあ」

「いや！ はなして！」

太った不潔そうな男が、恵理奈ちゃんを抱き上げて頬ずりをしていた。

恵理奈ちゃんは男から逃れようと必死に暴れている。

それを見た瞬間、沸騰するかのように頭に血が上った。

「なにしてんだ、クソ野郎!!」

気がついたらそう叫び、走り出していた。

「死ね！」

「ぐう……！！！」

俺よりも早く男に駆け寄った美香が、思い切り金的を蹴り上げた。

股間が一瞬ひゅんとなったが、美香には心の中で良くやったと言っておく。

俺も経験したが、あの男はしばらく痛みで動けないだろう。

それほど美香の金的は強烈でエグい。

男から解放された恵理奈ちゃんは優子ちゃんに抱きつき大声で泣いている。

泣き声で異変に気がついたのか、炊き出し場にいた人たちが「どうした？」と集まりだした。

そのうちの一人が男を見て「またこいつか！」と言っていたので話を聞いてみた。なんでも前も同じように女の子にいたずらをしていたとか。

注意してもやめず何度もいたずらをするため、女の子とその家族はここを出て行ったらしい。

「このクソ豚を外に放り出せばいいのよ。馬鹿じゃないの」

うずくまっている男をゴミでも見るかのような目で美香が見る。

先ほどの女性と言いつこの男と言いつ、この避難所にはどこかおかしい人が多い。

俺の荷物を盗んだ人もいたし、佐藤くんから聞いた中学生を犯して殺した集団もある。

人の世の中とは、法治国家とは、こんなにも簡単に崩れてしまうものなのだろうか。

そんなことを考えていると、騒ぎを聞きつけたからか「どうされました」と自衛隊員がやってきた。

俺の荷物を取り返してくれた人とは違い、その人は明らかに男性だった。

身長は俺が少し見上げる位置に目があるので一九五から二メートルくらい。

体はがっしりしていて服の上からでもその筋肉量が見てとれる。

目出し帽から見える目は鋭く、普通の人とはなにかが違うのだと思えた。

「どうしたもこうしたもないわよ。この男が幼女に暴行しようとしていたから防いだだけ」

いまだ興奮さめやらぬ美香が自衛隊員へ食ってかかるように言う。

「……なるほど。ではこの場は私が預かりますので、後ほど詳しい話をお聞かせください」

見た目とはうらはらに穏和そうな話し方をする自衛隊員だった。

「ほら美香、こう言ってくれていることだし任せてしまおうよ」

「次やったら殺すわ。絶対。確実に。ねえ、わかった？ 気絶したふりしてるあんたに言ってるの」

「ひっ、ひい」

うずくまっていた男が跳ね起き、走って逃げようとしたが自衛隊員に取り押さえられていた。

「はっ、はな、せ!!」

「まあ落ち着いて。少し気持ちよくなりましたか」

「な、なにを、うぐぐ……」

自衛隊員が片手で男の首を掴むと、数秒もしないうちに男は力が抜けたかのように倒

れこんだ。

「それではこの方とお話をしてきますので、失礼しますね」

「あ、ああ」

太って重そうな男をひよいと担ぐと、自衛隊員は去っていった。

彼の言うお話がどういったものなのか、想像したら少し怖くなった。

とりあえずは一件落着かと皆の顔を見ようとして気がつく。

「そういえば双子はどこに行ったんだ？」

「あ、あ、あの！ 男の人が来て、それで！ 私、私、あの」

「優子ちゃん、落ち着いて。男の人が来たのね？」

優子ちゃんが必死に言葉を吐き出そうとしているが、過呼吸気味でうまく話せていな

い。

美香が優子ちゃんをなだめつつ、なんとか内容を聞き出せた。

俺たちが去ったあと男の集団が来て優子ちゃんと恵理奈ちゃんを連れ去ろうとした

が、双子が守ろうとして代わりに連れ去られた。

男の集団は若い人が多く、周りの人は双子と知り合いだと思ったのか誰も止めに来な

かったそうだ。

優子ちゃんたちの元には先ほどの男だけが残り、恵理奈ちゃんを取り返そうとしてい

るところに俺たちがやってきて今に至る。

「美香、二人を頼む。俺が行く」

「わかった。お願い。くれぐれもやり過ぎないように。殺さないように」

「気をつける」

「ヘルメットとグローブはつけた方がいいわ」

「わかった」

「優子ちゃん、結愛と愛理の二人はどっちに行つたかわかるかしら？」

「あ、あつち」

「わかった。ありがとう。行つてくる」

俺は感情が昂ぶると加減がわからなくなってしまう。

やり過ぎた場合、多人数が相手だから正当防衛が適用されるだろうか、と考えたところでもう法律もクソもないのだと気がつく。

欲望の赴くままに行動しているんじゃないやゾンビとなら変わらないだろうに。

この避難所にはゾンビ野郎が多すぎる。

少しくらい駆除しても誰も文句を言わないんじゃないか？

心の中に沸々と湧き上がる獣性に従い、駆け出した。

## 第五話 地獄の音

優子ちゃんの指さした方には建設関係の資材置き場があった。

積み重なった部材は人の目に触れない死角を多く作りだしている。

双子が連れ去られてからそう時間は経っていないはずだ。

どうにか見つけ出せれば手遅れにならずに済む。

必死な思いで資材置き場を走る。

「……………めろー！」

聞こえた。

人の声、双子のどちらかの声だ。

「……………に手……………！ ……しが……………！」

遠い。

どこだ。

どこにいる。

「……………えな！ 抵抗すんな！！」

「離せつってんだろー！」

「舐めてんじやねえぞ、てめえ!!」

「おい! やめろ! 愛理に触んな!!」

近い。

声のする方へ走る。

「オラッ! ハハッ! 泣いてるぜ、こいつ」

「あんま顔殴んなよ。やる時萎えちまう」

「クソ! クソ! 触んな! 離せ!」

「うるせえんだ、よっ!!」

「ううう……!!」

見つけた。

馬乗りになって顔を叩いている。

あれは足に包帯をしていないから愛理か。

結愛を守ったのか。

結愛は……いた。

羽交い絞めにされている。

暴力は振るわれているが、最悪なことにはなっていない。

間に合った。

男は全部で四人か。

「お、おい！ お前何しに来たんだよ！」

「あっち行つてろ！」

「聞こえねえのか！」

周りにいる男どもがわめいているが無視をする。

愛理に馬乗りになっている男の元へ歩く。

周りの男が俺に掴みかかろうとするのを避ける。

足を出してやれば簡単に転ぶ。

「お前みたいな生意気なガキは殴りながら犯したくなるんだよなあ」

「そうか。死ね」

「は？」

愛理に夢中になっていたからか、俺に気がつかなかつた男の髪を掴む。

無駄に長いから掴まれるんだぞ。

良い教訓になつたな。

右手で髪を引つ張り左膝を顔面に叩き込む。

反動で仰け反ろうとする頭とか髪を両手で掴み、おもいきり引つ張りながら更に

膝。



多分、鼻が折れた感触がするのだろうか、このスーツのプロテクターが固すぎてわからない。

鉄板で補強された膝蹴りは効くだろうか？

「ぐあああ!!」

叫ぶ男の髪を引っ張り、愛理の上からどかす。

地面に転んだその男の顔にサッカーボールキックをいれる。

このブーツにも鉄板が使われているんだ。

痛いだろ。

「うぐがああ!! つぎぎいい!!」

もはや人間語を喋らない。

ああ、そうだった。

こいつは、いやこいつらはゾンビ野郎だったんだ。

「おい! やべえぞ!」

「死ね、こら!!」

周りにいた男の何人が向かってくる。

つかみ掛かってきた手の薬指と小指を握り、一気にへし折る。

「ぎやあああ! 折りやがったあ!!」

うるさい口には肘のプロテクターをくれてやる。

血が吹き出て顔に飛んできたがバイザーが防いでくれた。

肘打ちを何回も入れていると後ろから掴みかかられた。

その男の右足を持ち、左足を払いつつ後ろに倒れてやる。

「がふっ……い！」

俺の体重は軽いが、それでも二人分の体重で背中をしたたかに打ちつけた男は呼吸ができなさそうだった。

ちようど良いので馬乗りになり、何度も拳を叩きつける。

俺のグローブも美香のやつほどじゃないが補強をされている。

男を何度も殴っていると唇が切れ、鼻がひしゃげ、涙を流すようになった。

もうやめてといった具合で手が出てきたので、両手の人差し指と中指をまとめて折る。

男はゾンビのような悲鳴をあげた。

ああ、ゾンビは悲鳴をあげないか。

「で、でめえ!! ぶっゴろろず!!」

愛理に馬乗りになっていた男が背中を思い切り蹴ってきた。

つんのめるようにして転ぶと、男が俺の上に乗ろうとする。

だから、お前の髪は掴みやすいんだって。

無駄に長くしてんなよ。

髪を掴み横に引つ張ってやれば、すぐに俺の上からどいた。

髪を両手で掴み、思い切り頭突きをする。

これはいい。

ヘルメットのおかげで俺は痛くない。

男は血まみれだ。

俺は汚れていない。

良いこと尽くめだ。

男に馬乗りになり、こいつが愛理にしたように顔を何度も殴る。

無駄に長い髪を振って抵抗するのがウザイので、髪の毛を引つ張って顔を持ち上げた状態で殴る。

ブチブチつと手に髪が残った。

全部抜いてやるか。

「やべっ、やべでっ!! だずげええ!!」

ゾンビ語はわからない。

何度も殴ると、男の髪はかなり短くなったが、もう面倒なので終わらせる。

結愛のほうを見る。

結愛は愛理と抱き合うようにして体を守っている。

羽交い絞めにしていた男は……いた。

「く、来るな！ 俺は何もしていない！」

羽交い絞めにしていたのを見ているんだよな、俺が。

男のほうへ歩くと這いずって逃げようとするので足を掴む。

靴が脱げた。

ズボンの裾を掴む。

ズボンがずり落ちた。

おい。おい。お前。ズボン下げて何をしようとしていたんだよ。

ジャケットをシャツごと掴み思い切り引っ張って脱がす。

顔が隠れたので脱ぎ掛けのまま固定。

隠れた顔を蹴り上げる。

白いシャツに赤い染みが広がっていく。

この状態ならろくに抵抗できないだろう。

双子のほうへ顔を向ける。

「お前らもやるか？」

二人は無言で顔を振るだけだった。  
やらないのか。

じゃあ代わりに俺がやるか。

体を丸めて身を守ろうとしているが、まあ関係ない。  
顔、鼻、口を蹴る。暴れるので首を踏む。

このまま体重をかければ死ぬだろうな。

ゾンビ野郎は駆除していいんだっけ？

「そこまで」

いつの間にか背中に立たれ肩に手を置かれていた。

振り返りざまに右肘。

受けられた。

前蹴りで距離をあける。

避けられた。

避けた方向へ裏拳。

腕をとられる。

「う、ぐう！」

「落ち着いて」

腕を極められ地面に押さえつけられてしまった。

ここから脱出するには腕を折る覚悟が必要だ。

耐えられるか。

「暴れないでください」

「お、お兄さん……」

「その人自衛隊の人だよ……」

「えっ？」

「はい。落ちついて」

昂ぶっていた感情が冷めていく。

自衛隊の人って、自衛隊の人だよな。

少しの混乱がある。

興奮状態は治まったか。

今の俺は、普通に話せるか。

「落ち着かれましたか」

「ああ、すまん。落ち着いた」

「そうですか。では解放しますので、暴れないように」

自衛隊員が俺の上からどいた。

解放された腕を振って確認する。

痛めてはいないようだ。

自衛隊員は双子と同じくらいの身長でとても小柄だった。

いや、小柄ではないな。

分厚い筋肉や太い腕を持つ人間を小柄とは言わない。

この男はベストや銃などを装備しておらず、迷彩ズボンにシャツと目出し帽だけの出で立ちだった。

もしかして休憩していたところを邪魔してしまったのか。

なにせよ感謝しなければ。

「仲裁に入ってくれて助かった。礼を言う」

「いえ、それには及びません」

あのままじゃ本当に殺していたかもしれない。

弱いものを食い物にするゾンビ野郎でも、殺すのはよくないだろう。

……本当に良くないのか？

犠牲者が増える前に駆除してしまった方が良いのでは？

ダメだ。物騒な方向へと考えが流れていく。

この場から早く離れたい。

「じゃあもう行くけど、こいつらのこと頼んでも良いか？」

「ええ、任せました」

双子の方へ顔を向けると、二人はビクリと体を揺らした。

「おい、帰るぞ。美香が心配している」

「あ、は、はい」

「わかった……」

結愛をおぶろうとしたが血で汚れているのでやめておいた。

結愛は愛理に肩を借りてゆっくりと歩いている。

今ふと思ったが、なんで俺はこの双子と共に行動をしようと考えているんだろう。

避難所に行く時にゾンビから助けて保護したからか？

ここには他に頼れそうな市役所職員がたくさんいた。

預けるべきなのは？

「お前からさういえばさ、なんで美香と同じところで生活するって話になってたんだ？」

「え、今それ聞く？」

「美香さんがあたしらのこと守るって言い出して」

美香がそう言うのなら守るべきだな。

「ふーん、美香がね。じゃあ俺もお前らを守るよ」



「もう充分守ってもらってるし……」

「うん、ほんと来てくれてありがとう……」

「あざまなんとかじやないのか？」

「あざまる水産な」

「あれ言う和美香さん怒るから」

「美香さん怒らせると半端ねえし」

「あ、お兄さんもだけど」

「マジ鬼だった。リアル鬼」

「お兄さんほんとやばたにえん」

「マジ出」

「まんじ？ お茶漬けが食いたいのか？」

やっぱり最近の子の言っていることはわからない。

宇宙人と話している気分になる。

たぶん真面目に聞いたらダメなのだろうと、その後の双子の話はほぼ聞いていなかった。

炊き出し場に戻ってくると、美香にすごい顔をされた。

「……お疲れさま。とりあえず服を洗うか拭くかした方が良いでしょう」  
「あ、ああ。そうだな。じゃ、ちよつと洗つてくる」

ちよつと遠くに手洗い場があったのでそこへ逃げるように向かった。

ブーツやヘルメットの表面を洗いながら先ほどの美香の顔を思い出す。

「はあ……。怒つてるよなあ」

十年前にした美香との約束、『必要以上に痛めつけない』を破つたのが丸わかりだったのだろう。

血もたくさんついてたし、なによりこのグローブに絡みついた大量の髪の毛がバレた原因に違いない。

今回も土下座をすれば許してくれるだろうか。

いつまでたつても俺は美香に頭が上がらない。

俺が真人間になるきつかけをくれて、更生までしてくれた。

美香に人生を変えてもらったのだ。頭も上がらなくて当然だ。

人生を変えたとかそんな大げさなことでもないか。

ただ単純に、調子に乗つた十七のガキが年下の女子と喧嘩して負けて、それで惚れて好かれようと自分を変えたただけだ。

なんともアホな話だ。

そもそも俺のこの性格が全ての原因なんだろう。

ホラー映画もまともに見れないビビりな俺は、何かになりきってそれを乗り越えようとしてしまう。

ホラー映画を見るときはホラー映画評論家に。

ジェットコースターに乗るときはアドレナリンジャンキーに。

そして不良に絡まれたときは外道チンピラに。

中学校と演劇部に所属していたヒョロモヤシの俺は、何かを演じてなりきるのが好きだった。

そんな俺が不良に目をつけられて、外道チンピラの役ができてしまった。

俺の演じる外道チンピラは「やるなら徹底的に」を基本スタンスにしている。

そのおかげか、いや、そのせいでその辺の不良にはまず負けず、それが負の連鎖の始まりになってしまった。

タイムマンに勝てば相手をする人数が増え、多人数に勝てば凶器が出てきて。

いつしか凶器所持の戦いが当たり前になっており、気がついたらいつの間にか高校を退学していた。

そこからはもうチンピラを演じているのか本当にチンピラになっているのかの区別がつかなかった。

いつ喧嘩を売られても対応できるように、寝るときも食事をするときも、常にチンピラ状態だったからだ。

まあ心までチンピラになってしまっていたんだろう。

あるとき目の前を一組のカップルが歩いており、チンピラなら絡むべきだよなと男に喧嘩を売った。

そして男ではなく女の方に負けて、俺はなにをしていたんだと我に返り、その女、美香に惚れたわけだ。

しかも美香と歩いていた男は女で、そして美香の妹さんだった。

それを正直に言って二人にボコボコにされたりもした。

二人とも空手をやっていて、腰の入ったパンチが本当に痛かった。

美香の妹の花乃ちゃん、無事だと良いが。

通信障害で電話が繋がらず、メールやSNSの連絡もつかずとても心配だ。

だが実姉である美香はそこまで心配していない。

「あの子は私より強いから」とのことだ。

血を洗い流しタオルで水気をふき取る。

ああ、美香のところに戻りたくない。

でも約束を違えたのは俺だし。

「ここは素直に謝ろう。」

「恐妻の尻に敷かれるダメ旦那を演じるしかないかな。」

「いや、演じるまでもなく恐妻の尻に敷かれるダメ旦那だったか。ははは。」

「美香のところに戻ると、俺の予想とはうらはらに全く怒っていなかった。」

「それどころか褒められたくらいだ。」

「むしろその程度で済ませちゃったのが意外だわ。私ならまず間違いなく去勢する」

「そうだね。美香はとりあえず金的から入るから」

「俺が昔負けた原因もそれだ。」

「男同士の喧嘩だと滅多に金的なんてこないからなあ。」

「まあ俺は外道チンピラだから積極的に狙っていたが。」

「これからは全員離れないようにしましょう。トイレに行くときもお風呂に行くときも、必ず私か恭平についてもらうように」

「そうだな。俺もすぐ対応できるように世紀末覇者モードでいるようにしようかな」

「ちよつとやめてよ。『ウヌ』とか言い出したら絶対に笑うよ、私」

「あ、じゃあ黒王号用意しないと!」

「ウケる」

「双子は話を通じるようだったが、優子ちゃんと恵理奈ちゃんは不思議そうにしている」

だけだった。

これがジエネレーションギャップというやつか。

その日はそれ以降トラブルが無く、平和だった。

高校生とはいえ美香以外の女性の近くで寝るのは緊張を強いられたが。

そういえば、双子は避難所に来る前にいたギヤアギヤアうるさい高校生グループにいて、ゾンビの襲撃を受けて散り散りに逃げたそうだ。

友達の安否が心配かと思いきや「勘違い男と媚女しかいなくてウザかった」とか「やらせてってしつこかったから離れられて良かった」とか言っていた。

襲撃を受けたのは自業自得だと美香に言われ、さすがにしよんぼりとはしていたが。

次の日、佐藤くんに言ってバリケードの補強の仕事を手伝わせてもらった。

「いやー、ほんとありがたいぜ。人手が足りないのに何もしないカスが多くてさー」

佐藤くんは鬱憤が溜まっていたのか、しばらく愚痴が続いた。

「そういや山下さん、あいつらブチのめしたんだってね。俺らは手を出さなっって言われてたからマジすつきりした」

「うん、まあ、でも、暴力は良くないよね」

「ははは！　そうだな！　良くないわ、ははは」

うん。良くないと思っっているんだよ、本当に。

気持ち良さそうに笑う佐藤くと並んでバリケードの上を歩く。

補強が必要な箇所がないかをチェックするのだ。

バスの上やトラックの上には足場板が並べられて道が作られており、とても歩きやすい。

「なんか、すごい風景だと思わない？　ほんとこれが現実なのかよって」

「ああ、そうだね……」

バリケードの外には大量のゾンビがいる。

老若男女を問わず、今まで生きていた人がそこにいるのだ。

その人たちがバリケードを叩き、押し、呻き声を上げている。

「いつ終わるんだろうな。これ。このまま人類は滅びるのかな」

「……………どうだろうね」

滅びる以外の道は残されていないと思うが、それを俺の口から伝えることはできなかった。

「ゾンビもさ。最初は十人くらいの塊がちらほら居たくらいなんだよ。それが今じゃ数えることもできないくらい居るし」

日を追う毎にゾンビが増え、この避難所から出ることすら困難になってしまったらしい。

「山下さん、この市の人口わかる？」

「六十万だったっけかな」

「そっか。このゾンビで六十分の一はいそうだよな。生きている人は何人いるんだろう」

半分もないだろう。

そしてそれは、日が経てば経つほど減っていく。

「まあ、俺らは俺らにできることをするしかないってね」

「そうだね」

佐藤さんと話していると、突然ゾンビが騒ぎ出した。

「ウアアア……」

「グガアア」

「オオオオオオ……」

ゾンビの声は伝染するように広がり、避難所の周囲から鳴り響いた。

「おいおい、なんなんだよ、いったい」

「わからない。なんだこれは……」

さながらそれは、昔動画サイトで聞いたことのある地獄の音のようであった。



## 第六話 狂気の末に

『オオオオオオ……』

呼応するように避難所の周りにいるゾンビが唸り声をあげる。

その声に呼ばれるかのように、遠くから歩いてくるゾンビの姿がちらほらと見えた。

「仲間を呼んでんのか……？」

「そんな知恵があるとは思えないけど、実際にゾンビが寄ってきてるとそうとも言えないよね」

『『このバリケード手ごわいから壊すの手伝ってくれ』って言ってんのかな』

『肉、食いたい』かもね』

「まあいくらゾンビが増えようがバリケードが壊れることは無いと思うけど、一応知らせてくるか」

佐藤くんは市職員の方に知らせるらしく、ここで解散となった。

市庁舎二階の生活ブースに戻ってもゾンビの声は聞こえていた。

「もう終わりよー！ 殺されるのよー！」

「いや、いや、死にたくない」

「大丈夫だから。大丈夫よ。ここは安全だから」

「死にたくない！ 食べられたくないよ！」

「ママ、またアレが来るの？」

「来ないわ。絶対に来ない」

軽いパニックが起きている。

落ち着いている人と発狂している人の割合は半々くらいか。

ゾンビの声が続く限りこの混乱は収まりそうにない。

「恭平！」

二階の階段すぐの場所で中の様子を眺めていると、奥から美香が駆け寄ってきた。

「なにがあつたの？」

「わからない。皆は？」

「向こうよ。あまり離れたくないからブースの方に行きましょう」

「そうだな」

ブースに入ると恵理奈ちゃんが抱きついてきた。

抱きついたまま震えている恵理奈ちゃんは小さい声で「パパ……」と言っていたので

背中を撫でる。

「大丈夫だよ、恵理奈ちゃん。ここにゾンビは入って来ないよ」

「でもお兄さん、外からめっちゃ声するんだけど……」

「ああ、なんか急に大勢で呻き出してね。でもバリケードはビクともしてなかったから」

「こ、ここにいれば安全なんですか？」

「ゾンビからはね」

「ゾンビからかあ。なんかヤバげな空気してるもんね、ここ」

「あたしさつきオバさんが血走った目で包丁握ってたの見たわ」

「ドサクサに紛れて刺してきたりして」

もしそうなら刺されるのは俺だろうな。

こういう狭いコロニーで力こそ正義の傾向が広がったら、起きるのは殺し合いか虐殺かだ。

力の強い男を排除すべく、女が闇討ちを仕掛けるか、集団で一人を襲うか。

昨日、俺に絡んできたあの女性のように精神的におかしくなっている人が多いこの場所、あのゾンビの大合唱は効果があり過ぎる。

早晚、この避難所が崩壊するだろうということとは想像に難くなかった。

昼の炊き出しの時間になったので、皆で外に出る。

盗難防止にそれぞれリュックを背負っていくのを忘れない。

炊き出し場でお昼をいただく。

塩むすび一つに豚汁だけだが、とても美味しかった。

「あたしら一ヶ月くらいずっとお菓子だけ食べてたんだぜ」

「えーいいな。恵理奈チョコ食べたいよ」

「良いと思うのは一週間くらいが限界だつてー。マジお米食べれるつて幸せなんだぞ」

「私もお肉が食べれて嬉しいです。豚汁大好きです」

「優子ちゃん肉食系かよー」

「アスパラベーコン系好きそ〜」

「あ、はい。アスパラベーコン好きです」

「好きぴー」

「恵理奈も好きぴー」

「あつはは、ウケる」

双子と優子ちゃん姉妹が仲良く楽しげに話している。

少し離れた場所で美香に声をかけた。

「美香、考えたんだが、早めにここを離れた方が良くもしれない」

「そうね。私もそれが良いと思う。けどどこへ向かう？」

「離島は？」

「海まで遠い上に移動手段が無いわ」

「港に行けば船がありそうだが」

「操縦できないし島の場所なんてわからないんだから遭難するわよ」

確かに。少し考えが浅かったか。

どこか隔離された場所じゃないと、この先生きのこるのは難しいだろう。

「素直に自衛隊駐屯地とかは？」

「ここよりはまだ秩序があるか。自衛隊員の人に避難の受け入れが可能か聞いてみようか」

「そうね。私ここにいるから、恭平行ってきてもらえる？」

「ああ、わかった」

「ありがとう」

炊き出し場から離れ自衛隊員を探す。

目立つ格好だからすぐ見つかるだろうと思っていたけどどこにもいない。

装甲車両があつたので、そこなら一人くらいいるだろうと向かう。

そこには予想に反して自衛隊員の全員がいた。

ミーティングでもしていたのだろうか。

全員が俺を見て黙っているの切り出す。

「あの、すみません。ちょっとお伺いしたいのですが」  
「なんでしよう」

昨日俺を止めた小柄の隊員が答えた。

「自衛隊の駐屯地で避難受け入れはしていますか？」

「はい。しております」

「それは今も？」

「そうですね。避難されてきた方は保護をしております」

「そうですか。ありがとうございます」

あまり話をしたくなさそうだったので切り上げようとしたが「ちょっと待て」と言われたので振り返る。

俺に声をかけたのは、荷物を取り返してくれた人とは別の女性隊員だった。

「なんですか？」

「お前、どうやってそこに行くつもりだ」

「菊間。口のきき方に気をつけろ」

「……失礼。お前、どうやってそこに行くつもりですか」

口のきき方を注意をされてこれか。

あまり変わらない気がするが。

見れば注意をした小柄な隊員も首を振っていた。

問題児なのだろうか。

とりあえず質問には答える。

「まあ、歩いていきますけど」

「女子供を連れてか？」

「そうですね。妻は俺より強いから心配ないけど子供たちが心配ですね」

「置いていけば良いだろ」

「あり得ない提案に少しイラ立つ。」

「いや、それは無いな。あんたも知ってるだろ？　ここを現状を。前に起きた惨状を」

「……知っている。だが子供の足で駐屯地まで歩くのは無理だ」

「じゃあどうしろってんだ。ここに置いていつて死ぬのを見過ごせってか？」

「そうは言っていない」

「じゃあなんだよ。どうせお前らもここを見捨てて脱出する算段でもつけてたんだろ」

「落ち着いて」

小柄な隊員に言われ、少しだけ冷静になれた。

「すみません。熱くなつて。言い過ぎました」

「いえ、うちの菊間が失礼を」

「……失礼しました」

菊間と呼ばれた隊員が頭を下げてきた。

「ああ、別に謝ることでは無いです。それより俺の方こそ失礼なことを言つてすみません。いろいろよくやつてもらつてるのに」

「いえいえ。貴方の言つていることはだいたいあつておりますので、謝る必要はありませんよ」

それはつまり、ここを去るといふことか。

本当にここを見捨てるのか？

ゾンビに囲まれたからか？

そもそもなんでこいつらはここに来たんだ？

その目的はなんだ？

やつていることは治安維持だった。

もう維持する必要がなくなった？

わからない。

「私たちがここを去るのは、応援を呼びに行くためです。誰が行つて誰が残るかの話をしておりました」

「……見捨てるのかと思つた」



「国民を守るのが仕事です。外敵脅威は排除と云いたい所ですが、外にいる元国民に対しての発砲許可は出ていないので」

「すまん。マジですまん。いや、申し訳ありませんでした」

彼らに深々と頭を下げた。

「疑ってしまつたこと、失礼な言動をとつたこと、ここに深くお詫び申し上げます」

「ちよ、ちよつとお前、頭上げなつて……」

「菊間、言葉遣いに気をつける。さつきから直つてない。全然だめ」

「……頭をお上げになつて」

それは少し違う気がする。

が、頭を上げた。

「頭を下げたついでにお願いがある」

「聞けるものなら聞きましょう」

「子供たちを四人、車でその駐屯地まで運んでくれないか」

「それを希望している方はたくさんいます。その全てを叶えるのは無理です」

「……なんとかならないか」

「なんともなりません。他の人にバレたら騒ぎになります」

「つまり、バレなければ良いわけだな？」

「私の口からは何も言えません」

「もし駐屯地に向かう途中で民間人を発見したら？　それが助けを求めていたら？」

「保護して駐屯地へ避難させます」

「なるほどなるほど。じゃあ、それでお願いします」

「さて、なんのことでしょう」

「この人もいろいろと大変だ。」

「こんな回りくどいお願いをしなければいけない程度には、規則やらなにやらに縛られているのだろう。」

少し話をしたあと、小柄な隊員——小池さんが、佐藤さんにレッカーで車両を持ち上げてもらうように頼みに行った。

俺も一緒に行こうとしたが「山下さんはご家族に先にお話をしてきてください」と言われて炊き出し場に戻ってきた。

「おかえり。どうだった？」

「ただいま。駐屯地は避難の受け入れを続けていて、ここの応援を呼びに駐屯地に行く自衛隊の車に同乗させてもらえることになったよ」

「すごいじゃん。恭平、やるねえ」

「相手のご厚意に甘えた感は否めないけどね」

俺と美香の話し声が聞こえたのか双子の片方が「えー、なにになー?」と話に入ってきた。

「目処が立ったことだし話しても良いか」

「そうね。ちよつと皆聞いてくれる?」

「なにになー」

「どしたの?」

「実はここを離れようかと思うの」

「え? 昨日来たばつかなのに?」

「でも危ねえヤツ多いから離れられるなら離れたいかなー、あたしは」

「あ、それはあたしも」

双子は納得してくれたようだ。

優子ちゃんと恵理奈ちゃんの方を向く。

二人は俯いていた。

「二人が行きたくないのはわかるよ」

「ここでお父さんとお母さんを待っていたいのよね」

「……うん。絶対に来てくれるもん」

「パパとママにあいたいよ……」

「そうだね。今は外にゾンビが多いから来れないだけかもしれないね」

幼い二人は、きつと両親が死んだと言っても納得しないのだろう。

バリケードの上に二人を連れて行き、周りを囲っているゾンビを見せて「ご両親はいたかい？」なんてひどい事は聞けない。

俺が美香でそれをやられたら、まず間違いないくらいをゾンビの群れに落とす。

ついでに自分も落ちる。

二人もそうなる可能性があるから、それはできない。

どうやって説得しようか考えていると、市庁舎から小池さんと佐藤くんが出てくるのが見えた。

「あの自衛隊員さんをお願いして、基地に連れてって貰えるんだよ。もしかしたらお父さんたちはそっちに避難しているかもね」

あり得ない話ではないだろう。

可能性は低いが。

「へー、あの人たちかー」

「ちよつと挨拶行こうぜ。愛理肩貸してー」

「うーい」

双子が小池さんのあとを追いかけて行ってしまった。

見える範囲だし、自衛隊員も近くにいることだし襲われることは無いだろう。

「優子ちゃん、恵理奈ちゃん。一度行ってみて、それで見つからなかったら戻ってくればいいのよ」

「そうだね。こつちにもお父さんたちが来たら『自衛隊の基地にいます』って伝えてもらうように言っておけばいいし」

「そうですね……。向こうにいるのかも。お父さん、自衛隊に詳しかったから」

「それは可能性があるね。優子ちゃんのいたところから自衛隊の基地は近かった？」

「こつちよりは遠いけど、だいたい同じくらいです。多数決で市役所に行くってなってます」

「それじゃ二人とも一緒に行」

『オオオオオオオ……!』

「ひっ」

「やだ、こわいよー!」

外のゾンビの声が一段と増した。

壊れないと思われるバリケードが揺れている。

「もうダメ!! 終わりよ! 殺されるの! 殺される! 殺される!」

炊き出し場にいた一人の年配の女性が、狂ったように同じことを叫んでいる。

余計に不安を煽るような真似はやめて欲しい。

叫びたいならバリケードの上からゾンビに向かって叫んでくれ。

「おい、ババア！ 黙れ！ ぶっ殺すぞ！」

「殺す!? 殺される！ 殺される！」

中年男性と年配女性が叫びあっている。

これは、まずいぞ。

「美香、荷物を。自衛隊のいる方へ行く」

「わかった。二人とも、荷物持って」

「う、うん」

「こわい、こわいよ」

恵理奈ちゃんは震えている。

抱き上げてやると少しだけ震えが収まった。

俺の体を掴むその震える小さな腕を見て、なんともいえぬやるせなさを感じた。

本来ならこの子はこんな怖い思いをしないで生きていけたのに。

なんでこんなことになってしまったんだろう。

「黙れババア！」

「ギャアアアア！」

男が女性を殴りつけた。

ざわりと空気が変わる。

「殺せ！ こいつを殺せ！」

「はあ!? お前が死ねよ！」

「誰か！ こいつを殺して！」

「うるせえよ！ 本当に死にてえの、か……。ああ？ んだ……。これ」

男の首には、深々と包丁が突き刺されていた。

膝をついた男の首から大量の血が吹き出る。

「殺すのよ。男は皆殺すの。犯されて殺される前に殺すのよ」

俺に噛み付いた女性が、血まみれで包丁を握って立っていた。

それを見た瞬間、恵理奈ちゃんを下ろし、ヘルメットをかぶり、グローブをつけていた。

恐らく、殺し合いになる。

簡易テーブルをひっくり返し、パイプの足をもぎ取る。

U字になっているが無理やり引き剥がし二本の鉄パイプを作った。

無理やり引き剥がした先端がギザギザでよく切れそうだ。

美香も片方の足で同じことをやっていた。

さすが、わかつてる。

狂気に支配された女性らは、手当たり次第に男に襲い掛かっていく。

こちらにも一人来たが、武器を二本持った全身プロテクターフルフェイス人間が二人もいたからか違う方へ向かった。

「行くぞ。ついてこいよ」

「は、はい！」

「二人は間に入って」

「うええーん！ こわいのやだよー！」

「恵理奈、手を繋ごう。行かないと」

「おねえちゃん、おねえちゃん……！」

「いい子ね。恭平、行こう」

「ああ」

至るところで血が出ている。

男の振り返りにあい首を絞められて殺されている女がいる。

凶悪な笑みで女の首を絞めていた男が、数人の女に滅多刺しにされて息絶えた。

「おらあ！ 女は置いてけ!!」



「うっせえー！」

俺に襲い掛かってきた男を前蹴りで蹴飛ばす。

転がったところで男の顔を蹴り上げる。

「ひいっ！」

「大丈夫よ。恭平が守ってくれるわ」

「お、お兄さん、こわいよ」

すまん。

今は手加減できる状況じゃないんだ。

あまり怖がられると、つらい。

遠くでエンジンの音が聞こえた。

バリケードの補強用で置いてあったダンブが動き出している。

段々速度を上げるダンブは炊き出し場を破壊し、何人かの人を撥ね、そしてバリケードにしているバスへ衝突して止まった。

「おい、おい、なんてことだ。バリケードに隙間が」

「嘘……」

外からの圧に強いバリケードも、中からダンブに突っ込まれたらダメだったようだ。バリケードの隙間からたくさんゾンビの手が突っ込まれている。

ダンプからバックを知らせる音がした。

「やめろ。やめろやめろ！ バカ野郎！ やめろ！」

「ダメ、ダメよ。何やってるの。やめて。やめなさい！」

俺と美香の制止など聞くはずも無くダンプはバックを続ける。

止まって、最加速。

「ああ！ クツソ！ 走るぞ！」

「二人とも！ 走って！」

自衛隊員の元へ走り出す。

衝撃音。

そこには、横倒しになったバスと、煙を吹いて止まったダンプ。

そして、大きく開いたバリケードから大量に溢れ出したゾンビたち。

地獄の釜が開いたら、こんな光景なのだろう。

俺たちは亡者から逃げるべく必死に走りだす。

「あつ」

「恵理奈！」

恵理奈ちゃんが転んだ。

優子ちゃんが起こしに行くがすぐそこまでゾンビが迫ってる。

自衛隊員の場所までは炊き出し場を挟んで三百メートルほど先だ。俺たちがそこに行く頃にはゾンビでいっぱいになっているだろう。

「ぎ、ぎやああ！ 離せええ!!」

「やめてえええ！ あああああ!!」

既にゾンビの犠牲者が出ている。

優子ちゃんと恵理奈ちゃんを抱えて走るか？

自衛隊との合流を諦めて市庁舎に避難するか？

どうしたらいい。

すぐそばまでゾンビが来ている。

「オオオオオオオ！」

「ウガアアアア!!」

もう行くしかないだろ。

「美香！ 恵理奈ちゃんを頼む！」

「わかったわ！」

「優子ちゃん！ 俺が抱き上げるからしっかりつかまれ！」

「え、は、はい！」

「二人を中心にして走るぞ！ 俺は右手、美香は左手で抱えろ！」

「ええー！」

走る。

ゾンビがこちらに気がつくが、俺たちのほうが早い。

百メートルは走った。

あと半分と少し。

息は続く。

「恭平ー！」

「うっ、クソー！」

横から飛びついてきたゾンビに鉄パイプを押し付けるようにしてかわす。

浮遊感。

足をつかまれている。

優子ちゃんを地面から守るように抱えて背中から倒れる。

衝撃は背負ったリュックで吸収された。

「大丈夫!?!」

「クッソ！ 離せ！」

足を掴んだゾンビの手を思い切り蹴るがなかなか離れない。

何て力だ。

なんとか手を振りほどいて立ち上がると、絶望があつた。  
俺たちは、ゾンビに囲まれていた。

## 第七話 脱出

よく見ればゾンビの壁にはまだ薄い場所がある。

「美香、俺が行く。二人を頼む」

「疲れたら交代してよね。私もいける」

「ありがたい！」

両手に持った鉄パイプを強く握りしめ、ゾンビの群れに突っ込む。

突き出してきた手を鉄パイプでいなし、体を押しながら足を払って転ばす。

頭を向こうに足をこちらに。

美香たちをその手で掴ませるわけにはいかない。

「恭平、危ない！」

「うっ、ク、クソ！」

横から掴みかかられ引き寄せられる。

そのまま腕のプロテクターに噛みつかれた。

「離しなさい！」

美香の蹴りでゾンビの腕が離れた。

そのチャンス逃さず、左腕を嘔ませたまま首投げ。

プロテクターに食い込んでいた歯が折れ、腕が解放された。

ゾンビから離れ鉄パイプを拾い、迫って来ていたゾンビを押しつける。

少しずつ進んでいるが、遠い。

たったの百メートルちよつとが何百メートルにも感じる。

壊れたバリケードからはゾンビが列をなして侵入して来ている。

ゾンビたちは活きの良い新鮮な肉を目指し避難所内に散っていく。

この避難所内で活きの良さの一二を争う俺と美香の所には、大量のゾンビが押し寄せ  
て来ていた。

「ダメだ、壁が厚すぎて突破できない」

「市庁舎に戻るにしても、あっちもだいたいぶゾンビに囲まれちゃってるわよ」

「……このまま進めば俺たちは大丈夫だが優子ちゃんたちは危ないな」

「せめてバリケードが高いものの下に行ければ二人を投げ上げられるんだけど……」

どうしたらいいんだ。

俺が間違った判断をしたせいで、幼い子供二人が死ぬかもしれない。

絶対に、何が何でも二人だけは守らなければならない。

だが、守りたいが、くそ、方法が思いつかない。

優子ちゃんたちを中心に置いて、俺と美香でゾンビを押し返す。

迫り来るゾンビを転倒させ、うまいこと将棋倒しにして距離を稼ぐ。

美香は俺のように鉄パイプや足払いなどで押し倒すことはせず、前蹴りと後ろ蹴りのコンビネーションでぶつ飛ばしていく。

ゾンビの輪が美香の方は広いが、俺の方は小さくなつてしまっている。

もつと長い柄の武器なら押し返すのも楽だったんだろう。

この短い鉄パイプだと、突き出された腕を払う一動作分が余計に増えて、押し返すのが遅い。

見れば美香は素手だった。

鉄パイプをゾンビに投げ捨てて、美香に習い助走をつけてヤクザキックを繰り返す。

ゾンビの腹に当たり体をくの字に曲げて倒れる。

その後ろにいるゾンビがたたらを踏んでいるので追加でヤクザキックをかまし将棋倒しにする。

これはいい。さすが美香だ。

いいのだがこのままじゃ押し返せるだけで結局ジリ貧だ。

いずれ体力が尽きてゾンビの波に飲み込まれてしまう。

「美香、あとどれだけ頑張れる?」



「どこまでも頑張つてあげたいけど、もって一時間かな」  
「わかった」

倒れるように飛びかかって来たゾンビにヤクザキックを食らわす。

ゴキリと嫌な音がし、ゾンビの首が明後日の方へ向いた。

どうしようもない嫌悪感。

考えるな、こいつらはもう死んでいるんだ。

俺が殺したわけじゃない。

首が明後日の方を向いたゾンビがその首をかくかくさせながら起き上がる。

くそ、殺した心配なんかするだけ無駄だった。

こいつらはもうこういつたモノなんだ。

ゾンビを蹴り飛ばしながら考える。

冷静になれ。

何か手はあるはずだ。

自衛隊のところにはさえ行ければ良いんだ。

ゾンビの密度は増えていくが俺と美香のスタミナは減る一方だ。

この八方塞がりの状況をどう打開すればいいのか。

実際に物理的にゾンビに八方を塞がれているんだけどな。ははっ！

心の中でくだらないことを考えていると頭の上から「山下さーん！」と声がした。ゾンビを蹴り飛ばし空を見上げると、そこには。

「ええっ？ 佐藤くん!?!」

「山下さん！ 助けに来たぜ！」

空を飛ぶ佐藤くんがいた。

いや、飛んでない。宙吊りになっている。

バンジージャンプに使いそうなハーネスを体に装着して、背中から伸びたワイヤーをクレーンのフックに引っかけていた。

ゆっくりと降下してくる佐藤くんに抱きつきたいが、ゾンビが迫ってくるので蹴り飛ばす。

「佐藤くん！ 君にキスしてやりたくらいだ！」

「やめてくれ！」

それくらい嬉しいんだ。

これで、優子ちゃんたちが助かる。

「佐藤くん、一度に何人いけるの？ 全員いける？」

「いや、流石にハーネスが切れちゃう。スリング取ってくる暇が無かったんだ」

「子供二人はいける？」

「いけると思うぜ」

「じゃあお願い。二人とも、佐藤くんのところに！」

言いながら美香がゾンビに蹴りをいれる。

ゾンビは凄いい勢いで後ろに飛ぶ。

あれ、生身の人間が食らったら一撃KOしそうだ。

もうどの道、優子ちゃんたち二人には市庁舎で待っていてもらうしかない。

自衛隊隊員も何人かはここに残るらしいし、佐藤くんもいる。

駐屯地に優子ちゃんたちの両親を探しに行くのは俺と美香だけでいい。

駐屯地からここに自衛隊の応援が来れば、頭のおかしい連中もおとなしくなるはずだ。

高いところが苦手で、これから宙吊りになるのを想像したからか震えている優子ちゃん。頭の頭に手を置く。

「優子ちゃん、怖いと思うけど頑張るんだよ」

「は、はい」

「自衛隊の基地には俺たちが行ってってくるから、両親に二人のことを伝えるからここで待っててな」

「わ、わかりました！ 絶対に、絶対に帰ってきてくださいね？」

「ああ、約束だ。っと、ちよっと待っててくれ」

ゾンビが迫ってくるのでゆっくり話す時間も無い。

五人ほど蹴り飛ばすと将棋倒しになったので少し時間が作れた。

「よし、これを。優子ちゃんの好きな大きいベーコンと恵理奈ちゃんの好きなパン缶があるよ。これを食べて待っていてくれ」

「あ、ありがとうございます。あの、早く帰ってこないと全部食べちゃいますよ?」  
「ははっ、急いで帰ってくるよ」

優子ちゃんも冗談を言える程度には落ち着いている。

背中背負っていたリュックを佐藤さんに渡す。

「落とさないでくれよ。他の缶詰めは食っていいから」

「え、いいの? よっしや、ありがとうございます」

佐藤くんが腰の金具にカチンとリュックを取り付けた。

カラビナとかいうやつか。

あのリュックの上に二人が乗れば落ちなくて安心だ。

「佐藤くん、これもあげるわ」

「え、なにこれ。重っ!?!」

「ビール。私のビールよ。あげるわ」

美香も背負っていたリユックを佐藤くんに渡した。

確かに身軽になった方がゾンビの中を突破しやすいが、まさか美香がビールを渡すとは。

「佐藤くんには感謝をしてるから特別に飲んでもいいわ。だけど私のだからね。少しは残しときなさいよ」

「ありがたくいただくぜ。じゃあもうヤバそうだから行くよ。ほらお嬢ちゃんたち、掴まりな」

「美香おねえちゃん、恭平おにいちゃん、また会えるよね!」

恵理奈ちゃんが泣きながら叫んでいるので親指をグツと立てて。

「アイルビーバック!」

「え? なに?」

「また戻ってくるって言ってるのよ。じゃあまたね」

恵理奈ちゃんには伝わらずに少しがっくりしたが、佐藤くんは笑っていた。

「よし、行くぞ。しっかり掴まれよ。オペさん聞こえる? うん、行ける。子供二人増えたから。そう。ゆつくりゴーハイね」

佐藤くんが無線でやり取りをすると、三人がふわりと浮き上がる。

「きゃあー!」

「わあー、とんでる！」

「うっ。ぐ……。食い込む……。キツイ……」

優子ちゃんと恵理奈ちゃん、俺と美香のリユック分の重さが増え、佐藤くんの太もものハーネスがギユツと食い込んでいた。

なるほど、あの様子じゃ確かに俺と美香も一緒に吊り上げるのは無理だ。

佐藤くんの股が裂けるか、ハーネスが切れるかしてしまおうだろう。

地上五メートルくらいから手を振る恵理奈ちゃんに手を振り返し、駆け出す。

邪魔なゾンビは蹴っ飛ばし、出された手を払い、隙間を走る。

リユックが無くなったおかげで体が軽い。

美香は俺の少し前を、ステップを使いフェイントでゾンビの飛び掛りを誘ってから、それを避けて走っている。

あれは真似できない。

走っているとどうしても突破が無理そうなゾンビの集団に当たる。

一人にヤクザキックをかますも他のゾンビに迫られる。

くそ、掴まれたらそのまま引き倒されて終わりだぞ。

「オッラア!!」

「美香！ 助かった！」

「気にしないで！ 行くわよ！」

美香が横から飛んできて蹴りを入れてくれたおかげでなんとかあった。

しかし、ゾンビをまとめて三人も吹き飛ばす美香の蹴りは、いったいどうなっているのか。

俺が食らったらあばら全部を折って内臓破裂で即死くらいはしそうだ。

美香の助けもあり自衛隊の装甲車が見える場所まで来れた。

もう前方にゾンビの姿は見えない。

ようやくゾンビの壁を抜けた。

「遅い！ もう出るぞ！」

「早く乗る！」

「どっから乗んだ、これ！」

「ドアどこ!?!」

「一番後ろだ！ 開いてんだろ！」

自衛隊員の菊間ともう一人の女性隊員に促され、俺と美香は装甲車に乗り込んだ。

入り口は小さく狭く低い。

こんなの乗ったことないからわかんねえよ。

「ちよ、ちよ、めっちゃヤバいことになってんじゃん！」

「あん中走って来て大丈夫だったの!? 何おきてんのか全然わかんないんだけど!」  
装甲車の後部座席には双子がいて、ぎゃんぎゃん喚いてうるさかった。

「おい、少し黙っとけ。あいつらが寄ってくるぞ」

「わ、わかった……」

「静かにする……」

狭く暗い車内に座り、ヘルメットを外す。

汗がもの凄い出ていた。

美香も肩で息をしている。

「さすがにやばかったわ……」

「ああ、そうだな……」

このプロテクタースーツがなかったら死んでいただろう。

バイク屋の店主には感謝してもしきれない。

「美香さん、優子ちゃんたちは?」

「もしかして……」

「安心して。二人は無事よ。市庁舎で待ってもらったことにしたわ」

双子への説明は美香に丸投げしよう。

美香のことを良く慕ってるから、ちゃんと聞くだろう。



決して俺が宇宙人語を聞きたくないからとかではない。

装甲車はゆっくりと進むが外の様子はわからない。

窓がないのだ。

時折、ドンやゴンといった音がして、車体が何かを乗り上げたように揺れた。

ゆっくりとゆっくりと進み、やがてゾンビの呻き声が小さくなった。

避難所を抜けたか。

狭い車内を運転席にいる自衛隊員の方へ向かう。

「おい、自衛隊はゾンビへの攻撃許可が下りてないんじゃないんじやなかったのか？ 轢いてたろ」

「許可が下りてないのは銃口を向けることだけだよ。これはあれだ。元国民が移動妨害

をしたために起きたやむを得ない事故だ」

「なるほど。事故なら仕方ないな」

攻撃をためらって自分たちは全滅しましたじゃ目も当てられない。

俺はこの菊間の判断を尊重する。

「駐屯地までどれくらいだ？」

「道が塞がってなけりや渋滞無しで一時間つととこだな」

「はっ。渋滞なんざもう起きないだろ。走ってる車なんかどこにもいない」

「ゾンビ渋滞がってことだよ」

「ああ……」

道を埋め尽くすほどのゾンビが居たんじゃ、さすがにこの車でも無理だろう。

「ま、到着するまでゆっくりしとけよ。あのゾンビの中を走ってきたんだ、疲れただろ。中々シビれたぜ」

「ああ、ありがとう。そうさせてもらうかな」

駐屯地に着けばゾンビと争うことはなさそうだが、それでもスタミナを回復させておきたい。

「後ろのボックスに水と携帯食料が入ってるからさ」

「ああ、助か」

「かゆい」

「え？」

突然、運転をしていた女性隊員が目出し帽を脱ぎ捨てた。

「ちよ、春、何脱いでんだよ。脱ぐなって言われてたろ」

「もう着けている意味が無い。顔を見られて侮られないようにと命令されていた。この人たちには無意味」

「あー、んー、それもそうか」

菊間も目出し帽を取ると、意外にも整った顔が出てきて驚いた。

「ん？　なんだよ、そんな見て。……ははーん、さてはあたしに惚れたか？　あたしが美人だからってお前、浮気はダメだぞ。奥さん泣いちゃうぞ」

「あー、いや、そういうんじゃないやなくて、女ゴリラが出てくるもんだと思ってたから」

「よし、その喧嘩買った。表に出ろ」

「ゾンビがいるからパスだな」

菊間とくだらないことを言っていると、運転している女性隊員が「貴方、名前は？」と聞いてきた。

「そーいや名乗ってなかったな。」

「山下恭平だ。あつちにいるのが妻の美香だ」

「私は山口春やまぐちはる。よろしく」

「ああ、こちらこそよろしく」

「あたしは菊間葉子きくまようこだ。よろしくな、恭平」

「お前、距離感計り間違えてるとか言われないか？」

「言われないな」

随分とフレンドリーで対応に困る。

まあ、こいつの口調もあってか、いつのまにか男友達感覚でいたのは間違いないか。

「あー！　お兄さん浮気だ浮気ー！」

「ヤグったらダメっしょー！ 美香さーん！ お兄さんが美人さん二人と浮気してるよー！」

「つーか二人ともきれかわすぎ！」

「ぐうかわ！」

双子が喚く。

かわ……、革？ 俺のスーツか？ 切れ革？ 切れてるのか？ どこが？

ダメだ、わからん。

「恭平、浮気はダメだからねー」

「いや、俺が美香以外を愛すわけ無いじゃないか……。わかってるだろう？」

「んふふ、まーね」

何を言っているんだか。

長い付き合いなんだから不安になることもないだろうに。

「ぐ、は……。至近距離でノロケを浴びて死にそうだ……」

「同感……。これはキツイ」

「軽くからかったらこの仕打ちとか……」

「冗談で弱く肩パンしたのに全力フルパンチで顔を殴り返されたらこんな気分になると思う」

後ろの席にあったボックスに水と携帯食料があったのでいただく。

水のペットボトルを開け一口、二口と飲み、「ほら」と美香に渡す。

「ありがとね、恭平」

「ん？ うん？」

嬉しそうに水を飲む美香が、なんだか印象的だった。

## 第八話 感染

避難所を出発して三時間が過ぎた。

俺たちは未だ駐屯地にたどり着いていない。

「この道もダメ。塞がっている」

「高速もダメ、側道もダメ。県道もバイパスもダメと来たか」

道路の両脇に停車した放置車両のせいで一車線しか無い道を来たが、ダンプが横倒しになって行き止まりとなっていた。

Uターンする場所も無いので、広いところに出るまではひたすらバックで来た道に戻るしかない。

出発してから何度も同じようなことが続き、皆が辟易とした表情を見せていた。

「もう行ける道は無い。県道から歩くのが一番近い」

「歩きか。でもあそこからでも十五キロはあるぞ」

「行くしかない」

「はあ……。つたく。無線が使えればわざわざ行くこともなかったのになあ」

菊間の呟きが気になった。

確かに駐屯地に無線で応援を要請すれば良いだけの話だ。

「無線、壊れてるのか？」

「ん？ ああ、違う違う。ゾンビ騒ぎのドサクサに紛れて悪化した奴がいっぱいいてさ」

「基地の周囲の土地にジャミング装置が大量に置かれている」

「巧妙に上手いこと隠してさ。しかもひとつふたつじゃなくて何百個ってな」

「ロクなことしねえな……」

「自衛隊に動かれて日本人を助けられるのがムカつくって奴が多いんだよ。違う国の奴が」

「日本人のふりをして、そういう工作をしている」

人類の危機だというのに、まだ国同士で足の引つ張り合いをしようとしているのか。

そんなことをしている暇があるならゾンビの対策でもすれば良いものを。

そんな話をしながら車に揺られていると、県道の行き止まりについた。

車がゆっくりと停車し、山口さんが「ふう」とため息を一つ。

「暗くなる前に基地につけるか……」

「ギリギリだな」

「ここ最近の日没時間はだいたい十八時少し前くらいだ。」

この停車位置から駐屯地まで約十五キロ前後。

一時間に五キロ歩くとして三時間はかかる。

今が三時過ぎだからかなり急がないと日没には間に合わないことになる。

「駐屯地には全員で行くのか？ ケガ人をおぶって十五キロ歩くのは無理だろ」

「ここにはあたしが残る。その双子も外歩かせるのは危ないから残りだな」

「うー……すみません」

結愛が凹んだ様子で謝っていた。

「構わない。そもそも車を置いて行く際には、車を守るためにどちらかは残る予定だった」

「そういうこと。だから気にすんなよ、JK」

山口さんと菊間にフォローされ結愛は少しホツとしたようだった。

「じゃあ私と恭平は駐屯地に行くわよ。戦える人数は多い方がいいでしょ？」

「助かる」

「まあ俺たちの着てる服はゾンビに噛まれても平気だからな。壁役にはなれるよ」

「私は囲まれなければとりあえずなんとかなるわよ」

「あんた、あれだけゾンビ吹っ飛ばしといて何言ってるんだよ。見てたけどあんなことできるのはうちの隊長くらいだぞ」

「隊長って？」



「小池隊長。小柄な人いただろ？」

「ああ、あの人か。何かしらの武術をやってるわね、あれ」

「なんとか拳法とか言ってたな。斉藤が、ああ大きいやつな、あいつがしょっちゅう吹っ飛ばされてんだよ」

「へえ。一度手合わせしてみたいわね」

どうして美香はこう戦闘ジャンキーなのだろうか。

そのうち「私より強い奴に会いに行く」とか言い出しそうだ。

周囲を警戒しゾンビがいないことを確認して車から降りる。

車のエンジン音で集まってきてもおかしくなかったが、不思議と姿が見えなかった。

「警戒をしつつ早足で進む」

「わかったわ」

「了解だ」

山口さんの先導に従い歩き出すと後ろから「お兄さん、美香さん」と声がかかったので振り返る。

「気をつけてよ、マジで」

「絶対に帰ってきてよね」

結愛と愛梨にそう言われたので親指をグツと立て。

「アイルビー」

「恭平、伝わらないわよ、それ。すぐ戻るわ。静かに大人しくしてなさいね。うるさくするとゾンビが寄ってくるから」

「うん」

「わかった」

美香の言うことを素直に聞く双子だった。

俺は、立てた指をそつと下ろした。

「ジエネレーションギャップって、ツライな」

「そう？　恭平のネタが古いだけだと思っよ」

名作映画は誰にでも通じると思うけど、最近の若い子は古い映画なんて見ないものなのか。

県道は二車線道路だったが車で埋まっており、さらにはゴミが散乱していて歩くのが大変だった。

セダンタイプの乗用車なら乗り越えられるが、ワゴンタイプやトラックなどは迂回しないといけない。

迂回をするたびに車の下や影にゾンビがいないかのチェックをして、余計に時間がか

かる。

「ずっと車の上歩いた方が早くない？」

「いや、音がするだろうからやめた方がいいよ」

「安全優先で行く」

美香や山口さんはぴよんぴよんと車の上をうまいこと飛んでいけそうだが、俺は多分転んで落ちる。

あまりそういったことは得意ではない。

山口さん、俺、美香の順で並び、通りを歩く。

これじゃ俺が守られるような配置で、なんとも居心地が悪い。

実際に守られているんだろうけど。

「止まって」

「なに？」

「ゾンビか」

山口さんの制止で足を止める。

前方にはゾンビがいるらしいが、ここからじゃ車の影になって見えない。

「誘導する」

山口さんは足下に落ちていたペットボトルのゴミを拾うと、進行方向とは別の方へ投

げる。

コンと音がしてもしばらく動かずに待つ。

「行く」

先導する山口さんの後ろを同じように姿勢を低くし静かに歩く。

まるで映画とかでよく見る特殊部隊の隊員になったようだ。

演技指導——というよりも見本——は自衛隊隊員の山口さんだから、割と様になって  
いると思う。

ゾンビは遠くの方をフラフラと歩いているだけで、こちらには気がついていない。

ゾンビの姿が見えなくなると、山口さんが普通に歩き出したのでそれに従う。

「人の視野は通常で一三〇度ほど。ゾンビの視野は四〇度程度」

「へえ、そうだったんだ」

「どこで知ったの？」

「いろいろと実験した。視野の狭いゾンビだが動体認知は一八〇度ある」

「動体認知？　つまり？」

「動いているものは目に見える範囲全部に反応するってことでしょ？」

「そう。それと暗視もできる。暗くしていても動いたら見つかる」

明かりがあろうが無かろうが関係ないのか。

「レーザーポインタとかで誘導できないかな？」

「猫じゃないんだから」

「試したが、人のシルエツトにしか反応しない」

「だったらダンボールや着ぐるみをかぶれば安全なんじゃない？」

「……盲点だった。今度試してみる」

まあ、匂いとか音とかではバレそうだけど、遠くにいるゾンビはよって来ないかもしれない。

ふと視界の端で何かが動いた気がして振り向く。

美香以外にはゾンビも人も何もいなかった。

「どうしたの、恭平？」

「いや、何か動いた気がして」

「何もいないわよ？ 少し過敏になってるのかもね」

「かもな。俺怖いの苦手だから」

美香と軽口を叩いていると「静かに」と山口さんに注意をされてしまった。

少し軽率だったかもしれない。

その後も山口さんのおかげでゾンビをうまくやり過ごし、駐屯地へ向けて進む。

道のりは順調だったが、日没には間に合わなかった。

「ライトをつける。影に気をつけて」

「ああ」

「もう少しで駐屯地が見える」

「急ぎましょう」

県道には街灯が少なく、家々の灯りも無いから闇が濃かった。

闇の中からゾンビが飛び出てくる想像をして、ブルリと震えた。

山口さんのヘルメットに装着したライトが青白い光で道を照らした。

「ん？ 何か聞いたような」

「また？ 恭平怖がりだから」

「かもしれないな。疑心暗鬼になってるのかも」

元々暗闇は怖くて苦手だし、今じゃ何が潜んでいるかもわからないから余計だ。

「行く」

歩き出した山口さんについて歩く。

タタツと右前方から何かの音がした。

目を凝らすも何も見えない。

「何か音がした？ 右の方」

「んー、聞こえなかったけど」

「そうか……」

どうにも暗闇の中に何かがある気がして仕方が無い。

黒く何も見えない闇が蠢いているように感じる。

音のした方も暗闇にも、何か大きな黒い塊が動いているように見える。

気のせいなら良いんだが。

再び音が聞こえる。

目を凝らす。

何かがいるようにしか見えない。

「山口さん、すみません。あのあたり照らしてもらって良いですか？」

「良いが」

闇を凝視する。

山口さんのヘルメットライトに照らされて、黒い塊が……動いた!?

「危ない!」

咄嗟に山口さんと黒い塊の間に手を出すと、とても重いものに体当たりを受けたかのよう押し倒された。

体を押さえつけられ左腕を何かに固定されたと思ったら物凄い痛みが走る。

「う!?! がああ!! 離せ!!」

「恭平！ この、離れろ!!」

「ガアルル!!」

美香の蹴りを受け、俺の腕に噛み付き振り回すそいつは、大きな狼のような犬だった。何度も美香の蹴りを受けても俺の手を離そうとしない。

左腕の先の感覚がなくなってきた。

痛みが脳味噌に刺さるようだ。

美香が犬の口に蹴りをいれようがビクともしない。

まるで怪物だ。

俺の口からは勝手に叫び声が吐き出され続けている。

「山口！ なにしてるの！ 撃ちなさいよ！」

「し、しかし」

「ゾンビじゃなくて犬なんだから撃ち殺して!! 早く！」

「クツ……」

パンという甲高い音が短く三回響く。

俺の上から重さが消え、腕が解放された。

「グルル！」

「嘘、まだ死なないの？」



「どいて」

乾いた音が連続で響くと、俺の横にどきりと犬が倒れた。

「恭平！ 大丈夫!? 意識はある!?!」

「あ、ある……。俺の腕なくなってるないか……。う?」

「あるわよ！ 今止血するから!」

「これを」

山口さんの取り出したガーゼのようなものを美香が受け取り、俺の腕へ押し当てて。

「うっぐ……。!」

「少し我慢して!」

まるで腕が心臓になったかのようにズキンズキンと脈打つ。

ガーゼを押し当てて、包帯で縛る。

血が滲み出していた。

「まずい。銃声でゾンビが集まってきた」

「恭平、立てる?」

「ああ、なんとか……。!」

美香の手を借りて立ち上がる。

少しふらつくが何とか歩けそうだ。

足元に転がる犬の死体を見る。

犬にしてはとても大きい。

動物園で見た虎やライオンの雌と同じくらいの大きさがある。

顔つきはまるで狼だったが、毛色は真っ黒だ。

「こいつ、なんだったんだろう……」

「野生動物でしょ。狼を誰かが持ち込んだのよ、きつと」

「急ぐ」

周囲にはゾンビが集まり始めている。

暗くて見えないが、ゴミを蹴飛ばして歩く音や呻き声が聞こえてくる。

相当数のゾンビがいそうだ。

腕に巻いた包帯は赤く染まり、収まりきらない血がポタポタと地面にたれている。

これは結構な重症なんじゃないか？

足手まといになってしまおうとは思わなかった。

強化プラスチックでできたプロテクターがバキバキに碎かれたのも衝撃だ。

プロテクターが無ければ腕が千切れていたのかもしれない。

血を多く失ったのか、ボーっとする。

二人についていくのがやっただ。

気がつけば美香がゾンビを蹴り飛ばし、山口さんが突き飛ばして転ばしている。いつの間にゾンビがこんな近くに。

「……平！ 恭平!!」

「あ、すまん。今行く」

「違う！ 後ろ！」

「え？」

美香の声で振り向くと、一人のゾンビが掴みかかってくる場所だった。

「くそ、やられるかよ」

ヤクザキックを食らわすもあまりダメージが無い。

ゾンビは吹っ飛びもせず、むしろ距離を詰めてきたせいで押し倒された。

くそ、犬と言いたいと言いつつ、人を食うことしか考えられないのか。

ゾンビが口を大きく開け、俺の新鮮な血が滴る包帯部分へ噛み付く。

「ぐう!! 離せこら!!」

「オツリア!!」

美香のかかと落としでゾンビの首が千切れた。

ゾンビは生首だけでまだ噛み付いている。

蛇か何かなのか。

外そうとするが、肉に歯が食い込んで中々離れない。

顎を掴んで口を開け、美香に手伝ってもらいなんとか外す。

「恭平、腕が……」

「……あとにしよう。今はすぐにでも逃げないと」

「うん……」

ヘルメットをしているおかげでわからないが、きつと俺の顔色は真っ青になっているだろう。

美香に支えられ、山口さんに守ってもらいゾンビから逃げ出す。

どうにも自分が情けない。

とりあえずはゾンビの群れを抜けて、安全と思われる場所まで逃げてきた。

今はバスの屋根の上で治療してもらっている。

山口さんの出してくれた止血ガーゼと包帯で、とりあえずは血が止まった。

血が止まっただけで、縫ってはいないのでいつまた血が出てくるかがわからない。

血を失いすぎて頭がクラクラする。

これ以上血を失ったら死んでしまいそうだ。

「早く駐屯地へ行って治療してもらいましょう。あとどれくらい？」

「すぐだ」

「じゃあ出発しましょう。恭平、立てる？」

「ああ、なんとかな……」

美香の手を借りて立ち上がると、山口さんがマシンガンの銃口をこちらへ向けていた。

「ちよつと、なにしてるのよ。それ人に向けて良いものじゃないでしょ」

「すまない」

山口さんは謝罪をしてくるものの、銃口は下げなかった。

「すまないが、感染者を駐屯地へ入れる訳にはいかない」

「……は？ なによそれ」

「山下恭平は感染した。国民の命を守るため、貴方を駐屯地及び避難所等へ入れる訳にはいかない」

「ふざけないで!!」

美香が激昂し、山口さんへ食って掛かる。

「恭平はあんたを庇ったせいでケガしたのよ!?! わかってんの!?!」

「……本当にすまない」

「すまないじゃないわよ! 駐屯地で今すぐ治療して!」

「……それは、できない」

そうか、俺は感染しているのか。

確かに化け物のような犬にもゾンビにも噛まれてしまった。  
そうか。

俺はゾンビになるのか。

だったら駐屯地に入ることなど不可能だろうな。

大声で山口さんに詰め寄る美香の手を掴む。

「美香。もういい。ありがとう。俺は駐屯地には行かないよ」

「でも……」

「噛まれたら確実に死んでゾンビになると言われている。俺はここまでだ。美香だけでも駐屯地に」

「行くわけない！ 恭平と一緒に居る！」

美香が涙声で叫びギョツと抱きしめてきた。

噛まれたせいでこんなに美香を悲しませるなんて。

何をやっているんだ、俺は。

美香の声に引かれ遠くからゾンビが歩いてきているのが見えた。

「山口さん、行ってください。俺と美香はここにいます」

「……すまない」

「いえ、いろいろ良くしてくれてありがとうございます」

「こちらこそ、感謝する」

「あ、そうだ。駐屯地に優子ちゃんたちのご両親がいるか探してあげてください。飯塚夫妻です」

「約束しよう」

「じゃあ、これで」

「ああ。さようなら。本当にすまなかつた」

「いえ。さあ行ってください」

バスから降りて歩いていく山口さんが最後に振り返り敬礼をくれた。

俺は、腕の中で震えながら泣いている美香にどうやって別れを告げるべきか悩んだ。

どうか、美香には俺の分も生きて行ってほしい。

美香を抱きしめる腕にギュツと力を込めると、美香が同じように返してくれた。

## 第九話 出会い

腕の中の美香がすん、すんと鼻をすする音が聞こえる。

抱きついて動かなくなってしまう美香をどうにか動かさないと、このままじゃゾンビに囲まれてしまう。

「美香、動こう。どこか安全なところに行かないと」

「うん、わかった……。一緒に家に帰ろう？」

「……家はちよつと遠いな。それに燃えて無くなってるかもしれないし」

「うん、そっか……。そうだね……」

ここまでで意気消沈している美香ははじめて見た。

ここは少し無理をしてでも俺が安全なところまで連れて行かないとだな。

今の美香はゾンビ相手に戦えそうもないし、俺もまともに動けない。

静かに見つからないように物陰を進めば、なんとか安全そうな場所まで行けるか。

このまま県道を進めば県道同士がぶつかる交差点に出る。

そこを港の方に曲がれば大きなマンションがあったはずだ。

とりあえずはそこを目指そう。歩いて一時間もかからないはずだ。



俺がゾンビになる前に美香を安全な場所へ連れて行くのが、俺の最後の仕事かな。バスから乗用車の屋根に、屋根から地面に、何てことの無いかのように降りる。

「ほら、歩こう、美香」

「うん」

美香の手を取り歩き出す。

まだフラフラするが、ここで弱つているところを見せたら美香を更に悲しませてしま  
う。

せめてマンションにつくまではもってけると良いが。

雲で隠れていた月がいつの間にか現れてくれたおかげで灯り無しでも何とか歩けた。

交差点は大型トラックの事故で大変な事になっていた。

箱型の長さが十五メートルはありそうなトラックが一台、横倒しになって道路を封鎖  
している。

青看板で確認したが、このトラックに沿うように左へ行けば目的のマンションで、右  
に行けば駐屯地だろう。

「ここを左だ。どこからゾンビが来ても対応できるように真ん中を進もう」

「恭平、ごめんなさい。ここからは私が前を歩くわ。無理しないで」

「いや、全然無理してないよ？ まあ美香がやってくれるならありがたいけどね」  
「任せて」

だいぶ美香の調子が戻ってきたように感じる。

正直、もう平気なふりをするのも限界だった。

美香に見られる心配の無い後ろを歩けるのはありがたい。

「見て。ゾンビがいる」

「ああ、一人か。誘導できるかな」

「やってみる」

遠くの方にフラフラとしながら立っている人影があつた。

こんなところで一人で立っているのはまず間違ひなくゾンビだ。

足音を立てないように静かにトラック沿いに進む。

トラックの先には乗用車が停まっているので、その影に移れば誘導もしやすいだろう。

乗用車の方へ移動しようとトラックの端から身を乗り出すと、反対側から同時に人影が飛び出してきていた。

ゾンビがそつちにもいたか。

至近距離で蹴りが使えないため、美香が殴りかかる。

「Hey stop!! I, m alive!!」

「え!? 人!」

外国人の女性が英語でなにやら叫びながら両手をあげている。

敵意が無いようだが片手には大きく重そうなクロスボウが握られていた。

美香は前屈の構えのまま左手を前に突き出し、右手を顔の横に置いている。

いつでも突きが繰り出されそうだ。

あれの前にはいたくない。

「あんた、私たちを襲う気?」

「アー、ワタシ、日本語少しわかるマス。ちよとネ。ケンカしないヨ」

美香の問いかけに、女性は片言の日本語で答えた。

争う気は無いようだ。

美香にもそれが伝わったらしく、構えを解いた。

女性は欧米風の顔立ちをしており、迷彩柄のズボンにシャツを着ている。

ブロンドのパーマのかかった髪の毛はバンダナで覆われていた。

「あー、えーと、ラブアンドピース?」

「ヤー! Love&amp;P; Peace! デモちよと待つてネ。Zが来てるマス」

美香の英語に元気に返してくれた女性が指さす方から、先ほど見つけた一人のゾンビ

がこちらへフラフラと近寄ってきていた。

大声で気付かれてしまったようだ。

こちらとの距離は五十メートルくらいか。

「ワタシがやるマス。ちょっと待ってて」

滑車つきのクロスボウのバイポッドを展開し乗用車のボンネットに乗せ、ハンドルをカチカチと回して弦を引っ張っていく。

その音が意外と大きく、他のゾンビが寄ってこないか心配になった。

腰には矢筒が装着されている。

女性が矢筒から凶悪な先端部がついている矢を取り出しクロスボウにセットした。

「随分物騒な物持つてるな」

「日本語で『Hunting』ってなに言うマス？」

「ああ、ハンティング用か。ハンティングは狩りとか狩猟かな」

「ソレね。じゃあやるマス」

女性が膝立ちになりクロスボウに取り付けられたスコープを覗き込む。

「Eat this……」

パンと手の平を叩いたような結構大きな音が響くと、遠くにいたゾンビが膝をつき倒れこんだ。

頭には矢が突き刺さっていて、容赦なくゾンビを殺すその所業に少しだけ後味の悪さを感じた。

「Hell yeah! Piece of cake!」

女性が嬉しそうになにやら言っている。

少し声を抑えていただきたい。

「さあ行くマス。ん？ アナタ腕どうしたノ？」

「ゾンビに噛まれたのよ」

「Oh……」

俺の代わりに美香が答えてくれると、女性が天を仰ぎ顔に手を置くジェスチャーを示してきた。

少しイラついたが外国人は大げさな表現をすると聞いたことがあるのでこらえる。

「ワタシ『medicine』貰ってるマス。Zの『medicine』」

「メデイシン？ ……薬!? 薬があるの!?!」

「アー、ワタシの『friend』から貰ってるマス。少しネ。けど人に使ったことない言ってたデス」

「試験段階ってことか？」

「ソレね。使うならあげるマス。けど、持ってるじゃないネ。家にあるマス」

俺は、気がついたら土下座をしていた。

「くれ。いや、ください。ああ、くれるんだったか。……ありがとう。本当にありがとう……！」

「Oh…… Japanese DOGEZA!! It was the first time I saw。」

英語はよくわからないが、土下座とは聞こえた。

女性は俺の肩に手を置くと「立つマス」と言つて笑顔を向けてきた。

立ち上がり、女性と向かい合う。

「ワタシはマキシーンデス。マキシーン・ブルックスというマス。アナタは？」

「恭平。恭平、山下だ」

「キヨーハイ、ヨロシクおねがしますネ。アナタは？」

「美香、山下よ。マキシーン。貴方は私の救世主よ」

「キユーセ？ 日本語難しいデス。ミカ、ヨロシクおねがしますネ」

「こちらこそよろしくお願いします。時間が惜しいわ。マキシーンの家に行きましょう」

「家、アツチ行くマス。大きい『high-rise apartment』見えるネ」

「アパートに住んでるのか。俺たちも空いている部屋があればしばらく住みたいな」

「そうね。ついでから考えましょう」

とにかく安全な場所で体を休めたい。

気を抜いたら倒れかねないくらい、頭がフラつくのだ。

『Medicine』あげる代わりにお願いあるマス。キョーヘイとミカ、ワタシを助けるしてほしいデス」

「助ける？」

『friend』助けるしたいネ。ジータイにはダメ言われたヨ」

「良いわ。その薬が本当に効くならどんなお願いも聞いてあげる。だから早く行きましょう」

「OK!!? 行くマス」

先頭をマキシーン、そのすぐ後ろを美香、最後尾に俺の順番で道を進む。

マキシーンはゾンビに出くわす度にクロスボウで殺そうとしていたが、美香に先を促され渋々といった様子で諦めていた。

実は危ない人なのかもしれない。

歩いていると、噛まれた腕が熱くなり、少し引いていた痛みがぶりかえして来た。

包帯の隙間から見える肌の色は黒くなっており、明るいところで見たら紫色とかなっていきそうだ。

ポタポタと垂れていた血は止まり、包帯がカピカピに乾いていた。これも感染した影響なのか。

小一時間も歩くと、マキシーンの目指している場所へとついた。

「(ハハ)ネ。(ハハ)から登るマス」

「これつて……」

「これは……」

いわゆるはしご車と言われるものが、そのはしごを伸ばしていた。

伸ばす先はタワーマンションの五階通路。

そういえば英語でマンションのことをアパートと言うのを思い出した。

このタワーマンションは二十階建てで、ゾンビパニックの直前に完成したのが記憶に新しい。

こんな良いところに住んでいて、少し羨ましく思う。

はしごはほぼ垂直に近い角度で伸びている。

これならゾンビの進入は防げそうだ。

見ればマンションの一階エントランスは家具などが積み重なってふさがれている。

これならマンション内にゾンビの侵入が防げて、さらに出入りも可能だ。

なかなか理にかなっている。



「コレ見つけるの大変だったネ」

「マキシーンが持つてきたの？ このはしご車を？」

「道、ジャマ多いくて、でもコレ強いデスから、押したヨ」

「他の車を押しにかけて来たのか。確かにこのはしご車の重量なら可能だろうな」

それにしてもこのような大きい車を運転でき、その上ではしごを展開する操作ができるマキシーンはいったい何者なのか。

「早く行くマス。キョーヘイがZになるマスしたらワタシ撃つしかないネ」

「撃たれたくないから、早く行こう」

「急ぎましょう」

冗談なのか本気なのか。

マキシーンの手には矢の装填されたクロスボウが握られていた。

ほぼ垂直のはしごは、片手で登るには少し過酷だった。

落ちそうになるのでケガをしている左手を使わざるを得ない。

使うたびに裂けてしまうかのような激痛が走り、ヘルメットの中の顔は脂汗でベタベタになっていた。

俺のすぐ下には美香が登っていて、もし落ちそうになったら支えてくれるとのことだ。

軽いとはいえ成人男性を一人支えるにはそうとうの力が要りそうだ。

一緒に落ちてしまうのが簡単に想像できたため、何がなんでも落ちないように気を付けて登った。

細いしごは登るたびに揺れ、折れたり倒れたりしないか心配になる。

五階程度の高さだが、こんな不安定な場所にいるとても怖く感じた。

「恭平、あとちよつとだよ。頑張つて」

「ああ、頑張る……」

美香の励ましもあり、なんとか登りきる。

「遅いネ。まだまだ登るマス」

「登る？ この階じゃないのか」

「ワタシの部屋は八階デス。まずその部屋に行くマス」

「どういうこと？」

「いいからついて来るデス」

マキシーンが五〇七号室の鍵を開けドアを開く。

ズカズカと土足で入っていくので、ついて行く。

一目で誰も住んでいないとわかる何もない部屋を進み、ベランダに出るとそこにはまたはしごがあった。

「なるほど。ハッチか」

「それネ。行くマス」

ハッチのはしごを登り六〇七号室へ。

生活感はあるが誰もいない部屋を抜け通路に出る。

「この階段をあがるネ」

「下はバリケードでふさがれてるのか。なるほどな」

五階から六階にあがる階段はふさがれているが、六階から七階にあがる階段はふさがれていなかった。

そのまま八階に行くのかと思ったら、また階段がふさがれていた。

「またハッチか？」

「そう。行くマス」

通路を進むとまたもやバリケードがあり、ハッチのある七〇七号室には行けない。

どうするのかと思っていたら、マキシンが七〇九号室に入り、またベランダへ。

ベランダの仕切りが取り払われており、隣の七〇八号室へ行く。

そのまま七〇七号室に行くのかと思いきやまた通路へと出た。

「ずいぶんと遠回りさせられるんだな」

『Invader』はZだけじゃ無いデスから『just in case』……日本

語で、気をつケル？」

「なるほど」

警戒するに越したことはないか。

マキシーンは若い女性で一人だ。

よからぬ輩に狙われるかもしれない。

この迷路のような順路も仕方の無い事か。

通路から七〇七号室の鍵を開けて入り、ハッチから八〇七号室へ。

両端がバリケードでふさがれている通路に出て、八〇三号室へ行くとようやくそこが

マキシーンの部屋だった。

「散らかってるデスけど入って入って」

「そういう日本語は知っているんだな。お邪魔します」

「あ、靴OKデス」

「脱ごうとしちゃったわ」

「こんな状況じゃ脱がないのが正解なのかもな」

「そうね」

マキシーンの部屋に入り、ヘルメットを脱ぐ。

なんとなく解放された気分になれた。

マキシーンの部屋は物で溢れていた。

缶詰、ペットボトルなどの食料品から、発電機、ガソリンまで。

大量にある大きなバケツには水が大量に貯められていて、それはベランダにも置いてあった。

よくわからない作業台にはクロスボウが何台か置かれていて、大量の矢もあった。

「ワタシが集めたデス。大変だたネ」

「そりゃこれだけ集めたら大変だろうに」

「Zをいなくさせるまで全部必要なモノね」

「ゾンビがいなくなるまで必要なもの？ ゾンビはいなくなるのか？」

このB級映画のようなあり得ない世界が終わって、平和な世界が戻ってくるのか？

「Zはいなくなる無いデス。ワタシが『hunt』するマス。皆でやらないといなくなる無いネ」

「狩るってか。そいつは、なんとも」

「もう話はいいでしょ。マキシーン、薬はどこ？」

「oh! そうデス。持ってくるマス」

すっかり忘れていた。

俺の中にいるゾンビウイルスが、今もなお俺をゾンビにしようと動いているんだ。

薬があるなら早く使う方が良いに決まっている。

「あつたヨ。はい、これネ」

「注射か……」

マキシーンが黄緑色の液体の入った注射器を持ってきた。

「これが薬なのか。」

注射が苦手な俺としては遠慮したいところだが、ゾンビになるかどうかの瀬戸際でそんなことは言ってられない。

「これはどこに注射すれば良いんだ？ 静脈か？ 傷口近くの方が良いのか？」

「んー、ワタシわからない。聞いてないヨ」

「静脈で良いと思うわ。すぐに体中にいるゾンビウイルスを殺すべきだし」

「そうか。じゃあ、美香頼む。俺は無理だ」

「でしようね。スーツの上は脱げる？ 手伝おっか」

「ああ、助かる。変なふうに破けてて片手じゃうまく脱げなくて」

美香の助けもありなんとかスーツの上をはだけさせ、腕を出す。

一二の腕を紐で縛り静脈を出す。

「マキシーン、アルコールない？ 消毒液でも良いけど」

「コレならあるマス」

マキシーンが持っているのはスピリタスの瓶。

あれで消毒ができるのか？

「それでいいわ。少し貰うわよ」

「これも使うデス」

マキシーンから救急セットを受け取った美香がガーゼをとりだし、スピリタスで俺の腕を消毒した。

強い酒の匂いにクラクラする。

大量にガーゼにスピリタスを染みこませ、美香がそれで注射針を包んだ。

というか、俺の腕を先に洗って消毒してきた方が良い気がするが、今は薬を打つのが先か。

「いくわよ。失敗したらごめん」

「一発で楽にしてくれ」

前に病院で注射されたときは、針を刺したあと静脈を捜すためかグリグリと掻きまわされた。

あの痛みは忘れることができない。

いつまでもグリグリしてくるので「もうやめろや！　ヘタクソが!!」とチンピラ風に怒鳴ってしまったのは苦い思い出だ。

そんなことを思い出していると美香が「はい、終わり」と言った。

「え？ もう？ 全然痛く無かったよ。美香は注射が上手だな」

「そんな褒め方されたの初めてよ」

そう言つて美香が笑つたので俺もつられて笑つた。

「気分は悪くなつてない？ 吐き気とか、頭痛とかは？」

「そんなすぐに症状は出ないと思うけど、とりあえずは大丈夫だよ」

「良かった……」

安堵からか涙をポロポロと流す美香の頭を撫でると、涙の量が増した。

心配をかけてすまない。

それにしてもこれでゾンビにならなくて済むのかと思うと、マキシーンには感謝をし

てもしきれない。

「マキシーン、貴方にはなんとお礼を言えば良いのかわからないよ。ありがとうとしか

言えない」

「別にお礼いらないデス。ワタシも『friend』から貰っただけデスから」

そのフレンドとやらにも会つてお礼をしたものだ。

この世界でゾンビになるはずだったのに助かった人がどれだけいる？

数えるほどしかないんじゃないか？



マキシーンとの奇跡としか言いようの無い出会いに、普段は信じていない神様に感謝をした。

まあもし神様が本当にいるんだとしたら、こんなゾンビアポカリプスがおきる訳は無いが。

だからやはり、マキシーンとその友人に感謝をするのだった。

## 第十話 狂った世界で

友達は助けに行きたいけど、まずはケガを完治させてからということ、俺たちはマキシーンの部屋を出て空いている部屋を探していた。

一階から九階まではマキシーンが探索を終わらせていて、もう使えそうなものは残っていないそうだ。

住人はゾンビが何人か残っていたが、すでに殲滅を終えているらしい。殺したゾンビはどうしたか聞くと「ぜんぶ焼いたヨ」と返ってきた。

「死体放置するマスとビョーキになるマス。汚物はショードクだあデス」  
「どこでそういつた言葉を覚えるんだか」

ゾンビ焼却場は一階にある、周りがコンクリートの塀で囲まれたゴミ収集所だそう  
だ。

ドラム缶が三つほどあり、そこにゾンビとガソリンを入れて燃やすらしい。  
ベランダからゾンビを落とせば焼却所に運ぶのも容易いそうだ。

「落ちた時にバラバラになるマスと軽くなって運びやすいデスからgoodネ。hahahaha!!?」

アメリカンジョークは笑えない。

エレベーターホールはテーブルやイス、ベッドから棚まで、いろいろなものを使ったバリケードでふさがれていた。

十階以上はわからないが二階から九階まではすべてのエレベーターホールが同じようなバリケードでふさがれている。

マキシーンが一人で地道に作ったそうだ。

「さすがにコレより上はダメだったネ。疲れたし意味無いデス」

確かに階段しか使えないのに十階以上を拠点にする意味は無いか。疲れるだけだろう。

西階段は踊り場がマキシーン作成のバリケードでふさがれているので東階段へやってきた。

ここに来るまでも部屋を何個も抜ける必要があった。

ここまで徹底して侵入防止に努めているマキシーンに敬意を抱く。

九階から十階に上がる階段に設置されている邪魔なバリケードをどかす。

釘やビス、針金やダクトテープで補強されていて取り外すのが大変だった。

十階からは部屋数が少なくなっており、一部屋が大きくなっている。

九階までは十部屋あったが、ここには八部屋ほどしか見えない。

通路には何も落ちていなく、きれいなものだった。

マンションが完成して一年も経っていないから元々人が少なかつたのかもしれない。できればゾンビとは会いたくない。

「ここから先はナニいるかわからないデス。二人とも『be careful』」  
「ビーケーフォー?」

「気をつけてることよ。私が前に行くわ」

美香、俺、マキシンの順で並んで進む。

一〇〇八号室から探索を始める。

インターホンを鳴らし耳を澄ませる。

ヘルメットを外した美香が、耳を扉につけて中の様子を伺う。

「音はしないわね」

「ドア開けるマス」

美香がドアノブをひねって開けようとするが。

「鍵かかっているわね」

「まあ、こういうマンションはオートロックが標準だしな。マキシンはどうやって他の部屋の鍵を?」

「ワタシこれあるマス」

「これは？」

マキシーンの手には片手サイズのタブレットと、そこから伸びたコードに繋がっている小さなタグ状の機械が握られていた。

そのタグをインターホンと一体化しているキーリダーにかざす。

マキシーンがタブレットを何回かタッチすると、ウィーンとオートロックの開く音がした。

『friend』から貰ったヨ。『hacking device』ネ」

「ハッキングデバイス？」

「ハッキングっぽいわね。マキシーン、あんたの友達っていったい何者なのよ？」

『Virologist』デス」

「バイロジス？」

「わからないわ」

「んー、会えばわかるマス」

ハッキングの機械なんかをポイポイ友達に渡しちゃう人か。

悪い人じゃなければ良いけど。

それよりも今は安全な場所の確保をしたい。

薬を打ちはしたが体調が回復したわけではない。

血を流しすぎたのもあり、早く安静にしておきたい。

「今は友達のこととは置いといて部屋を探索しよう」

「そうね。危ないから恭平は離れてて。私が行く」

「ハイ、ミカ！ Zいたらワタシ撃つマス。ドア開けて横行くネ」

そう言つてマキシーンがクロスボウを構えてドアへと向けた。

「わかったわ。三、二、一、で開けるわよ。あ、スリートウワンのが良い？」

「そののが良いデス。ラストはG Oが良いネ」

「オーケー。じゃあ、スリー、トウ、ワン……ゴー！」

美香がドアを開けるが、マキシーンは動かない。

中を覗くと、何もない廊下の先に、何もないリビングが見えた。

「誰も引越してきてないみたいね」

「ここ、ダメね。次行くヨ」

「空いている部屋は多いのか？」

「半分くらいデス」

確かマンションが五月に完成したはずで、今が九月だから四ヶ月か。

ゾンビパニックが起きたのが六月だから、実質このマンションの売り出し期間は一ヶ月程度だ。

それだけの期間で半分も埋まっていれば良いほうなんじゃないか？

自分で考えといて何が良いのかいまいちわからないが、いるかもしれないゾンビの数が少ないのは良いことだろう。

探索を続ける。

一〇〇二号室と一〇〇三号室も何も無いハズレ部屋だった。

一〇〇四号室のインターホンを鳴らすと、中からガタンと音がした。

「いるマス。Zかも」

「もう一回押してみるわね」

「俺が音を聞くよ」

インターホンを再度鳴らす。

くぐもった呻き声が聞こえた。

「いた。呻き声した」

「Zネ。やるマス」

「わかった。恭平は離れてて。マキシン、準備は？」

「OKデス」

美香が号令をしてドアを開ける。

中から腐敗臭が漏れ出してきて、思わずええきそうになる。

ドアの先はゴミで散乱した玄関と廊下があり、リビングに続くドアの曇りガラスに人影が見えた。

その人影がドアをバンバンと叩いている。

「どうする。あのドア開けたほうが良いの？」

「このままやるマス。ちょっと待ってて」

マキシーンは立ったままクロスボウを構えているが、良くあの重そうなものを水平に保てるものだと感じた。

室内だと結構響く発射音が出て、すぐにガラスの割れる音がした。

中を覗き込むとリビングのドアの上半分のガラスがなくなっており、人影もいなくなっていた。

『No sweat』。Zがまだいるかもデス。音させるマス」

「オーケー」

美香が玄関の壁や棚をグローブの固い部分でゴンゴンと叩く。

しばらく耳を澄ませるが、物音はしない。

「中に行くマス」

「待って、マキシーン。その服じゃ噛まれたら危ないわ。私が先に行く」

「OKネ。『closet』とベッドの下はよく見るマス。Zから逃げて隠れるして、そ



のまま乙になつてゐる人多いデス」

「なるほどね。クローゼットとベッドの下ね。気をつけるわ。恭平はここで待つててね」

「すまん、役に立てなくて」

「良いの。恭平はそこにおいて」

「行つてくるマス」

二人が中に入つていくのを見送る。

美香がまず玄関横にあつた下駄箱の扉を開ける。

さすがにそこには居ないだろうと思つたが。

「くっ!?! 子供……!?!」

美香に倒れ掛かるように、五、六歳の男の子が現れた。

ぐったりとして、目を見開いている。

首には深い傷があつた。

「もう死んでるマス。隠れるしてたネ。ミカ、どいてください」

マキシーンがそう言いながらクロスボウの先端を男の子の頭に向けた。

美香が男の子の遺体を抱きかかえるようにしてマキシーンから守る。

「ちよ、何してるのよ! やめなさい!」

「Zになるマス。『brain』の破壊しないとZ増えるだけネ」

「だけど、こんなの死者に対する冒瀆よ、許されるわけないわ！」

「許す、許さないじゃないデス。もしそのZに噛まれた人、ミカのこと許さないヨ」

「だけど……」

美香の気持ちはよくわかる。

だが、今は世界が狂ってしまっているのだ。

狂った世界には狂った秩序がある。

幼子だろうが死者の頭は破壊して、死体を燃やさなきゃいけない。

「美香、マキシーンに従おう。その子もゾンビになって徘徊するよりかは静かに眠れた

方が良いだろう」

「……わかった」

「やるマス。そこに寝かせるネ」

美香がいたわるように男の子を玄関へと寝かせる。

次の瞬間、男の子が飛び跳ねるようにして起き上がり、美香に噛み付こうと飛び掛る。

「美香！」

美香はヘルメットを脱いだままだ。

あのままじゃ首を噛まれる。

反射的に蹴りだした足が男の子に当たり、そのまま玄関の壁に男の子を叩きつける。足裏からボキボキと嫌な感触が伝わる。

そのまま男の子を足で壁に押し付ける。

「マキシーン！ やつてくれ！」

「Y a h」

マキシーンはクロスボウを暴れる男の子の眉間に押し付け、トリガーを引いた。

男の子はビクンと震えると、頭を壁に矢で縫い付けられているせいで変な立ち方をしたまま痙攣を始めた。

「……素早いゾンビもいるんだな」

気の利いたことを言いたかったが、出てきたのはそんな言葉だった。

「……なりたては早いネ」

そんな俺に、マキシーンが返してくれた。

ツライ。

美香の顔を見ることができない。

ゾンビとはいえ、子供を殺してしまった。

まだ小学校にも行っていないような子をだ。

「マキシーン、死体はどうするの？」

いつもと変わらない声で美香がそう聞いた。

まるで「コーヒーに砂糖入れる？」とでも聞くかのような、そんな声だった。

「あー、外に落とすマス。あとで燃やすネ」

「そう。私が落とすわ」

「美香……」

「恭平、ごめん。私が間違ってた。ごめん。嫌なことさせて」

「いや、大丈夫だけど……」

俺はそんな鬼気迫る顔をした美香が心配だ。

なんとか気を取り直し探索を続ける。

一〇〇四号室にはその男の子と母親しかいなかったようで、二人の遺体を美香がベランダから外に落とした。

幼子を殺し、母子の遺体を十階のベランダから落とさなきゃいけない世界は、やはり狂っているのだと思えた。

その部屋は腐臭が凄いのと嫌なことを思い出すために使うのはやめた。

食料なども食べつくされており、あの男の子がどんな気持ちであそこに隠れていたかと思うと、やりきれない気持ちになる。

探索を続けたが、隣の部屋の一〇〇五号室は空き部屋だった。

一〇〇六号室は女のゾンビが椅子に縛り付けられて暴れており、その横に男の首吊り死体があった。

両方の頭部を破壊してベランダから落とし、一〇〇七号室へ向かう。

「ここもハズレか」

「この階はダメかもしれないわね」

「次行くマス」

空き部屋だった一〇〇七号室を過ぎて一〇〇八号室へ。

インターホンを鳴らすも中の音はしない。

「開けるわよ。スリー、トゥー、ワン、ゴー！」

「……匂いがないデス」

「本当だ。これは期待できるか」

美香が注意深く探索を始める。

下駄箱にはハイヒールがいくつか。

この部屋の住人は女性だったようだ。

リビング、風呂、トイレ、寝室、クローゼット。

しらみつぶしに探索を続けるがゾンビの姿も、住人の姿も見えなかった。

「当たりかしら」

「そうネ。ここならキョーハイ休めるマス」

「助かる。もう割りと限界なんだが、少し座ってていいか？」

「その前に腕の治療をしないと」

「まずバリケードを作るマス。キョーハイ、寝てていいよ」

「そつか。じゃあ恭平、ゆっくり休んで」

「すまん。頼む」

きつと二人は階段やベランダなどに他の部屋の家具を使ってバリケードを作るのだらう。

ソファに腰を下ろし、二人を見送る。

あの薬を打ってから、時折心臓が強く脈打つ時がある。

まさか副作用が出てきたのか。

今もドクンドクンと一拍ごとに強くなる動悸に、体がつられて揺れているような錯覚を覚える。

今になって思うが、なんでマキシーンのことを信用したんだ？

ゾンビに噛まれたせいで正常な判断ができていなかったのは間違いない。

初めて会った人間、それも素性の知れない相手を、冷静だったのなら信用はしていいだらう。

そんな人物から渡された怪しい薬をなんの迷いも無く打つなんて、やはりどうかしている。

ゾンビの治療薬がなんでこんな所にある？

そんな重要なものこんな所にあるわけが無い。

あれはきつと偽物だ。

じゃあマキシーンの目的はなんだ？

友達を助けたいと言っていた。

欲しいのは、美香か？

美香の戦力が欲しいのか？

確かに美香は人外じみた空手パワーがある。

空手パワーってなんだ。

思考がまとまらない。

熱が出た時の怠さを感じる。

重力に押し潰されるように、体が勝手にソファへ横たわる。

脳が沸いているかのようだ。

今までのことが頭に思い浮かんでは消えて、すべての行動が最悪の一手だったんじゃないかと思えてきた。

疑心暗鬼になる。

自衛隊のやつも、避難所のやつも、皆俺たちを騙そうとしていたんじゃないか。とにかく俺は美香を守らなきゃいけないのに。なんでこんなところで寝ているんだろう。

体が動かない。

マキシーンの目的は美香だ。

足手まといでゾンビに噛まれた俺はいらぬ。

じゃあ、あの薬は、毒か？

なるほど。薬を渡して恩を売り、美香を懐柔しようってか。

俺がゾンビになったらならぬで「友達が完成品を持っているかも。恭平もゾンビから戻る」とか言つて友達救出に向かわせる算段か。

クソ、まんまと騙された。

元演劇部の俺が演技で騙されるとは、なんたる不覚。

ふかくつてなんだ。

別にくやしいとかじゃないだろ。

あれ、どうしたらいいんだ。

わからない。



「……………！ 恭平！」

「ミカ、寝てるマス。今は休ませるデス」

「……………そうね。じゃあ続きをやっちゃいましょう」

ああ、待ってくれ。美香。

ダメだ、行っちゃ。

俺たちは騙されてるんだ。

クソ、あの薬、何だったんだ。

体が動かない。

目が開かない。

俺はこのまま死ぬのか。

ゾンビになるのか？

美香を襲うのは、嫌だ。

クソ。

体が動くのなら、飛び降りるのに。

マキシーン、俺に美香を襲わせて、そのまま俺を処理する気なのか？

俺がゾンビになったら美香はどうなる。

あの意気消沈した美香を思い出せ。

……自殺しかねないぞ。

マキシーン、お前の考えはダメだ。

美香の性格を計り間違えている。

それじゃあダメなんだ。

俺に、俺が、美香に生きるように言わないと。

ああ、クソ。

意識が薄くなってきた。

嫌だ。

ゾンビになるのは嫌だ。

美香を襲わせないでくれ。

頼む。

「……恭平？」

美香。

「良かった。よく寝てる」

起きているんだ。

「マキシーンに葉貰ったよ。感染症とかいろいろのやつ。後で飲もうね」

その薬も信用できるかわからないんだよ。

「冷蔵庫にビールがあつたよ。五本も。恭平が起きたらお祝いで飲みたいけど、病み上がりじゃキツイかな。私が全部飲んじやおっかな」

全部飲んでいい。だから……。

「ふふ、早く良くなつてね、恭平。……愛してるよ」

俺も、俺も愛している。

「じゃあ私も寝るね。おやすみ」

額に柔らかい感触。

いつものおやすみのキスだ。

このままじゃ俺が美香をゾンビの仲間入りにさせてしまう。

誰か、俺を殺してくれ。

## 第十一話 目覚め

人の声がする。

「ミカ、コレ持ってきたヨ」

「ありがとう、マキシーン。この点滴って病院にあったの？」

「小さい『hospital』探しまシタらあったデス」

「ごめんね、一人で危ないことさせちやって」

「That's just fine. もう慣れっこデスね」

美香とマキシーンの声だ。

起き上がろうとするが、体が動かさず目も開かない。

「これ、やり方どうするんだろう。静脈に刺すんだよね」

「ワタシわからないデス。コレとコレを一緒にするマス？」

「あー、このチューブとこの変な筒が繋がってるの見たことあるかも。たしか上に吊るしてた」

「やってみるマス」

「恭平ごめんねー。腕チクツとしますよー、っと。うわっ!?! 血! 血が吹き出てきた

「！」

「へい、ミカ！ 押さえるヨ！ それから出てるマス！」

「うわ、うわ、ごめん、恭平、ごめんね！ うわわわ！」

意識が遠くなっていく。

腹が減った。

「えー！ じゃあマキシーンがあの本の作者だったの!？」

「Y a h . I s n , t t h i s c o o l ? 」

「うん、クールクール！ 私あの本持つてるよ！ サイン貰っちゃおっかな」

「O h . T h a n k y o u f o r t h a t ! ! ワタシ、嬉しいデス」

良い匂いがする。

「でも実際にゾンビだらけになってどう？ あの本の内容通用する？」

『It depends』デスね。日本は銃がないデス。ワタシの国はそこらにあるマス。だからコレは音しないだったね」

「クロスボウが？ 結構大きい音するけど？」

「それデス。日本静か過ぎるマス。銃声に比べるマスと音はないだったデス」

「銃社会の弊害つてヤツかな」

新鮮な、肉がいる。

「あれ？ 恭平動いた？」

「んー、動いてないデスネ。それより、ミカ」

「え？ なに？」

「ワタシ『friend』助けるしに行くマス」

「一人で？ 友達は危ないところにいるんじゃないの？」

「だからネ。ミカはキョーヘイから離れるできないデス。『friend』は早くしないと死ぬマス」

食いたい。

「……うん、ごめん。そうだね。私も行ってあげたいけど、恭平を放つては行けない」

「Don't worry, it's alright」

「気にするなつてこと？」

「ワタシはヘーキなのデスから、ミカ元気なるネ」

「うん、ありがとう。危なくなったら逃げるんだよ？」

「ワタシ『Zombie survival』の『specialist』ネ。誰よりも強いヨ」

「あはは。確かにスペシャリストでプロフェッショナルでエキスパートだよ」

「Yeah! I'm tough!! Zには負けるないデス」

肉。

食いたい。

「恭平、マキシーン行っちゃうよ。ほら、挨拶しないと。起きてよ」

「ミカ、寝てていいネ。じゃあ準備したらワタシ行くマス。必要なものあつたら今持つてくるマス?」

「ううん、平気だよ。ここまで良くしてもらったし、これ以上は悪いもん。あとは自分で何とかするから」

「ミカ、『I hope to see you again』。また生きて会うネ」

「うん、約束する」

肉……違う、美香だ。

何を、考えているんだ。

美香……。

美香、食う。

違う。

しっかりしろ。

ゾンビになりたくない。

腹が減った。

美香……。

何かが体を触っている。

「恭平、綺麗にしようねー。布団かけすぎちゃったかな。汗っいや」

暖かいものが体に触れている。

「もう十月だから寒いかなって思ったけど、まだまだあたたかいね」

美香の音がする。

「マキシーン帰ってこないね。生きてるといいけど」

マキシーンって誰だ。

「恭平、いつ起きるの？ もう二週間も寝てるよ。早く起きてよ」

思考が、まとまらない。

音がする。



「ちよつと！　ここではやめてよ！」

「ハッへへ。旦那の前でつても興奮するなあ。良いつしよ、美香さくん」

「ダメ。早く服を着て」

「チエ。ま、いつか。じゃあ俺の部屋行こうぜ」

男の声と、美香の声だ。

「つーか生きてんの？　これ。もう何ヶ月寝てんの？」

「……いいから早く行きましょ。あんたの部屋」

「うーい。久々だからめっちゃ出ちやうよ、俺」

誰だ。

美香、そいつは、誰なんだ。

痛い。

体がもの凄く痛い。

なんだこれは。

俺に何が起きた？

喉が張り付き、息がしにくい。

「……ぐ、が、は」

「えっ!? 恭平!?」

「み、か……」

「恭平! 嘘! 恭平!!」

喉が痛い。

というより全身痛い。

目開けると美香がいた。

何が起きた。

ここはどこだ?

「ここ、ここは?」

「ちよつと待つて! まず水飲んで!」

「あ、あ」

美香に支えられて体を起こす。

ここが誰の部屋かはわからないが、いつの間にか布団で寝ていたようだ。

差し出されたコップを受け取る。

飲み込もうとしたが喉がうまく機能せずむせ込んだ。

「恭平、慌てないで。ゆっくり飲まない」と

「わか、った」

返事をするも掠れた声しかでなかった。

ゆっくりと喉の動きを意識して水を飲み込む。

水の温度もぬるめで飲みやすい。

体に染み渡るようだ。

「ふう……。ありが、とう、美香」

「ああ、恭平……。良かった……」

抱きついて来る美香の背に手を回すも全く力が入らない。

俺の腕が、枯れ枝のように細くなっていた。

抱きついている美香の肩を掴み体を離し、その泣きはらした顔を見つめる。

ガラガラになった声でゆっくりと「美香、説明してくれ」と尋ねる。

「俺に、何が、起きた？ ここはどこだ？」

「……わかった、驚かないで聞いてね」

「ああ、努力する。ただ、ごめん。もう一杯水を貰っても良いかな」

「いっぱい飲んで」

美香から貰った二杯目のコップを飲み干す頃には、声の調子も戻ってきていた。

この痩せ細った腕がどうしてこうなったのかをはやく聞きたい。

どうにも記憶が曖昧だ。

「ゾンビに噛まれたのは覚えてる？」

「ああ、腕を噛まれたな。あれ、傷が治ってる？」

「うん。じゃあマキシーンは覚えてる？」

「マキシーン？ ……ああ。覚えているよ。薬をくれた。その辺りからの記憶があやふやみたいだ」

頭の中の記憶がミキサーをかけられたみたいにバラバラになっていて、うまく繋がらない。

「ああ、そうだ。試薬段階とか言っていたけど、ゾンビになっていないから薬はちゃんと効いたみたいだな」

「うん。それで、安全地帯を探してマンションを探索したのは覚えてる？」

「いや、その辺はあまり記憶にない。というところはここはそのマンションの一室？」

「うん、そうだよ。ここに辿り着いてすぐに、恭平は寝ちゃったの」

薬の副作用か。

ゾンビから治ることのできる薬なんだから、それくらいの副作用があってもおかしくないか。

むしろその程度で済んで良かった。

「それで、恭平はその日から、四ヶ月くらい眠ってたの」

「は？」

「今は二〇一九年、一月二十日だよ」

「え？」

理解が追いつかない。

俺たちが避難所に移動をしたのが九月二十何日かだ。

それから四ヶ月以上が経っている？

そんなバカな。

「四ヶ月も寝たきり？ 嘘だろ？」

「ううん、嘘じゃないよ」

「病院でもないのに、生きられるわけがないよ。四週間の間違いじゃなくて？」

「うん、間違いじゃない」

「栄養とかは水分は……この点滴か」

手の甲に刺さった点滴の針を撫でた。

ふと気になったので下腹部を触る。

ゴワゴワとした感触。

「え、嘘だろ。まさか、俺、美香にオムツ替えてもらってたの？」

「うん。別に平気だったよ」

「俺が平気じゃないよ……。ごめん、そんなことまでやらせて……」

「ううん。私の方こそごめん。点滴じゃ栄養が足りないみたいで、恭平がどんどん痩せていつちやつて……」

点滴の中身はスポーツドリンクとほぼ一緒だと聞いたことがある。

一日に二リットル飲んだとしても、基礎代謝よりかは確実にカロリーが少ない。

「俺、良く生きてたな。ありがとう、美香。たぶん美香がいなきや死んでた」

「私の方こそありがとう……。生きててくれて、ありがとう……。」

再度抱きついて来る美香を受け止めるだけの力はなく、そのまま倒れてしまった。

美香の頭をポンポンと撫でていると、インターホンがなった。

「誰だ？俺たちのほかに人が？」

「えっと、あ、たぶんマキシーンかな。ちよつと約束してたから。出てくるね」

「ああ、そつか。いつてらっしやい」

慌てて出て行く美香を見送る。

マキシーンにもお礼を言わないとな。

俺がゾンビにならずにすんだのはマキシーンのくれた薬のおかげだ。

そんな貴重なものをくれるなんて、いくら感謝をしてもし足りない。

座って待っていたが一向に美香が戻ってこないで横になる。窓の外はどんよりと曇っていて一雨降りそうだ。

「遅いな、美香」

マキシーンの部屋に何かを取りに行ったのかもしれない。

少し疲れたので目を閉じると、だんだん意識がまどろんでいった。

「ん……？ いい匂いがする……」

「あ、恭平、起きた？」

「美香……。ごめん、また寝てたみたいだ」

なんとか布団から体を起こす。

外は既に暗くなっており、部屋には電気がついている。

さあさあと雨の降る音が聞こえた。

美香はテーブルに手に持っていたお盆を置いた。

いい匂いがする。

「寝ても大丈夫だよ。それよりお腹減ってるよね。ご飯用意したけど食べられそう

？」

「ああ、ありがたい。お腹と背中がくつつきそうだよ」

本当にそれくらい食べたんこになってしまっている。

美香が用意してくれたのは、柔らかく煮られた魚と米。

この匂いはサバかな。俺の大好物だ。

「レトルトのお米とサバ缶を一緒に煮た特製おかゆだよ。恭平、普通のおかゆ嫌いだから」

「味のしない米は食べられないんだ」

梅を入れようが塩を入れようが卵を入れようが、あれは食べられない。

「食べさせてあげよっか？」

「いや、大丈夫だよ。茶碗くらいは持ってるって」

「遠慮しないでよ。ほら、あーん」

「はは。じゃあ、あーん」

美香の差し出したれんげを口に含むと、瞬間的に美味しいという感情が脳みそに走る。

しょっぱい、少し甘い、サバのkokに味噌の香り。

これは、臭い消しで生姜が使われているのか。

「美味しい……。体中に染みていくよ、サバが」

「たんぱく質を取らないとね。ゆっくりちゃんと噛んで食べてね。胃がびっくりしちゃうから」



「わかった。もう一口ください」

「ふふ、はい、あーん」

「あーん」

いくらでも食べられるな、これは。

なんて思っていたが、たったの八口でお腹がいっぱいになってしまった。

「くそ、もつと食べたいのに食べられない」

「また後で食べればいいよ。お腹が空いたら暖めなおしてあげるから」

「ああ、ありがとう。助かる。それと、お願いがひとつあるんだが」

「なに？」

「トイレに連れて行ってくれないか。とても歩けそうにない」

さすがに意識があるのに美香にオムツを変えられるのは、ツライ。

美香の献身的な介護を受けて一週間が経った。

俺の体は足りなかった栄養を食欲に吸収しているらしく、だいぶ肉付きが良くなった。

こんなに早く肉がつくなんて、人間ってのは不思議だ。

生存本能のようなものが失ったものを補おうとしているのだろうか？

まだフラつくが一人でも歩けるようになっていた。

一人でトイレに行ける幸せなんてものがあるとは知らなかった。

美香は、一人で探索に行っている。

俺もついて行きたかったが、まず間違ひなく足手まといになるだろう。

なので大人しく部屋で待っている。

マキシーンにも会いたかったが、ここ一週間はこちらに現れず会えていない。

ここからマキシーンの部屋に行くには、他の部屋の鍵が四つは必要だから、こちらからは会いにいけない。

目覚めてから、腹が異様に減るようになっていた。

今も美香が探索で持って帰ってきてくれたコンビーフを焼いて食べている。

一日に何食食うんだと怒られないかヒヤヒヤしているが、美香は体が栄養を求めてい  
るんだと納得してくれた。

早く俺も探索に出て、自分の食う分くらいは見つけないとだ。

夜、美香が探索を終えて帰ってきた。

「恭平、くださいま。これ見つけてきたよ」

「おかえり。これってなんだ？」

美香がリュックからビールを取り出した。

テーブルの上に並べられていくそれらを見て、喉がごくりと鳴った。

「なんてこった、美香、これは凄いぞ」

「えへへ、恭平が喜ぶかかって思って持ってきたんだ」

「うん、凄く嬉しいけど、病み上がりで飲んでいいものなのか？」

「良いんじゃない？」

美香の許可がでたのでビールの蓋をあける。

カシュッと小気味良い音がして魅力的な匂いが漂う。

美香も同じようにビールを持っていたので、軽くコンと当てて「乾杯」と言う。

「恭平が目覚めたことに乾杯だね」

「美香が今日も無事帰ってきてくれたことにな」

笑いながら一口飲む。

が、一口じゃ止まらない。

これは、まさにビールだ！ おビール様だ！

「やっぱ、一気に飲んじやった」

「私も。あー、やっぱ美味しいなあ」

アスパラの缶詰とタコのアヒージョがあつたのであたたためて肴にする。

俺はともかく美香はすきつ腹に酒だから、胃に良くない。

俺と美香の晩酌は続き、いつの間にかビール十本が消え去っていた。ボヤーツとする頭で、そういうえぼと思ひ出したことを美香に聞く。

「俺さ、たぶんずっと寝てた時に何回かおきてるっぽいんだ」

「へー。記憶にあるの？」

「なんとなくね」

マキシオンと美香が仲良さげに話しているのを覚えていた気がする。

「腹が減ったって記憶と、二人が仲良さそうに話してるのがセットになつていてさ」

「んー、恭平がお腹空かして起きるかもってマキシオンと二人で匂い嗅がせてたからかな？」

「そんなことしてたの？　じゃあそれだな」

このビールの匂いと缶を開ける音を聞かせれば飛び起きたんじゃないか？

さすがにそれじゃアホか。

「あとさ、なんか知らない男の声がした気がしてさ。誰か来てたりした？」

「うん。来てないし知らない。夢でも見てたのかもよ」

「そっか。なんか誰だこいつって記憶があつてさ。夢だったのかな」

「うん。うなされたりしてたから。その時かも」

夢だったのか。

だったらそれはそうとうな悪夢だな。

「美香がそいつの部屋に行くとか言ってたような気がしてさ。夢で良かったというか、とんだ悪夢だというか」

「うん。他には？ 何か覚えてることは無いの？」

「そんなものかなー？ 最近になって少しずつ、そういえばって思い出してる感じでさ」

「……そう。そっか、わかった」

美香がビールの缶を見て固まっていた。

どうしたんだ？

「……あのさ、恭平がもう少し良くなったら、駐屯地か避難所に行ってみない？」

「ああ、そうだな。恵理奈ちゃんと優子ちゃん、佐藤くんが無事なら良いけど」

「うん。愛理に結愛もあんなだから心配だし、様子を見に行つて、もし駐屯地に住めるんなら住もう。もう恭平は感染してないんだから、駐屯地にも入れてもらえるよ」

「そっか。行つてみるか。なら早く動けるようにならないとな」

「うん。もうすぐ雪が降りそうだし、できるだけ早くここを出よう」

そう言う美香は、どこか焦ったような顔をしていた。

## 第十二話 死別

目覚めてから二週間が経過した。

俺の体は驚異的な回復力で、以前と同じくらいの体型へと戻っていた。

しかも、以前より体重が増えている。

筋肉量が増し見た目も細マツチョのようで強そうだ。

まあ相変わらずもやしなのだが、それでも以前よりはマシなのである。

一度飢餓状態に陥った体が、必死に栄養を蓄えようとした結果なのだろうか？

人の体というのは不思議なものだ。

昔見た格闘マンガの、水の上を走るといふ偉業も、もしかしたら現実で可能なのかも  
しれない。

そう思えるくらい、人の体の可能性というものを考えさせられた。

筋肉量が増したのは、美香が探索から帰ってきてくれたプロテインを一日に五  
杯飲んでいられるのも影響があるのか。

まだゾンビパニックが起きていない頃、どうしてももやしから卒業したくて筋肉をつ  
けようとプロテインを飲み続けたこともあるが、あの時は全く何にも効果がなかった。

やはり飢餓状態の体のおかげなのかもしれない。

リハビリを兼ねた申し訳程度の腕立てや腹筋やスクワットも、筋肉増量の助けになっているに違いない。たぶん。

美香の持つて帰ってくる食料をひたすら食べるヒナ鳥のような生活は、罪悪感がつのる一方だった。

これじゃヒナというよりヒモだ。

もう足腰もしつかりしているし、そろそろここを出て避難所や駐屯地に行ってみるのも良いかもしれない。

近さ的にまずは駐屯地からか。

優子ちゃんたちの両親が見つかったかどうかどうかも聞きたいし。

美香が帰ってきたら相談してみよう。

夕飯はカレーだ。

サバ缶とひよこ豆、それとマッシュルーム缶とカレー粉で作った。

隠し味に、にんにくパウダーを入れたが量が少なかつたようである。本当に隠れてしまった。

缶詰を作り出した人類は偉い、そしてカレー粉を作ったイギリス人も偉い。

何よりもスパイスを調合してカレーの元となるマサラを作り出したインド人が偉い。もつと言え、カレーに関わる全ての人が偉い。

そう思えるような味だった。端的に言えば美味い。

カレーを美味しそうに頬張る美香に、ここを出ないかと提案した。

「うん、そうだね。だけどあと一日待ってもらえる?」

「なんでだ? 何かあるのか?」

「今探索してる場所がようやく終わりそうなの。全部見ておきたいなつて」

「だったら俺も一緒に手伝うよ。そのほうが早く終わるだろうし」

「ううん。ちよつと危ない場所だし、病み上がりの恭平は連れて行けないよ」

「むしろそんな危ないところに美香一人で行かせたくないんだが」

「大丈夫だつて。恭平が寝てる間、さんざん一人で探索してたんだから。慣れてるつてば」

慣れた頃に事故が良く起きると聞いたことがある。

俺が心配そうに見ていたからか、美香が苦笑いを浮かべた。

「すぐ帰ってくるから、恭平は荷造りをしといてよ。大丈夫だからさ」

「んー、本当に気をつけてくれよ。俺みたいに噛まれるかもしれないんだから」

「私は大丈夫」



美香はそう言つて力こぶを見せてくる。

あれ？ これ俺より大きくない？

思つても言わないのが氣遣いである。

言わないことにより、俺のちんけなプライドと美香の乙女心が守られるのだ。

ここ四日の食事には常にビールがつくようになった。

美香が段ボールで三箱ほど持つて帰つてきてくれたからだ。

カレーのスパイスのせいとか、酔いがまわつてきたからか、体が熱い。

それは美香も同じらしく、だいぶ薄着になつていた。

美香の主張する豊かな胸元に自然と目が吸い寄せられていく。

「んふふ。する？」

「え？ あ、ああ、いや、そう、だな」

ついドギマギしてしまった。

童貞の坊やじゃあるまいし、なにを慌てているんだか。

「恭平が起きてからしてなかつたね。四ヶ月ぶり？」

「はは、そうなつちやうのか」

「駐屯地に行つたらやりにくくなつちやうし、今日はいっぱいしよつか」

「お手柔らかに頼むよ」

「病み上がりだしねー」

どうせ明後日にはここを出て行く。

俺たちは使った食器もそのままに、ベッドのある寝室へと向かった。

「ん、朝か……」

「おはよ、恭平」

「美香、もう準備済んでるのか」

「うん、早く行って早く終わらせてくるから」

「そっか。気をつけてな」

「わかった。じゃあいつてきます」

そう言つて手を振る美香を、俺はベッドから起き上がることもできずに見送るのだった。

抜かすの三発とか、十代の頃ですらできなかつた。

一回死に瀕したことから、俺の体は生存本能がとんでもないことになっているのだから。

部屋はにおいがこもっていて、ひどい有様だ。

ベッドが俺と美香のいろいろな体液でグチャグチャなもの、においの原因か。

シーツを洗濯したり取り替える気にもならず、どうせ明日には出て行くのだと放置することにした。

今晚はソファで寝ればいい。

ベタつく体を流すため、風呂へ向かう。

湯を浴槽に溜めているからすぐに入れる。

駐屯地の風呂がどんなものかはわからないが、避難民や自衛隊員が多いだろうしゆくり入れる気はしない。

一人でゆったりと楽しめる風呂は今日で最後なのかと思うと、少し名残惜しく思う。まだ電気、ガス、水道といったライフラインが生きている。

そういうった施設で働いている人たちが、一生懸命頑張ってくれているのだろうか。ありがたい、名も知らぬ人々。感謝してお湯に浸かっています。

世界のこのゾンビ騒ぎは収まったのだろうか。外に出ていないからいまいち状況が把握できない。

ラジオでもあれば情報が入ってくるのか。

駐屯地に行けばかなりの量の情報があることだろう。

他国の妨害工作で無線が使えないと自衛隊員の菊間が言っていたが、四ヶ月も経てば何かしらの対策はしているはずだ。

シャンプーやボディソープで髪や体を入念に洗う。

ゾンビという非現実的な化け物が溢れた世界で、普通に入浴できる人はどれだけいるのだろう。

こういう日常が続いていると、ついゾンビなど本当はいないんじゃないかと思えてしまう。

だがこれらの物は美香が外で危険を犯して持つてきたものだ。

そうやって俺が現実逃避をするのは、何か違うだろう。

風呂からあがり、髪を乾かすのは自然に任せて荷造りをはじめめる。

朝ごはん代わりにビーフジャーキーを齧りながらだ。

顎も鍛えられて良い。なにより美味しいのが良い。

あつという間にビーフジャーキーを一袋たいらげてしまったのでもう一袋あける。

これ、ビールが飲みたくなるな。

飲んだら荷造りなんかできなくなるのはわかりきっているので却下だが。

却下だが、飲みたいのだ。

視界に入るビールの缶が目の毒だ。

ええい、見えなくするために詰めてしまえ。

今夜はビール無しだ。

怒ってくれるなよ、美香。

ビールの段ボールはあと一箱半。

本数で言ったら三十六本ある。

バラバラにしてリュックに詰めていく。

全部を一つのリュックに納めると、結構な重さになった。

米十キロよりは重い。

ビールの上に着替えやタオルなど軽いものを詰めて一つめのリュックは完成。

もう一つには俺の大好きなサバ缶を大量に詰める。

こちらもダンボールで四箱あるのでバラしてから詰めていく。

二十四缶入りのダンボールが四箱で、サバ缶が百缶近くリュックに詰め込まれた。

ビールと変わらない重さになってしまった。

まだひよこ豆の缶詰と桃の缶詰があるが、どちらも大量だ。

残していくしかないのか。

まあまた取りに来れば良い。

俺はサバ缶とビールがあればそれで良いのだ。

荷造りを終わらせると、お昼を過ぎていた。

ビーフジャーキーを齧りながら荷詰めをしていたが、お腹は空いている。

四袋も食べたのに、まだまだ俺の胃には余裕がある。

駐屯地に行つたとしても、食事量が少ないとかで外に探索に出そうな予感がする。世の食いしん坊たちの苦しみが少しだけ理解できたような気がした。

お昼は昨日のサバカレーだ。

このカレーはひよこ豆もホクホクで美味い。

美香は毎日夕方に帰ってくるから、これは俺が全部食べてしまおう。

カレー鍋にレトルトライスを温めずにそのままぶっこみ火にかける。

カレードリア的なやつだ。

チーズを乗つけてオーブンで焼いたら美味いんだよなあ。

ああ、ピザとかパスタとか食べたい。

夜になり、外が暗くなってきたのに美香が帰ってこない。

オートロックの部屋は、俺が開けないと美香は入れない。

鍵が見つかっていないそうさ。

だから毎日インターホンで帰ってきたことを伝えてくるが、まだその音がしない。なにかあったのだろうか。

嫌な想像ばかりしてしまう。

大丈夫だ。きっと大丈夫。

くそ、不安を紛らわす何も無い。

煙草が吸いたい。

四ヶ月も寝ていて体からニコチンが抜けたのか、目覚めてから今までは煙草を吸いた  
いとは思わなかった。

だがこの不安感は、煙草を吸わない限り無くなりそうにない。

「美香……。美香、頼む。無事でいてくれ」

俺の願いも虚しく、美香は朝になっても帰ってこなかった。

眠れぬ夜が開け、頭がボーっとしているところに、チャイムの音が聞こえた。

「美香！」

玄関に駆け出しドアを開けると、そこには、美香の姿があった。

「ごめん、恭平。ドジった」

「ああ、美香、嘘だろ……！」

ヘルメットを外している美香は、プロテクター付きのバイクスーツのジャケツトでは  
なく、見慣れない白いダウンジャケットを着ていた。

その白いダウンジャケットが血に染まっている。

元は白かっただろうタオルで美香が首を押さえていた。

タオルは雫が垂れそうなくらい血で湿っており、大ケガをしたのだと一目でわかった。

美香を支え、寝室のベットに座らせた。

汚れたシーツや毛布は取っ払い、マットレスの上に直に。

「傷を見せてくれ」

「うん」

タオルを外すと、血がトロトロと流れ出す。

その傷は、まるで何かに食いちぎられたかのようにだった。

「美香、まさか……」

「うん、ごめん……噛まれた」

「そんな……」

「でも、治療薬あるから、大丈夫、だと思おう」

「マキシーンか！ 貰ってくる！ 待っててくれ！」

俺もゾンビにならずに済んだあの薬があれば、美香は助かる。

すぐに持つてこようと部屋を飛び出そうとしたところに、美香から「待って」と声がかかった。

「なんだ？ 早くしないと」



「うん、そうなんだけど、今、マキシーンは部屋に居ないの」

「出かけてるのか？　いつ帰ってくる？　間に合わないぞ」

「マキシーンは四ヶ月前、友達を助けに行くとして出て行ったきり帰ってきてない」

「部屋の鍵は？　預かってないのか？」

「ないわ……」

オートロックの扉を開ける方法なんて鍵以外にはない。

だったらどうする。どうすればいい。

「……ベランダだ。たしかマキシーンの部屋のベランダは、ハッチと隣への仕切りはふさがれていたが、外はがら空きだった」

「待って、恭平。何をやる気？」

「美香、もう少し待っている。薬を持ってくる！」

「あ、恭平……！」

玄関へ向かい、美香が意識を失っても帰ってこれるように、ドアを開けU字ロックを倒しドアを閉める。

こうしておけば鍵はかからない。

すぐに戻ってくるから、侵入者の心配は今はない。

スリッパを脱ぎ捨て靴を履きベランダに向かう。

窓を開けると冷たい風が熱くなった頭を冷やしてくれた。  
焦らず急いで行動だ。

仕切りの壁は軽く蹴れば破れた。

まるでせんべいのようにパキリと割れていく。

同じように壁を壊して隣の部屋へ渡る。

目指すは、一〇〇二号室だ。

一〇〇二号室のベランダから身を乗り出して下を確認する。

九〇二号室と九〇三号室の間仕切りが見えた。

九〇三号室の方へ場所を調整し下を見る。

ちゃんと九〇三号室の真上に来た。

「よし……落ち着け、できる、大丈夫だ、俺はやれる……」

自分に言い聞かせる。

俺は一流のスタントマンだ。

香港の某映画スターだ。

これくらい、なんてことない。

「行くか……」

アルミの枠とガラスで作られている手すりを乗り越え、体を外に出す。

手すりを掴む手に力が入っている。  
力みすぎるな。失敗するぞ。

手すりの下にあいた空間に手を入れ、懸垂のようにぶら下がる。

下のベランダまでどれくらいかはわからない。

下を見ると落ちてしまいそうだ。

こういう高層マンションではベランダじゃなくてルーバルコニーとかお洒落な言い方をするんだよな。

と、どうでも良いことを考えて心の平静を保つ。

覚悟は決まった。

あとは手を離すだけだ。

離したくないという本能を無理やり押さえつける。

パツと手を離すと浮遊感、その後すぐに衝撃。

「ぐ、うぐ……」

九階のベランダの手すりに、しがみつくように掴まることができた。  
できたが、ガラスがひび割れアルミがミキミキいつている。

火事場の馬鹿力なのか、掴んだアルミ部分が手の形にへこんでいた。

これは、かなりタイミングがシビアだ。

もう一度同じことをできるのか？

下を見れば赤い跡が何個もあった。

あれを増やす結末にはなりたくない。

できるできないじゃなく、やるしかないんだ。

再度、意を決して飛び降りる。

衝撃が強すぎたのか、アルミ部分を掴んだ瞬間ガラスが砕け散り、手すりの支柱が外へと傾いていく。

手すりの一部分が、丸々外へ倒れ始めた。  
落ちる。

手すりが完全に水平になり、勢いを増して下へ向かう。

体を引き上げ、手で掴んでいる部分に足をかけ、跳ぶ。

ベランダのふちに手がかかる。

体がずり落ちそうになるが、ふちに両手の爪を立てて必死に掴む。

ガシャンと地面から手すりの落下した音が聞こえた。

ベランダ内に体を引き上げ、下を見る。

この高さから落ちたら、まず間違いなく死ぬだろう。

ベランダのふちに残る爪の跡を見て、俺がどれだけ死に物狂いだったかがわかる。

ドツと汗が吹き出てきたのを手の甲で拭った。

こんなところで放心している場合じゃない。

早く薬を探さなければ。

ベランダの窓の鍵は開いていたのでそのまま開けて入る。

「薬箱……じゃないか。注射の管理ってどこだ……」

マキシーンの部屋は相変わらずとつちらかつている。

訳のわからない工具やクロスボウなどのほかにも、ガスバーナーや丸ノコの刃などが置いてある。

いったい何に使うのかわからないこれらを見無視し、薬のありそうな場所を探す。

「ウイルスにはワクチン……？ いや、ワクチンは予防接種か？ まあいい。ワクチンの保存方法は……」

ピンと来て冷蔵庫をあける。

「あつた！ これだ！」

頑丈そうなケースの中に、見たことのある注射器が入っていた。

中身は黄緑色の液体で、俺の打ったやつと一緒だ。

絶対に無くしたりはできない、とケースをポケットに仕舞いこみ玄関を出る。

マキシーンの通った道は鍵がないから使えない。

だったら最短で行くしかないだろう。

道を塞いでいるバリケードを壊すのだ。

垂木やロープ、ダクトテープや釘、ビスで補強されているバリケードは撤去するのに時間がかかる。

それでも急いで美香のところに戻らないといけない。

「おらあ!!」

思い切り蹴りを叩き込む。

少しぐらついた柵を掴む。

「よい、しょおおお!!」

バキバキと柵のベニヤが裂けてしまった。

垂木をもぎ取り隙間に差し込む。

「邪魔だあああ!!」

テコを利用して破壊しようとするも垂木が折れた。

「ぎげん!!」

もう一度蹴り。

柵がボロボロに砕けた。

その後ろに椅子が現れる。

それも蹴る。

何度も何度も蹴ると、椅子が壊れ少しの隙間ができた。

バリケードを屈んで這うようにしてくぐり抜けると、またバリケードがあった。

「くそ、マキシーンめ。優秀なんだよ……!」

二重のバリケード、たしかに侵入者に対してとても有効な手だろう。

だがそれは俺にも有効だ。

「急いでるんだよ!!」

バリケードに悪態をつきつつ、俺の力じやとても壊せそうにないテーブルに蹴りを入れる。

ベキンとテーブルの木が裂け、足がハマる。

裂けた場所へ手を差し込み、持ち上げるようにして裂け目を広げていく。

ミキミキと音を立ててテーブルは半分に千切れた。

火事場の馬鹿力は人のリミッターを外すという。

こんな物凄い力を使った代償は、ひどい筋肉痛だろうか。

俺の筋肉痛で美香が助かるのなら、その程度の痛みいくらでも耐えてやる。

バリケードを抜け、部屋まで戻ってきた。

美香はベッドの上に仰向けに倒れた状態で目を見開き、浅い呼吸を繰り返していた。  
「美香！」

「あ、恭平……おかえり……」

虚ろな眼でこちらを見上げる美香。

もう時間がなさそうだった。

「美香、薬を持ってきた。今から打つ」

「あつたんだ……良かった……」

ベッド脇に置いてあつた薬箱から消毒液を取り出し、美香の腕へとかける。

ガーゼで汚れをふき取り、静脈を探す。太いのが見つかったから多分これだ。

ポケットに入れておいたケースから注射器を取り出し、空気を抜くために少しだけ液体を出す。

「少しだけ痛いかもしれないからな」

「おね、がい……。寒く、なってきた……」

「待ってる。今打つから。気をしっかり持て」

「恭平……寒い……」

美香は体が小刻みに震えている。

早く薬を打たなければ。



映画やドラマで見た注射のシーンを思い出し、見よう見まねで静脈へと注射する。薬液をゆつくりと注入し、針を抜く。

「今薬を打ったからな、もう大丈夫だぞ」

「あ、あ、恭、平……。さむ、い……」

美香の体が大きくガクガクと痙攣し始めた。

痙攣を止めようと体を抱きしめると、とても熱かった。

高熱が出ているからか、額には玉のような汗が浮かんでいる。

美香は焦点の合わない目で虚空を見つめている。

「恭、平……。ど……。さむい、よ……」

「ここだ、ここにいます。美香、俺はここだ」

「ごめ、んね……。恭平……。ごめん……」

美香の目から涙と一緒に血が溢れ出した。

「が、ふ……。ぐ……。」

「美香！」

鼻や耳からも血が溢れ、口からは吐血をした。

俺は美香の名前を呼ぶことしかできないでいた。

「美香、横を向いて。血を出さないと窒息する」

「恭平……ごめん……ごめんなさい……」

うわ言のように呟く美香。

美香の血は止まらず、俺の服やベッドが赤く染まっっていく。

薬が効かなかったのか？

どうしたら良いんだ……！

「俺の血だ。俺の血にはウイルスの抗体が作られているはずだ……！」

薬箱に備え付けられていたハサミで手の平を切る。

ドクドクと血が溢れる傷口を、美香の首の傷口へと当てて。

「頼む……頼む頼む……！ どうか、神様、どうか美香を助けてください……！」

「恭平……どこ……どこ……さむいよ……」

「ここだ!! 美香! 頼む! 美香!!」

美香の体がいつそう激しく痙攣を始めた。

必死にその体を抱きしめる。

「生きてね……恭平……」

そう呟き、美香の痙攣は止まった。

「ああああ! 嘘だ……! 頼む、美香、頼むから!」

美香の脈はなく、息をしていなかった。

「ダメだ！ 逝くな!!」

美香を床に下ろし心臓マッサージを始める。

三十回に二回、人工呼吸をする。

「戻って来い！ 美香！」

何度も、何度も心臓マッサージを繰り返した。

段々と、美香の体が冷たくなっていくのを感じる。

「ああ、美香……、ああああ……！」

美香にすがりつき、泣き叫ぶ。

何時間そうしていたのかわからない。

気がつけば外は雨が降り始めていた。

まるで、世界が美香を失った悲しみで泣いているかのようだった。

俺の頭が理解したくないと拒むが、それでも理解してしまった。

今日、最愛の人が死んだ。

## 第十三話 決意

寒気で目が覚めた。

いつの間にか眠ってしまったらしく、外はもう暗くなっている。

俺の隣には美香が眠っていた。

「美香、ごめん。汚れたまま寝させちゃって。お風呂入ろうか」

ベッドの上で美香の服を脱がす。

大量に血を失ったからか肌が青白くなっている。

服は血でバリバリになっていた。

美香を抱え、風呂場へ向かう。

こんなに軽くなっちゃって。

もやしの俺が軽々運べちゃうじゃん。

美香を脱衣所に座らせ、俺も服を脱ぐ。

「ごめん、お尻冷たいよな。俺も脱いでくれば良かったよ。気が付かなかった」

シャワーを出し、適温になるのを待つ。

「よいしょ、っと。まずは血を流してから浴槽に入ろうな」

椅子に美香を座らせ、膝立ちの俺の胸に寄りかかると、赤黒い水が排水溝へと流れていった。

「あ、首の傷は……。あれ？　もう血が出てないな。まあいつか。染みたらごめん」

体には汚物も付着していたので、丁寧に洗い流していく。流れる水が透明になったので、美香を抱えて浴槽に浸かる。

「はあ、温かい。二人で入っても足を伸ばせるお風呂とか最高だよな。こんなところに

住めたら良かったよ。安月給でごめん」

「だいぶ温まったので美香の体を洗ってやろうとして閃く。

「美香、泡風呂なんてどうだろう？　素敵じゃないか？」

「ボディーソープのボトルの蓋を開け中身を全部浴槽に入れる。

「こうバチャバチャと泡立てれば……。ほら、できた。泡風呂。でもあんまり良いもんじゃないな」

泡が浴槽の水面を漂うだけだし、入っているお湯の感覚はヌルヌルとしているだけだ。

「まあ、なにごとくも経験だろう。」

「このまま頭も洗っちゃおうか。目は……。瞑ってるな」

美香の髪の毛を丁寧にシャンプーで洗う。

俺の記憶では美香の髪の毛の長さは肩にかかる程度だったが、今はポニーテールに結べそうなくらい長い。

俺が寝ている四ヶ月の間に、こんなに伸びてたんだな。

今になって気がつくなんて、怒られちゃうかな。

でも美香、今までに髪の毛を切っても感想求めてこなかったしな。怒らないか。

「流すよ。次はトリートメントか。たしか水をふき取ってからやつてたよな？ リンスと何が違うのかわからないよ、俺」

たしか毛先からつけて頭皮につけないようにしないといけないんだった。

丁寧到手櫛で塗りつけていく。

どれくらい待てば良いのかはわからない。

「五分くらい待てば良いのか？ もうそれくらい経ったよね？」

シャワーで髪を洗い流す。

あとは体を湯船の中で洗って泡を洗い流して終わりだ。

「よし、あがろうか。ああ、せつかく温まったのにまた冷たくなっちゃうか。ちよつと待ってて、椅子持ってくる。それまで我慢しててな」

塗れたままの美香を脱衣所の床に座らせ、倒れないように壁に寄りかからせる。

ダイニングにあった椅子を持ってきて脱衣所に用意した。

大きなバスタオルで美香の体をぎつと拭き、バスローブを着せる。

「髪長くなったから乾かすの大変だったでしょ。今日は俺がやってあげるからな」  
まずはタオルで拭く。

しっかりと髪から水分をふき取り、違うタオルに変えて地肌を拭く。

「ドライヤーかけるよ。ちよつと頭ふらつくかも。ごめんね」

美香の頭を抱きかかえるようにして、右手でドライヤーを操り、左手で地肌をわしやわしやとやる。

時折冷風を混ぜつつ、しっかりと乾かしていく。

「前にドライヤーかけたときは温風のままで怒られたからなあ。ちゃんと覚えてたんだぜ、俺」

美香が「熱い!!」と言って怒ったことを思い出す。

まだ二人とも十代の頃だったか、懐かしいな。

髪を乾かすと、艶々のサラサラになった。

「ああ、綺麗だよ、美香……」

素面でこんな歯の浮くようなセリフが言えるようになるとは。

人間、変われば変わるものだ。

「少し待ってて。ベッド綺麗にしてくるから」

椅子に座った美香が倒れないように、洗面台へと体を預けさせてから寝室へ向かう。換えのシーツと毛布を用意してベッドメイキングだ。

美香が気持ち良く眠れるように、綺麗にしないと。

汚れたシーツや毛布は丸めて部屋の隅にでも置いておけばいいか。

ベッドメイキングを終わらせ、美香の着替えを持って脱衣所へ向かう。

動きやすくて良いのか、美香はスポーツタイプの下着を好む。

着させやすさが今ありがたい。

下着を着させたあとは服だ。

バイクスーツを着て気に入ったのか、美香の持っている服はレザーの物しかない。

眠るときに着るにはきつ過ぎるかもしれないが、これしかないから仕方ない。

パジャマなんかいらんと下着で寝ていた美香のせいも半分ある。

さすがに起きたときに下着よりかは良いだろう。

フラフラとどこかに歩いて行って、美香の下着姿が知らない人の目に入るのは俺が嫌だしな。

二月だから寒くないように長袖の上からジャケットも着させる。

靴下はサラサラして伸びるヤツを履かせた。

「よし、完成。あー、起きたとき自分で靴履けないよな。靴履きながら寝るの嫌？ でも



足の裏とかケガするかもだしなあ」

履いても良いだろう。

換えの新品のブーツがあつたのでそれを履かせる。

美香を抱きかかえ寝室へ。

綺麗なシーツの上に寝かせ、毛布をかける。

「うん、良く眠れるといいな。おやすみ、美香」

美香のおでこにおやすみのキスをして、寝室から出てドアを閉める。

リビングのソファに座り、ふうとため息をひとつ。

「……飲むか」

既に荷造りを終えた美香用のリュックからビールを取り出す。

プルタブを開け一缶を一気に飲む。

すぐに二本目を開けて中身を全て流し込む。

三本目の半分を飲んで、ビールの味がこんな味だったかと気がつく。

もつと美味しかった気がする。

なんとも味気ない。

味気ないビールを飲んでみると、いろいろな思いが浮かんで消えていく。

美香は、このままゾンビになるのだろうか。

死後二十四時間経つと、感染した死者が起き上がり歩き出すそうだ。

美香が息を引き取ったのが何時かはわからないが今朝のことだ。

現在時刻は深夜四時。

あと数時間もすれば美香は起き上がる。

ビールを飲むスピードが落ちないが一向に酔う気配がない。

もうテーブルの上にあるビールの空き缶が十本を超えている。

ゾンビについて考えてみる。

なんで人を襲うのか。

たぶん、人のことが好きなんだろう。

人が大好きだから、人を見れば近寄ってくるし、行き過ぎた過剰な愛情表現で嘯み付いてしまうのだろう。

思えばゾンビにも嗜好があるのか、女性には男ゾンビが集まっていたように思う。

また、その逆もあつた気がする。

間違いない。

ゾンビには生前の嗜好が引き継がれているんだ。

ということはある程度の知識があるに違いない。

そういえば、起きてすぐのゾンビが車を運転したとどこかで聞いた気がするし、知識

は絶対にあるのだ。

つまり、俺のことが大好きな美香は、愛情表現を我慢できずに嘯みついてくるに違いないわけ。

はは、知識が残っているなら美香と二人でここで暮らしていけるな。

なんだ、つまり、これは二人の新しい門出ってことだったのか。

まだ結婚して一年も経っていない新婚夫婦が死に別れるなんてあるわけない。

結婚式のときに「死がふたりを分かつまで」なんて誓いをしたけど、死じゃふたりを分けられないようだ。

この死は門出だ。

死の祝福なんだ、これは。

窓の外が白みがかっている。

朝が来たようだ。

空いているビールの缶は、数えられないくらいだ。

まだリュックの中にビールは残っているが、数本しかない。

飲みすぎだと美香に怒られてしまうか。

「……ウウアア」

「美香、起きたか」

寢室から、美香が「おはよう」と話しかけてきた。

俺も美香にお願いして、早くゾンビの仲間入りをしないと。

美香とペアルックになるために、プロテクターがついたバイクスーツへ着替える。

俺も普通のレザージャケットやレザーパンツが良かったけど無かったから仕方がない。

ペアルックなんてダサいって怒るかな。怒らないといいな。

寢室のドアを開けるとすえた臭いがした。

汚れたシーツや毛布は洗濯すべきだったか。

「美香、おはよう」

「ウウウウ……」

美香が、ベッドの脇に俯いて立っていた。

「ほら、美香、おいで。俺も美香と同じになりたいからさ、頼むよ」

「ウアア……」

佇んだまま動かない美香は一向にこちらへ来ようとしなない。

「どうしたんだ？ 美香、ほらおいで」

「ウウア……」

美香の元へ歩み寄ると、嫌がるそぶりをしてドアの方へ向かってしまった。

「美香？　俺だ。恭平だ。わからないのか？」

「グガア……」

フラフラとした足取りでリビングを抜け、玄関の方へ向かって行く。

玄関のドアは美香が出入りをしやすいようにU字ロックを倒したままだ。

「ちよつと待てつて、美香！」

「アアア……」

肩に手を置くも振り払われてしまう。

どうしたというんだ、美香。

美香はヨタヨタと玄関から通路へ出て、階段へ向かって歩く。

その後ろを、俺はゆっくりとついていく。

「なあ、美香。怒ってるのか？　こつちを向いてくれよ」

「アア……」

右から左から美香の顔を覗きこむが、反対方向へ顔を向けられてしまう。

美香が顔を向けたほうへヨタつくので、覗き込むのをやめる。

転びでもしたら大変だ。

美香は今にも倒れてしまいそうな歩き方で階段を登っていく。

重心の取り方がヘタクソになってしまったのか、何度か倒れそうになっているのを支

えてやったがその度に暴れて振り払われてしまった。

階段の途中で暴れる方が危ないので、ハラハラしつつも見守ることにした。

「まだ登るのか？」

「ウウウ……」

もう十四階だ。

美香はどこまで登るのだろう。

俺と距離を取りたいだけなのか？

でも一応問いかけには答えてくれるから、そこまで怒ってはいないのかもしれない。

「お、この階になにかあるのか？」

「グアアア……」

十五階の通路を美香が先導して歩き、俺はその後ろをついていく。

通路を歩いていた美香が一五〇六号室の前で止まると、おもむろにインターホンへと手を伸ばした。

美香の手が揺れて上手くインターホンのボタンを押せなかったが、やつとのことで押すことに成功した。

俺がインターホンを押しても良かったが、近づくと美香が離れようとするので少し遠くから見守るに留めた。

というよりもだ。やはりゾンビになっても知識はあるようだ。

知識があるとなると、俺を避けるのは何故なんだ？

そんなことを考えていると、インターホンから『うーい』と知らない男の声が聞こえた。

『つて美香さんじゃーん。最近来てくれなかったから超寂しかったよ俺ー』

インターホンからどこかで聞いた事のある気がする男の声がした。

どこで聞いたんだ？ というかこいつ美香と知り合いなのか？

『あれ？ ぞしたのよ、美香さーん。なんか暗くね？ ちよい待ちー、今開け行くよ』  
男がドアを開けに来る。

「美香、どいてろ」

「グアウ……」

俺がドアの前に向かうと、美香が通路の奥へとヨタつきながら歩いていく。

俺との距離がある程度開くと、美香はその場でフラフラしながら佇んでいた。

「お待たー、つておたく誰よ？」

「お前こそ誰だ」

見た目がチャラそうな、ロン毛の男がドアを開けて出てきた。

「俺は俺だつてーの。あ、おたくあれか、美香さんの旦那。なんだ、生きてたのかよー」

死んでれば美香さん俺のものだったのになー」

「……何を言っている?」

「あ? 美香さんに言われて来たんじゃないの? 俺と美香さんの関係聞いて文句言いに来たのかと思っちゃったよ」

「お前との関係だど?」

「あー、俺から言って良いのかなー? つーか、あれ、美香さんどこよ?」

チャラ男がドアを全開にして、美香の姿を探すように外に出てきた。

美香はチャラ男の姿を確認すると、フラフラとチャラ男の方へ向かう。

「あ、美香さん見つけー。そんなうつむいてどしたー? 旦那にいじめられちゃったりして?」

「ウウウ……」

美香が両手を突き出してチャラ男へ向かって歩く。

「マジ傷心かよー。俺が慰めてあげっから」とチャラ男が手を広げて美香を迎える。

「おい、美香、何してるんだ。やめろ」

「見てわかんねーの? 美香さんは旦那のお前じゃなくて俺を選んだの。わかったら帰りなー」

「お前は黙れ」



なんだ、何が起きている。

美香がチャラ男に抱きつく。

「へっへへ、こんな積極的な美香さん初めてじゃね？ あ、キス？ キスしちゃうの？

旦那見てるよー」

やめろ。やめろ。やめろ。

なんだこれは。何が起きているんだ。

誰か教えてくれ。

「あー、寝取るの最高、やめらんねえ。ほら美香さん、チュー……、つておい！ ゾンビ

!?! 嘘だろ、おい！ 離せ!!」

「グガアアアー!」

チャラ男が騒ぎ出す。

美香はそのチャラ男の首筋に顔を近づけて……。

「おい！ おい、旦那！ 俺が悪かったから、このゾンビを離し……ぎ、ぎやあああ!!

やめろおおお！ ああああ!!」

美香が、嘔みついた。

そのままチャラ男を押し倒し、部屋内に倒れこむ。

倒れたチャラ男の上に馬乗りになり、愛おしそうに咀嚼をしている。

そんな美香の姿を、勝手に閉まっていくドアが閉まりきるまで、見ていることしかできなかつた。

ゾンビは、人間が好きだ。

それは、生前の嗜好が影響される。

美香は、俺を避けてチャラ男を噛んだ。

頭の中にあつた違和感があふれ出す。

俺が四ヶ月の眠りから目覚めてすぐにインターホンが鳴つた。

美香はマキシーンと約束していたと出て行つた。

マキシーンは、四ヶ月戻っていない。

あのとき、インターホンを鳴らしたのは、こいつだ。

俺がああチャラ男の声を寝ているときに聞いたと言つた際に、美香は知らないと言つた。

マンション内なら一緒に探索できると言つたときは、美香は必死に止めてきた。

そして、さっきのあのチャラ男の言動。

全てが繋がつた。

美香は、あの男と浮気をしていた。

そしてわざわざここまで噛みにきた。

つまり、俺よりもあの男のほうが、好きなのだ。

不思議と涙は出なかった。

呆然とした思いしかなく、何をしたらいいのかがわからなかった。

頭の中がグチャグチャになっている。

気がつけば、マンションから出て、通りを歩いていた。

どんよりと曇った空は、俺の心を写し取ったみたいだ。

ふと、死のうと思った。

だが自分で死ぬのは怖い。

だから、殺してもらおう。

ちようど通りにいたゾンビの元へ向かう。

「おい」

「グアア……！」

元はサラリーマンらしいゾンビに話しかけると、もの凄い勢いで振り返ってきた。

「アアアア……！」

「おい！ どこ行くんだよー！」

ゾンビは俺の姿を確認すると、目を合わせないように顔を伏せ、足を引きずりながら

離れていった。

まるで美香と同じような反応をする。

お前も、俺のことが嫌いなのか。

俺の何がいけないんだ。

きつと、きつと男のゾンビだったからいけないんだ。

そうだ、女のゾンビを探そう。

「いた。おい、あんた！」

「ウウアアアアア……」

「待てよ！ こらー！」

やべえやつが来たみたいいな反応をして逃げていくゾンビ。

追いかけて捕まえる。

「おい、おい俺を噛め！ 噛むんだよ！」

「ウウウウガアアアアア！」

口の中に腕を突っ込むと、ものすごい勢いで頭をイヤイヤするように振り出した。

そんなに、そんなに嫌かよ。

なんなんだよ、くそ。

「くそつたれが！ お前も、お前らも俺のことが嫌いなのかよ！！ なんでだよ！！」

遠巻きに見ていたゾンビに叫ぶ。

全員が俺から距離を置こうと離れていく。

なんだ。

なんでなんだ。

なんで浮気をした。

なんで裏切った。

なんで嫌う。

なんでなんでなんで……!!

なんでこんな思いをしなくちやいけないんだ。

心が、凍りついていく。

「はっ、嫌うなら嫌えよ。お前らみてえなくせえヤツらに嫌われたってなんてことねえんだよ」

そこで見てるお前らだよ。聞こえてるんだだろうが。

石投げんぞ、おい。

手ごろな石を拾って投げると、その石から遠ざかるようにゾンビが離れていく。

「俺が触った石すら嫌うかよ。上等だ、ゴラア!!」

その辺に落ちているゴミを拾ってはゾンビに投げていく。

見える範囲からゾンビが全て消えた。

「美香。俺を捨てたこと、裏切ったこと、後悔しても知らねえからな」

このゾンビに溢れた世界で、ゾンビに嫌われた俺に敵はいない。

つまり、やりたい放題ができるわけだ。

「俺の気に入った女を集めて好き放題だつてできるんだ」

美香、お前がやったことを倍返しにしてやる。

倍どころか十倍、百倍にして返してやる。

俺は、この世界に俺のハーレムを作つてやる。

そう決意し、歩き出した。

誰にも俺を止めることなんてできやしねえ。

## 第十四話 童貞を捨てる

誰もいない道を駅の方へ歩きながら考える。

よくわからない勢いで目標としたハーレムとは、なにをして、どうすればいいのか。

俺がハーレムを作る目的はなんだ？

女をたくさん集めて、俺がいかに魅力的なのかをわからせるためだ。

誰に？ 決まっている。美香にだ。

お前が裏切った男は、大多数の女に好かれる、必要とされる、そんな魅力的な男なのだ、と。

そう美香にわからせてやるのだ。

つまりハーレムを作るには女を集めれば良い。

それだけだ。簡単なことだ。

誰もがゾンビに恐怖して家に閉じこもっているこの世界で、ゾンビの脅威が無い俺はそれだけで魅力的だろう。

このオスについていけばエサにありつける。

文明が崩壊しかけているこのクソみたいな世界では、そういう単純な要因が、強く逞

しいオスが、メスの眼には魅力的に映るのだ。

まずは住処だ。メスを捕まえても住処がなければ、ゾンビに殺されたり別のオスに連れて行かれたりする。

安全で堅牢な住処を作り、そこで囲ってやれば良い。

それと並行してエサ集めもしなければいけない。

このオスの住処なら安全で安心して腹いっぱい食べられるとメスに思わせなければいけないのだ。

堅牢で物資が豊富な住処を見つければ話は早い。

大型商業施設、ホームセンター、百貨店。

そういった建物の中で、ゾンビに占拠されて人間がいないものが望ましい。

駅へ向かえばそういった建物はたくさんあるはずだ。

道路上にある標識を見れば距離にして十五キロ弱。

暗くなる前にはつくだろう。

「う、ぐう、うつぶ……おええええー！」

急に襲われた吐き気に、腹の中のをぶちまけた。

ビシャビシャと吐き出される液体からは酸っぱい臭いに混じって酒の香りがした。

胃がひっくり返ったんじゃないかと思えるくらい、嘔吐は止まらなかった。



「……ウウアアア」

「アアウウ……」

「グゲ……」

遠巻きにゾンビがこちらを見ていた。

未だに嘔吐の止まらない俺を見て、嫌そうにしやがった。

「てめえら、何見て、おえええ！ ……クソが、見てんじやねえ、ぞ……おええあああああ!!」

地面に落ちていた俺の汚物にまみれているペットボトルを拾い、ゾンビに投げつけてやると慌てた様子で離れていく。

一匹転びやがった。ざまあみろ。

しばらく吐き続け、胃の中のものもを全て吐き出し、もう出るものが何もないとなった頃、ようやく吐き気が治まった。

吐き気が治まると、途端に猛烈な渇きを感じた。

自販機を見つけたので思い切り蹴りをいれると、ガラガラと大量のペットボトルや缶が出てきた。

出てきた水のペットボトルをあけ、何回かうがいをして気持ちの悪い口の中をすす

ぐ。

スポーツドリンクと水を一本ずつ飲み干すと、喉の渇きも治まった。

そういえば、酔いが中々まわらずにビールを大量に飲んだのを思い出した。

倒れなかったのが不思議だ。

急性アルコール中毒にはならなかったが、体が酒を毒と認識して胃の中の酒を全て吐き出そうとしたのだろう。

地面に転がっている水のペットボトルを一本拾い、歩き出す。

胃に何も入っていないから空腹感が凄まじい。

早く住処になりそうな所を見つけて腹いっぱい食いたい。

駅に向かう途中、ゾンビに占拠されているコンビニを見つけたので寄ることにした。

外から見るだけで五匹はいる。

棚が倒れていたり荒れてはいるが、まだ商品があるように思う。

「おら、クソゾンビども、散れ」

「ウウアアアア……」

「グゲ……」

「アアアアア……」

店内に入った俺の言葉にゾンビが反応し、離れようと動き出す。

俺が店の奥に行けば、勝手にゾンビは入り口から外へ行く。

何匹かが倒れた柵に躓きながらも、全部のゾンビが店の外に出て行った。

「邪魔だし臭いんだよ。どっか行ってろ」

ペツと唾を店の入り口に向かって吐く。

店の外でウロウロしていたゾンビは、俺に唾をかけられると思ったのか逃げた。

ゾンビどもは視界に入ってくるだけで不快だ。

中は荒れてはいるがある程度の商品は残っていた。

俺は迷わず珍味の柵へ向かう。

ジャーキーや鮭とば、帆立のヒモやサラミなどがあつた。

これは、全部持つて行きたい。

籠があるのでそれに全部入れて置いておく。

飲料売り場には少ないが酒もあつた。

ビールもあつたが、飲む気はしなかつた。

代わりにウイスキーを二瓶ほど手にして籠に入れる。

他にも俺の好きなアヒージョの缶詰やサバ缶があつたので新しい籠に満載にして入

れる。

「腹減ったな。ここで食ってくか」

電気が生きているので電子レンジが使える。

売り物の紙皿の上に缶詰の中身を出して温める。

サバの水煮の上にカキのアヒージョを乗つけて、スパイスのにんにくと黒こしょうをかけたものだ。

電子レンジで温まってくると良い匂いが漂ってくる。

もうこれだけで酒が飲める。

ビールを飲みすぎて吐いたばかりだというのに、俺は懲りずにウイスキーの瓶の蓋を開ける。

まずは一口。そのまま瓶に口をつけてラツパ飲みだ。

「う、美味い……」

正直少しビビッてはいた。

また体が酒に対して拒絶反応をしたらどうしようかと思っていた。

ちゃんと飲めて良かった……。

お前、度数は三十七度か。結構高いのに、俺の胃は受け入れてくれたぞ。

酒瓶を見つめていると、ピーという電子音に現実を引き戻された。

俺は今、酒瓶に心の中で話しかけていたのか？

危ない人じゃないか。

「はあ、もう酔ってるのかね。まあいい、食おう」

レジのカウンターに座り、横に紙皿を置く。

カウンターに割り箸があつたのでそれを使っていた。

サバの身は柔らかくアヒージョの油を良い感じに吸っている。

黒こしょうとにんにくの香りも良いアクセントになっている。

塩気が少し薄いのが、塩分過多になっても良いことはない。

薄味で良いのだ。

カキは電子レンジで温めたせい、小さく縮まりゴムのような感触になってしまっていた。

これはこれで嘔み応えがあつて美味しいと言えるかもしれないが、俺はプリプリの力が好きだ。

あつという間につまみが消え、ウイスキーの半分が無くなった。

これ以上ここにいると、いつまでも酒盛りをしてしまう。

缶詰や珍味の入った籠を持ち、店を出ようとしたときに閃いた。

たしか『有印絶品』の置いてある棚があつた。

そこにバッグがあるのを見た気がする。

トートバッグのような肩掛けのものだ。

少なくとも籠よりかは持ちやすく量も入るだろう。

棚にはコンパクトに箱詰めされたトートバッグが三個ほどあったので、それぞれ珍味、酒、缶詰を目一杯入れる。

相当な重量になったが、肩にかけると意外と簡単に持てた。

駅に行けば物資もたくさんあるだろうから、ここからいろいろと持っていく必要はない。

道中で腹が減って酒が飲みたくなるとき用の食料と酒があれば良いのだ。

店を出ると遠巻きにゾンビが見ていたので唾を吐いてから駅へと向かった。

忌々しいヤツらだ。

腕時計を見ると一六時半を過ぎたところだった。もうすぐ、日が暮れる。

空がどんよりと曇っているせいか、暗くなるのも早くなっている気がする。

目標としていた百貨店にはまだついていない。

今は商業ビルが立ち並ぶ通りを歩いている。

暗くなるにつれ、ゾンビを見かける回数が減った。

俺の存在を知ったからか、どこかに隠れているのかもしれない。  
遠くで犬の遠吠えが聞こえた。

なんとなく「どこにいる」と言っているような気がした。

すぐにもうひとつ遠吠えが聞こえた。

これは「ここにいるぞ」と返しているように思う。

それつきり遠吠えは聞こえなくなった。

きつと二匹は会えたのだろう。

人が支配しなくなったこの世界で、犬も新しくコミュニティを築いているのだろうか？

日が完全に沈み、辺りが真っ暗になった。

街灯が等間隔に点いてはいるが、人の生活の明かりがないと、世界は暗い。

ふと、視界に違和感を覚えた。

暗闇が見える。

白黒の映画のようと言えば良いのだろうか、暗視カメラの映像が一番近い気がする。

そんな風に、暗闇が良く見えるのだ。

暗がりに停まっている乗用車の車内の様子までもがしつかりと見える。

ゾンビが一匹、運転席でシートベルトから逃れられずにもがいていた。

哀れなものだ。

前に誰かが言っていた、ゾンビには暗視能力がある、という言葉思い出す。

今の俺の視界がそれと同じなら、俺はゾンビになってしまったことになる。

しかし俺は人を食いたいとも思わないし、体臭も臭わない。

臭いは本人に自覚がないとは言いが、俺は臭っていないと思う。多分。

俺がゾンビじゃないならば、この暗視能力はきつとゾンビウイルスに一度感染したけれど、薬を飲み治ったことから得られたのだろう。

思わぬ副産物に、口元を歪めた。

俺が強く優秀になればなるほど、俺のハーレムは増えていく。

もつと他に俺が有利になる能力は無いのだろうか？

ゾンビは生者の匂いに敏感だとも聞いたことがあるので空気の匂いを嗅いだ。

なんともそそられる匂いがする。

なんだろう、この匂いは。

脳髓にガツンと来る、そんな匂いだ。

気がつけばフラフラとその匂いを追うように歩いていた。

匂いの濃い方へ歩いていくと、ひとつの商業ビルに辿り着いた。

四階建ての鉄筋コンクリート造のビルだ。



一フロアにひとつしかテナントが入らないような、狭くて小さいものだ。

一階はシャッターが下りている。

階段にあるポストには、一階は美容院と書かれていた。

外から看板と窓に張られたフィルムを見るに、二階は占い屋、三階は雀荘、四階はオフィスとなっている。

二階は明かりが点いていなかったが、三階と四階は点いている。

どちらかに匂いの元はある。

階段の上から匂いが漂ってくる。

荷物の入っているバッグを床にそつと置いた。

敵がいるかもしれないので足音を消して細い階段を登っていく。

「……………て！……………し……………！」

「……………にしろ……………ンビが……………だろ……………」

「……………て！……………誰か!!」

声が聞こえた。

メスの声だ。

匂いも濃くなっていく。

二階は、違う。匂いはもつと上だ。

三階は、嫌な臭いがする。ここではない。  
四階のオフィス、ここだ。

脳みそが蕩けそうになる匂いに満ちている。

音がしないように、ゆっくりと静かにドアを開けていく。

匂いが、脳に突き刺さった。

とても興奮する匂いだ。

中の様子を窺う。

メスが一匹、オスに組み敷かれている。

オスは全部で二匹。

「大人しくしろ……。少し我慢してればお前も食料がもらえんだからよ。あんま騒ぐとヤツらに気付かれちまうぞ」

「そうだぜ。あまりうるさいなら殺すしかねえぞ。別に俺はお前が死んだあとに使ったって良いんだぜ」

「ゲスめ……。！ だったら大声を上げてヤツらを呼び寄せてやる!! 誰かあああ、むぐぐうー!」

メスが叫んだが、オスの手で口をふさがれてしまった。

「クソ、ほんとに殺すぞ、こいつ……。！」

「首絞めてやれ。死ぬってわからせてやれば大人しくなんだろう」

「挿入れながら首絞めるのが好きなんだけどなあ、俺。おら、苦しいか？　死ぬか？　おい」

「ぐ、が、は……！」

不快だ。

ただただ不快だ。

「脱がせ脱がせ。もう抵抗しても無駄だつてわかつたら」

「おい、次暴れたら前歯を全部折るからな？」

オスがメスの着ているズボンのベルトを外した。

オスがズボンを脱がせると、濃密な匂いが充満し頭がクラクラした。

「はは！　黒とか淫乱なんじゃねえの？」

「嫌がるわりに好きもんかよ」

「くっ……！」

こいつら、俺の縄張りで俺のメスに好き勝手しやがって。

俺のハーレムにはオスはいらねえんだよ。

見たところオスは二匹しかいないようだ。

こいつらなら勝てるという確信が俺の中にはあった。

ドアを蹴り開けると、オス二匹がビクリと体を震わせ、すぐに立ち上がった。

「てめえ、何の用だ……」

「ふざけたことしやがって。やろうつてか？ あ？」

オスと問答をする気は無い。

無言で一步近づくと、オスの一匹が「止まれ」と懐から何かを取り出し、こちらへ向けた。

あれは、拳銃？

おもちゃのように見えるが、本物かもしれない。

少し様子を見よう。

「お、止まったか。それが懸命だぞ。これはほんもんだからな」

「ムカつく目えしやがって。睨んでんじやねえぞ、コラ」

オスは十代から二十代くらいか。

体格は貧弱だ。

一匹は痩せぎすで一匹は筋肉量も少なそうな肥満体だ。

これなら、すぐに倒せる。

銃が本物かどうかはわからない。

だが素人が撃つてもなかなか当たらないとは聞いたことがある。

あれが本物だとしても、銃口から逃げるように動けば当たることはなさそうだ。

「おい、聞いてんのかよ！」

痩せ身のオスがナイフをこちらへ向けて喚いている。

もう観察はいいだろう。

やるか。

「おい、後ろゾンビいるぞ」

「え？」

俺の嘘にひっかかり、バカなオスが振り向いた隙に、入り口にあるスイッチを押し部屋  
の明かりを消す。

途端に暗闇が広がるが、俺の眼には白黒の世界の輪郭がはつきりと浮かび上がって  
いた。

「くそ、見えねえ！ 動くな！ 撃つぞ！」

「なめてんじやねえぞ、コラ！」

見当違いの方向へ銃を向けナイフを突き出すオスたちに静かに忍び寄る。

もし銃が本物だったら危ないから取り上げておこう。

銃を構えている肥満体のオスが、銃口を誰にも向けていないのを確認してから、その  
手に思い切り手刀を振り下ろす。

ボグ、という音が手刀をした手の先から伝わるのと同時に、男が絶叫をあげた。

「ぎいあああ！　ぐううう……！！　い、いでええ……！！」

「おい、おい！　どうしたんだよ！」

肥満のオスの手首から先がプランと垂れていた。

折れてしまったようだ。肥満な上に骨が脆いとか。弱いオスだ。

「クソが！　そこにいんのか！」

痩せ身のオスが闇雲に振り回すナイフが、スーツの肩プロテクターの部分にかすった。

「見つけたぜ！　死ねや!!」

俺の肩を掴み、ナイフを振り下ろしてきたオスの腕を思い切り殴ると、ナイフを落とした。

オスは俺を掴んでいた手を離し、床を這うようにしてナイフを探している。

「お前、さつき前歯折るとか言ってたよな？」

「ひっ！　どっだ！」

振り回す腕をひよいと避け、髪を掴む。

こいつも髪が長くて掴みやすい。ゾンビにも掴まれるだろうに、何故伸ばす？

思い切り引っ張るようにして掴むと、オスが仰け反るように体を起こし、俺の腕を両

手で掴み痛みを軽減しようとする。

良い体勢だ。そのままでいろよ。

「人にやられて嫌なことはしないって先生に教わらなかつたか？ 親でも良いぞ」

「う、うるせえ！ 離しやがれ！」

反省するようなら考えないでもなかつたが、まあいいか。

オスの髪を引つ張り、机の近くまで持つていく。

「ここで良いか。」

「離せつってんだろぅが！」

オスは大きく口を開けて喚いている。

髪を引つ張り勢いをつけて、思い切り机の角に顔面を叩きつけてやる。

「う、ぐ、ぶあー！」

少しずれて鼻をぶつけたようだ。

もう一回だ。

「が、ぎ、あ……！」

前歯が何本か折れた。

オスが俺の腕から手を離し、空中に突き出して叩きつけられるのを防ごうとしている。

そんなことをしても意味は無いな。

右手でオスの髪を引つ張り上を向かせる。

そのまま左手の鉄板で補強されたグローブで、オスの口を殴りつける。

一、二、三、四、と殴りつけると、オスの前歯は全部がなくなつたように見えた。

オスは手で顔を庇おうとしているので、ついでに両手の人差し指と中指を折つておく。

「ぐ、ぎい、が、ああー」

肥満のオスの指も折ろうと思つたけど、アレは手首が折れてるから大丈夫か。

制圧は終わった。

メスが状況を把握できるように明かりを点ける。

「……ひ。近寄らないで。近づいたら刺す」

倒れたオスの様子に一瞬ひるんだメスだったが、すぐに脅威でないと確認したのか、俺へとナイフを向けてきた。

いつの間にか拾つたんだか。

遅いメスだ。

敵意が無い事を理解してもらおう為に両手を上げる。

「俺は、敵ではない」



「敵は皆そう言うの」

油断させるために言うのだろうな。

だが、俺は本当に敵では無いのだ。

「どうしたら信じてもらえる？」

「助けてもらったのはありがたいけど、男は信用ならないから。ごめん」

「そりゃ犯されそうになつたらな。それより、ズボンを履いたらどうだ？ 今の格好は

少々眼の毒だ」

「貴方はそれ目的じゃないの？」

「無理やりは嫌いだ」

「……そう。じゃあ履くけど、襲ってこないでよ」

「敵に言うセリフじゃないな、それは」

メスの下腹部から漂ってくる匂いに、頭がクラクラしてきた。

ズボンを履いてくれれば多少収まるか。

この匂いを嗅いでいると、このメスを俺のものにしたいという願望が強くなつていく。

「履いたわ。本当に襲わないんだ。信用させてから襲う気？」

「いや、襲いはしないさ。それより、どうしたら信用してもらえるかな？」

「信用はしない。消えてくれればそれで良いわ」

「それは嫌だな。せつかく会えたのに」

なんとかしてこのメスを俺のものにしたい。

どうしたら良いんだ？

「それじゃ、今から私がやることと同じことをやってくれる？　そうしたら信用してあ

げる」

「なんだってやってやるさ」

「言ったわね」

メスはそう言うのと、床に倒れて呻いている瘦身のオスへと近づき、ナイフを振り下ろした。

オスの胸に深々とナイフが突き刺さる。

「ぐ、おい、いぶ……」

オスが口から血を吐き出した。

そのオスの胸からナイフを抜き取ると、メスが再度振り下ろした。

「クソが！　よくも！　私に！　あんな！　真似を！」

何度も何度もオスの胸にナイフを突き立てる。

「死ね！　死ね！　ゴミ虫！　死んじまえ！」

刺される度に体を揺らすだけになったオスはとくに死んでいるように思えた。肥満体のオスはその様子を見て小便をもらしている。

臭い。

「……ふう。ゴミ掃除できてすつきりした。あ、そいつをお願いしてもいい？ できるって言ったよね？」

「アイアイ。こんなことで良いなら」

元より俺の縄張りにいるオスは排除する予定だ。

ゾンビにでも食わせようと思っていたが、自分の手でやればこのメスが手に入るのなら喜んでやる。

「ひ、ひい、やめてくれ！ なんでもするから、殺さないでくれ！」

肥満体のオスが這いずって逃げようとするので、頭を蹴り上げる。

ゴトリと床に倒れ伏すそいつは、うつ伏せなのに顔が天井を向いていた。

骨が脆すぎて折れてしまったようだ。

「あー……、終わったが、これで良いか？」

「……もつと苦しめて欲しかった。こいつら、私以外にも女を襲っているっぽかったし」

「なんでわかるんだ？」

「このビルの周りは裸の女のゾンビばかりだったでしょ？ 気がつかなかった？」

「ああ、見なかったな」

ゾンビは俺が近づくといなくなるからな。

俺の視界にすら入るのが嫌なようだ。

「ああ、もう夜だからか。まあいいわ。とりあえずは信用する。名前は？」

「恭平。山下恭平だ」

「そう、私は井上鈴鹿いのうえすずか。よろしくね、山下さん」

「ああ、よろしく」

お互い血まみれの手で握手を交わす。

笑みを作る鈴鹿に、こちらも笑みで返す。

初めて人を殺したというのに、全く何も心が動かなかった俺は、ゾンビのような怪物になってしまったのかもしれない。

## 第十五話 百貨店へ

俺と鈴鹿は、三階の雀荘で物資を漁っていた。

オスの拠点となっていたと思われる雀荘には、ろくなものがなかった。

というか臭いがひどいので一刻も早く立ち去りたい。

「チツ。溜めこんでるかと思っただけど全然シケてるわ」

「何もなさそうだしもう出よう。くさくてかなわない」

「待つて。何か食べるものを見つけない。私、もう三日も食べてないんだ」

「食い物なら俺が持つてるから、早く出よう」

「本当に？ その代わりとか言っつて体を要求したりは？」

「しない。もう俺は先に出るぞ」

「あ、待つてよ」

このままここにいたら、また盛大に吐いてしまいそうだ。

鈴鹿の芳しい匂いでも相殺しきれない悪臭だった。

一階に下りてバッグを開ける。

鈴鹿に渡す食い物は、缶詰とかで良いか？

「もう、先行かないでよ」

「ああ、悪い。食い物はこんなしかないが、これで良いか？」

「ええっ、桃岳にパイ缶……。本当に貰っていいの？ お札に口でしょっか？」

「いい。体目当てじゃないし、信用してもらいたいからな」

「ここで断る方が何か企んでるんじゃないかって思っちゃうけどね。まあくれるものなら病気以外はなんでも貰うわよ」

鈴鹿が俺の手から缶詰を二つ取ると、階段を登り始めた。

「おいおい、どこ行くんだ？」

「どこって上で食べるんだけど。ここじゃ危ないでしょ」

「上って、あのくさい雀荘か、くさいオスが転がっているオフィスしかないだろ。二階は閉まっていたしな」

「でもここでは食べられないでしょ。ゾンビも寄ってくるだろうし、なんか野犬の群れもいるみたいだし」

野犬とは俺を襲ったあの大きい犬のことだろうか。

あんなのに群れで襲われたらたしかに危険だ。

「それに、知ってる？ 夜になると怪物が出るらしいよ」

「怪物？ 野犬やゾンビじゃなくて？」

「うん。怪物みたいな熊がいるらしいよ。立つと三階の窓から顔が見えるくらい大きいんだって」

「なんだ、そりゃ。赤カブトかよ」

「赤カブト？ 何それ」

「あれ、知らない？ 犬が喋るマンガの敵役」

「知らない。ジエネレーションギャップだね」

「そんなに年離れてないように思うけどな。俺はまだ二十六歳だぞ」

「私二十一歳だし、五年も違えば世代も違うでしょ」

「それもそうか。」

まあ、そもそもあの漫画も俺の親の世代だしな。

そんなことよりも早くここを出て住処を見つけない。

メスを囲う強固な住処を得なければ。

「……ゾンビに襲われる心配はない。ここでそれを食べたなら出発をしよう」

「いや、夜は怪物が出るかもしれないんだって。人の話聞いてた？」

「怪物の姿は見たか？ 本当にいるのか？ それは」

「見てないけど、そう話してたのは聞いた。なに？ 疑ってるの？ 行きたいならひと

りで行けば？ 私朝まで待つ」

鈴鹿が不快そうに眉をしかめた。  
どうやって説得したらいいんだ。

「とりあえずそこで食つてろ。安全だつてことを証明してやるから」  
「まあ良いけど。フオークとかないの？」

「割り箸がバッグに入っている」

鈴鹿がトートバッグを漁る。

割り箸は缶詰のバッグにまとめて入れてあるはずだ。

「わ、まだこんなにある。お酒まで。やるねえ、山下さん、恭平さん？  
恭平って呼び捨てて良い？」

「ああ、構わない。俺も鈴鹿って呼ぶけどな」

「別に良いよー」

階段に座り桃缶を食べ始めた鈴鹿を尻目に、通りの車の中を見る。

通りは真つ暗に近いが俺の視界には鮮明に映る。

放置されている車の一台に目当てのものを見つけた。

鈴鹿のいるところからも見える場所だ。

「おい、懐中電灯とかないか？」

「ん、あるよ。ペンライトだからあまり広くは照らせないけど」



「それでいい。俺の指さす方を照らせるか？」

「うん。ちよつと待って」

割り箸を咥えた鈴鹿が桃缶を階段に置き、ポケットから細くて小さい懐中電灯を取り出した。

「どこ？ この車？ うわ、ゾンビいる」

「よし。ちよつとそこでそのまま照らしててくれ」

「え？ あ、ちよ、どこ行くのさ」

車に歩み寄り運転席のドアを開ける。

シートベルトが外れずもがいているゾンビの目の前に腕を出す。

「見ろ。わかるか？」

「ちよつと何やってんの!? 噛まれる！」

「噛まれない。俺は噛まれないんだよ」

「ええ、嘘でしょ。本当に噛まない……そいつ死んでるんじゃないの？」

「死んでるだろうよ。ゾンビなんだから」

「あー違って、活動してないんじゃないのってこと」

「良く見ろ。動いているだろう。噛まれないだけじゃないぞ。見てろよ」

シートベルトのバックルを外してやると、ゾンビが慌てたように助手席の方へ逃げ

る。

違う、そつちじゃない。

車を回り込み助手席のドアを開けると、ゾンビは運転席から外に出て俺から離れ始める。

「ちよ!! 何やってんのって! こつち来てる!」

「まあ見てろ」

ここからは少し賭けだ。

鈴鹿の姿を確認したゾンビが、鈴鹿を獲物として認識し近寄っていく。

俺はゆっくりゾンビのあとを追いかける。

「ちよっと! 逃げるからね! そいつなんとかしてよ!」

「まあ待ってって」

ゾンビと鈴鹿の距離は三メートルほど。

ここでゾンビを追い抜き、鈴鹿の前へ立つ。

「ウウアア……」

「止まった……?」

「少し近づくとぞ」

「うん……」

鈴鹿の肩を抱き密着した状態でゾンビへ一歩ずつ近づく。フラフラしていたゾンビだが、俺と鈴鹿が近づくと「グゲ……」と言つて逃げた。

実験成功だな。

ゾンビは獲物がいても、俺の近く、または俺の触れた獲物には手を出さない。

鈴鹿の肩を離しても遠くに行つたゾンビが戻ってくることはなかった。

「ちよつと……これ、すごいよ……」

「ああ、安全だろ？ だから一緒に出発しよう」

「うん……うん！ わかつた、私も一緒に行く。ていうか恭平、貴方何者なの？」

「何者、か。まあ嫌われ者だな。ゾンビには嫌われてんだ」

「はは、変なの。ゾンビに嫌われてるとか、そりやこれだけ食料も持つてるわけだ」

鈴鹿の目にはさぞ魅力的なオスに映つただろう。

これで鈴鹿は俺のものになる。

このゾンビだらけの世界で、ゾンビに襲われずに生きていけるんだから、俺を選ばない手は無いはずだ。

「あ、でも出発する前にこれだけ食べきつて良い？」

「ああ、良いぞ。ゆっくり食つてくれ」

桃缶のシロップまで飲み干した鈴鹿はバイン缶をバッグに戻す。

「それは食べなくて良いのか？」

「うん。あとでゆっくり食べれば良いかなって。それより出発するってどこに行くつもり？」

「駅前に何個か百貨店あったろ。そのどこかに行こうかと思ってる」

「西部と東部があるね。あと駅ビル。私も見に行ったことあるけど、駅ビルは宗教的なコミュニティができてた」

「そこには近寄らないようにしましょう。西部と東部も見に行ったのか？」

「西部はゾンビが一階にいっぱいいたから入れなかった。東部は最近まではコミュニティがあつたけど、中から全滅したっぽい」

「詳しいな。調べたのか？」

「まあね。何回か食料漁りに行ってたから」

鈴鹿が言うには、ゾンビもいなく安全だったため、ちよくちよく食料を盗みに行っていたらしい。

とりあえずは全滅したコミュニティのある東部百貨店を目指して歩き出す。

「ていうかさ、中にある物は別に占拠した奴らの物じゃなくない？ それなのに見つかる」と追い掛け回してきてさ」

「そうだな……。でもそのバッグに入っている食料を持っていかれたら追うだろ？」

「そりゃね」

「ほら、つまり発見者の所有物つてのが今の世界のルールなんだよ。追われても仕方ない」

「うん。知ってる。けど安全なところから奪うのもこの世界の新しいルールじゃない？」

「だから貯めこんだやつらは奪われるリスクがあるの」

「うーむ。そういうもんかね」

「うん。そういうもんだね」

「法治国家ではなくなり、弱肉強食の世界になったのだ。」

「そうなってしまふのは仕方ないと言えるのかもしれない。」

「話を聞くと、このビルにも食料を盗みに入ったらしい。」

「オスが住処を離れたタイミングで侵入したが思いのほかオスがすぐに帰ってきてしまい、逃げられずにああなったそうだ。」

「鈴鹿、お前も捕まったときのリスクを考えるべきだったな」

「まあ、ね。でも、ここの男たちは調べてたらゲスだってわかったし。ゴミ掃除もしたいなって」

「ゴミ掃除つて……。武器もないのにどうやってやるつもりだったんだ？」

「ん？ 毒。食べ物にでも混ぜるところかなーって」

「毒かよ。怖いな」

「うん。私怖いよっ」

鈴鹿は口の端を上げて不敵に笑う。

あんなに躊躇なく人を滅多刺しにして殺せる鈴鹿が怖くないわけない。

未だに手は血まみれだし、その端正な顔にも返り血がついたままだ。

俺が持つバッグには、コンビニで持ってきたタオルがある。

それをペットボトルの水で湿らせて渡してやる。

「ん？ なにこれ」

「顔を拭くといい。手もだ」

「あは、ありがとう。なに、恭平って紳士なの？」

「別にそういうわけじゃない」

「じゃあジェントルメンだ。ま、ありがたく拭かせてもらうけど。……ふふいー、お風呂入りたい」

足を止めて顔をごしごし拭く鈴鹿を横目に、俺は周囲の警戒をする。

鈴鹿の言っていた怪物が本当にいたら大変なことになる。

俺の目は視力も増したのか遠くまで見えるようになっていたが、怪物の姿は見られな

い。

危ない匂いもなく、なんとなく安全な気がする。

白黒の視界の中で、遠くの方に動くものを見つけた。

あれは、大きな白い犬だ。

向こうもこちらに気付いたのか、ジッと見ている。

あれが野犬か。

俺を襲ったでかい狼のような犬に似ている。

犬の脇に停まっているセダンタイプの乗用車よりも体高も体長も大きい。

……ちよつと待て。でかすぎないか？

俺を襲った犬は虎ぐらいの大ききで、それでも通常の犬よりは大きかった。

それに比べてあいつはなんだ？

車より大きい犬なんて見たことも聞いたこともない。

犬はこちらをジッと見ていたが、フイと顔をそらすとそのままどこかに歩き去って

いった。

襲う気は無いのか……？

「ふうー、すつきりした。どう？ 取れた？ 美人になった？」

先ほどの犬のことを思うと、鈴鹿の顔を呆然と見るしかできなかつた。

あの大きさの犬が集団で襲い掛かってきたら対処できるのか？  
食い殺されて終わる未来しか見えない。

「ん？ どうした？ はっはーん。さては私が美人過ぎて見惚れたな？」

「ああ、美人だ……」

「え、あ、そう？ うん、まあ、ありがとう」

「ああ……」

今は急いで百貨店に行こう。

あんな大きな野犬のうろつく外よりかは安全だ。

「急ごう。怪物がいるかもしれないしな」

「うわ、そうだった。ゾンビは大丈夫だけど熊は襲ってくるか」

周囲の警戒を怠ることなく、早足で百貨店へと向かった。

「ここか。入り口が閉鎖されて入れなさそうだけど」

「うん。こつち」

百貨店の入り口は全部にシャッターが下りていた。

窓も一部はシャッターが下りていたが、ほとんどの窓が割れていて、いろいろなものが積みあげられたバリケードのようなものでふさがれていた。



鈴鹿の後についていくと、百貨店への入り口を見つけることができた。

三階の窓に二連梯子が取り付けられていて、その梯子が大きな観光バスの屋根の上から設置されていた。

観光バスの屋根にある梯子には、乗用車の屋根からワゴン車の屋根を経て辿り着けた。

「ゾンビは梯子を登れないのか」

「千回くらい挑戦したら一回は成功するんじゃない？ 知らないけど」

「その確率じゃ一晩のうちに成功されそうだな。ヤツらは疲れ知らずで痛みもない。一晩中挑戦し続けるだろうよ」

「じゃあ兆とか京とかそれくらい。ていうか知らないって言ってるんじゃない？」

「ああ、悪い」

まあ梯子から落ちて骨を折れば体をうまく使えなくなるだろうし、成功率は限りなくゼロなんだろう。

「じゃあ先に入るぞ」

「うん。よろしく」

二連梯子は結構大きikutawami、折れないかと心配になる。

窓枠にロープで固定されているから倒れることは無いだろうけど、いつかは朽ちて折

れるのだろう。

窓から体を滑り込ませると、ゾンビの臭いで充満していた。

内部からゾンビが発生してコミュニティは崩壊したのだろう。

「よいしょつと。うわ、くさつ。いるよね、これ」

「だろうな」

なりたてのゾンビはくさくない。

……くさくさなかった。

道行くゾンビはだいたいが漏らしたようにズボンが汚れていた。

肛門の筋肉が緩むのか、便が垂れ流しになっている。

なぜ……もう考えるのはやめよう。汚い。想像したくない。

「八階がコミュニティのメイン生活場所って感じだった」

「じゃあそこを指すか」

歩き出そうとすると、鈴鹿がペンライトで明かりを点けた。

違和感なく見えていたが、そうか、明かりが点いていなかったか。

「くつついていい？ ゾンビいるだろうし」

「そうだな。肩を抱いても？」

「ん、お願い」

右手で鈴鹿の肩を抱く。

匂いでゾンビが近いかどうかはある程度わかるが、いきなりゾンビが飛びついてこないとも限らない。

エレベーターホールから階段室へ向かい、ゆっくりと登っていく。

「……いないね」

「六階にはいたつぽいぞ。音がした」

「嘘、良く聞こえたね。何にも聞こえなかったけど」

聴力も良くなっているのか？

今は七階だが、耳をすませば八階を歩くゾンビと思わしき足音が良く聞こえる。

八階の踊り場に来ると、ゾンビの不快な臭いに混じって、芳しい匂いが漂っていた。

横の鈴鹿の下腹部をじっと見る。

この匂いとは違う。別の匂いだ。

「ちよつと、どこ見てんの。くつついて興奮しちゃった？」

「いや、そういうんじゃない。匂いがな……」

「におい!? 嘘、くさいかな!? ちゃんと洗ってるんだけど、あ、でも三日はお風呂入っ

てない……」

鈴鹿は大きな声で喚いたかと思えば俺と距離を取ろうと離れていく。

この階はゾンビが多そうだから、あまり離れない方が良い。「くさくない。むしろ良い匂いだ。大丈夫だから近くに寄れ。ここはゾンビが多そうだ」

「え、あ、うん。わかった……」

鈴鹿がジャケツトの端をつまんできたので歩き始める。

この階のテナントには雑貨の『アングラ』と家具の『イチウオ』が入っているようだ。生活のベースにするにはいろいろとちようど良いのだろう。

店内には何匹ものゾンビがフラフラと徘徊している。

「おらあ！ 散れ、ゾンビども!!」

「うわ、びっくりした。いきなし叫ぶのやめて」

「ああ、すまん」

俺が叫ぶと中からガタガタと音がした。

ゾンビがフラフラとやってきて、俺を確認すると反対側の階段やフロアの中央にあるエスカレーターへ向かって歩いていく。

フロアの隅の方に逃げずに階段やエスカレーターを使うとは、やはりある程度の知識はあるんだな。

ゾンビがほぼほいなくなると、芳しい匂いが濃くなった気がした。

店内は商品棚が全てなくなっており、とても広い。

ベッドやテーブルなどが置かれ、生活スペースがしっかりとでき上がっている。

倒れた椅子やひっくり返ったテーブルに混じって、ゾンビの死体や人の死体が転がっていた。

「これ、ゾンビに噛まれてない。頭割られて死んでる」

「こつちもだ。首を搔つ切られている」

他にも、無数の包丁が顔に突き刺さった死体や、首を切断された死体などがあつた。

「内部分裂からゾンビ発生の混乱、で全滅と」

「アホだねえ。信用できない人間を集めるからこうなるんだよ」

「どうしてもそういうのは一定数いるんだろ。市役所の避難所にもいたぞ」

「あんなどこはそんなのの巣窟に決まってんじゃない。自分で何もしないで助けてもらおうと思わない連中なんだから」

「普通はそうなんじゃないか？」

「その普通の奴らが暴走するところなるの。間引けば良いのに」

「昨日まで平和だったような日本で普通の人にそんなことは無理だろ」

「無理でもやらなきゃ生きていけない世界なんだよ。もう世界は変わっちゃったの」

「まあ、そうなんだけどな。順応できなければ死ぬだけだ」

「そういうこと」

店内を見ながら歩いてみると、ゾンビが一匹残っていることに気がついた。こちらを見ているが、去ろうとしない。

「おい、まだいんのか。あっち行つてろ」

「ウガアア……」

「あっち行けつて」

「ウウウウ……」

唸るだけで一向に去ろうとしない。

なんなんだ、こいつは。

こいつのいる壁際にはドアがあり、倒れた柵がそれをふさいでいた。

この奥になにかあるのか？

そういえば、匂いもそこから漂っている気がする。

「おい、どかねえと殺すぞ」

「ちよつと、なんかそいつ危なくない？ 近寄らない方が良いつて」

「いや、このフロアからは一掃させたいだろ。邪魔だ」

「そうだけど、なんか他のと様子が違うくない？」

良く見ればこのゾンビは漏らした様子もなくなりたてのようだ。

なにかしら知識が残っていて、このドアに執着しているのか？  
ゾンビ相手にお願いなんでアホらしくてやってられない。

実力行使だ。

「鈴鹿、そこにいろ。壁際で他にゾンビがないか気をつけとけ」  
「うん、わかったけど」

鈴鹿から離れゾンビに近づくと

「グウウ……」

「おう、殺すぞ」

どんどん近づく。

「グゲ……」

「わかりや良いんだよ。あっち行け」

「グゲエ……」

不服そうに離れていくゾンビ。

なんだよ、なんか文句あんのかこの野郎。

「あいつまだこっち見てるよ」

「むかつく野郎だ」

ゾンビは放置だ。

今は柵にふさがれたドアが気になる。

折り重なった柵をどかし、ドアを開けようとするが。

「鍵がかかっているな」

「鍵か。あいつが持つてるかな？」

あのゾンビがまだこちらを見てウロウロしていた。

よし。奪うか。

俺と目が合うとゾンビは逃げようと歩き出した。

猛ダツシユで走り、背中へ飛びつく。

「おらあ！ 出せよお！ 持つてんだろうがあ!？」

「ウゲアアアア……!」

「ああん？ どこだおらあ!!」

「グゲエエエ……!」

嫌がるゾンビのダウンジャケットのポケットから鍵が出てきた。

多分これだな。

「よし、もう消えて良いぞ」

「ウゲエエ……」

すくすくゾンビはエスカレーターを降りていった。



ドアの前に戻ると鈴鹿が呆れたような顔でこちらを見てきた。

「さすがの私もゾンビから強盗したことはないな……」

「やれることをやったまでだ」

「いや、かつこよく言ってもかつこよくないから」

あのままゾンビがいなくなっていたらここのドアは開かなかつたんだ。

なんとも言えば良いのだ。

鍵を使いドアを開けると、濃密な芳しい香りに包まれた。

これは、極上の匂いだ。

「だ、誰!? お兄ちゃんはどこ!?!」

「お兄ちゃん?」

倉庫と思わしき部屋の中に居たのは、鈴鹿と同一年くらいのメスだった。

体全体から匂いを発しているように思う。

頭がクラクラしてきた。

「あの、お兄ちゃん、見ませんでしたか?! ニット帽かぶった、ダウンを着た人です」

「あ」

「さっきのゾンビ?」

「ゾンビ!? そんな、嘘……」

その場に崩れ落ち泣き出したメスの姿を見て、なんとも言えない罪悪感に苛まれた。あいつ、この妹のこと守ろうとしてたのかもなあ。

## 第十六話 大掃除

メスの名前は細川ほそかわ珠子たまご。兄妹でここを拠点にしているコミュニティに参加したそう  
だ。

年齢は十九歳。安産型のどっしりとした尻が魅力的だ。

「それで、男の人たちが暴れ出して……こゝ、殺し合いがおきて……」

「なるほど、だからお兄ちゃんがここに入れて守ってくれてたんだ。良いお兄ちゃんだ  
ね」

「はい……うう……お兄ちゃん……」

ひとしきり泣いて落ち着いた珠子から、ここで何が起きたかを詳しく聞いた。

このコミュニティが作られたのはゾンビ発生から二カ月後の八月中旬。

防火シャッターの下りた百貨店は略奪にあうこともなく、綺麗なものだっただろうだ。

コミュニティの人数は六十人ほどで、九階にあるレストラン街の食料で食いつないで  
いたらしい。

そこに別のコミュニティ数十人が避難してきたことからおかしくなっていた。

新参者の人間は軽んじられ、食料が少なくなつたのはお前らのせいだ、と外へと物資

を漁りに行かされていた。

この百貨店の地下にある食料品売り場は大量のゾンビに占拠されているため、シャッターを閉めて閉鎖していたらしい。

ある時、新参者のうちのグループが、外ではなく地下街へと物資を漁りに行き、失敗。

シャッターの開いた地下街からゾンビが溢れ出し、百貨店の低層は占拠され、生き残った人々は追い詰められていった。

恐慌状態に陥った人々がお互いに罵り、やがて殺し合いに発展し、そこへゾンビが現れて地獄のようになってしまった。

防火シャッターでも下ろしておけばゾンビはあがってこなかっただろうに。そんな余裕も無かったのだろうか。

珠子は兄にこの部屋に閉じ込められ、四日が過ぎた頃に俺と鈴鹿がやってきたそう  
だ。

幸いなことに、量は少ないが食料も水も部屋にあつたらしい。

俺たちは、珠子の閉じ込められた部屋で向かい合って座り、話をしていた。

「さて、それで珠子はこれからどうするんだ?」

「……わかりません。どうしたら良いのでしょうか?」

「どうにかして生きていくしかないよね。恭平はどうすんの？　そもそもなんで百貨店を目指してたの？」

「そうだな。まあ堅牢な拠点が欲しいのはあった。ここは良いと思う」

「ですが、もうゾンビに占領されてしまっています。もの凄いや量のゾンビがいたんです」

「ああ、その辺は心配ないよ。恭平はゾンビを追い払えるから」

「えつと……？　どういうことですか？」

不思議そうにこちらを見る珠子、隣では何故か鈴鹿が得意げな顔をしている。

「俺はゾンビに噛まれないし、ゾンビは俺を避けようと離れていくんだよ」

「それは、何故ですか？」

「知らん。気付いたらそうなっていた。あつて便利なものなんだ。それでいいだろ」

「そうそう。恭平といたら安全だし食べ物に困ることなさそうだしねえ。あ、恭平、お腹

空いた。食べていい？」

「好きに食べ。足りなければもつと持ってくるぞ」

「いや、充分。これ全部食べたからお腹壊しちゃうよ」

鈴鹿がバッグからミカンとパインの缶詰を取り出す。

「他にもあるぞ。それだけで良いのか？」

「うん。やきとりとかは温めたほうが美味しいし」

「ああ、たしかにそうだ」

サバも温めた方が美味いしな。

スパムやコンビーフも焼いた方が美味しい。

鈴鹿が割り箸を使い、ミカンを一房ずつ口に入れては幸せそうに笑っている。

果物が好きなのかもしれない。

「あ、あの」

「なんだ？」

なにやらもじもじした様子の珠子が話しかけてきた。

「その、恭平さん、はゾンビに嫌われているんですよね？」

「ああ、そうだ」

「外に出ても襲われないんですよね？」

「そうだな」

「えつと、あの、非常に申し訳ないのですがお願いが……」

「なんだ？ だいたいのは叶えてやれるぞ」

「その、えつと……。お……」

「お？」

「お手洗いに、行きたいです……」

珠子は顔を真っ赤にして俯いた。

まあそれくらいならすぐにも叶えてやれるだろう。

このフロアにもトイレはあったように思う。

鈴鹿が「ああ、そっかあ」と言った。

「四日も閉じ込められてたもんねえ。でもその間は どうしてたの？」

「口、ロッカーに掃除用の布切れがあつたので、紙袋にそれを敷いて……」

「ああ、この並んでる紙袋ってそれかあ。あは、ごめんごめん。ゆっくりしておいで」

「うう……」

「あまりいじめるな。デリカシーがないぞ」

「あはっ。つい、ねえ」

羞恥に染まった表情で唸るだけになってしまった珠子を連れて部屋を出る。

「本当にゾンビがいらないんですね……」

「下の階にはうじゃうじゃいるだろうけどな。まだ隠れている奴がいるかもしれない。

俺にくつついて離れるなよ」

「はい……」

珠子が左腕にしがみつくせいで若干歩きにくい。

女子トイレの個室ひとつひとつを覗きゾンビがいなかったかの確認をする。

「よし、大丈夫だな。じゃあ俺は外で待つてるから」

「は、はい。すみません。ありがとうございます……」

待っている間、フロア内の状態を見つつ考える。

ここをより良い空間に変えるのが今後の目標だろう。

メスの居心地を良くし、ここにいたいと思わせるような、そんな住処にしなければいけない。

今の状態は決して良いとは言えない。

大量の血、汚物、人の死体にゾンビの死体。血で汚れていたり壊れていたりする家具。これらの掃除をしなければ、新たなメスは迎え入れられない。

下の階に逃げていったゾンビも追い出さなければ。

やることはたくさんある。

腕時計を見れば短針が一二の数字を指している。

今からじゃ明日の朝までかかっても終わらない。

ゆっくりと寝て、明日の朝一で始めれば良いだろう。

今日はいろいろなことがあるすぎた。

「お待たせしました……。ありがとうございます。助かりました」

「いや、いい。明日には俺が付き添わなくてもいいようにしておくから、少し待っててく



れ」

「え？ あ、はい」

不思議そうに見てくる珠子が、何故そのような顔をするのかがわからない。

何かおかしいことを言ったのだろうか？

「なんだ？」

「いえ、あの、私、ここに居ても良いのでしょうか？」

「ん？ 居たくないのか？」

「いえ、違います。そうじゃなくてですね」

珠子は手をぶんぶん横に振る。

ハーレム要員として数えていたが、まさか珠子は俺に魅力を感じていない？

それはまずいな。

俺はメスを集めなければいけないのだ。

明日、ゾンビを追いついでに俺のアドバンテージを理解してもらおうしかないな。

とりあえず珠子にはすぐにここを出て行こうという気にならないように気を使わなくては。

「俺はお前に無理強いはいしない。ここに居たくないなら出て行っても構わない。だが、ここに居ると言うのなら、俺はお前を全力で守り、決して危険な目にはあわせないと

誓う。ここに居てくれるか？」

「あ、あの、あの、はい。不束者ですが、よろしくお願いします……」  
珠子が顔を赤くしてもじもじとしている。

なんでそうなる？

何か勘違いしているだろう、これ。

まあ、都合は良いか。このままにしておこう。

ふわりと強烈な芳しい匂いが珠子のスカートの裾から流れ出てくる。

この布をめくり上げ、直接匂いを嗅ぎたくなる衝動を必死に抑える。

俺は獣じゃないんだ。

「よし、じゃあ戻るぞ」

「はい！　よろしくお願いしますー」

俺の腕をギュツと抱きしめる珠子。

柔らかい感触を腕に感じ……なかつた。

俺の着ているプロテクタースーツは、ちよつとやそつとの衝撃は通さない。

それは、固くても柔らかくても同じだ。

珠子を帰し、その辺にあつた比較的綺麗なマットレスを三つほど部屋へと運び入れ

る。

邪魔な紙袋を窓から投げ捨ててやったら、珠子が「ああ……！」と悲痛な叫びを上げた。

下のことは気にするな。

俺は外で寝ても良かったが、寝ている間に万が一のこともある、と二人から部屋内で寝ると言われたのでそれに従った。

部屋はマットレスを三つ並べるだけで精一杯な広さだった。

ドアのすぐの場所に俺、真ん中に鈴鹿、窓際に珠子の順で並び、寝ることになった。

「あー、お風呂入りたい。ねえ、たまちゃん。お風呂入りたいよ」

「私もです……。六階にいくつもショールームが入っていて、そこのお風呂を改造してもらって私たちは使っていました」

「え、嘘。ほんとに？ 恭平、明日ゾンビ追い出すよね？ 私お風呂入りたいんだけど」

「……追い出すから……はやく寝ろ……」

「やった。約束だよ？ 私もう三日お風呂入ってなくてヤバイんだから」

「約束する……。良い匂いだから、寝ろ……」

「え、うん。わかった」

明日はいろいろとやらなければいけないのだ。

まだ鈴鹿が何かを言っているが、もはや何と返しているのかもわからない。意識がだんだんとまどろんでいく……。

腹をもぞもぞと何かが這う感触で目が覚めた。

まさかゾンビかと目を開くと、鈴鹿が俺の上に重なるようにして寝ていた。その手は俺の着ているシャツの下に潜り、腹を撫でている。

「あ、起きちゃった？ 寝ているうちにお礼しようかと思つてただけだ」

「お礼？ ああ、別にいいって言つたら」

「ええ、でも悪いからさ。感謝の気持ち的な」

「気持ちだけで充分だ。ほら自分とこ戻つて寝ろ」

「ええー。せつかく人がしてあげようかと思つたのに。なんか怪しくない？」

「気分じゃないんだよ。寝てくれ」

「へーい。なんだよなんだよ。本当はインポなんだろー」

「聞こえてるぞ。はやく寝ろ……」

「ちえー、まったく、乙女心を傷付けやがって。たまちゃんもそう思うだろー。起きてんのはわかつてんだからなー！」

「ええ、ちよつと鈴鹿さん、やめてください……！ 私寝てました！」

「うるせー！ このムツツリ娘が！」

「ム、ムツツリ!? 訂正してください！」

頼むから静かにしてくれ……。

あれからなにことも無く朝を迎えることができた。

二月の朝はとても寒いが、幸いなことにこの百貨店の空調は生きているらしく暖かい。

窓の外は白く染まっている。どうやら雪が降ったようだ。

静かに部屋のドアを開け外へ行く。

このフロアにゾンビは戻ってきていないようだ。

足音も下の方の階からしか聞こえない。

使えそうな物資がまとまっていたので漁る。

新品のタオルに歯ブラシ、髭剃りもあるのはありがたい。

三人分のタオルと歯ブラシを持ち部屋へと戻る。

ドアの音に気がついたのか、二人がもたもたと起き上がった。

「ううん、うん? あ、おはよう……。恭平、早いね……」

「おはようございます……」

「ああ、おはよう。窓の外見てみる。すごいぞ」

「ええ？ 外？ うわ、寒そう……」

「雪ですね……」

そこまで嬉しそうじゃない。

おかしいな。雪つてこの場所じゃ降るのが珍しいのに。

テンション上がりそうなものだけど、俺と二人じゃ感性が違うのか。

「顔洗つて歯を磨いたら飯にしよう。ほら、起きた」

「うええ、もつと寝てたいよお」

「起きますよ、鈴鹿さん。ほら、立って」

「うえええ」

鈴鹿は朝に弱いようだ。

それに引き換え珠子は起きたばかりだということにしやしきしきと動く。

この違いはなんなんだろうな。

最終的に珠子が嫌がる鈴鹿を引きずるようにしてトイレへと向かった。

ゾンビの姿も見えないので大丈夫だとは思うが、万が一があるといけないので俺も一緒に女子トイレの洗面所で顔を洗い歯を磨く。

無精髭が生えていたので全て剃ると、だいぶスッキリした。

髭の似合う男になりたい。

以前髭を伸ばしたときには似合わないと……。

髭のことはいい。朝食を何にするか考えよう。

「うわ、恭平、爽やかイケメンになったね」

「怖い感じがなくなりました」

チンピラ時代は髭を生やしていたからな。

無精髭が生えているとチンピラのように見えてしまうのだろう。

朝食はカセットコンロとフライパンがあつたので缶詰を温めることにした。

というよりも缶詰とつまみ以外食うものがなかった。

缶詰の鶏レバー、ベーコン、やきとり、ひよこ豆、グリーンピースをフライパンに全部入れる。

これにチキンタイカレーをいれて弱火で混ぜる。

カレー風味の炒め豆だ。

「うわあ、良い匂いだけど、本当に美味しいの、それ？」

「見事に缶詰ばかりですね」

「美味いかは知らん。味の系統的になんとか合うだろう」

「あ、この豆私知ってる。ガンバルゾでしょ？」

「頑張るぞ？」

「これ、この鳥みたいなの。ガンバルゾっていうんでしょ？」

「鈴鹿さん、ガルバンゾですよ」

「そうそれ。ガンバルゾ」

「ガルバンゾです」

「今日も一日ガンバルゾ」

鈴鹿が変な音程をつけて言い出した。

「何でも良いから早く食べ。意外とイケるぞ。口直しにフルーツ缶もある。デコポンと

不知火だ」

「描いてある絵、一緒じゃん」

わかってないな。

デコポンのほうが甘く、不知火の方が酸味が強い。

俺は不知火の方が好きだ。

騒がしい朝食を終えると、いよいよ掃除の始まりだ。

二人には部屋に残ってもらい、俺一人で行く。

この百貨店には上下の移動手段が、エレベーター、中央エスカレーター、西階段、東階段と四つある。



ゾンビを残らず追い出すためにそのうちの三つをまずは潰す。

屋上十階のエレベーターホールの防火シャッターを下ろす。

次にエレベーターで九階に下り防火シャッターを下ろす。

これを一階まで繰り返す。

一階に下りたら正面玄関のシャッターを一箇所開ける。

それからエレベーターまで戻り防火シャッターを下ろし屋上へ。

屋上のエレベーターホールの防火シャッターも下ろせば、もうここは進入経路にならない。

次に西階段。

これもフロアごとにある踊り場の防火シャッターを下ろしながら一階まで行き屋上へ戻る。

結構ハードな運動だが全然苦じゃない。

階段を二段飛ばし三段飛ばしで駆け上がったが息も切れなかった。

とんでもなく体力が増えている。

東階段も同じように終わらせてから、二人の居る部屋まで戻る。

「あ、おかえり。終わったの?」

「ああ。あとは屋上から追い込めば勝手に玄関から出て行くだろう。多少は出て行った

みたいだが、まだ残っているからな」

「あの、本当に私たちも行かないとダメなんですか？」

「そうだな。万全を期すなら二人は一緒の方が良い。ここに二人が居るとゾンビが変則的な動きをして上手く追い出せないかもしれないからな」

本当は二人に俺の力を見せつけて、俺の魅力を伝えるためだが、そんなことを正直に言う必要は無い。

両手に花の状態で屋上を歩く。

屋上は半分ソーラーパネルが設置され、もう半分が庭園になっていた。

池まであり、果樹なども植えてある。

ただ、今は雪で覆われており、一面真っ白だ。

雪は好きだ。わくわくする。

二人には不評なようだが。

太陽が出ていれば溶けて無くなるんだろうけど、あいにくの曇りだ。

「へえ、屋上は初めて来たけどすげえな。ここで養殖できるんじゃないか？ 鯉とか」

「鯉なんて泥臭くて食べられなさそう。レンコンとかの方が良いんじゃない？」

「ハスだっけ？ 本でも読んで育てる方法探してみるか」

「あそこの一角には畑を作ったんですよ。私も参加しました」

「へえ、畑か。田んぼでも作る?」

「作り方わかんないでしょ」

いろいろと喋りながら屋上を歩く。

ゾンビが潜んでいそうなどころは、どんな死角でもチェックしていく。

屋上の売店のロッカーや、ベンチの下、水の中も。

「屋上は大丈夫そうだな」

「早く下に行こう。ここ寒い」

「そうですね。冷えてきました」

そう言つて二人は身震いをした。

俺はそこまで寒さを感じなかったが、男女では体感温度が違うのだろう。

止まっているエスカレーターを下りて九階へ。

「これエスカレーターって閉鎖できないよ。どうすんの?」

「こうすんだよ」

エスカレーター脇にあるパネルを開きボタンを操作する。

すると屋上のフロアの床からシャッターが伸び、エスカレーターを包み込んでふさい

だ。

これで上下のエスカレーター両方ともがふさがった。

「す、すごい。なにこれ。エスカレーターってシャッターあるの?」  
「ここの東部百貨店はな。西部は知らん」

前に市の広報だかなんだかで見た気がする。

適当にパネルをいじったが閉じることができて良かった。

やり方なんて知らなかったが、緊急時に動かないんじや防火シャッターの意味は無いしな。

九階もゾンビを隅々まで探すが見当たらなかつた。

トイレの個室から冷蔵庫の中、従業員のロッカーまで漏れなく探したから大丈夫だろう。

八、七、六階と何もなし。

ゾンビは相当俺のことが嫌いなようで、遙か下の階に逃げてしまったようだ。

ちなみに七階はスポーツ用品店とアウトドア用品店で、六階には家電やショールームなどの店が多くあつた。

五階につくとゾンビが数匹ウロウロしていた。

しかし俺の姿を確認すると、エスカレーターをすごすごと降りていった。

「す、すごい。本当に逃げて行きました」

「でしよー? 信じてなかつたの?」

何故か鈴鹿が得意げだった。

「このまま残さず追い出すぞ」

だんだんとフロアにいるゾンビは増えていくが、残りの階も全て終わらせた。

五階に生活雑貨と本屋、四階は紳士服と婦人服、三階は一フロア丸々婦人服、二階がバッグや貴金属などのアクセサリーがメインで、一階が化粧品売り場だった。

一階の正面玄関は、ゾンビが列を成して退店していく姿が見れた。

まるで、バーゲンセールが終わったあとのようだ。

二人もそんなゾンビをなんとも言えない表情で見ている。

「私恭平と出会えて本当に良かった。何も怖いもの無いじゃん」

「そうですね……。ゾンビに襲われないというだけで、こんなに安心できるなんて……」

よしよし。俺の魅力は充分に伝わったようだ。

これで二人が俺のハーレム要員になるのは間違いないな。

## 第十七話 地下食料品売り場

百貨店内の掃除は残すところ地下だけとなった。

地下へ繋がるのは中央エスカレーターと、一階からの階段が一つ。

その階段は既に防火シャッターでふさがれていた。

中央エスカレーターの防火シャッターは閉まっておらず、そこからなんとも言えない嫌な臭いを感じた。

「地下は、また今度にしよう。なんだか危険な予感がする」

「えー、美味しいご飯がありそうなの？」

「食料はどこからでも調達してきてやるから、とりあえず地下はやめだ。行くなら俺一人で行く」

もし、この嫌な臭いを発するナニカが中にいたら、二人のことを守りきる自信はない。俺が一人で行くと言うと鈴鹿は不満気だが珠子はホッとしたような表情をしていた。

「ここはシャッターを閉めて放置だ。上に戻って掃除するぞ」

「あーあ、美味しいご飯をお腹いっぱい食べたかったなあ」

「仕方ありませんよ。それよりも恭平さんにここを安全な場所にしてもらったんだから

感謝しなくちゃダメですよ」

「わかってるってば。ちよつと期待しちやつてたから、余計に食べたくなつちやつただけ」

鈴鹿の不満を放置するのは良くないだろう。

なるべく近いうちに地下の探索をしなければ。

メスが不満を抱いてハーレムから抜け出すなど、決して許されることじゃない。

不満や不安は全て取り除かなければいけないのだ。

「鈴鹿、すぐに見つけてきてやるから、少し我慢してくれ。何が食べたいとか希望はあるのか？」

「え、いや、無理しなくてもいいんだけど。言ってみただけだから」

「俺は無理をしなくてもできるんだよ。ほら、何が欲しいか言ってみろ」

「まあそつか。ゾンビに襲われなきゃゆつくり探せるもんね。じゃあチーズケーキ食べたい」

チーズケーキはさすがに無理だろう。

何か代わりとなるものを見つけないければ、不満は解消されない。

牧場に行つてチーズを探して作るか？

無理だ。どこに牧場があるかわからないし、そもそもチーズケーキもチーズも作り方

を知らない。

どうすれば良いんだ……？

「つて嘘だつてば。そんな真剣に考えこまないでよ。恭平が何か美味しそうって思ったものだったらなんでも良いけど、できれば甘いものが良いかな」

「わかった、探してこよう。とりあえず今は掃除だな。八階を生活スペースにするというこことで良いな？」

「うん、良いと思う。私は賛成」

「私も賛成です。九階のレストランのキッチンでご飯が作れますし、六階のお風呂も近いですし」

「あー、お風呂入りたい。ねえ恭平、先にお風呂入っても良い？」

「どうせ掃除をする際に汚れると思うが、どうしても入りたいと言うのなら入っても良いだろう。」

八階の掃除の主となるのは死体や血、汚物などだ。

ここで不快な思いをさせる必要もない。

「ああ。入ってこい。そうだ、珠子も一緒に入ると良い」

「え、私も良いんですか？」

「俺たちはここの風呂がどうなっているのかわからないからな。鈴鹿に教えてやってく



れ」

「やった。たまちゃん一緒に入ろうか。私四日ぶりだわー」

「私は七日ぶりです……。に、臭いませんか……。？」

「え？ うん、まあゾンビのヤバイ臭いで麻痺してるから大丈夫だよ」

ゾンビは死体だが、不思議なことに腐ってはいないように思う。

見た目は様々で、全身の毛が抜け落ちたヤツもいれば、人間とそう変わらない姿のヤツもいる。

血まみれだったり、ケガしていても平気で歩いているのはだいたいゾンビだ。

あと近くで見れば白目が黄色く濁っているのでわかりやすい。

体が腐り落ちていたり溶けていたりするようなヤツは見たことがない。

さすがに体の腐ったゾンビがそこら中に居たら疫病が大発生しているだろう。

それでも、ゾンビ独特の臭いはあり、俺は遠くにいてもくさいと感じる。

ゾンビの臭いをわかりやすく例えるのなら、寝起きのおっさんが歯磨きもせず煙草を吸ったあとにコーヒーを飲んで思い切り切り鼻の前でため息をしてきたような、そんな臭いだ。

端的に言えば吐き気を催す臭いだ。

そんな臭いのするゾンビに嫌われるとは、もしかして、俺もくさかったりするのかわか？

二人は俺に気を使って何も言わないだけで、本当はくさいのかもしれない。もうアラサーと呼ばれる年齢だ。

そういうところに気を使っていかなければ、ハーレムを集めるのに支障をきたすかもしれない。

「じゃあ恭平、私たちお風呂行ってくるから。一緒に入りたかったらおいでー」

「だ、ダメですよ！ 狭いですし、三人なんてダメですよ！」

「俺はあとでゆつくり入りたいから、先入ってこい」

「あはっ。本当にインポなんじゃないの、恭平」

インポじゃねえよ。

気分が乗らないだけだ。

そもそも、やることが山積みなんだ。

そんなことしている場合じゃない。

「あ、怒った？ ごめんごめん。じゃあ行ってくるねー」

「はやく行け」

「あの、男の人の着替えは四階にありますので」

「ああ。わかった」

二人がエレベーターホールへ続く防火シャッター脇の扉を潜るのを見届け、行動を開始

する。

まずは地下へと続くエスカレーターのシャッターを閉める。

そして、一フロアずつエスカレーター全部の防火シャッターを開けて上へと上がっていく。

本当はエスカレーターを起動したいが、無駄な電力を使わない方が良いだろう。

六階を通るときは遠くの方で二人の騒ぐ声が聞こえた。

まったく、のんきなものだ。

ゾンビが溢れ、人が簡単に死んでいくような世界になったのだと理解できているのだろうか？

今までの日常が壊れ、非日常がずっと続き、それが当たり前前の日常になっているというのに。

俺と居るからか？

安心して、平和な頃の間感覚になっているのか？

それは、良いことだな。

そうか。こうやってこの安心感に浸らせて、抜け出したくないと思わせれば良いのか。

なら俺がやるべきは、より住みやすい環境をメスに提供することだな。

寢床の掃除をやつてしまおう。

八階に戻る。

ゴミを外に投げ捨てたいので、ベランダに出られる窓を取っ払う。

あとではめ直すから、割れないように離れたところへ置いておく。

まずは使え物にならない家具を捨てていこう。

椅子、ベッド、テーブル、棚。

血で汚れていたり壊れていたりするのは全て窓から投げ捨てる。

八階という高い所からベッドを落とすと、かなり広範囲に木片が散らばるようだ。

原型はほぼ留めていない。

かなり重いはずのベッドも筋トレの成果が出たのか一人で軽々と持つことができた。

スポーツ用品店にプロテインがあれば飲むようにしましょう。

家具を終わらせたら次は死体だ。

死体の数は全部で二十二体。全部が頭部を損傷、もしくは首の切断をされていた。

比較的着ている服が綺麗なのが人で、破れていたりするのがゾンビだろう。

死体になるとゾンビも人もそうそう変わらない。

死体も全部ベランダから投げ捨てる。

丁寧に扱うべきなのだろうが、もはやそんなことを言っていられる世界ではない。

ちやんと火葬はするから、許してほしい。

散らばった肉片や溢れた内臓、落ちている脳漿のうしようを箒とちりとりを使い紙袋にまとめて

詰め、外に放り投げる。

血や汚物もある程度ボロ切れで吸い取りまとめ捨てる。

乾いた血や汚物には水と洗剤を撒いてデッキブラシで擦り、ボロ切れで吸い取って捨てていく。

だいたい綺麗になっただろうか。

あとの細かい所はメスにやっておいてもらおう。

灯油缶とバーナーがあつたので一つずつ持ち、外へと向かう。

六階で二人に声をかけようと思ったが、楽しいげな笑い声が聞こえてきたのでやめておいた。

これから死体を焼きに行くなんて伝えたら、楽しい気分になんてなるだろうか。

三階の梯子から外に出て、いろいろと投げ捨てたベランダのある面に向かう。

「……………これはひどい」

家具は爆発したように散乱し、死体はひしゃげて中身が飛び散っている。

自分でやったことだが、これはひどすぎた。

一応手を合わせて祈りを捧げておこう。

アーメン。ハレルヤ。南無阿弥陀仏。

クソつたれな世界を救わない神さまたちでも、死んだ人くらいは救ってくれ。

比較的形を保っているベッドがあつたのでそこに死体を寝かせていく。

八体ほど寝かせたらいっぱいになってしまったので、その死体の上にばらばらに散らばっている家具の木っ端を並べていく。

その上にまた死体を、更にその上に椅子など木片を、そしてまた死体を乗せて、周辺の紙袋や木片全てをその山に投げ入れれば完成だ。

家具と死体のキャンプファイヤーに灯油を念入りにかけて、バーナーで火をつければ轟々と勢いよく燃え上がった。

この死体も誰かの親であり子であり、妻であり夫であり、そして兄弟であり姉妹であつたのだ。

ゾンビになつたからといって嬉々として殺そうとするような人間はそうそういない。だからこそここまで被害が広がつたのだろう。

いつそのこと異形の怪物にでもなつてくれていければ、躊躇なく殺すことができ被害が収まつていたのかもしれない。

そんな詮無きことを考えていても仕方ないか。

今は為すべきことを為すのみだ。

燃え広がるものが周りにないのを確認して、火をそのまま放置することにした。八階に戻るとジャージ姿の珠子と鈴鹿が床にモップをかけているところだった。

「あ、おかえり恭平。何やってたの？　なんか煙たいけど」

「ああ、火葬していた」

「火葬ね、なるほど。恭平もお風呂入ってくる？　ここは私とたまちゃんて掃除しとくよ」

「いや、地下に行こうかと思う」

「ええ？　一人で平気？　私も行こっか？」

「何かあるかわからないからまずは一人で行ってみる」

「そっか。無理はしないでね。恭平に何かあつたら大変だからさ」

「ああ。わかった」

ケガでもした日にはメスを守ることができなくなってしまうからな。

安全第一。命を大事に、だ。

地下へは中央エスカレーターから行くことにした。

防火シャッターを開けると、なんとも言えない嫌な臭いが漂ってくる。

確実に何かがある。

地下はスーパーのような食料品売り場と、テナントがいくつも入っている仕組みだった。

まずは臭いの元を探ってみるか。

より嫌な臭いが濃くなる方へと歩いていくと、とんでもない光景を目にすることになった。

生鮮食品売り場の一部の壁が無くなり、バックヤードが見えている。

そのバックヤードの壁すらもなくなっていて、トンネルのようなものができていた。付近にはコンクリート片が散らばり、土と泥がトンネルからあふれ出ている。

トンネルの大きさは縦横二メートル程度で、ずっと奥まで続いている。

途中でカーブをしているせいでその先が見えない。

恐らくこのトンネルを作ったナニカがこの先にいるのだろう。

嫌な臭いはそこまで強くない、このナニカが近くにいることはなさそうだ。

まだ地下には手付かずの食料品が残っていた。

電気が生きていたおかげで、冷凍食品も無事だったのありがたい。

バックヤードにあった野菜の入っていたであろうダンボールが、グチャグチャにされて中身がなくなっていた。



ナニカがここを荒らし尽くす前に、全て上へと運んでしまおう。

中央エスカレーターまで戻り、上りの電源を入れる。

カートは上が大きい籠のタイプだったので、下に手提げの籠を一つ乗せ、まずは冷凍食品から集めることにする、

冷凍野菜のブロツコリーとコーン、ミックスのやつと里芋だけで、籠が両方とも溢れそうなくらいにいっぱいになってしまった。

エスカレーターに戻りカートを無理やり乗せる。

俺が先に乗り、後輪だけ乗せて取っ手を掴んで押さえていたら意外と普通にいった。

これらはエレベーターであとでまとめて運んでしまおう。

とりあえずは広くなっているとところに置いておく。

カートは下にたくさんあった。

食料品を集めることを優先して行動しよう。

ひたすらカートで冷凍食品を運搬していたら、全部で十八台になっていた。

まだまだカートはいっぱいあるが、いちいち上に上げてたんじゃ効率が悪い。

なにか良い手はないだろうか？

籠だけをエスカレーターで上げてしまえば良いのでは？

これは良い考えだ。

物資を下に集めるだけ集めてこよう。

このカートは上に二つ、下に一つ籠を乗せられる。

一度に三つ籠を集められるし、いちいち俺が上に行かなくても済むのでかなり効率があがるはずだ。

夢中になつて物資を集めていたらすごい数になつた。

アイスの籠が全部で八籠、これはメスが喜ぶだろう。

調味料だけで十二籠もある。

チョコや日持ちのしそうな甘味が十六籠、これもメスが喜びそうだ。

嬉しいのが冷凍肉が大量にあつたことか。

牛、鶏、豚、羊。ウインナーやベーコンに肉団子まであつた。

籠にして二十五籠。

これだけで生きていけそうだ。

エスカレーター前が大量の籠で大変な事になつてしまつたので、試しに上げてみる。籠はエスカレーターの床板にギリギリ乗つたので何とかいけると思う。

ゆつくりとあがつていく籠を下から見守っていると、鈴鹿が現れて籠を受け取つた。

「おー、肉だ。これ運べば良いの？」

これは助かる。

そうか、二人にも手伝ってもらおう。

とりあえず今は地下に危険がなさそうだし、籠を乗せるのと受け取るのをやってもらえば更に効率上がるぞ。

「ありがとう。できれば珠子を呼んできて、二人でこれをやってもらいたいんだけど」

「おー、たまちゃんもカートをやつをレストランの冷蔵庫にしまいに行つてるよ」

「助かる。カート結構あるだろ？」

「さっきのが最後だったからもう帰つてくると思うよ。とりあえず上に上げれば良いの？」

「ああ、すまん、助かる。俺は集めてくるから」

「はーい。今夜はごちそうだね、これ」

嬉しそうな鈴鹿は冷凍食品の中にチーズケーキがあるのを知らないようだ。

あとで見せて驚かせてやろう。

こういつたサプライズ精神が、ハーレムを維持していく秘訣なのかもしれない。

その後も米、粉物、乾麺、乾物、缶詰、飲料、酒と物資を集めていった。

チーズも熟成されているだけで食べられると思うので全部持つていく。

コーンフレークやスナック菓子も、賞味期限が切れているが封が開いていなければ食べられるだろう、と残さず集めた。

ふと時計を見れば午後五時ちようどになるところだった。

もう夜になるのか。だいぶ時間がかかった。

鈴鹿が最後の籠を上<sup>ねぐら</sup>に送ったのを見て、<sup>ねぐら</sup>「労いの言葉をかける。

「お疲れさま、疲れたろう。助かったよ」

「別に良いって。私も食べるものだし、何より労働の後のご飯は絶対美味しいしね」

「俺は焼くくらいしか料理ができないぞ？　鈴鹿が作ってくれるのか？」

「聞いて驚け。たまちゃん<sup>たまちゃん</sup>は料理の専門学校に通ってたんだってさ」

「なんだって？　それはもしかして、最高じゃないか」

「最高に決まってんじゃない。ほら、早く行こー。冷凍品以外は放置で良いでしょ。もう

お腹空いたー」

「チーズも冷蔵しておきたいな。これ以上熟成したら食べられるかわからないし」

「チーズ良いねえ。ピッツアパーティ？」

「ピザか。食べたいな。」

「ていうかさ、意外と少なかったね、物資。倉庫とかも見たんでしょ？」

「倉庫なんてあるのか？」

「あるでしょ。大きな冷凍庫とか。あれ、もしかして商品売り場だけ見てたの？　肉と

か魚とか切って売ってるんだから、バックヤードの冷凍庫にいっぱいあるはずだよ」

知らなかった。

ちよつと確認しに行つてみるか。

「鈴鹿、ちよつと先に戻つていてくれ。俺はちよつと見てくる」

「そうだね。でも倉庫のやつはまた明日にしようよ。お腹空いたし」

「ああ、すぐ戻る」

精肉売り場のバックヤードには大きな冷凍庫があつた。

中を見ると、大きな塊肉がいくつも入つていた。

これは、持つて帰りたい……。

二つの籠に塊肉を詰め込み両手で持ち上げると、籠の持ち手が壊れそうになつてしまつたので重ねて抱えるようにして持った。

これだけの肉があれば当分食うのに困らないだろう。

意気揚々と歩いていくと、急に背筋がぞくりとした。

嫌な臭いが濃くなつていく。

ナニカが戻つてきたのだ。

地響きのような獣の咆哮が、遠くから響いてきた。

籠を放り投げて走り出す。

後ろからは柵を壊しているのか破壊音が聞こえる。

エスカレーター前には鈴鹿がいた。

「上に戻れ！ 早く！」

「わ、わかった！」

どんと破壊音が近づいてくる。

エスカレーターに足をかける。

三段飛ばしで駆け上がる。

鈴鹿に追いついたので抱き上げて走る。

あと数段で一階に戻れるというところで激しい揺れを感じ、たたらを踏んでしまう。

階下からは獣の咆哮。

エスカレーターが壊されている破壊音がする。

なんとか一階に戻り、鈴鹿を下ろし防火シャッターのスイッチを入れる。

ゆっくりと閉まっていくシャッターの隙間から、エスカレーターの床板が弾け飛び崩落していくのが見えた。

俺たちは誰も言葉を発することができず、ただ呆然と獣の叫ぶ声を聞いていた。

## 第十八話 人として

階下からすさまじい破壊音が響くと、防火シャッターが波打つように揺れ出した。

「まさか登つてくる気!？」

「な、何が起きてるんですか!？」

「シッ。静かに」

喚く鈴鹿と珠子を引き寄せ、いつでも逃げられるようにしておく。

あまり大声で騒いで、下に居るナニカを刺激してしまうのは良くない。

二人は無言で首を縦に振った。

エスカレーターの防火シャッターは手すり部分に連結している。

そのシャッターが揺れているということは、手すり部分まで崩落しているということだ。

であるならば、この後何が起きるか想像がつく。

「少し離れるぞ」

俺たちが距離を置いてすぐに、轟音と共にシャッターが剥がれ落ちていった。

息を呑み、その様子を見る。

『ブギイイイ!!』

獣の咆哮が響いた。

二人をその場に留め、エスカレーターが崩落した穴から階下を覗く。

シャッターやエスカレーターの残骸の下から軽自動車くらいはある猪が現れた。

天を穿つような四本の巨大な牙を振り回し、辺りの物をなぎ払っている。

猪はエスカレーターの残骸へ執拗に攻撃を仕掛けていた。

牙で突き、かち上げて、蹄で踏みつける。

自分の上に落ちてきたことがさうとう許せなかったようで、怒りの声を上げながらの攻撃はしばらく続いた。

数分もするとようやく怒りが収まったのか、猪は『ブゴ』と短く何度か鳴き、トンネルのある方へと戻っていった。

「今の猪？ 私初めて見た」

「あんなに大きいんですね……」

いつのまにか俺の横に来て穴の下の様子を見ていた二人がそう述べた。

俺も猪を見るのは初めてだが、あんなに大きいはずがない。

なにかしらの原因があつて、あそこまでの巨体を手に入れたのだろう。

鈴鹿の言っていた三階建てと同じくらい大きい熊の話も、あながち間違いではないの



かもしれない。

「そういえば野犬も乗用車くらいの大きさがあつたな」

「ええ！ そんな大きいの？」

「ああ。遠くで見えているだけでこちらには来なかったが。不思議と敵意は感じなかったな」

「でも噛まれたら危ないですよね……？」

「まあ危ないというか、死ぬだろうな」

「し、死ぬ……」

出会えば即死しかねない獣が外をうろついているのだ。

珠子の顔が蒼白になってしまうのも仕方がない。

「とりあえずここは安全だろう。さっきのヤツが五メートルくらい垂直ジャンプができたら話は別だが」

「流石にそれは無理でしょ。ていうか早く片付けないと。暖房効いてるから冷凍のやつ溶けちゃうよ」

「せっかく集めた物がダメになるのは悲しいしな。片付けるか」

百はくだらない数の籠がエスカレーターの周辺に並べられている。

さっきの猪に荒らされる前に集めることができず、本当に良かった。

これだけあれば、ハーレム要員が増えても余裕で養っていける。

「あ、じゃあ私と恭平で片付けするからさ、たまちゃんのご飯作つといてよ。私お腹空いた」

「そうだな。珠子、任せても良いか?」

「は、はい! 任せてください!」

珠子がはりきった表情で頷いた。

料理学校に通っていたのなら、さぞかし美味しい飯が食えそうだ。

エレベーターにはカートが四つ乗る。

一往復で籠が十二個は片付けられる。

十往復もすればすぐに片付きそうだ。

九階にあるイタリアンレストランの大型冷凍庫は二つあり、一つは既にいっぱいになっていた。

レンジ調理のものや冷凍野菜、アイスやピザやうどんにそばなど。

冷凍食品がこれだけあれば、一年は余裕で食べていけそうだ。

レストランの厨房は作業台やカウンターの下にも冷蔵庫があり、収納スペースは多そうだった。

珠子が手際よくなにやら料理を作っている横で、俺たちはひたすら運搬作業をした。

ある程度冷凍肉や冷凍魚が集まると、今度は収納をしなければいなくなり、分担して作業をすることに。

冷凍庫に詰める作業を鈴鹿に任せ、俺は籠の運搬をする。

冷凍肉や冷凍魚は全部で四十籠近くあり、かなりの量になった。

運搬の途中で九階にある中華レストランの冷凍庫へ寄り、冷凍ホールケーキを隠しておく。

あとでサブライズをするのだ。

チーズケーキは食後のデザートですぐに食べられるように、冷凍庫から出して解凍しておく。

鈴鹿は喜んでくれるだろうか。

冷凍品の運搬が終われば、次は米や小麦などの冷蔵庫に入れない物だ。

一階にはまだまだ籠が残っている。

とりあえず全て運んでしまおう。

カートに乗せたままの状態でレストランの外側に並べておけば、あとは自由にやってくれるだろう。

それにしても、もの凄いや量の物資だ。

まだまだバックヤードに物資はある。

きつとまた集めるのは大変だと思うが、とてもありがたいのも事実だ。

あの猪が居ない隙に集めてしまいたいが、そう簡単にはいかないか？

俺が集めた物資の籠は、合計で三百を超えるほどあった。

午前中から夕方までひたすら籠に詰める作業をやっていたのだから、それくらいの量にはなるか。

籠を全部運び終えたタイミングで、珠子から「ご飯ができましたよ」と声がかかった。

イタリアンレストランのソファ席には、白米に味噌汁、サバの味噌煮に豚のしょうが焼きがあった。

いっそのこと暴力的とも言えるくらい良い匂いが、俺の鼻と脳と胃をガツンと殴りつけてくる。

「お、おお、これは、すごい」

「でっしょー！ たまちゃん料理の腕はプロだよ、プロ。味見したけどめっちゃ美味しかったもん」

「あ、味見？ ずるいぞ……」

「至近距離で良い匂い嗅がされるだけとか、なんの拷問だよって。あ、でもメイン料理は食べてないよ？ 味噌汁だけ」

「ほら、お二人とも、冷める前に食べてしましましょう。今日はお肉とお魚どちらが良い

のかわからなくて両方作っちゃいました」

「ありがたい、これはありがたい……。いただきます」

「いただきますーす！ 久しぶりの、お肉！」

サバは柔らかく煮込まれており、箸で簡単に身がほぐれた。

白米の上に乗せ、その純白を味噌の茶色で染めていく。

サバの身だけを口に入れれば、甘じよっぱい味が広がり、生姜や酒の風味が微かにしつつ、濃厚な旨みが広がっていく。

そこへ汁を吸って茶色く染まった米をかきこめば「ああ、これだよ」と勝手に言葉が出てくる。

「美味しい。美味しいとしか言えない。珠子、手を」

「手？ 手ですか？ こうで良いですか？」

出された右手をしっかりと両手で握る。

尊いものを壊さないように優しく握り、神仏を拝むかのように頭を下げる。

神さま、仏さま、珠子さま、だ。

「ありがとう。本当にありがとう。食事をこんなに美味しいと感じたのは本当に久しぶりだ」

「そんな、大げさですよ。それにこの食料は恭平さんが集めてくれたんですから」

「いや、料理を作ってくれた珠子のおかげだ。見ろ、鈴鹿を」

「え？ 鈴鹿さんですか？ ってどうしたんですか!?」

鈴鹿は目を閉じ、涙を流しながら咀嚼をしていた。

手には豚のしょうが焼きの入った皿が持たれている。

「う、うう……。美味しい……。美味しいよお……」

「鈴鹿さん、ほら、泣かないで食べましょう?」

「食べてるよお……。美味しいよお……。 お肉美味しいい……。」

泣きながらも鈴鹿の箸は止まらない。

そんなのがつついてバクバク食べるとは、なんて勿体無い真似を。

俺はサバを大事に大事に食べていく。

一口ずつ噛み締めて食べるのだ。

「うう、足りないよお……。 恭平お肉食べてないから私が食べるね……」

「おい待てこら。鈴鹿お前それをやったら戦争だぞ」

「食べてないんだから良いじゃん! 冷める前に食べてってお肉ちゃんが言ってるんだ

よー! いただきー!」

「ああ! お前! なんてことすんだ! 二枚も持っていきやがって! 返せ!」

「あはっ、美味しーい!」

「ちくしょう！ 戦争開始だ！ 俺はサバを貰うからな！」

「あ、うん。食べて。私サバ苦手なんだ」

「ええ？ こんなに美味しいのに。サバを食べないなんて、人生の半分は損してると言っても過言じゃないぞ」

「損してないから大丈夫」

サバは完全栄養食品なのに。

これさえ食べていれば健康優良児間違いないというのに。

まったく、理解に苦しむ。

「お二人とも、食事中は静かに行儀良く食べましょうね」

「あっはい」

「すません」

笑顔で圧力をかけてくる珠子に諭され、俺と鈴鹿は大人しく食事を再開した。

鈴鹿がサバを皿ごとくれたので、俺もしょうが焼きを全部あげることによって戦争は終わった。

少しは食べたいと思っていたしょうが焼きは、珠子が一切れくれたのでありがたかったです。

こちららもサバと同様もの凄く美味しく、ご飯に良く合う素晴らしい味だった。

味噌汁も具が乾燥わかめと麩<sup>ぶ</sup>だけだったが、出汁のとり方が上手いのかとても美味しくいただけた。

食事を終え食器を片したあと、珠子の注いでくれた緑茶を飲みつつまったりとしていた。

サプライズのチーズケーキを取りに行くため、二人に待っていてくれと告げ中華レストランへ向かった。

ケーキは紙箱の中に入っているのになんなんなのかはわからないが、常温で二時間も放置しておけば解凍されているだろう。

「ほら、鈴鹿。食べたいって言ってたものだ」

「ん？ なにこれ……って、『OTL』のチーズケーキじゃん！ 恭平、どうしたの、これ!？」

「下で見つけたんだ。驚かそうと思ってな。隠してた」

「なんで隠してたの！ 開けて良い？」

「ああ、好きにしろ」

鈴鹿が割れ物でも触るかのように、丁寧に紙箱を開けていく。

ホールのチーズケーキは上下で違う色をしていた。

「ドゥーブルフロマージュだあ！」



「わあ、美味しそうです。飲み物は紅茶で良いですかね？」

「あ、俺の分はいい。二人で分けてくれ」

「恭平！　なんで食べないの!?　チーズケーキだよ!?!」

わかつてはいるけど、チーズケーキだからなんなんだろう？

「俺は甘いものはそこまで得意じゃないから。美味しいものは美味しいと思える人が食べれば良いんだ」

「でも、私が美味しいと思うものを、恭平にも美味しいと思ってもらいたいよ?」

「じゃあ鈴鹿、お前サバ食うか?　俺が美味しいと思ってるものだぞ」

「ああ、うん、無理。じゃあチーズケーキ食べるね。たまちゃん!　一緒に食べよう!」

「ふふ、わかりました。私、紅茶用意してきますね」

「ゆっくり食べると良い。俺は風呂に入る」

「いてらー。チーズケーキ、チーズケーキ!」

きつと俺にとつてのサバが、鈴鹿にとつてのチーズケーキなのだろう。

珠子から軽く説明を受け、風呂へと向かう。

先に四階の紳士服売り場で下着や寝間着を回収していく。

新品の物も多くあり、まだまだ洋服には余裕がありそうだった。

六階のショールームの一つに風呂はあった。

風呂と言っても目隠しで囲われた浴槽が二つ並んでいるだけの物だ。

一つはお湯が張られていて、もう一つにはお湯が張られておらず、ホテルなどにある防水カーテンが取り付けられていた。

この空の浴槽で体を洗い、それからお湯の張られている方に浸かるのだと珠子から教わった。

浴槽は少し高いところへ設置されていて、その下から出ている排水管がトイレまで延びていたので、床が水浸しになることはなさそうだった。

体と髪を洗い、お湯の張られている浴槽へ体を沈める。

浴槽脇には電気給湯器が設置されていて、浴槽内の湯は常に温かい温度に設定されている。

湯に浸かっていると、体から疲れがじんわりと溶け出ていくような錯覚を覚える。

いろいろな考えが頭の中に浮かんでくる。

それは今日の出来事が大半を占めていた。

あの猪は邪魔だ。

地下にはまだまだ物資がある。

それらの回収作業中にアレと遭遇したら死にかねない。

何とかして排除がしたい。

ではどうするか？

エスカレーター穴の穴を使った地の利を活用するべきだ。

上から物を落とす？

エスカレーターやシャッターの下敷きになっても平気だったんだ。

俺が投げ落とせる物程度じゃ傷一つ付きやしないだろう。

鋭利な刃物を落とす、とかか？

マキシーンの持っていたクロスボウが欲しい。

あれはハンティング用だと言っていたし、猪くらいは狩れそうだ。

通常サイズに限るが……。

では、矢も大きいサイズにしてしまえばどうだ？

むしろ、槍……。投げ槍？

投げ槍で上から一方的に攻撃してしまえば良いんじゃないか？

原始時代では投げ槍である猪より大きなマンモスを狩っていたのだ。

きつと俺にもできる。

そうとなれば投げ槍作りか。

固い木を削る？ どう作れば良いんだ？

確か下の階に本屋が入っていた。  
作り方の載った本でも探してみるか。

風呂からあがり寝間着に着替えて本屋へ向かう。

今まで着ていた服は籠に入れておいて置けば、明日珠子が洗ってくれるらしい。

珠子はなんでもできて、本当に偉いと思った。

俺は洗濯機の使い方すらもわからないから。

本屋では『原始的武器の作りかた！』なる、俺のニーズにばっちり応えてくれそうな本が見つかった。

これを持ち九階へ戻る。

レストランでは鈴鹿と珠子が仲良く話している声が聞こえた。

二人のもとへむかうと「おかえり」と迎えられたので「ただいま」と返しておく。

「物資の片付けはまた明日にして今日はもう寝るまで自由時間にしても良いか？」

「え、まだ片付ける気でしたの？ 私は夕飯までで終わりかと思ってた」

「自由時間で良いと思いますよ」

「そうか。あ、そういえばまだ寝るところを用意してなかったな」

「もう終わらせてありますよ。ベッドを仕切りで囲っただけですけど、でもお布団とか

のベッドメイキングは終わらせてありますので」

「そ、そうか。何から何まですまない。助かる」

珠子の家事能力はとて高くて頼りになる。

鈴鹿と珠子はもうしばらくここに居るそうなので、先に八階へと戻った。

安楽椅子とサイドテーブルをベランダに出し、物資の中にあつたスコッチウイスキーとグラスをテーブルに置く。

寝間着だけじゃ寒いだろうから毛布を用意してくつろぎスペースの完成だ。

スコッチをグラスに注ぎ、ストレートで一口。

スモーキーな香りが鼻から抜けていく。

煙草が吸いたくなる酒だ。

初めて飲んだが嫌いじゃない。

安楽椅子に深く腰かけ本を開く。

毛布は下半身を覆うようにしている。

オットマンに足を乗せ、片手で本を開き、もう片方の手でスコッチを飲む。

なんだか、とても優雅なことをしている気分になる。

半月だが月明かりはそれなりにある。

月の光を浴びていると、とてもリラックスできるような気がした。

酒に酔っているのか、この状況に酔っているのかはわからないが、リラックスができていいるのだからそれで良いのだ。

月明かり程度の明るさでも俺の眼なら本の文字が読める。

投げ槍は投げ槍器というもの使うと、より安定して強く飛ばすことができるそうだ。

見た目は返しの付いた木の棒で、この返しに投げ槍の尻にあけた窪みを引つ掛けて投げる。

これは練習しないと当てるのは難しいだろう。

ベランダから見える景色は暗く、そして静かだった。

人がこの地球の支配者じゃなくなるだけで、こうも変わってしまうものなのか。

闇と静寂に包まれた世界は、人間を拒んでいるのだろうか。

酒と月のせいで、そんなセンチメンタルなことを考えてしまう。

遠くから野犬の遠吠えが聞こえた。

たくさんさんの遠吠えの声は、なんだかもの悲しく聞こえる。

まるで「どこにいるの？ 帰っておいで」と言っているような声だった。

仲間には訴えかけるようなその声を聞いていると、物悲しい反面、心地よくも感じた。

野犬の群れにも家族や絆という物があるのだろうか。

あの白く巨大な犬も、妻や子が居て、それを守ろうとしているのだろうか。

猪だつてそうだ。

子供が居ないとも限らない。

ただ邪魔だからと殺そうとして良いのか？

スコツチをグラス一杯飲み干す頃には結論が出た。

世界の理は弱肉強食へと変わってしまった。

殺せるものが殺し、殺されたものは食われるだけだ。

だから俺が猪を殺すことは変わらない。

俺を殺そうとしたのだ。

殺されても文句は言えないだろう。

酒のせい、か、頭の中が物騒な考えに支配されていく。

ただ、この世界ではこの考え方のほうが生きやすいのは間違いない。

しかし沸々と湧き上がる獣性に身も心も委ねてしまつては、それこそただの獣に成り下がってしまうだろう。

喧嘩を売られたから殺すなんて、そんなものは獣以下の何かだ。

俺は人間で、決して化け物では無い。

だから俺は人として生きるために猪を狩らなければいけない。

## 第十九話 幼獣

投げ槍の材料には、家具売り場にあったメタルラックの支柱を使うことにした。

生活雑貨売り場に大量にあった包丁を、ダクトテープで支柱の先端に固定すれば簡単に作る事ができた。

補助具である投げ槍器を作ろうとしてみたが、木を上手く削ることができずに断念した。

先端に取り付ける包丁の数を変えてみていろいろと試してみた。

二本の包丁の刃を外側にして支柱に取り付けた二股タイプ。

三本の包丁の内、一本だけ突出させるようにして取り付けたトライデントタイプ。

四本の包丁を二股タイプのように支柱の四方に取り付けたタイプ。

この四本のタイプは、『機動騎士カンナム』に出てきた敵ロボット『スコック』の腕の四本爪バージョンのようだった。

『スコック』の爪は、味方ロボットの『シム』の腹を貫いている絵がとても有名だ。

俺も猪の腹を貫くことができるように、この槍を『スコック』と呼ぶことにした。

キッズルームにあったウレタンのマットを的にして、投擲練習をする。



どれぐらい貫くかで威力もわかるだろう。

三十センチのマットを五枚並べて、まずは包丁一本のスタンダードタイプ。

四枚を貫通し五枚目に突き刺さって止まっていた。

これは中々の威力だ。

二股タイプも四枚、トライデントタイプは三枚貫通できた。

そしてスコックだが、二枚という結果に終わった。

しかし勘違いをしてはいけない。

貫通枚数は少ないが、マットの風穴の開き具合は一番だ。

猪の腹を大きく裂き、血や臓物をこぼすのに特化しているのがスコックなのだ。

「良いぞ、スコック。お前が一番だ」

俺はスコックに期待を込め、赤いペンキで塗装した。

よくわからないが赤くすると、強くなるとか早くなるとか偉い人が言っていたから、俺もそれに従うのだ。

猪の行動パターンを確認するのに三日ほど時間を要した。

ヤツは決まって朝の六時に地下を出て、夕方五時に帰ってくる。

あのトンネルは地下駐車場に通じていたようで、駐車場へ続くスロープから上がって

くる姿を窓の外から確認できた。

夜の間は地下のどこかで睡眠をとっているのだろう。

何とかしてエスカレーターの下にまで誘導しなければいけない。

日中のうちに何かしらの細工を仕掛けてしまわないと、投げ槍で仕留めるのは難しそうだ。

幸いなことに一度地下を出てしまえば夕方までは戻らない。

下見をして、策を練ってみよう。

地下に通じる階段を下りエスカレーターへと向かう。

猪の倒した柵の残骸がエスカレーターからトンネルまで、折り重なるようにして道を作っていた。

この柵を使って何かしらの罠を仕掛けてみるか？

まずは攻撃を仕掛けた際に逃げ道をなくすため、エスカレーター周りを柵で塞いでしまおう。

柵は薄い鉄板で作られている。

これを積み重ねたところで大したバリケードにはならなそうだ。

それでもやらないよりは良いだろう。

材料は猪がたくさん用意してくれた。

カートに鉄板や枠を積み、エスカレーター周りにバリケードを作っていく。

薄い板とひしゃげた枠でも、積み重ねればそれなりな物にはなる。

進捗しんちよく状況は半分ほど。

カートで往復を繰り返して、足元に転がる鉄板を集めていく。

「お、これは……」

鉄板の下に隠れるようにして落ちていた肉の塊を見つけた。

俺が猪から逃げるために放り投げたものうちのひとつだ。

あの時はカチカチに凍っていたが、今はすっかり解凍されていた。

衛生状態が気になるところだが腐ってはいなさうなので、珠子に食べられるかどうか

確認してもらおう。

柵の下から肉を拾い上げた。

「ガウウー」（にくー！）

「うわっ!？」

俺の持ち上げた肉の塊に、白い毛玉が飛びついてきて、驚き手を離す。

床に落ちた肉にしがみつく様にして食べているそいつは、白いふわふわの毛皮の子

犬だった。

以前見たことのある、シベリアンハスキーの子犬にそっくりだ。

「なんだお前。どこから迷い込んだんだ？ トンネルから来たのか？」

「ハグウ、ググウ」（おいし、おいし）

「はは、腹減ってたのか。ゆっくり食べな」

小さい子犬が自分の体程もある塊肉に無我夢中で齧りつく様は、見ていだけで癒される。

しばらくその様子を眺めていると、ある程度腹が満たされたのか子犬がこちらに気がついた。

首を傾げて不思議そうにこちらを見る姿がなんとも可愛らしい。

「プププ」（だれ？）

「誰と言われてもなあ……」

「プププ」（なかま？）

子犬は首を右に左に傾げては、鼻を「プププ」と鳴らす。

「仲間じゃあないな」

「プググ……グウウ！」（じゃあてき……う？ てきー）

突如、臨戦態勢になる白毛玉に対し、両手をあげて答える。

「敵じゃないよ。ほら、安心して」

「ププププ」（じゃあなかま）

子犬が俺の足の匂いを嗅ぎにきたので、無抵抗で嗅がせておく。

「プププク」（おおかみのおい？）

「狼？ 俺は人間だよ？」

「プクウ」（ひとのおい？）

「ああ、そうだよ。俺は人だ」

「ププググ……ウアン！」（おおかみのひと……おおかみのひとだ！）

子犬は目を輝かせて尻尾を振りながらこちらを見上げている。

そんなに獣臭いだろうか？

自分の匂いを嗅いでみるが、ここは猪の臭いが充満していてよくわからなかった。

「もう少ししたら夕方になる。ここに居ると危ないよ。お父さんとお母さんは居ないのか？」

「クウウウ、ウルルウ」（おとさん、おかさん、まいご）

「迷子？ 迷子はお前だと思うぞ。ああ、毎晩遠吠えしてたのはお前を探してたのか。ちゃんと返事したか？」

「プグググ……」（とおぼえ、うまくいかない……）

「どんなだよ。ちよつとやってみな」

「アウ、アオウ、アアウオン」

「練習あるのみだな。ここに居ると猪が戻ってくるから、一緒に上に行くか？」  
「ブググ」（あいつこわい）

「そっか。じゃあ上に行こう。その肉も持っていくから、あとでゆつくり食べるんだぞ」  
「ウアン！」（にくー！）

肉を持ち上げて歩き出すと、俺の後ろをちよこちよこことついてきた。

階段に差し掛かると、一段目に前足を乗せた子犬がそのまま後ろにひっくり返ってしまふ。

「おいおい、大丈夫か？」

「プウ……」（のぼれない……）

「仕方ないな」

子犬を小脇に抱え、階段を上っていく。

「ウウオウ」（おとさんとおなじくらいある）

「お前のお父さんでかいな」

以前見たことのある、あの白い野犬がこの子犬の親なのかもしれない。

こんなにコロコロとした毛玉が、いつかあれくらい大きな姿に変わってしまうのか。

一階に着いて子犬を下ろしてやると、物珍しそうに辺りの匂いを嗅ぎながら歩き回っていた。

「おい、そつちじゃないぞ。こつちにおいで」

「アウー！」（おいてかないで！）

エレベーターホールへ続く防火扉を潜りエレベーターを呼ぶ。

開く扉を見て、子犬が固まって動かなくなってしまった。

「ほら、おいで。中入りな」

「グウウ……」（へんなの……）

どうやらエレベーターを怖がっているらしい。

どれだけ呼んでも中に入ろうとしない子犬に肉を見せつけるようにして振ると。

「ガウウー！」（にくー！）

「よし、良い子だ」

簡単に釣れた子犬にそのまま肉を齧らせ、八階のボタンを押す。

しばらくして八階に到着すると、エレベーターの電子音に驚いた子犬が肉を口から離した。

その隙に肉を拾い上げて、子犬をエレベーターの外に誘導する。

防火扉を抜けて部屋へと入る。

ソファに座っている鈴鹿と珠子の姿が見えたので、そちらへと向かう。

生肉を掴んだままなのもどうかと思うので、子犬の手が——前足か——届かないとこ

ろに置いていく。

子犬はきよろきよろしながらもついてきた。

「あ、恭平タイミング遅かったね。もう食べ終わっちゃったよ」

「ん？ まだ夕飯じゃないだろ？ 何を食べていたんだ？」

「鈴鹿さんがきな粉餅を食べたいと言っていたので、おやつで作ってみたんですよ」

「そうか。俺も食いたかったな」

テーブルの上には既に餅が無くなりきな粉だけになった皿が置かれていた。

ほのかに香るきな粉の良い匂いが、腹を刺激する。

「アオンー！」（いいにおい！）

「あ、こちら」

テーブルに飛びついた子犬が皿をひっくり返し、頭からきな粉をかぶってしまった。

粉まみれになりながらきよんとしている子犬を抱き上げ、きな粉を食べないように

させた。

犬の体に悪いものが入っているかもしれないので、顔周りについた粉も払っておく。

「きよ、きよ、恭平！ なにその子どうしたの!？」

「うわあ、モフモフだあ！ 拾ったんですか？ 飼うんですか!？」

「いや、地下に迷い込んでしまったみたいでさ。猪に殺されないように少しだけ保護し



てやろうかなって」

「ええー！ 飼おうよ！ 外に出したら死んじやうよ！」

「そうですよ。こんなにモフモフで可愛いのに！」

「ププク」（だれ？）

二人の子犬を見る目が、とろけている。

俺に抱えられた子犬は、不思議そうに二人を見て首を傾げている。

その仕草で二人の顔はさらにとろけてしまった。

「じゃあ飼うなら名前付けなくちゃね！ シロ、コロ、マル？」

「もつと可愛い名前が良いですよ。ジュリア、エリザベス、ソフィア」

「いや、飼わないし名前をつけたら離れるとき辛くなるぞ？」

「離れないもん。ほら、恭平も名前考えてよ」

「そうですよ。名前は必要です」

「名前いるか？ んー、まあメスみたいだしきな粉まみれだから、きなこで良いんじゃないか？」

「きなこ！ 可愛いねえ。お前は今日からきなこだよ」

「きなこちゃん。よろしくね〜」

二人は俺の出した名前を気に入ったようで、しきりに子犬に「きなこ」と話かけてい

る。

当の子犬は、何が起きたのかわからないといった様子できよときよとしている。

「プググウ」（おろして）

「下ろしても良いけどその粉は食べちゃダメだぞ。お腹を壊すかもしれないからな」

「プププク」（おなかこわす？）

「ああ、食べたら死んじゃうかももしれない怖いものなんだ。食べないと約束するなら下ろしてやるぞ？」

「ワウウ」（たべない）

「よし、良い子だ」

子犬を床に下ろしてやると、きな粉の匂いを嗅ぎにいき、ぺろりと舐めたので慌てて抱き上げる。

「食べるんじやねえか！ 珠子、ちよつとこれ片付けてくれないか？」

「あ、はい。ちよつと待っててくださいね」

子犬は俺の腕の中で珠子が掃除している様子をジッと見ている。

「プグウ」（おろして）

「掃除が終わるまでダメだ」

あとで腹が痛くなっても知らないからな。

珠子と鈴鹿が掃除を終わらせてくれたので子犬を下ろすと、きな粉が落ちていたところの匂いをしきりに嗅いでいた。

「きなこちゃん、ダメですよ〜」

「お腹空いてるのかな？」

「ワププウ」（だれ？）

「鈴鹿と珠子だ。敵じゃないぞ」

「ググウ」（なかま？）

「ああ、俺の仲間だ」

子犬が二人の方へ歩いていき、匂いを嗅ぐ。

「プウプププ……ププププ」（ひとのにおい……なかま？）

「可愛いねえ。ほらおいでおいで」

「あ、ずるいです。きなこちゃんおいで〜」

「ワフウ」（なにかくれる？）

「何も貰えないぞ」

「グブブ」（おなかすいた）

「ああ、じゃあちよつと待ってる。肉持ってくるから」

「クアウ！」（にく！）

肉を取りに行こうとすると、鈴鹿が「ねえ、恭平さ」と話かけてきたので足を止める。  
「ん？ なんだ？」

「なんかさつきからきなこと話しているみたいだけど、言いたいことわかるの？」

「言いたいことつていうか、なんて言ってるかわかるな」

「ええ？ どうやって？」

「どうやって？ んー、なんとなくだな。耳の倒れ方とか顔の向け方、目の伏せ方、鼻の動き方、体の動き、あと鳴き声で、なんとなく」

「普通わかんなくない？ すごいね、恭平。動物関連の仕事でもしてたの？」

「いや、俺は普通のサラリーマンだったよ」

「意外ですね。もつと特別な何かをしているようなイメージでした」

特別な何かとは、いったいなんなのだろうか。

俺はどんなイメージを珠子に持たれているのだろうか。

「ああ、そうだ。珠子、犬のご飯つてどうしたら良いかわかるか？ 下に落ちていた塊肉はあげたんだが」

「ふふふ、実は昔、犬用の手作りご飯を研究していたことがあります。時間をいだければ作れますよ」

「本当か、じゃあそれで頼む。食いかけの塊肉はあそこにあるから使ってくれ。こいつ

は風呂にでも入れて洗ってやるか？ 粉まみれだ」

「あ、私がお風呂入れるよ。ねー、きなこちゃん。一緒に入ろうねー」

「プグプグ」（おなかすいた）

「じゃあ鈴鹿頼む。ほら、鈴鹿と一緒に行ってこい。風呂に入れてくれるってよ」

「ウアン！」（なにそれ！）

「水浴びだよ。やったことないか？」

「ワフ」（ない）

「そうか。きつと楽しいぞ。水で遊んで来い」

「ワウウ、アン！」（あそぶ？ いっぱいあそぶ！）

「ねえ恭平、なんて言ってるの？」

「水でいっぱい遊ぶってさ」

「えー、可愛いねー！ 一緒に遊ぼうねー」

「ワフウ」（あそぶ）

珠子は厨房へ、鈴鹿は子犬を連れて風呂へ向かった。

残された俺は時計を確認し、ペランダへと向かう。

時刻は夕方の四時半。夜行性と思わしき野犬たちもそろそろ起きている頃だろう。

ペランダから街全体に響くように、遠吠えの真似を試みるか。

子供は預かっている。無事だ。  
そんな意味を込めて、叫ぼう。

「ウオオオオオン!!」

しばらくすると、遠くの方で一つ二つと遠吠えがあがった。

その遠吠えは「待っている、そちらに行く」と言っているように聞こえたので、恐らく意思は伝わっていることだろう。

包丁とメタルラックの支柱はまだまだあったので、投げ槍を量産していく。

勿体無いので、包丁の数は複数でなく全て一本だ。

メタルラックの支柱も長さがいろいろあり、連結して伸ばすこともできたので、長いものから短いものまで作る。

今日は猪対策が終わらなかつたので狩りをする事ができなかつた。

明日、罾や仕掛けを作つて準備を終わらせて、それから狩りをするとなると明後日くらいになりそうだ。

「あ、ちよ、待ちなつて！ 恭平、捕まえて！」

「アン！」（おおかみのひと！）

「ん？ おお。どうした、つてびちよ濡れじゃないか」

「ワフ！ ワウアウ！」（たのしい！ おおかみのひともあそぶ！）

子犬は風呂での水浴びがとても楽しかったのか、嬉しそうにはしゃいでいた。

「もう、きなこつたら、急に暴れ出してお風呂から逃げちゃってさ。抱きかかえて戻そうとしてもすつごく暴れて、エスカレーターの階段上ろうとして転んで」

「そうだったか。俺のことを遊びに誘いに来たらしい……つてお前なんて格好でうろついでんだ。服を着ろ」

「あはっ。エロい？」

バスタオルを巻いただけの鈴鹿が、科（しな）を作つてポーズを決めた。

少し小さめのタオルからいろいろ見えてしまいそうだ。

「そういうのはいいから服を着ろ。風邪をひいても知らないぞ」

「へーいへい。相変わらずインポでいらつしやいますなあ。ねえ、恭平。据え膳食わぬはなんとやらつて知ってる？」

「知ってるけど気分じゃないんだよ。こいつは俺がやつておくから、お前も髪を乾かしておけよ」

「はいはい」

鈴鹿を見送り、足に絡みついてくる子犬を連れてタオルやドライヤーがまとめて置いてある場所まで行く。

そこには既に先客が居た。

「あーら、恭平さんじゃないの？ なに？ 私の裸でも見に来た？」

「ちげえよ。ドライヤーだ」

「そうなんだー。ムツツリなのかと思っちゃった」

裸を隠そうともしない鈴鹿がそう言ってくるが、俺は極力その姿を見ないようにしてドライヤーとタオルを取ると違う場所へと避難した。

クソ、ドライヤーとタオルは別の場所に置いておくべきだったな。

乾かしておけなんて偉そうに言っておいて、すぐに再会するなんて恥ずかしすぎる。少し考えればわかるだろうに。クソ。

暴れる子犬の水気をタオルでふき取り、ドライヤーをかけてしつかりと乾かしていくと、とんでもなくふわふわな白毛玉が完成した。

「ワグウー！」（あつかった！）

「すまんすまん。でもちゃんと乾かさないと具合が悪くなるかもしれないし、許してくれよ」

「グウルル……」（なにかたべたい……）

「ああ、夕飯できたかな？ 行ってみるか？」

「アンー！」（いく！）

九階のレストランへ行けば、既にテーブルの上に料理が並んでいて、夕飯の準備がも



う少しで完了するところだった

先にここで準備の手伝いをしていた鈴鹿が、俺を見ると「あら？」と言った。

「あらあら、ムツツリの恭平さんじゃない……って可愛いいい！ きなこすつごくふわっふわ！ こつちおいで！」

俺に軽口を叩こうとしたようだが、俺の足元に居る子犬を見て、その顔をとりとりにとろかしていた。

「ププグググ」（おなかすいた）

「恭平、なんて言ってるの？」

「腹減ったって」

「ちよつとたまちゃんにご飯貰ってくるー！」

鈴鹿が走って厨房に行くと、珠子と二人でいろいろと料理を持って帰ってきた。

「今日はいかとサトイモの煮物とひじきご飯です。きなこちゃんはハンバーグだよ。モフモフ度がアツプしたねー」

「ねえ、たまちゃん。床に置いた方が良いの？ テーブルで一緒に食べた方が良くない？」

「むむ。そうですねえ……」

「そうですねえじゃないだろ。床のほうが食べやすいんだから置いてやれよ」

「それもそつか。ほらきなこちゃん、ご飯だよー。おいでおいで」  
「ウアン！ ウオン！」（いいにおい！ たべたい！）

鈴鹿が持っているプレートには数種類の料理が乗っかっている。

犬用のほうが人間用より種類が多いという。

「インゲンとツナの混ぜご飯。じゃがいものお焼き。牛肉の粗挽きハンバーグにはブロッコリーとニンジンを入れてみました」

「普通に美味そうなんだが」

「ワフ、ガウガウ！」（おいし！ これおいし！）

「おう、すげえ勢いだ。美味しいってさ」

「良かったです！」

二人は子犬の食事風景を見るばかりでなかなか箸が進んでいなかった。

子犬は満腹になると、丸くなって眠ってしまった。

「ああ、そうだ。こいつの親と連絡が取れたから今夜中にいなくなるからな。覚悟はしておくように」

「えええええ！ 一緒に寝たいんだけど！」

「そうですよ！ ひどすぎます！」

「そもそもどうやって親と連絡取るの！ 犬でしょ！」

「そうですよ！　嘘はダメです！」

二人は想像以上に激しくブーイングをしてきた。

名前なんか付けて愛着を持つと離れるときに辛くなるのはわかっていただろうに。

「連絡は遠吠えでやった。最近、夜になるとずっと聞こえてたろ？　あれはこいつを探していたからだ。お前らは親と子を引き離れたままでも良いと言うのか？」

「そ、そうじゃないけどさ。でもやっぱり寂しいよ」

「たしかに家族は一緒に居るべきですね……」

二人が意気消沈となるのと同時に、窓を閉めていても聞こえるくらいすぐ近くから犬の遠吠えが聞こえた。

その声を聞くと子犬がガバリと体を起こす。

「アウン！」（おとさん！）

「ああ、お前のお父さんが迎えにきたぞ」

「アン！」（いく！）

「わかった、連れて行ってやるから。お前らはどうする？　見送るだろ？」

「うん。そうだね」

「行きます」

子犬を抱き上げエレベーターへと向かう。

「また来るんだよ」

「きなこちゃん、元気でね」

二人はずつと子犬に話掛けたり撫でたりをしていた。

エレベーターで一階まで行き、子犬を床に下ろしてやると元気に走り回る。

「ワウ！ アオン！」（おとさん！ どこ！）

「ちよつと待て。今開けてやるから。二人は万が一があるといけないから、この防火扉を開けたままここで待っててもらえるか？」

「うん。そうだね。わかった」

「うう、最後にきなこちゃんを撫でたかったです」

走り回っている子犬は既にこちらへ興味を失っているように見えるが、試すだけ試してみるか。

「おい、こつち来い！」

「ワフン」（なに？）

意外にも俺の声に子犬が寄って来た。

「さよならの挨拶をしようか」

「アン！」（またね！）

「うー、きなこー」

「あ、舐めてくれました……」

二人とも無事別れを済ませたので、正面玄関へと子犬を連れて向かう。

防火シャッターは脇に設置されたパネルで開閉が可能だ。

スイッチを押すとシャッターがゆっくりと上がっていく。

シャッターが開ききると、突如、目の前に白い大きな何かが降り立った。

「グルルル……」

そこには、鼻にしわを寄せ、牙を見せて唸る、明らかに怒りの表情をしている巨大な白い犬がいた。

## 第二十話 獣たち

「アオン！」（おとさん！）

子犬が嬉しそうに尻尾を振り、父らしき犬へと駆けていく。

そして父犬に前足でペしやりと潰され、押さえつけられてしまった。

「グルルル……！」（愚かな娘よ、勝手に出歩くなと何度言えはわかるのだ……！）

「アン！ ウアン！」（みんなごはんさがしてた！ きなこもここでみつけた！）

「ガアルルル！」（それは年長者の役目だ……！ 外には危険が沢山あると教えただろうが）

「キャン！」（でも！）

「ガア！」（言い訳は聞かぬ！）

「えーと、お父さん、その辺にしてあげたらどうでしょうか」

あまりにも子犬が不憫で、思わず口を挟んでしまった。

「ウウオウ。ウルル……」（ああ、狼の人。この度は我が子が迷惑をかけた。なんと詫  
びれば良いのか我にはわからぬ……）

「いえいえ、そんな、全然大丈夫ですよ。迷惑なんてかかってないので」

「ウォン……」（そう言ってもらえるとこちらとしては助かるのだが……）

「アン！ アオン！」（おとさん！ おもい！ はなして！）

「ガアアオ」（大人しくするのだ。こら、待て）

子犬は父犬の前足から逃げると、鈴鹿と珠子の方へと駆け出して行った。

「お、どうしたの、きなこ。お父さんに怒られて拗ねちゃったの？」

「きなこちゃん、ほらおいでー」

珠子に抱き上げられた子犬を父犬が険しい顔で見ている。

「おい、鈴鹿、珠子、そいつを連れてきてくれ。この犬は安全だ」

「うん、そうっぽいね。ていうか恭平、もしかして犬と普通に話してるの？」

「意思の疎通ができてるように聞こえましたけど」

「そうだな……」

たしかに今俺はこの父犬と自然な流れで会話をしていた。

子犬の言葉は仕草などから読み取ってなんとなくわかっていたが、父犬との会話では

正確に言語を理解できた。

ゾンビウイルスに一度感染したから動物の言葉がわかるようになったのか？

どちらにせよ、俺の有利になることには変わらない。

ならば有効活用していけば良いだけだ。

深くは考えなくても良い。

「まあ俺のことは良いだろう。ゾンビが寄り付かなかつたりするし、いろいろとわかっていないことが多いんだよ」

「それもそつか。あまり気にしちゃダメだね」

「そうですね。恭平さんには不思議な力があるというだけで充分です」

二人は一応の納得を見せてくれた。

説明しろと言われても俺自身がわかっていないから答えようがなかった。

あまり追求してこない二人で良かった。

「ええと、改めまして、俺は山下恭平。こちらは井上鈴鹿と細川珠子だ。あんたに名前はあるのか？」

父犬と向き合い自己紹介をすると、父犬ではなく珠子の腕の中にいる子犬が吠える。

「ウオン！ クアン！」（きなこはきなこ！ きなこのなまえ！）

「オウウ……。ウウオン」（きなこ……。良き名を貰えたようだ。我が名はシロ。かつて主人より賜った）

「恭平、なんて言ってるの？」

「その子犬は自分の名前がきなこだと叫んでる。で、お父さんはきなこの名前を褒めて、飼い主に貰った名前がシロだって言ってる」



「そんなことまで話せてるんですね。シロさん、よろしくお願いしますね」

「クウアオン」（狼の人の伴侶か。我が娘、きなこが世話になった）

「これはなんて？」

「あー、きなこが世話になったってさ」

「たいしたお世話なんかしてないって」

父犬のシロは二人に対しても穏やかな態度で接している。

もし野犬の群れのリーダーがシロであるのなら、ここで盟約を結ぶのは良い手だろう。

野犬の群れに襲われることが無くなれば、ほぼ敵はいなくなるようなものだ。

向こうがこちらを襲わない代わりに俺は何を出せる？

そういうえば子犬のきなこは飢えていたようだが、食料が足りていないのか？

ペット関連の商品がおいてあるところに、大量のドッグフードがあった。

これが取引材料になれば良いが。

「あー、シロ、聞きたいことがあるんだが」

「ウルル」（なんだ、狼の人よ）

「きなこがかなり腹を空かせていたようだったが、もしかして食いもんがないのか？」

「ガアウ……」（そうだ……。ヤツが来てからは鹿や猪が姿を消し、我らはまともに食

事を取れぬようになった)

「ヤツ? でかい猪か?」

「ガウ。ウウウオン」(違う。巨大な熊だ。ヤツは我らの縄張りに侵入し、獲物という獲物を狩りつくした)

「じゃあ縄張りから出てったのか?」

「ウルルル。オン」(我らの縄張りの近くには多くの人が居る場所がある。ヤツはそこを餌場としたらしく動く様子はない)

「人を食ってるのか?」

鈴鹿の言っていた赤カブトは本当に実在したのか。

三階建ての窓から顔を覗かすくらい大きい熊なんて、どうやったって勝て無そうだ。

二人が何の話をしているのかと聞いてきたので、かいつまんで説明する。

「だから言ったじゃん、化け物がいるって。ゾンビたちも夜になるとその熊に襲われるから避難するように逃げていくって聞いたよ、私」

「私もそれは聞きました。というよりも、ここに避難してきた人が熊に襲われてコミュニケーションが壊滅したって言っていました」

とんでもない化け物がいたもんだ。

それよりも、ゾンビが逃げていくところは俺と通ずるものがある。

ゾンビのヤツらは俺を脅威に感じているのか？

俺が一度ウイルスに感染して治ったことで、俺の中にある抗体を警戒しているとかか？

しかるべきところで俺の血を研究すれば、ゾンビの治療薬ができるかもしれないな。

まあ、こんな世界になってしまったんじや、研究施設などが存続できているわけもな  
いか。

俺のことはいい。熊について考えよう。

そもそもそんなに大きい熊は、この地球には存在しない。

ウイルスに感染しての突然変異という説が濃厚か？

俺もウイルスに感染して眼や耳が進化したように思う。

ゾンビだって死んだ人間が生き返って歩いているんだ。

突然変異、あり得る話だ。

今まであり得なかったことが、今や全てがあり得る可能性があるのだ。

そう考えて行動した方が良いだろう。

熊が空を飛び、火を噴き、分身する……さすがにこれはあり得ないな。

このシロも地下で会った猪も、きつとウイルスの影響で大きくなったのだろう。

人に感染すれば死者を蘇らせ、動物に感染すればその体を大きくする。

死者は更なる死者を増やそうとし、巨体になった獣は餌を求め人を狩る。

人を見限った神様が、人を根切りするためにばら撒いたと言われても信じられる。

「シロ、お前たちは全部でどれくらいいるんだ？」

「ウオウ」（私の群れは十頭いる。オスが五、メスが二、子が三だ）

「皆腹を空かせているんだよな？」

「グルル……」（そうだ……。ヤツが来てからは群れの者が痩せ衰えていく一方だ）

「そうか。じゃあ俺と取引をしないか？ 少なくともしばらくは腹をいっぱいにするこ  
とができるぞ」

「ガアウ」（詳しく聞こう、狼の人よ。もしや我らを群れに加えると言うのではないか  
？）

「群れに入ってくれるならそれが一番だけだな。入ってくれるのか？」

「ウオン」（群れの者が飢えぬのなら我は構わぬが、他の者は認めぬやも知れぬ）

「力を示せば良いのか？」

「ウオン。グウルル」（強きオスに従うのが我らの掟。狼の人ならば文句を言う愚か者  
は居ないと思うが）

さつきから気になっていたが、この狼の人とはなんなんだろうか？

そういうええきなこも出会ってすぐに狼の人と呼んできた。

やはり俺は獣くさいのか？

「すまん。一つ聞くが狼の人とはなんだ？」

「ガウ」（狼の匂いのする強き人。我らは狼の人と呼んでいる。）

「それが俺？」

「オーン」（そうだ）

よくわからない理由だった。

「ねえ恭平。私たちも何を話してるか聞きたいんだけど。シロときなが私たちと一緒に居るってことで良いの？」

「あー、えつとだな。シロの群れが全部で十頭。シロは俺の群れに入っても良いと言ってるが、仲間がなんて言うかわからないから力を示すべきって話」

「狼の人とはなんですか？」

「シロやきなが俺のことをそうやって呼ぶんだよ。狼の匂いがするんだと」

「へえ。不思議ですね。きながちゃん、恭平さんは狼の匂いするの？」

「アン！」（おおかみのひと！）

「そうなんだ〜」

珠子の腕に抱かれたきながが嬉しそうに吠えた。

珠子はきなこと話している気になっているが、微妙に噛み合っていない。

「それで、恭平はどうやって力を示すの？ 犬と取っ組み合いの喧嘩でもする？」

「そうだな。ちょうど猪を狩ろうと思っていたから、それを振る舞うのはどうだろう。それでいけるか、シロ？」

「オン。オオン」（それはありがたい。ここに居る猪は狼の人の所有物だ。それを狩り肉を分け与えれば文句を言う者も居ないだろう）

「じゃあ決まりだな。猪を狩る準備まだできていないんだが、シロたちが協力してくれれば今すぐにもでも狩れるぞ」

「ウオオン」（わかった。協力しよう）

シロが「今すぐ来い」と遠吠えをすると、了承の遠吠えが返ってくる。

「オン」（すぐにも我が群れの者が集まるだろう）

「そうか。助かるよ」

シロの群れは数分のうちに集まった。

「ワン」（来たぞ）

「オーン！」（獲物か!?)

「クオン」（狼の人在る）

「ウルル」（狼の人だ）

「ワオーン！」（狼の人!!）

白い犬や黒い犬が俺に殺到してきては鼻を押し付けてふんふんと匂いを嗅いでいる。何匹かは大きな尻尾をぶんぶんと振って喜びを表している。

俺はお前らの飼い主でもなんでもないので、どうしてそんなに懐いてくるのか。それにしても乗用車サイズの犬五匹に囲まれると迫力がもの凄い。

「おい、落ち着け。押すんじゃない。鼻を押し付けるな」

「こ、これは凄いね。毛の海みたい」

「もふもふ！ もふもふがいっぱいです！」

俺の近くに居た二人も巻き込まれる形で囲まれてしまった。

鈴鹿は少し引き気味だったが、珠子はとても嬉しそうだ。

「グル」（妹、良い匂いだ）

「ワン！」（本当だ！）

「フンフン」（変な匂い）

「アン！」（きなこ、いいにおい！）

きなことも久しぶりに会えたからか、犬たちはしばらく騒がしかった。

なかなか落ち着かない群れの犬たちをシロが一喝して黙らせ、ようやく話を始めることができた。

俺が猪を狩る協力を要請すると、群れの犬たちは喜んで協力すると言ってくれた。

「グルル……」（わざわざ力を示す必要はなかったようだな……）

「なんでこんなに懐かれているのか不思議でしょうがないな」

「オン。ウウウ」（狼の人の匂いから圧倒的強者の片鱗がうかがえるのだ。それに我らと似た匂いもする）

「良くわからないが、仲間だと思ってくれるならそれで良いよ」

犬たちには猪を地下から逃がさないようにしてもらおう役と、エスカレーター下に追い込む役をお願いした。

鈴鹿と珠子には安全な場所であるエレベーターホールへと避難してもらおう。

スコック含む大量の投げ槍を用意すれば準備は完了した。

猪を追い込む合図はシロに任せる。

「シロ、頼む」

「オン」（わかった）

エスカレーターの穴に向かってシロが大きく吠えようと、トンネルのある方から群れの犬たちの吠え声が聞こえてきた。

『ブゴオオオ！』

猪の怒ったような声が聞こえるのと同時に、一匹の犬がエスカレーターの穴から飛び出してきた。



「ワン！」（あいつ追ってきた！）

「ありがとう！」

犬の言うとおりに猪が勢い良く穴の下へ走り出てくる。

自分の巣を荒らす外敵を排除しようと追ってきたが、既にその姿が無く辺りを忙しく探している。

スコックを握る手に力が入る。

固そうな頭を狙ってもダメだ。

狙うなら腹。

柔らかい腹を搔つ捌き、臓物をこぼしてやるんだ。

猪が外敵を探そうと右に左に頭を向ける。

ちようど腹が俺の正面にある。

今だ。

スコックを全力で投擲。

猪の右腹に向かってスコックは飛んでいく。

だが猪がここで左に体を向けてしまい、スコックは狙った腹ではなく右の尻部分へと突き刺さった。

『ブギイイイ!!』

猪は走り出し柵で作ったバリケードへと衝突し、粉碎する。

「まずい、逃がすな！」

「ウオオオン!!」（囲め！）

シロが吠えると猪の周りに犬が集まり、逃がさないように吠え立てる。

怒り狂った猪が一匹へと狙いをつけて突進するが、犬はヒラリと身をかわす。

「くそ、動くなよ……」

二投目。

どこでも良いから当たれと投げたトライデントは、前足の肩らへんに突き刺さる。

これは浅かったようで、すぐに抜け落ちた。

それでも傷からは血があふれ出しているので、このまま時間が経てば経つほど弱るだろう。

『ブゴオオ!!』

猪は犬に突進し、避けられたがそのまま走ってトンネルの方へ行ってしまった。

「逃がすか！」

投げ槍を両手に持ち、地下駐車場への入り口へと走る。

スロープになっている駐車場の入り口から、大量の犬の吠え声と、猪の猛り狂う叫び声が聞こえてきた。

中から逃がすまいと犬たちが対処しているようだ。

こちらへ追い立てるようにシロへ頼むと、猪の声が大きくなってきた。

『ブギギイイ!!』

巨大な牙を振り回し、止められている自動車を押しつけて猪が現れた。

猪は俺を見つけると、真っ直ぐに突進をしてくる。

軽自動車くらいの大きさに思えたが、いざ対峙してみるとダンパーくらい迫力がある。

俺と猪の間には乗用車が一台ある。

両手の投げ槍を握り締め、駆け出す。

今からやることはタイミングが全てだ。

失敗は許されない。

全力疾走をして乗用車へ走り乗る。

踏み込んだ足裏のボンネットがへこんだ。

猪はもう目の前だ。

四本の牙で乗用車をかち上げようとしている。

乗用車の屋根に駆け上がるのと同時に、猪が乗用車を下から持ち上げるようにしてかち上げる。

その力を利用して、跳ぶ。

邪魔な車を破壊して走り去ろうとしている猪の背中に、上から狙いをつけ二本の槍を投げて突き刺す。

良いところに刺さったのか、柄の半分ほどまで埋まっている。  
やったか。

『ブギョオオオ!!』

だが猪は止まらず、その勢いを増して走っていく。

待ち構えていたシロが噛み付こうと飛び掛るが、牙を激しく振って噛み付かせない。  
スロープから群れの犬が飛び出てきては猪の後を追っていく。

くそ、俺も後を追わなければ。

百貨店入り口に置いてあった投げ槍を取りに向かい、中で待っていた鈴鹿にシャツターを閉めておくように伝えて走り出す。

遠くの方で猪と犬の声が聞こえる。

だいぶ距離が開いてしまった。

道には猪の血のあとが点々とついている。

犬の吠え声や匂いを追って猪を追いかけるが、距離は開く一方だ。

犬や猪の走る速度に人がついて行けるわけがないのはわかっていたが、それでも追い

かけるしかない。

何キ口走ったかわからないが、しばらく経つと犬のけたたましく吠える声と、聞いたこともない鳴き声が聞こえた。

なんだか胸騒ぎがする。

数分して俺が犬たちへ追いつくと、辺りには血の匂いと嫌な臭いが漂っていた。

大きな血溜まりがひとつあり、猪の姿はなかった。

犬たちは舌を出し、浅い呼吸を繰り返している。

一方を皆で見えて、耳をピンと立てて警戒している。

「何が起きた?」

「グルルル……」 (ヤツだ……。獲物を横取りされてしまった)

「ヤツ?」

「ガルル……」 (巨大な熊だ。ヤツは我らが獲物を追い込むのを知ってここで待ち伏せていた。我らのことなど気にも留めず猪を食していた)

「マジかよ……」

「グウウウ」 (我らが一斉に飛び掛かるとさすがに食すのをやめたが、残りはきつちり持つて逃げていきよった)

「まあ熊の執着心は凄いつて言うから、それで良かったのかもな。それよりも全員無事

か？」

「ガウウ……」（ケガをした者はいないが食すものが無い……。これでは子が飢えてしま……）

シロも他の犬たちも、しょんぼりとした様子でうな垂れていた。

犬たちは猪がいなくなったらもう食べ物がないと思っっているようだが、そんなことはない。

百貨店に入っていたペット用品のコーナーに、大量のドッグフードがあったのだ。

バックヤードにも何種類ものドッグフードやおやつが置いてあり、この群れが一ヶ月は持ちそうな量があるのだ。

猪は残念だが、他に食べるものはあるなら諦めもつくだろう。

「シロ、実は俺の住処に食料は大量にあるんだ」

「グウウ……」（本当か？ それを分けて貰えるのか？）

「ああ。というより俺たち人間は食べないからな。お前たちで食べてくれ。飼われていたならわかるだろ？ ドッグフードだ」

「ワオーン！」（おお！ あれは素晴らしいものだ！ 缶詰のやつが好きだった！）

「お、おう。そうか」

尻尾をぱたぱたと振るシロを見て、図体はでかいがやはり犬なのだたと再認識でき

た。

## 第二十一話 ショットガン

一度百貨店まで戻った俺と犬たちは、ポストンバッグに大量にドッグフードを詰め、巢まで運んだ。

一頭あたり百リッターのバッグを八個ほど背負って運んだので、しばらくは持ちそう  
だ。

四つのポストンバッグの持ち手を連結させ、バイクに乗せる要領で犬の背に乗せれば  
簡単だった。

犬六頭と俺一人で、合計五十ものポストンバッグを運んだのだ。

犬たちの体が大きいおかげで輸送力も高く、一度で済んだのは僥倖げんこうと言えた。

ドッグフードはポストンバッグも入ったままじゃ犬たちは食べるできない  
め、全てのバッグから出しておく。

帰りは空のバッグを五十も持たねばならなかったが、上手いこと詰めて五個にまで数  
を減らせば意外と運ぶことができた。

シロたちと別れ百貨店に戻ると、日付が変わろうとしていた。

鈴鹿たちはもう寝ているだろうか。



三階のはしごを使い店内へと入る。

このはしごも侵入者にそのまま使われてしまうから、なにか対策を考えないとダメだな。

いつもははしごを外しておくが、今日は俺が外に出ていたからそのままだった。帰ってきた連絡をして、中からはしごを下ろしてもらうのが一番簡単か。

長いロープの先にベルでもつけて、帰ってきたらそれを揺らすとかか？

鈴鹿と相談してみよう。

はしごを登り三階に着くと、嗅いだことのない匂いがした。

まさか、たった数時間留守にただけで何者かに侵入されてしまったのか？

耳をすませば上階から鈴鹿と珠子、それと知らないメスたちの話し声が聞こえる。

落ち着いた穏やかな声と、時折笑い声。

とりあえず危険な状況ではなさそうだ。

はやる心を抑え階段で上を目指す。

エレベーターだと待ち伏せをされている可能性もあるので使わない。

この声の感じでそれは無いと思うが、念には念を重ねておく。

八階の防火扉を静かに開け、中の様子を伺う。

鈴鹿たちは寛ぎスペースにいた。

寛ぎスペースとは珠子が名付けた、四人掛けソファをテーブルの周りにぐるっと四つ置いた場所のことである。

珠子いわくソファをたくさん使える贅沢スペースなのだそうだ。

そこには鈴鹿と珠子を含めて八人のメスがいた。

一つのソファに二人ずつ座り、紅茶を飲んで寛いでいるように見える。

こいつらは、何者だ。

見つかからないように身をかがめて鈴鹿と珠子の座るソファの後ろへと行き、二人に何があっても対処できる場所で立ち上がる。

「おい。お前らは誰だ」

「うわっ、びつくりした!」

「恭平さん、おかえりなさい」

「あー、おかえり、恭平。忍び寄ってくんのやめてよ」

文句を言う鈴鹿に手のひらを向けて制し、二人に「ただいま」と言う。

六人いる見知らぬメスたちの半数は、怯えたように目を伏せた。

残りの半数は俺の顔色をうかがいながら、媚びたような目を向けてきたり、愛想笑いをしつつ探るような目を向けてきたりといういろいろだった。

「あ、恭平。この人たち、ここに住まわせても良いかな? コミュニティが襲われて命か

らから逃げてきたんだって」

「本当か？ 俺たちを騙してここを奪おうとしているんじゃないのか？」

「一応身体検査をさせてもらいましたけど、武器になりそうなものは何も持っていないでしてよ？」

武器を持たなくてもいくらでもやり方はあるだろう。

人は生きるためにはなんでもやるものだ。

「甘いよ、たまちゃん。武器なんか無くても中から入り口を開けて、外に待機させていたヤツらを引き入れたりとかいろいろ方法はあるんだよ」

「なるほど、そういう方法があるのか。じゃあ弱そうに見える女子供が最適ですね」

「そういうこと」

二人が話しているのを聞いているメスたちが、ぶんぶんと顔を横に振ったり、小さい声で「違います……違います……」と言っていた。

どんだん顔を青白くしていき、死んでしまうんじゃないかと思えるくらい震えている者もいた。

さすがにこの姿を見て疑うことはできない。

立ったままじゃ威圧をしているように感じるかもしれない。

これ以上畏縮させても仕方がないので、ソファに座って話を聞く姿勢をとる。

「鈴鹿も珠子もその辺にしてやれ。敵意がないのはわかったから。外に他の人間はいなかったから安心しろ」

「うん。私は別に疑ってないよ。ただそういう方法があるってたまちゃんに説明しただけ」

「わ、私はただ感心してただけで、何もしてません!」

弱そうに見える女子供が最適と言われたときが、一番メスたちの震えが大きかったんだけどな。

「まあいい。あんたたちは、どこのコミュニティにいたんだ? 襲われたと言っていたが誰に襲われた? 巨大な熊か?」

「あー、あたしが代表して話させてもらうよ。まずは安全な場を提供してくれたことに感謝する」

「ああ、別に構わない。俺が一応このリーダーのようなものやっている山下恭平だ。鈴鹿、俺がリーダーで良いんだよな?」

「恭平以外いるわけないでしょ」

「おう、そうか。で、あんたらを襲ったのはなんだ?」

「あたしは菱木奈津実。少し長くなるけど話しても良いか?」

「ああ、聞かせてくれ」

「元々あたしらは運送屋の集まりだったんだ」

奈津実が話した内容は、なんとも胸糞の悪くなる話だった。

奈津実と他二名は元々運送屋で働いていた。

ゾンビパニックが起きてすぐに奈津実たちは会社に避難をした。

会社はコンクリート塀に囲まれており、少なくとも自宅よりは安全だったようだ。

そこで働いている男たちと協力してなんとかやりくりをする日々が続いた。

しばらくすると、外の探索を終えた男たちが、数人の女を連れ帰ってきた。

保護したとのことだ。

そこからいろいろとおかしくなっていたようだ。

男たちが女を守る代わりに体を求めるようになる。

男の数は二十人を超えており、たったの数人程度じゃ反抗するだけ無駄だった。

だが嫌がって拒否した女の一人が、激しく暴行を受け、朝まで輪姦をされた末に殺される。

籠たがの外れた男たちが、奈津実たちをひどく扱うようになるのは当然のことと言えた。

一日中テールブルに縛り付けられて犯されたり、首を吊られてぎりぎり窒息しないように立たされたまま複数の相手をさせられたりと、残虐性は増す一方だった。

奈津実たちにとって地獄の日々は二週間ほど続いたそうだ。

よく見れば、全員が顔と手に痣や傷をつけている。

煙草の火を押し付けたような痕も見えた。

凄惨なさまが容易に思い浮かぶ。

よく死ななかつたものだ。

地獄の日々はつい数時間前にコミユニティに襲撃者が現れたことで終わりを迎えた。

奈津実たちは混乱した隙を見て必死に逃げ出したそうだ。

「襲撃者が何人かはわからないけど、そのうちの一人があたしらを逃がしてくれた。

追ってくる男を蹴っ飛ばして、殴り倒して、マジですっげえ強かった」

「うん。人が吹っ飛んでたよね。ワイヤーアクションみたい」

「格好良かった。線が細い女性だったのに、あんなに強くて」

黙って話を聞いていたメスたちも、脱出の話になると饒舌に語り出した。

「それで、その人が言ったんだ。東部百貨店を目指しなさいって。そこには安全な場所

と信頼できる人が居るって言ってたんだ」

「そいつの名前は？　どんな顔をしている？」

「名前は聞いてない。急いでたし。顔はフルフェイスのヘルメットをかぶってて見れな

かった」

「よくそんな怪しいやつ言うことを聞く気になったな」

「もう死にたいって言う子も出てきてね。だったら死ぬ前に賭けてみても良いかなって」

「そうか。まあとりあえずは良かったな。賭けには勝ったようだよ」

「それって、あたしらもここに居ても良いってことか？」

「ああ。好きにしろ。ただし、俺やこの二人の言うことには従ってもらおう」

「それくらいならいくらだつてやつてやるよ。ただこつちの子らには手を出さないであげてくれないか？　心が深く傷ついちまつてんだ」

目を伏せたまま震えるメスが三人ほどいる。

俺が視線を向けると、身を縮め小さくなろうとしていた。

そんなに怯えなくても俺は無理やり手を出すような真似はしない。

「別にそんないらねえよ。寝るところとか着替えとかはこの二人に聞いてくれ」

「わかった。ヤリたいってんならあたしやこいつらに言えばすぐヤラせるから」

「いらねえつつつてんだよ」

無性にイライラする。

俺が声を荒げたせいかメスの怯え具合が増した。

席を立ち、この場を離れようとする、鈴鹿が「ちよつと恭平、どこ行くの？」と手を掴んできた。

それを振り払い、短く告げる。

「上だ。酒が飲みたい。あとは任せた」

「うん、まあ良いけど。じゃあたまちゃん、この人たちにいろいろ出してあげよつか」  
「え、あ、はい。わかりました」

二人に任せておけば大丈夫だろう。

これ以上俺がここに居ると空気が悪くなりそうだ。

さっさと離れよう。

九階にあるレストランには大量に酒がある。

どうにも飲まずにはいられない気分だった。

つまみを出すのも面倒だ。

酒を置いてある棚から、適当に目に付いた瓶を数本持ちカウンター席に座る。

グラスに注いであおるようにして飲む。

二杯、三杯と飲んでも一向に酔う気配がない。

瓶を一本空けて、ようやく少し酔ってきた感覚がした。

二本目を飲み干したところで、背後から人の気配がしたので振り向く。

下で怯えて震えていたメスがいた。

「……………なんだ？」



「え、あ、あ、あの、私、できること、少ないので、それで、置いてもらう代わりに……」  
このメスは何が言いたいんだ？

黙って見ていると、突然服を脱ぎ始めた。

「何をしている。やめろ」

「す、捨てないでください……。私なんでもしますので、お願いします、お願いします  
……」

「やめろ。服を着ろ」

「わ、私、どんなことにも耐えますので、どうか、どうか」

「やめろって言うてんだよ！」

「ひっ」

服を脱ぎ下着姿になったメスが、しりもちをつく。

痩せ細り浮き出たあばらや、どす黒く変色した痣などが痛々しい。

メスは着ていた服をかき集めて胸に抱くと、俺に深々と一礼をしてから走り去った。

「……クソ。クソが」

胸のモヤモヤを流してしまおうと、酒をあおる手は止まらず、空いた瓶が四本を越えた。

銘柄を見ると、ウオッカ一本にウイスキーが二本、ブランデーが一本。

この酒たちも俺にこんな飲まれ方をして可哀相だ。

お前たちを味わつて飲んでくれる人はもうこの世にはわずかなんだろうな。

瓶を見ながらぼんやりと考へていると、気がついたら鈴鹿が横に座つていた。

「ん、鈴鹿か。いつのまに來たんだ」

「さつき。ポーつとしてるからさ。てか飲み過ぎ。死んじやうよ?」

「俺はこれくらいじゃ死なねえ」

「そつ。てかさ、恭平。一つ聞いても良い?」

「ん? なんだよ」

「恭平さ、なんで女と寝ないの? 自分で言うのもなんだけど、私だつてたまちゃんだつ

て割りと可愛い顔してると思うよ?」

「うるせえな」

「さつきの皆だつて可愛い子はいたよ。今はボロボロだから食指が動かないのはわかる

けどさ。でも言いなりにできるじゃん。綺麗になつてからやれば良い訳だし」

「……うるせえよ」

「たまちゃんに聞いたら経験は無いけど恭平にならつて言つてたよ? 処女が良いなら

たまちゃんとかやれば良いんだし。処女とか気にしないなら私でも良いけどね」

「……そのことは別に良いだろ。気分じゃないんだよ」

俺がそう言うと、鈴鹿はテーブルをバンと叩き、どこかに行ってしまった。

怒らせてしまったかとも思いつつも、放っておいてもらえて安堵もしてしまう。

そんなに、俺を構わなくて良いんだ。

だが鈴鹿はすぐに戻ってきた。

ドンとテーブルに置かれたのはテキーラが数本に炭酸水が数本、そしてショットグラスが二つ。

無言で俺の隣に座った鈴鹿が、炭酸水とテキーラをショットグラス二つに注ぎ、片方を俺のほうへと差し出してきた。

鈴鹿がショットグラスを手で蓋をするようにして持つと、テーブルヘカツンと叩きつけた。

炭酸が衝撃で泡立ち、こぼれそうになるところで一気に飲み干した。

まさかショットガンスタイルで飲むとは思わず、鈴鹿の顔をまじまじと見ると不敵に笑っていた。

これは、勝負を挑まれているわけか。

なら男として引くわけにはいかないな。

俺も同じようにして一気に飲み干すと、鈴鹿が二杯目を差し出してきた。こうなったらとことん付き合つてやろう。

何杯目になるかわからない酒を飲み干す。

「ねえ恭平」

「ん、なんだ」

「無理しなくて良いんだよ」

左手には手が重ねられていて、俺の薬指にはめられた指輪を鈴鹿がくるくると回すようにいじりながらそう言った。

「別に、無理はしてない。まだ飲める」

「違うよ。そうじゃない。私たちのために無理をしないでつてこと」

「無理なんかしてない。守るためだ。平気だ」

「嘘。無理に強くあろうとしている。恭平、そのままじゃ壊れちゃうよ」

壊れる？

俺が壊れるわけない。

「俺は、強くなきゃいけないんだ。強くなければ守れない。今はそういう世界だろう。」

強くならなくちゃいけないんだ」

「それは恭平だけじゃないでしょ。私もたまちゃんも強くなろうとしている」

「俺は男だ。オスなんだよ。オスはメスを守らなくちゃいけないんだ。強くないと、守

れないんだ」

「恭平、私たちは獣じゃない。オスメスじゃなくて男と女なの。守ってもらうのは嬉しいけど、もつと私たちのことを頼って」

頼って、それでゾンビに噛まれてしまったらどうするんだ。

俺が居ないところで、見えないところで、死んでしまうかもしれないんだぞ。

「俺は、俺が、守らなくちゃいけないんだ。守りたい、守りたかったんだ……」

「私たちだつて弱くない。この世界を生き抜いてきたんだから。たまちゃんだつて、他の皆だつてそう」

「だが……、俺は……」

「恭平は、恭平が守れなかった人の幻を私たちに重ねているの。その人じゃなくて、私たちを見て」

鈴鹿が指輪を撫でながら言う。

俺が、強ければ、良かったんだ。

あの時、寝込んでなんかいなければ。

一人にしなければ。

俺が、守ってやらないといけなかったんだ。

美香、すまない。

俺のせいだ。

俺は、なんてことを……。

「恭平？　寝ちやつたか……。ねえ、ちゃんと自分のために生きなきゃダメだよ。奥さんを失った痛みはそう簡単になくならないだろうけど……。それでもね」

鈴鹿の言葉が聞こえる。

なんて言っているのかよくわからない。

意識がぼやけてきた。

深いところへ潜っていくような感覚の中、俺は美香の寂しそうに笑う顔を見た気がした。

## 第二十二話 協力

カウンターに突つ伏した状態で目が覚めた。

凝り固まったせいで体に鈍い痛みを感じる。

背中には毛布が一枚かかっている。

鈴鹿がかけてくれたのだろうか。

昨晚、鈴鹿と話したことを思い出す。

酔ったあとの記憶を失くす人と失くさない人がいるが、残念ながら俺は失くさない人だ。

いろいろと弱気なことを言っていたように思うが、それはもう忘れよう。

鈴鹿は俺にもっと頼れと言った。私たちも役に立つと。

俺は一人で彼女たち全員を守ろうと思っていた。

それが俺の役目だと。

なんと傲慢でおこがましい考えだったのだろう。今なら不思議とそう思えた。

俺一人でなんでもやろうとした結果、また失うことになるのか？

全員で協力した方が、より安全でより効率的だ。

一人で全てをやらうとするのは俺のわがままでしかないのだ。

「あ、恭平さん、起きてますね。おはようございます。もう朝ごはんできていますので、支度を済ませたら来てくださいね」

「あ、ああ。わかった。じゃなくて、おはようからか。おはよう、珠子。すぐに向かうよ」  
「ええ。温かいうちに食べましょうね」

珠子がにこりと笑ってから去っていった。

普段食事で使用する場所はイタリアンレストランで、甘味や酒などの嗜好品が置いてあるのがこの中華レストランだ。

珠子が分けるように言ってきたときは面倒だと思わなかったが、今は言う通りにして良かったと思えた。

朝食の準備をしている横で、酔い潰れて寝ている醜態を晒さずに済んだのだから感謝しかない。

手早く歯磨きなどの支度をやってしまう。

洗面台の鏡に映る顔には無精髭が生えていた。

最近毎日のように剃っている気がする。

前までは三日に一度剃れば大丈夫だったのに。

それと、白髪がだいぶ増えてきた。



髪は全体的にメッシュのようになっていて、髭にまで白いものが混じっている。驚いたのが下の毛にまで白いのがいたことだ。

まだ二十代だというのに、なんでこんなに。

白髪染めがどこかにありそうだから、下の毛以外はあとで染めてしまうか。

珠子たちの元へ行くと全員が既に座っていて、皆で俺のことを待っていていたようだ。

「おはよう。遅くなつてすまない。先に食べてくれても良かったのに」

「ダメですよ、恭平さん。皆揃つていただきませすよ」

「そうか。それじゃあ食べようか」

鈴鹿の横が空いていたのでそこに座る。

昨日のことがあるのでなんとも気恥ずかしい。

ちらりと横目で顔をうかがつて見るが、なんてことのない平然としたものだった。

俺が意識しすぎなのだろうか。

朝食はトーストと焼いたベーコン、豆たつぷりのミネストローネだった。

このパンはホームベーカリーという機械で、小麦粉から練つて焼いて作ったものだ。毎朝焼きたてが食べられるなんてとても素晴らしいことだ。

機械を珠子が見つつけてくれて本当に良かった。

昨晚避難してきた女性らは、嬉しそうに食事をしている。

何人かは俺が視線を向けると体を強張らせてしまうので、極力そちらを見ないようにして食べた。

久々にまともな食事をとったのだろう、感極まったのか涙を零しながら食べる女性もいた。

食事を終わらせ、皆がまつたりとしているところで話を切り出す。

「あー、ゆっくりしているところ悪いが少し話がある。改めて俺の自己紹介をさせてもらう。俺は山下恭平だ。皆とはうまくやっていきたいと思うからひとつよろしく頼む」  
俺が礼をすると、女性らも頭を下げて礼を返してきた。

「俺は奈津実以外の名前を知らない。これからやっていく上でそれは良くないことだろう。今からちゃんと言葉を聞かすから、自己紹介をしてくれると助かる」

「うちのリーダー結構繊細でさ。皆の話聞いて悲しくなつてあんな感じになつちやつたんだ。許してあげて」

「ああ、昨日の俺の態度は悪かった。許してくれ」

鈴鹿の言う通り、俺は女性らの境遇を知り、悲しくやるせなくなつてしまったのだろう。

数人の女性らは怯えた様子を見せるものの、全員がしっかりと俺を見て自己紹介をし

てくれた。

運送屋で働いていたのが菱木奈津実、大塚明穂、西村深冬。

この三人は俺に対しての怯えは無い。

怯えながらもちやんと挨拶をしてくれた残りの三人が、森田香織、長谷川直美、小松友里。

全員の名前を覚えられるかわからないが、これから長く付き合っていくのだからそのうち覚えられるだろう。

昨日、俺のところに捨てないでと懇願に来たのは友里だった。

今でも俺を見ながら怯えたような顔をしている。

役に立たないと追い出されると思っているようなので、居ても良いんだと安心してもらわねばならない。

本当は体を休めてもらいたいが、このままじゃ気に病みすぎて体調を崩しかねない。だから今日は皆で地下の物資を持ってくる作業をしよう。

そのことを皆に提案する。

「もちろん体の調子が悪かったりするようだったらやらなくても良い。それで追い出すことなどはしない。無理をしない範囲で協力をしてくれると助かる」

運送組の三人は元気な様子でやると言ってきたが、残りの三人は迷っている様子だっ

た。

「俺が、というより男が怖いのもわかっている。辛いのなら珠子の手伝いをしてくれるだけでも良い。やってくれないか？」

「あの、私、力弱いし、迷惑かけちゃうかもしれないけど、やらせていただきます」  
「わ、私もやります！」

「……頑張ります」

三人は顔を伏せ怯えながらも勇気を振り絞ってそう言ってくれた。

悲惨な目にあっても、それでも強く生きようとする彼女たちに、尊敬の念を抱いた。

「それじゃ俺と地下に行く人は誰にする？ 行きたい人は？」

俺が問いかけると、全員が手を上げた。

その中でもピンと真っ直ぐに掲げられた手は、鈴鹿と珠子のものだった。

「いや、二人には上で整理しておいて欲しいんだけどな。他の人はどこに何を片して良いかわからないんだからさ」

「ええー、一緒に行きたーい」

「私も行きたいです!!」

ふうふうと文句を言う二人をどうにか宥めて、地下へと向かった。

地下のバックヤードにはまだまだ大量の物資が残されていた。

大量にあるカートに女性らが手分けをして物資を詰め、それを俺が抱えて階段を上り一階へ置いておく。

そのカートをエレベーターで鈴鹿が運び、珠子が片付ける。

そんな流れ作業だった。

定期的に地下を歩き、危険がないかの確認をしていると、一人の女性の姿が目についた。

力が弱くて役に立たないかもと言っていた友里が、重い米袋を何袋もカートに乗せていた。

必死な思いでやってきているのはわかるが、無理をするのは良くない。

「頑張ってるな」

「あ、はい、その……こんなことしかできませんけど」

「充分だよ。まだ体も痛いだろうに、偉いな友里は。今は人手が足りないから皆が手伝ってくれるのは本当に助かるよ。ありがとう」

礼を言うと、友里は驚いたように目を丸くして、俺の目を見つめた。

友里は顔を赤くして目をそらすと、小さな声で「そんなことないです……」と言った。

「無理はしなくて良いからな」

「はい……！」

強張った表情も和らぎ、切羽詰ったような空気も無くなった。

これなら安心して作業を任せられるだろう。

他の見回りに戻ると、野菜コーナーで声をかけられた。

声をかけてきた女性は、たしか、ええと……。

「明穂だよ。おつかあきほ 忘れてたっしょ？」

「ああ、すまん。一度にたくさんの方の名前は覚えられないようだ」

「まあ仕方ないって。前に居た場所じゃ、茶髪とか女とか穴とか呼ばれてたし。そんならい気にならないって」

本当に彼女たちの境遇には同情を禁じ得ない。

「そんな顔しなくて良いって。それよりさ、これ見てよ」

「ん？ どれだ？」

腐った野菜や、かさかさに枯れた野菜がたくさんある。

その中に、芽を生やしたものや、葉を伸ばして草状態になっているものがあった。

「これさ、畑に植えたら良いんじゃないかなって思っつて」

「畑？ すまないが俺は農業なんてやったことないから全く何にもわからないぞ」

「うん、大丈夫。私、家庭菜園やってたから。だいたいわかるよ」

「そうか、それは助かるな。そういうや屋上に畑があったぞ。珠子に聞いたらいろいろわかると思うが」

「ほんとに？　じゃあ私そつちやつてても良いかな？」

「ああ。任せた。もし必要そうなものがあつたら言ってくれ」

「うん。じゃあとりあえずこの野菜全部持つていこうかな」

「了解だ」

カートいっぱいに入った芋類や野菜を一階に運び、明穂と別れる。

見回りを一周してきただけで、階段下には女性たちが集めてきた物資入りのカートがひしめ轟くようにして置いてあつた。

俺は無心でカートを一階に運ぶマシンに戻つた。

夕方までかかり、地下バツクヤードにあつた物資は全て九階へ集まつた。

冷蔵庫はほぼほぼいっぱいになっており、倉庫代わりの店がひとつできたほどだ。

夕飯時には女性らもすつかり元気になっていたように見えたが、寝ているときに飛び起きたり、泣いていたりするのが聞こえた。

やはり、心の傷は深く、ちよつとやそつとじゃ治らないのだろう。

俺が気を使って別の階で寝ると提案したが、鈴鹿と珠子の猛反対により却下された。

部屋の端っこのほうで寝るようにしたが、周囲を鈴鹿と珠子に占領されてしまう。まあ二人が周囲に居るおかげで、女性たちの視界に入らないからこれはこれで良いのだと納得することにした。

相変わらず二人は寝るときにうるさいが。

次の日の朝食時、俺から女性たちにひとつの提案をした。

「前に居たと言う運送会社に行こう」

「えっ……」

「……なんで？」

「やだ……」

「行きたく、ないです」

全員が行きたくなさそうな顔をした。

それもそうだろう。

彼女たちのトラウマのある場所なのだ。

それが普通の反応だし、俺がさうとう酷なことを言っているのは自覚している。

「俺は、お前たちをそんな酷い目にあわせたヤツらを許さない。既に襲撃にあっている生きてるかどうかはわからないが、もし生きていたら殺すつもりだ」

俺の提案に女性たちは息を呑んだ。



ただ鈴鹿だけは「そうだね。クズは殺すべき」と賛同してくれた。

「お前らもそんなクズどもに囚われたままじゃ嫌だろう。俺が解放してやる。俺の元に居れば何も怖いものなど無いと思えるようにしてやる。だから行くぞ」

「……わかったよ。だけど、あたしにもやらせな。ヤツらにやどでかい恨みがあんだ。ギタギタにして殺してやる」

「わ、私も、やります。やらせてください」

奈津実の後に友里が続き、少し驚いた。

正直、絶対に行きたくないと思えるだろうと思っていた。

「奈津実も友里も行ってくれるか。ありがとう。他の皆は？」

「行くし。ぶっ殺してやんよ」

「い、行きます」

「やっつとやり返せる……!」

「やっつとやんよ」

なんとも勇ましいものだ。

俺は視界の端にピンと伸びる鈴鹿の手を無視して話を進める。

「よし、じゃあ全員で行くぞ。鈴鹿と珠子は留守を頼む」

「えええー!! 私も行きたいー! ゴミ掃除するんだから!」

「俺がない間ここを守れるのは鈴鹿しかないんだよ。頼むよ」  
ふうふうと文句を言う鈴鹿をなんとか宥め、俺たちは運送会社へと向かった。

運送会社へ向かう道中、ゾンビが俺たちから逃げていくのを見た女性らが不思議そうにしていた。

なのでゾンビを一匹捕まえ、もの凄く嫌がるさまを見せて納得させておいた。  
これで安心感がより増すだろう。

女性らは「そういえばここに近づくとつれゾンビがいなくなっていた」とか「追ってきていたゾンビが突然方向転換して帰っていった」などと話していた。

ゾンビどもは遠くからでも俺の何かを感知しているのだろうか。

運送会社は百貨店から歩いて三十分ほどの場所にあった。

頑丈そうな扉に囲まれ、重そうな鉄の門が開かれていた。

扉の中にはトラックや作業車が数台と、倉庫と事務所がある。

そして、地面に転がる大量のゾンビ。

手足の関節を外されたヤツもいれば、切り落とされたヤツもいる。

ワイヤーでぐるぐるに縛られたヤツや、折られて骨が飛び出しているヤツもいた。

不自由にされた状態で放置され、開いた門からゾンビがやってきて噛まれたとかか？

なかなかエグいことをする。

「一、二……。全部で二六匹いるな。こいつらに見覚えは？」

「……あ、ああ。こいつらだよ。数もあってる」

「そうか。ちようどやりやすいけど、どうする？ やるか？」

「あたしは、いいや。なんか、これ見ただけで充分って言うか」

「てかもう死んじやつてるし」

「そうだね……」

女性らはこんなんで気が済んでしまったらしい。

せっかく全員に俺お手製の槍を持たせてきたのに。

どうせなら全員で滅多刺しとかすればいいのに。

仕方がないので、俺が片付ける。

汚物は消毒をしなければいけない。

「じゃあ俺がやるから、お前らは安全なところで見てな」

まとめて燃やすのが良いだろう。

他に燃え広がることのないように、コンクリート塀の角にゾンビを集めていく。

俺に持たれたゾンビは激しく嫌がるので、塀に叩きつけるように投げる。

意外と軽いゾンビは良く飛んだ。

ガソリンがあつたのでゾンビの山に振りかけ、マッチで火をつける。勢い良く燃えるゾンビを、女性らが放心したように見ていた。

運送会社には特にめばしいものも無かつたので、何かに使えそうなトラックを二台だけいただいで帰ることにした。

帰り道、二台のクレーンつきトラックのユニツク車を奈津実と明穂が運転していた。時折車を止めては、通行の邪魔になっている乗用車をどかして進んでいく。

俺が乗用車の窓を割り、運転席と助手席の窓にワイヤーを通し、それをユニツクで吊つてどかすという地道な作業だった。

あんな細かいワイヤーで乗用車が持ち上がるのだから、すごいものだ。

百貨店に戻る頃には夕方になっていた。

女性たちからは怯えたり不安になるような素振りが消え、表情も明るくなったように思う。

珠子の作つてくれた美味しい食事を食べているときには、声を出して笑うこともできていた。

運送会社に連れて行つたのは正解だ。

食後のデザートを皆で食べるとのことなので、俺は退散をする。

ひとりで寛<sup>くつろ</sup>げる空間の、八階のベランダで本を読む。

これから皆を守って生きていくには、いろいろと覚えなきやいけないことや知らないことや知らないことがたくさんあるのだ。

こうやって考えられるようになったのも鈴鹿のおかげだろう。

ありがたいことだ。

鈴鹿だけじゃない。

女性たちに笑顔が戻ったのも、美味しい食事を毎回作ってくれる珠子のおかげだ。

二人には感謝しかない。

俺一人で全部をやろうとしていたんじや、野菜のことや畑のこともわからなかった。

皆で協力して、それぞれが得意なものをやっていけば、より良い生活が送れるようになるだろう。

夜空には煌々と満月が輝いていた。

気持ちの良い夜だ。

目を瞑り、静寂に包まれた夜に浸っていると、ふと遠くから音がした。

何かが壊れる音。

ガラスの割れる音。

そして、シロの声。

なんだ。

何が起きている？

耳を澄ます。

破壊音が大きくなった。

シロの吠える声。

「ウオオン！」（逃げろ！）

すぐに地響きのような低く重い獣の咆哮が聞こえた。

「シロ！ まさか、赤カブトと戦っているのか!？」

鈴鹿たちのいるところへ走る。

「まずい、赤カブトだ。シロが戦っている。俺は助けに行く。ここは任せた」

「助けについて、どうやって。ダメ、行かないで、恭平！」

鈴鹿の声を振り切って走る。

シロたちに危険が迫っている。

見殺しになんてできるはずがない。

行かないやいけないんだ。

三階に置いてある槍を持ち、外へ跳ぶ。

バスの屋根に着地し、駆け出した。

今から行くぞという意思を声に乗せて叫ぶ。  
「ウオオオオン!!」

待ってろよ、シロ!

## 第二十三話 決戦、赤カブト

音のする方へ走ると、すぐにシロたちを発見した。

シロや他の犬たちが、背の高さが一軒家くらいはありそうな巨大な熊に、四方から飛びかかつては離れるを繰り返している。

腹の大きな母犬と、なにより子犬たちの歩みが遅く、逃がすために囿をやっているようだ。

必死に走る子犬は白色と黒色のみで、もう一頭いた灰色がない。

シロの他には母犬と四頭の犬しかいなく、こちらも減っている。

子犬を庇おうと母犬の歩みが遅くなっているせいで、シロたち囿の負担が大きい。

子犬の一頭が転び、それに熊が迫る。

母犬が守ろうと熊に対して構える。

横から飛び出してきた犬が熊の首に噛み付いた。

「ゴオー！」

熊が鋭利な刃物のような両手の爪で、犬の体を縦に裂いた。

肉の切れ目から内臓が零れ、やがて噛み付いている口に力が入らなくなったのか崩れ



落ちた。

その犬の頭を、熊が叩き潰す。

ざわりと怒りが込み上げてきた。

持っている槍を全力で投げつける。

熊の肩付近に刺さると、熊は多少だが怯んだ。

その隙に子犬に駆け寄り二頭を抱き上げる。

驚き慌てた子犬だったが、俺だとわかると大人しくなった。

「シロ！ 百貨店にその大きな熊は入れない！ 子供たちを先に避難させるから、お前  
らもあとから来い！」

「ウオオンー！」（わかった！）

囀役をやるシロたちを確認し、子犬を抱えて走りだす。

母犬はやはり子犬に合わせていたようで、かなりの速度で走る俺にしつかりとついて  
きている。

百貨店一階のシャッターが開いていたので走りこむ。

鈴鹿がシャッター横に立っていた。

「恭平！ 無事?!」

「俺はな。だがシロたちがまだだ。こいつらを頼む」

「あつ、恭平！ 待って！ これを持って行って！」

走り出そうとしていた体を無理やり止めて振り返ると、鈴鹿が一本の槍を渡してきた。

俺が大量に作っておいたやつだ。

先程の槍は熊に刺さったままだからこれは助かる。

「ありがとう。いつてくる」

「死なないで」

鈴鹿の声を背に受け再び走りだす。

シロたちはこちらに向かいながら戦っていたようで、百貨店から数百メートルのところまで来ていた。

仰向けに倒れたシロに噛み付こうと迫る熊を見て、咄嗟に手にしていた槍を投げる。

槍は一直線に飛ぶと、熊の右目に突き立った。

「ゴアアア!!」

「シロ！ 今のうちに逃げろ！」

「ワン！」（すまぬ！）

熊の下から這い出たシロが、他の三頭の犬と共に百貨店へと走る。

痛みでのたうつ熊がこれで撤退してくれるはずもない。

シロたちの後ろを追うように百貨店へと向かうと、背後から怒りに満ちた咆哮がした。  
た。

振り返れば右目から血を流した熊が残った左目で俺を睨んでいる。

俺めがけて熊が突進してきた。

みるみる大きくなってくる熊の巨体に足がすくんでしまう。

巨大な熊がその大きな腕を振り上げるのが見えた。

すくんだ足に鞭打って、横に飛ぶ。

車を盾にして熊の攻撃をかわす。

轟音。すぐに体に凄まじい衝撃。

何メートルも吹っ飛んで、這いつくばってから気がつく。

熊が俺を車ごと吹き飛ばしたのだと。

鋭利な爪に引き裂かれグチャグチャになった車が俺の横に転がっている。

熊は余裕たっぷりゆっくりと歩いてくる。

もう俺を仕留めたと思ったのか。

倒れた体を起こそうとするが、バランスを崩し再び倒れる。

見れば俺の左腕の肘から、肉を突き破り骨が飛び出していた。

途端に激しい痛みに襲われる。

「うう、ぐうう……！」

今すぐ逃げなければ死ぬ。

熊はすぐ眼前に迫っていた。

熊の吐息を感じる。

このまま食う気なのか。

「ガアルルル!!」

「ゴオオ！」

横から飛び出してきたシロが熊の鼻先に噛み付く。

熊がシロを爪で引き裂こうとしたが既にそこにはいない。

一撃離脱を繰り返すシロを含む四頭の犬たちに、熊は翻弄されている。

今のうちに逃げなければ。

負傷した腕を庇うように立ち上がり、熊から離れる。

シロたちを助けに来たのに、逆に助けられてしまった。

なんて、情けない。

悔やむのは後だ。

今は少しでも熊から離れなければ。

振り返ったその瞬間。

飛び掛った一頭の犬が、熊の振り下ろした腕に頭を叩き割られて死んだ。  
ぞわりと脳に何かが走る。

熊はその犬の遺骸を掴み、何度も地面に叩きつけ、体をバラバラに引き裂く。  
「やめろ……」

その行為を見て怒り狂った黒毛の犬が、熊へと飛び掛る。

熊は誘っていたのか、犬へ噛み付くと、そのまま食い始めた。  
得体の知れない感情が俺の脳を支配していく。

「ギャン！ グガルルル！ グギヤアン!!」

断末魔をあげ暴れる犬。

熊は、苦しめるかのように噛み付き、咀嚼をする。

激しい怒りに支配されていく。

クソ野郎。殺してやる。

殺意が湧き出て目の前の熊を殺すこと以外、考えられなくなる。

脳が熱い。

折れた腕が勝手に動き出す。

ビクビクと痙攣し、骨が音を立てて動く。

「ぐ、ぐうう……」

熱い。

腕が。

脳が。

体が、熱い。

ゴキゴキと音を立て、腕が変形していく。

心臓の鼓動と連動するかのようになり、腕が痙攣を繰り返す。服を破り、腕は太く大きくなっていく。

元の腕の二倍ほどに膨れ上がり、長さが三十センチは長くなっている。白い毛がびっしりと生え、指の先には鋭い爪があった。

「なんだ、これは……」

折れた腕は、化け物の腕に変わってしまった。

手を握り、動くのを確認する。

頭の中であの熊を殺せと声がする。

仲間を、同胞ほっからを食った、あの熊を殺せと。

「ウオオオオ!!」

走る。

こちらを見た熊の鼻っ面を変化した左手で殴りつける。

「ゴオオ！」

鼻血を出しながらも熊が立ち上がる。

上からの振り下ろし。

腕の軌道が見える。

後ろに飛びすさる。

アスファルトに五本の線が走る。

「ゴアアア！」

「んだオラアア!!」

両手で挟むかのように繰り出された攻撃を潜り懐へ。

足の間を抜ける際に爪で切りつけたが硬い毛のせいでは傷は付かなかった。

熊の振り返りざまの横振りを上に飛んでかわす。

体が軽い。

熊の攻撃が全て見える。

「おせえよ！ 当ててみる、ゴラあ！」

「ゴガアア!!」

横振り、噛み付き、振り下ろし。

全て簡単に避けられる。

だんだんと紙一重でかわすことができるようになっていく。

横振りを少し後ろにさがってかわすときには、前髪に爪がかすった。

完璧に、見切った。

「ゴルル……」

「どうした熊公。当ててみるや。ビビってんのかよ、おいコラー！」

「ガアアア!!」

下からの振り上げ。

この攻撃は初めて見る。

少し距離を開けて避ける。

頭と腹に衝撃が走った。

たまらずに膝をつく。

なんでだ。

確実に避けたはずだ。

熊の顔がにやりと笑ったように見えた。

こいつ、何か仕掛けやがった。

クラクラする視界の中に、血で染まったブロック片が見えた。

振り上げてこれを砕きながら放ったのか。



そこまで知能があるのか。

クソ、余裕かまして歩きやがって。

飛び掛って鼻っ面を殴ってやろうとしたが、足に力が入らなかつた。

脳震盪を起こしているのか。

足が動かない。

熊が腕を振りかぶる。

「ゴオオオ！」

「クソがああああ!!」

視界の端に白い影が見えた。

ドンと体に衝撃が走り、突き飛ばされる。

「ガアルルル!!」

「ゴアアアア!!」

シロともう一頭の犬が俺を守ろうと熊に立ち向かう。

二頭で熊の後ろ足を噛み、体全体の力をこめて振り回す。

熊がわずらわしそうに振り回した腕に黒い犬が当たり、吹き飛んでいく。

「グルルルル!!」

「ゴオオオ!!」

シロと熊が対峙している。

足は、まだ動かない。

熊が四足歩行に戻り、シロに突進をしようと構えると、その鼻にぺちんと棒のような物が当たる。

良く見ればそれは俺の作った槍だった。

「おい！ 熊！ こつちに来な！」

「鈴鹿!? 何してんだ！ 戻れ!!」

なぜか鈴鹿が槍を持ち、外にいた。

なぜ出てきたんだ。

死んでしまうぞ。

「ほら、こつち来いよ！」

「ゴルル……！」

再度鈴鹿の投げた槍を頭を振ってはじくと、熊が鈴鹿へと走り出した。

すぐに後ろを向いて逃げる鈴鹿だが、熊の足は速く、すぐに追いつかれてしまうだろう。

「ガルルル！」

シロが飛びつくが、頭でかち上げられ跳ね飛ばされてしまう。

クソ、動け、動け。

ゆっくりと歩くことしかできない足を叩き、走る。

鈴鹿に熊が迫る。

「鈴鹿っ!!」

熊が両手をあげ鈴鹿へと叩きつけようとして。

「ゴアア!?!」

しりもちをついた。

「よっしや! うまくいった!」

嬉しそうな鈴鹿の声がした。

よくよく見れば、ユニツク車が二台あり、女たちが全員いた。

熊の前にはユニツク車のクレーンのアームがあった。

あれをぶつけたのか。

熊は歯が折れたのか、血を口から流してのた打ち回っている。

女たちのもとへ走りながら叫ぶ。

「お前ら!! なんて出てきた!」

「だって、恭平の役にたちたかったし」

「死ぬかもしれないんだぞ!」

「それは恭平もでしょー！」

熊がゆつくりと四足歩行へと戻り、飛び掛る姿勢をとった。

鈴鹿たちはこちらを見ていて気がつかない。

やらせるかよ。

全速力で走り、背中へと飛びつく。

「ゴアアア！」

暴れる熊。

すぐに放り出されてユニツク車のボディの上へと落ちた。

背中をしたたかに打ちつけ、口から空気が漏れる。

「グルルル!!」

シロが熊の後ろ足を噛み、引っ張る。

熊が立ち上がり腕を振り下ろすが、シロは既に離脱している。

体の下に細い何かがあるのに気がつく。

昼間、道の邪魔をしている車を動かすのに使ったワイヤーだ。

それを持ち、ユニツク車の運転席の上へ登り、アームを走る。

熊へと飛びつき、頭の上からワイヤーをかぶせてやる。

首に巻いたワイヤーを両手で握り締める。

今度は放り出されぬ。

「ゴアアア！」

「はっは！ 落としてみるよ！」

ワイヤーの先端に輪っかになったシャックルという部品がついているのに気がつく。そこにシャックルがついていない方のワイヤーの先端を通せば即席の首輪ができる。

右手で熊の毛を掴み体を支え、変異した左腕で全力でワイヤーを締め上げる。

毛と肉に食い込み、ちよつとやそつとじや外れない。

「恭平！ それ引つ掛けて！」

鈴鹿の声がすると、目の前にクレーンのフックが降りてきた。

ははっ、なるほどな。

ワイヤーの先端をフックに引つ掛けると、グングンとアームが伸びていき、フックが巻き取られる。

どんどんワイヤーが締まっていくのを確認し、熊から飛び降りる。

暴れる熊だが、ワイヤーにその爪を引つ掛けることができずに、足が爪先立ちになる。少しだけ浮き上がったが、暴れるせいで車が横転しそうだ。

「奈津実！ ぶつけてやれ！」

「あいよ！ これでもくらいな！」

奈津実の操作するもう一台のユニツク車が、クレーンのアームを勢い良く振り回し、熊の顔へと当てた。

鮮血が飛び、歯が数本抜けて地面の血溜まりへと落ちる。

もう一台のクレーンで吊り上げれば、重さが分散するだろう。

ワイヤーをもう一本持ち、だらりと垂れた熊の手へと巻きつける。

「おい！ これを吊ってくれ！」

「わかった！」

片手を上げた状態で、熊が吊りあがる。

しかし、まだ余力があるのか、残された腕や足をバタバタと振り回し暴れている。

ユニツク車からギシギシと音がしだした。

ワイヤーも切れてしまうかもしれない。

あと一押しが必要だ。

「シロ、あの腕が邪魔だ。押さえられるか？」

「ワオン！」（任された！）

暴れる熊の腕にシロが噛み付き、ぶら下がった状態で振り回す。

ギシギシとなる音が更に強くなった。

ユニツク車のボディに乗せられていた槍を持つ。

熊から充分な距離を取る。

走り出す。

加速。

自分が風になったかのような感覚に襲われる。

熊の姿が近づいてくる。

跳躍。

空中で槍を上段に振りかぶる。

「死ねオラアア！」

熊の心臓へと突き刺す。

二メートルほどある槍の半分ほどが埋まった。

だが、まだ熊は暴れている。

右手で毛を掴み、左手で槍を押し込む。

あと五十センチ。

「くたばれえええ!!」

左手を振りかぶり、槍を殴りつける。

槍の柄が埋まりきると共に、突き抜けた手ごたえがあった。

熊は大きくびくりと痙攣をすると、力なく吊り上げられるだけとなった。やったか。

頭がくらくらとして、熊の毛を掴んでいた手の力が緩んだ。

背中から地面に落ちるかと思いきや、シロがその背で受け止めてくれた。

「クウン」（大丈夫か。狼の人）

「ああ、大丈夫だ。ありがとう、シロ」

熊の背中からは槍が突き出し、足元の血だまりはどんどんと広がっていく。

その血の量を見れば、さすがに熊が死んだのだとわかった。

「俺たちの、勝ちだ」

疲れが一気に押し寄せてきた。

柔らかく温かいシロの背中に倒れたまま、意識が沈んでいった。



## 第二十四話 事後処理

目を開けると心配そうにこちらを見ている鈴鹿の顔があつた。

「恭平、よかつた。気がついた」

「ああ、鈴鹿。どれぐらい寝てた？」

「まだシロに運び込まれてすぐだよ」

それほど時間は経っていないようだ。

寝かされていたソファから体を起こし辺りを見る。

ここは百貨店の一階か。

フロアにはシロの他に母犬と黒い犬がいた。

それと白い子犬のきなこ、黒い子犬。

子犬たちは珠子を筆頭に女性数人にオヤツを貰ったり撫でられたりしている。

床に寝そべった黒犬の背中には大きな裂傷が一つあり、一人の女性が血の溢れる傷を

針で縫っていた。

あの女性の名前はなんだったか。

……たしか森田香織もりたかおりのはずだ。

しっかりと名前を覚えねば。

名札でもしてくれているとわかりやすいんだがな。

香織の手伝いは友里がしていた。

血を拭つたり、縫う際に剃つただろう犬の毛を片したりと急がしそうだ。

「ワン」（狼の人）

「シロ、どうした」

治療の光景を見ているとシロに話しかけられた。

シロは俺に感謝を述べると、今後のことを話し出した。

周辺を荒らしていた赤カブトの脅威がなくなったことにより、いなくなった動物たちが戻ってくるだろうということ。

それから、黒犬——クロという名のメス——のケガが治るまで俺たちの護衛等はできないということ。

そして母犬の出産もあるからしばらく住処から動けなくなるということ。

そして俺に頼りすぎるのは良くないからと、元の住処に戻ると言い出した。

こちらが気にするなどいくら言っても聞かず、その意思は固そうだった。

子犬二頭はきながここに残ると言い張り、きなかだけを預かる形となった。

女性連中にすっかり餌付けされてしまったのか。

「まあ、わかったよ。奥さんのケガ、早く良くなるといいな」

「クウン」（すまぬ）

とりあえずはクロが歩けるようになるまではここにいてもらう形でシロとの話は終わった。

あとは、俺のことを女性たちに話すだけか。

シロと俺の話を黙って聞いていた皆の顔を見て口を開く。

「あー、悪いが少し話がある。皆も俺に聞きたいことがあるだろう。落ち着ける場所に移動したいんだが、良いか？」

「うん、そうだね。移動しようか。レストランで良いよね？」

「そうですね。温かい飲み物でも用意します」

鈴鹿や珠子以外の皆も頷いてくれたので、九階へと移動した。

皆でテーブルを囲み、珠子の用意してくれた紅茶を一口飲む。なんだかりラックスできたような気がした。

「さて、まずは礼を言う。皆が出てきて助けてくれなかったらきつと俺は死んでいた。ありがとう。感謝する」

頭を深く下げる。

本当は危険な真似はやめて欲しいのだが、彼女らのおかげで命が助かった手前、何も言えない。

「皆が気になっているのはこの腕だと思う」

左腕をあげ、皆に見えるようにする。

視線が腕に集まるのを感じる。

「この腕がこうなったのは俺がゾンビウイルスに感染したことがきっかけだと思う」

「恭平、いつ噛まれたの!？」

「そんな、恭平さん……」

「ああ、違う違う。俺が噛まれたのは四ヶ月も前の話なんだ」

それから俺の身に起きたことをいろいろと話した。

ゾンビに噛まれはしたが、薬を打ちゾンビ化はしなかったこと。

それから四ヶ月も植物人間状態だったこと。

目覚めてから視力、聴力、嗅覚、身体能力が増していること。

ウイルスはまだ俺の中にいて、そのせいで腕が変異したのだろうということ。

皆は俺の話を黙って聞き終えると、議論のようなものを始めた。

「でもさ、ウイルスに感染してるかもだけど私らにうつらないよね。恭平の体液とか触れてんのに」

「おい、体液っていつどこで触れたんだよ」

「恭平が寝てるとき？　　っていうかき、ゾンビの治療薬ってなに？」

「薬なんてあるんですね。それがあればゾンビにならないなんて凄いです」

「その外国人女性が怪しいね」

「その薬本当に治療薬なのかな？」

「怪しい薬？　でも本当に治ってるし」

「その薬くれた人なら腕のこと知ってんじゃないかね？」

「あー、それはあるかも」

「あの、その腕カッコイイです」

「不思議と怖くないよね」

「恭平だからだね」

「わ、私もカッコイイと思います！」

「なんかヒーローみたいじゃね」

「アニメにいたわー、そういうキャラ」

女が一斉に話すと誰が何を言っているのかわからなくなる。

それでもこの化け物のような腕を怖がらないのはありがたい。

俺の腕を撫でたり握ったりして、わあわあ、きやいきやいと話す女性らは放っておく。

おそらく、この腕の原因になったのはマキシーンの薬だろう。

ゾンビを治す薬ではなく、別の生き物に変化させるウイルスだったのではないか？  
そのウイルスがゾンビウイルスを押しえこむのに要する時間が四ヶ月だったのか？

そして目覚めたことから俺の中のウイルスも活発化し、だんだんと化け物に変化しているということか。

マキシーン、いったい何者なんだ。

何故あの薬を所持していた？

そういえば奈津実たちを助けたのも謎の女性だった。

もしか、マキシーンがそうなのか？

顔を隠せば外国人だとはわからない。

可能性は充分にある。

薬のことを聞いただすべきだ。

今、どこにいるんだ？

……美香いわく友人を一人で助けに行ったらしいが。

その友人はどこに？

最初に会ったときのことを思い出せ。

たしか自衛隊に助けを求めていなかったか？

断られたから俺と美香に協力を求めてきた。

自衛隊駐屯地に行けばマキシーンの友人の居場所がわかるか？

「ねえ聞いている、恭平？」

「ん、ああ、悪い。なんだって？」

「その薬をくれた人を探したほうが良いって話してたの。居場所はわからないの？」

「今どこにいるかはわからないな。わかっているのは友人を助けに行ったことと、その友人を助けるために自衛隊に協力を求めたことだな」

「じゃあ決まりだね。恭平は駐屯地に行つて。その薬をくれた人を探さないと」

腕が変異したのは薬の効果が効かなくなってきたからか、それとも効いてきたからなのか。

このままじゃ全身がこの腕のような化け物になってしまうかもしれない。

マキシーンを探すことに異論はないが。

「このことは気にしなくて良いよ。私たちがなんとか守るから」

「そうですね、恭平さんは行つてください」

「わかった。それなら皆に任せた。俺がいなくなるとゾンビが来るかもしれないから、戸締りだけはしっかりしといてくれ」

地下の穴も塞いでおいたほうが良いだろうな。

「よし、じゃあ話終わり。もう遅いから寝ましよう。恭平はお風呂入ると良いよ。だいぶ汚れてるから」

「ああ、そうだな。そうするよ。それじゃあ皆、おやすみ」

避難をしてきて日が浅い奈津実たちも癒えきっていない体でよく頑張ってくれた。

眠そうにしているのが何人かいるし、もう寝たほうが良いだろう。

着替えを持ち風呂へと向かう。

風呂も浴槽が何個か並んでいるが、今後のことを考えたら別のところに俺用の風呂を作ったほうが良いのだろうか。

以前ここを使っていたコミュニティでは、男女で時間を決めていたらしいから俺だけ時間をずらせば済む話か。

服を脱ぎ全裸になる。

姿見があつたので左腕をよく観察する。

大きさや形が変異しているのは肩から先だが、白い毛は左半身の脇腹や胸にも少し生えていた。

これが全身に広がったら俺は正真正銘の化け物へと変わってしまうのだろうか。

背筋に寒気が走る。

寒気を払うために熱い湯の張られた浴槽へと身を沈めた。



化け物の腕を観察をする。

濡れた左腕は、少しだけ細く見えた。

ボリユームのある毛のせいで太く見えていたようだ。

指の一本一本が太く長くなっており、爪は鋭く尖っている。

その手で右腕を握って力を入れてみると、かなりの痛みを感じた。

力も以前の二倍以上はありそうだ。

この腕を見ていると、ああ俺は化け物になったのだ、と実感できた。

体を洗おうと浴槽から出る。

風呂の湯は汚れてしまっていたので一度抜き、軽く浴槽を洗ってから新しい湯を張る。

その間に体を洗ってしまう。

腕が長くなったので、背中が洗いやすくなったことに少しだけ感動した。

左腕も洗おうとしたが、アカスリタオルじゃ泡が立たなかつたのでボディークリームを追加してかけて手で泡立てていく。

洗えば洗うほど泡が立つのが面白い。

面白いが、泡を洗い流すのにめっちゃくちゃ時間がかかったので体がすっかり冷えてしまった。

手早く髪を洗い、泡を流して浴槽へ戻る。

温かい風呂に浸かっていると、疲れが溶け出ていくようで、心地よい。

まどろんでいると、誰かの足音が聞こえた。

「おーい。問題ないー?」

「ああ、大丈夫だ」

仕切りの外から鈴鹿が声をかけてきたので返す。

いつもなら俺があがるまで誰も来ないのに、珍しいことだ。

そんなに心配してくれているのか。

ありがたいことだ、と思っていると、鈴鹿が仕切りの壁からヒョコツと顔を覗かせた。

「うんうん。大丈夫そうだね。じゃ、お邪魔しまーす」

「はあ!」 ちょ、ばか、お前、なんで裸なんだよ!!」

「え? お風呂入るからだけど」

「今俺が入ってんの! 出る!」

「嫌だよー。寒いから入るし」

「あ、ちょ、おい! じゃあ俺出るから!」

「良いってそのまま。ふいー。良い湯だねえ」

鈴鹿が浴槽に入ると、量の増えた湯がこぼれていく。

柔らかい体が足の先に触れ、思わず伸ばしていた足をたたみ体育座りをしてしまう。そこまで広くない浴槽で、俺と鈴鹿はお互い体育座りをして向き合っていた。

自然と俺の視線が下がっていくので、慌てて横を向く。

視界の端に鈴鹿の裸があるのがわかるので、意識がそこへ集中してしまう。

本能が勝手に鈴鹿を見ようとしてしまうので、目を瞑る。

パチャリと音がして、鈴鹿が近寄ってきたのがわかった。

左腕に触れられ、ビクリと体を撥ねさせてしまった。

「不思議だね、これ。痛くないの？」

「あ、ああ。痛くない」

鈴鹿が俺の左腕を握ったり撫でたりとしてくる。

「感触はあるの？」

「ああ、ある」

「じゃあ、これわかる？」

「ば、ばかやろう！ なにしてんだよ！」

「あはは、なに照れてんの？」

手の平に柔らかな感触がしたので慌てて腕を引っ込める。

くそ、落ち着け、落ち着くんだ。

大きな水音がした。

鈴鹿が立ち上がったのか？

芳しい匂いが漂い、頭がクラクラしてくる。

「あはっ。そんなになってるってことは、そういう気分ってことだね？ やろうよ」

「ち、違う。これは疲れたとか死にそうだったとかいろいろあったからで……」

「ねえ、細かいことは良いって。我慢しなくて良いんだよ？ ここには私たちしかないんだから」

「それでも、俺には……。俺には、俺は、風呂ではしないんだよ」

「あ、恭平」

苦し紛れの嘘をつき、浴槽を飛び出て脱衣場へ行く。

風呂どころか家中どこでもしてたというのに……。

頭を振り思考を遮る。

鈴鹿の「いくじなし」という声を背中に浴びながらタオルで体を拭いていく。

早々にここを離れてしまいたかったが、毛に含んだ水の量が思いのほか多く、時間がかかってしまった。

既にバスタオル六枚目だ。

大型犬を風呂に入れる作業は大変なんだろうなあ、などと思いながらびしょ濡れの左

腕を拭いていると、鈴鹿が風呂から出てきてしまった。

「あれ？ まだいたの？」

「ちよ、おま、早く服を着てくれよ」

「ああ、うん。着るって。もう迫らないから安心してよ。恭平の気分が乗るまで待つよ」  
「……ああ、すまん」

鈴鹿が服を着る音を背中で聞きつつ、そういえば自分もタオルを腰に巻いただけだったと着替える。

下にジャージを履き、Tシャツを着ようとしたが左の肩から先がびしょ濡れなのでめた。

「それよりどうかしたの？ まごまごして」

「ああ、毛がな……」

着替えを終えて髪を拭いている鈴鹿にそう答える。

タオルですつと拭いてはいるが、未だに湿っている。

「あ、そつか。乾きにくいもんね。手伝ってあげるよ」

「すまん、助かる」

鈴鹿がドライヤーを二つ持ってきてくれたおかげで、俺の左腕の毛をなんとか乾かせることができた。

毛の長さは三センチほど。

ドライヤーで乾かしたおかげかフワフワとしている。

なんだか誇らしい気分になった。

「犬の毛みたいだね。中に柔らかい毛が生えているし。なんだっけ、ダブルコートって言うの？」

「いや、わからないな。犬は皆こうなんじゃないのか？」

「どうなんだろうね？ 犬飼ったことないから知らないや」

「まあ犬の毛質なんかどうでも良いだろ」

「そうだねー。恭平、そのうち尻尾とか耳とか生えてくるのかな？」

「どうだろうな。つうか耳が生えたら四つになっちゃうぞ？」

「それもそうか。じゃあ耳毛とか生えてとんがるんじゃない？」

「不気味だな……」

鈴鹿と他愛もない話をしながら、八階にあるベッドへと行く。

既に皆寝ているようで、たくさんの寝息が聞こえる。

自分のベッドに潜ると、すぐに眠気が襲ってきた。

「それじゃ、恭平、おやすみ」

「ああ、おやすみ……」

心地良い感覚に包まれながら、意識を手放した。

苦しきで目が覚める。

目を開けると至近距離に鈴鹿の寝顔があり驚く。

俺の左腕を抱きしめ、足で挟んで寝ている。

ふと、昨日の鈴鹿の裸を思い出してしまう。

くそ、朝だから元気だ。

裸は忘れろ。

このままじゃまずい。

今すぐ離れねば。

体の向きを変えようとすると、背中に何かが当たる。

首だけで振り返ると珠子が寝ていた。

こいつら……セミダブルのベッドで三人で寝たら狭いだろうが！

違う、落ち着け、そうじゃないだろ。

軽く混乱しているようだ。

これからもこのようなことを続けられたら、どうなってしまうかわからない。

真剣に対応を考えねばならない。

まあ、俺だけ違うところで寝れば済むわけだが。

しばらく体を動かさずにいると、二人が目覚めたのでようやくこの地獄から抜け出すことができた。

本当に、朝は勘弁して欲しい。

いろいろとまずいのだ。

朝食を終え、皆で今日のミーティングをする。

「とりあえずは昨日の熊を片付けたい。そのまんま燃やしても良かったんだが、シロたちが食いたいそうだから解体しようと思う」

「熊肉、美味しいんですかね？」

「ちよつとたまちゃん。私、人を食べた熊とか食べたくないんだけど」

「う、そうでした……」

俺もそれをシロへと伝えた。

仲間を食った熊だがそれでも食うのか、と。

シロは、食えることで我らが繁栄すればそれが弔いになる、と良くわからない理論で述べてきた。

まあ、良いなら良いんだけど、とその話は終わったが。



シロたちが食うにしろ持つて行くにしろ、小さくしたほうが良いだろう。

六メートルを超える巨体の熊を唯一ケガのないシロ一頭で運べるはずがない。

「えー、解体方法とかは良くわからないから手探りでやろうと思ってるんだが……  
ん？ なんだ？」

俺が話している途中で、おずおずといった様子で手を上げる女性がいた。

名前はたしか……。なんだったか……。

ああ、そうだ。長谷川はせがわなおみ直美だ。

間違っていないと良いが。

「どうした、直美？」

「は、はい。えーとですね……」

良かった。名前はあっていたようだ。

「あ、あの、私、実は狩猟免許持っていますですね……。熊はやったことはありません  
が鹿と猪はあります……。一応、熊も勉強したのでできると思うのですが……」

「えー！ 凄いねー！」

「カッコイイです」

「一時期流行ってたよねー、狩猟系女子。見るのは初だけど」

「尊敬しちゃいます」

「は、はは、恐縮です……」

「凄じやないか。じゃあ熊の解体は直美が指示をしてくれ。俺も手伝うから」

各自が仕事に取り掛かり、俺も直美の手伝いを開始した。

包丁は大量にあるので大きいものや重いものも持つてきた。

熊の解体が始まった。

俺は、気軽に手伝うと言った自分を殴ってやりたい気持ちになった。

「違います！ もっと丁寧に！ ああ！ また破けちゃってる！」

「すみません……」

毛皮を剥ぐ作業だけで、既に疲労困憊だった。

熊が大きすぎるのもあったが、直美が思いのほかスパルタだったのだ。

そして、解体作業はかなりシヨックの連続だった。

肉をいただくということは、命をいただくということなんだなあ、と達観した気持ちになった。

「よし！ これで終わりです。あ、あの、恭平さん、お疲れ様でした……」

「はは。お疲れさまでした」

乾いた変な笑いが出てしまった。

遠くの方では、犬の遺骸を集めて火葬をしていた。

俺と直美以外の全員とシロで、犬たちの遺骸を集めてきたらしい。燃える火を座つたままジツと見るシロは何を考えているのだろうか。

何個ものバケツに入った熊の胃腸を持ち、その火へと投げ入れた。

さすがにシロも自分の仲間の血肉が入った胃腸は食いたくないだろう。

一晚経つとクロも歩ける程度にはなっていたので、シロたちが出発をすることになった。

熊の毛皮に肉や内臓などを包んでシロに持たせてやる。

きなこは珠子に抱かれたままで、特に何も思うところはなさそうだった。

なんともあつけなくシロたちは行ってしまった。

名残惜しいと思うのは人間だけなのだろうか？

きなこは女性たちをすっかりとメロメロにしまったようだ。

昼食後の自由時間、珠子がきなこへ芸を仕込んでいるのを見かけた。

「きなちゃん、お手！」

「アン！」（はい！）

「良い子だね。きなちゃん、おかわり！」

「アン！」（はい！）

「賢いね。じゃあきなちゃん……伏せ！」

「アン！」（はい！）

「わあ、良い子良い子。ほら食べて良いよ」

「アウン」（できたでしょ）

「そんなドヤ顔しないで食べて良いんだよ」

「クウ？ アン！」（たべる？ あ、おいしいやつたべる）

他の女性たちにもきなこは可愛がられている。

この調子で彼女たちの心を癒してあげてほしいものだ。

アニマルセラピーなる言葉を聞いたことがあるが、こういうことなのだろう。

その日の晩、皆へと明日の朝に自衛隊駐屯地へ向かうことを告げた。

熊の骨や血が外には置かれているから、それがゾンビ避けになってくれるかもしれない。  
い。

そもそもゾンビは俺が触れたものでさえ嫌がって逃げていくのだから、百貨店周辺に現れることもなさそうだ。

そう伝えると、皆ホツとしたような顔になった。

朝、駐屯地に行く準備をする。

左腕は包帯で巻いて見えなくしておいた。

太くなった腕が通らないので、長袖の左腕部分を切り取ってから着た。

そのままじゃ寒いので、コートの右腕だけを通し、左肩に羽織るようにして着る。こうすると左腕も見えなくなるので一石二鳥だ。

「それじゃあ、皆、行つてくる。いろいろと気をつけてくれ。鈴鹿、頼んだぞ」  
「うん、任せて。行つてらっしゃい」

『行つてらっしゃい』

皆の声に送られ、百貨店を出る。

まずは駐屯地でマキシーンの友人の居場所を聞き、それからそこへ向かわないといけない。  
ない。

かなり時間はかかるかもしれないが、それでもやるしかないのだ。

駐屯地でマキシーンの行く先がわからなければそこでゲームセットだが。

どうか情報を知る者が居てくれよ、と半ば祈るような気持ちで歩き出した。

## 第二十五話 宇宙人、再び

荒れ果てた道路を進む。

相変わらず放置車両の中にゾンビが囚われていたりする。

俺が横を通るときに大暴れだったが、何がそんなに嫌いなのだろうか。

前方に見えるゾンビも、俺の姿を確認すると奥へ奥へと逃げていつてしまった。

途中で懐かしい場所を見つけた。

俺の飢えと渴きを満たしてくれたコンビニだ。

入り口周辺にゾンビがたむろしていたので、近づいて追い払う。

駐屯地に手ぶらで向かうのもなんだ。

手土産のひとつでも持って行くか。

店内に足を踏み入れると、芳しい匂いに包まれる。

「うわあ！ 入ってきたあ！」

「ん？」

声のする方へ顔を向けると、まだ年若い高校生くらいの女性が居た。

尻餅をつき、俺から離れようと這いずるように後ずさっていく。

「おい、そんな逃げなくても別に取って食いやしねえよ」

「い、い、今、ゾンビ追い払ってたツスよね!? 何者なんスか、あんた!」

「何者って、まあゾンビに嫌われてる者だよ。それよりお前はなんでここに居るんだ?」

「え? あ、えつと、実は……」

いわく、家にある食べ物が尽きたので食料を求めて外に出たは良いものの、ゾンビに追われて命からがらここに逃げ込んだとのことだ。

不思議なことにゾンビはここに入ってくることはなかったという。

しかし入り口すぐはずつと立たれているため外に出ることも叶わず、ここに一週間も閉じ込められていたそうだ。

「まあ食料はいっぱいあったから良かったんスけどね」

「そうか」

きつとゾンビがここに入ってこなかったのは、俺がここで飲み食いをしていたからだな。

「俺はここで物資をいただいたら駐屯地へ行くつもりだが、お前は どうする?」

「行く! 行くツス!」

「そうか。じゃあ集める協力をしてくれ」

「うツス!」

また『有印絶品』のトートバッグに物を詰めていく。

女性がバッグを広げて持ち、俺がポイポイと物を入れる。

片手でやると面倒だったから、素直にありがたい。

トートバッグ二個分の物資はあつという間に詰め終わった。

ひとつずつ持ち、コンビニから出る。

遠くにいたゾンビも俺の姿を確認すると忌々しそうに去っていく。

そのゾンビたちの姿を見た女性が、口をポカンと開けていた。

「す、凄いツスね。無敵じゃないツスカ」

「そうでもないぞ。車くらいでかい猪や犬、あと立つと二階くらいある熊なんかもいたからな」

「そんなことになってんスカ……。恐ろしいツスね……」

駐屯地までの道すがら話をする。

女性の名は田中詩織<sup>たなかしおり</sup>。高校三年生の一八歳。

両親は既に死亡していて、安全そうな家に引きこもっていたそうだ。

しかし、いよいよもって食料が無くなり、外へと出てきて今に至る。

「どうやってあそこから脱出しようかいろいろ考えてたんスよー」

「そうか。無事で良かったな。少し近くに寄った方が良いな。ゾンビが増えてきた」



「うツス。失礼しまーす」

密着しすぎで歩きにくい。

むしろこいつ俺のことを横に押しながら歩いてきやがる。

「おい、少し離れろ、押すな。歩きにくいだろうが」

「え、でも近くに寄れって言ったじゃないツスカ」

「横を歩けば良いんだよ。考えればわかるだろ」

「えー、はつきり言ってくれなきやわかんねツスよ」

「ああ、そうかい。そりやすまんな」

どうして、こう、若い子と話すのは疲れるのだろうか。

駐屯地に近づくにつれゾンビの数は増していったが、いつかの避難所みたいに囲まれて  
いるわけでもなかった。

少し歩くと正面の門が見えてきた。

遠くの方ではなにか音楽が鳴っているのが聞こえる。

俺から逃げたゾンビはそちらへとフラフラ歩いていった。

駐屯地の奥には高い建物があった。

その窓から人がこちらを見ている。

手には双眼鏡のようなものが握られている。

結構な距離があるはずなのに、俺の目にははつきりとその姿が映っていた。

門の前まで行くと、詰め所の中から人が出てきた。

長い銃が紐で肩にかけられている。

「こんにちは。よく来られましたね。避難をされて来た方ですか？」

「ああ、どうも。俺は避難じゃなくて人を探しに来たのですが」

「人探しですか。何はともあれ外は危険です。中へどうぞ」

「ありがとうございます」

詰め所の中からさらに二人の自衛隊員が現れ、幾重いくえにも閉じられた門を開けてくれた。

この人らにマキシーンの居場所を聞けばわかるのか？

どうしたら良いのだろう。

門の中に入るとバッグの中身や服などを軽く触られ身体検査をされた。

包帯をしていた左腕を触られそうになり、少しだけヒヤリとする。

「腕はどうされたのですか？」

「えっと、折ってしましまして、ギプスで固定しています」

「そうですか。良ければ医師の元へご案内しましょうか？」

「いえいえ、これもちゃんと医者の人に処置してもらったので、ご心配にはおよびません」

もし、この腕が知られたら、最悪殺される可能性もある。

なんとしてでも隠し通さなければいけない。

「それでは奥に向かいましょう」

「ありがとうございます。あ、この子は途中で合流したんですけど避難の受け入れは可能ですか？」

「ええ、可能ですよ。そちらの方を先に居住区へのご案内しましょうか？」

「お願いします」

俺が自衛隊員に頼むと、詩織が「ちよ、ちよっとお兄さん！」と慌てたように言った。

「お兄さんの用事を先に済ませましょうよ。私のことはあとで良いツスよ」

「そうか？　じゃあそうしようか」

俺の用事を済ませるにしても数十分で終わるだろうし、どちらでもいいのだが。

「ここに、山口、菊間、小池という名前の自衛隊員はいますか？　前に市役所で世話になったことがあって」

「少々お待ちください」

自衛隊員の方が無線機になにやら話しかける。

すぐにザザっというノイズの音と共に返事が返ってきた。

「菊間がおりましたので、こちらへ向かわせております」

「わざわざお手数をかけます」

金網のフェンスに囲まれた道を歩く。

この金網があれば、もしゾンビに正面の門を突破されても時間稼ぎができそうだ。

よく考えられている。

駐屯地内は避難所になっているとは思えないくらいに音がしなかった。

金網の向こうは居住区になっているそうだが、本当に人がいるのかと思えるくらいに静かだ。

耳に意識を集中してようやく人の話し声が聞こえた。

しばらく歩いていると突然横から「お兄さんじゃん！」というどこかで聞いた声があった。

声のしたほうを向けば見たことのある顔があった。

金網を掴みガシャガシャと揺らす様は動物園の猿のようだった。

「よう、結愛か愛理のどっちか。足は治ったのか？」

「結愛だし！ 足治った！」

「うわあ！ お兄さんじゃん！ なんでここにいんの!？」

双子の片割れも来て、揃って金網を揺らし出す。

「愛理！ お兄さんだよ！」

「知ってるし！」

ガツシヤガツシヤと金網を揺らして喚く双子は、自衛隊員にかなり厳しめに注意をされて、騒ぐのをやめた。

金網の通路の奥から、これもまた見たことのある顔が現れた。

「まったく、アホどもめ。何回言っても騒ぎやがる。よう、恭平。久しぶりだな」

「ああ、菊間か」

「お前に押し付けられたこいつらには手を焼いているよ……」

双子の様子を呆れたように見ながら菊間がそうこぼした。

ここまで案内してくれた自衛隊員と菊間が一言二言交わすと、隊員たちは元来た道を戻って行った。

「お兄さん、早くこつち来てよ！」

「そうだよ！ 話そうよ！」

「ああもう、うるせえな。あとでな」

「今が良い!!」

「聞きたいこといっぱいあるし！」

喚くなど怒られたばかりだというのに、こいつらは……。

「お前ら、静かにしろ。あと恭平、ついて来てくれ。座って話せる場所へ行くぞ」

「ああ、わかった」

「愛理に結愛、お前らも来て良いぞ。そのかわり静かにしろよ」

「よっしゃー！」

「さすが葉子、話がわかるしー！」

「呼び捨てすんなっての」

三人の仲は悪くないようで、少しだけ安心した。

金網の通路の奥に、ひとつの平屋建ての建物があった。

そのの一室に通され、今度は菊間に簡単な身体検査をされる。

俺の左腕も調べられ、腕を触った菊間が鋭い目つきをするが何も言わなかった。

部屋の隅には監視カメラが取り付けられており、もしバレたら拘束されかねない。

菊間があえてスルーをしてくれたのはありがたかった。

詩織の検査も手早く終わらせ、トートバッグの中身となった。

菊間が酒瓶を見たときに唾を飲み込んだ音を俺は聞き逃さなかった。

全ての検査を終えると、菊間が部屋のドアを開けて、なにやら手で合図を送る。

少しするとドアの外からバタバタと走る音が聞こえた。

「お兄さん！」

「お兄さん！」

愛理と結愛のタツクルをもちに食らうが、なんとか耐える。

二人はしばらく俺をぎゅうぎゅうと締め付けると、やがて体を離れた。

「お兄さん、死んじやったと思つてたよ！」

「そうそう！ 死んだんじやないの!?!」

「それじゃ死んでほしいみたいになつちやつてるし！」

「あはは、ウケる」

ヤバい。この二人のテンションについていけない。

いろいろと話したいことはあるが、監視カメラに見られているので迂闊なことは言えない。

「俺はそう簡単に死なねえよ。それより二人とも元気そうだなによりだ」

「元気だし」

「でもここありよりのなしって感じでさー」

「あーね。ちよつと話してると秒で怒られてがんなえだし」

「イキつてるやつ多すぎ。ガチでしょんどい」

なるほど、わからない。

相変わらず宇宙語を話す。

「ほら、恭平が困ってんだろ。お前らとりあえず座れよ」

菊間に促うながされるまま席につく。

「恭平、お前今何してんだ？」

「駅の方に東部百貨店あったろ。そこを拠点にして女性十人くらいと一緒に暮らして

よ」

「そうか、なるほど……」

菊間は何か考えている様子だった。

「あのよ、コミュニティには秩序維持の名目で自衛隊員が派遣されることになってんだ。

まあ大小で人数は変わるんだけど」

「へえ。ああ、だから市役所に四人がいたのか」

「まあ、そういうこと。あそこは人が減ったから今は小池さんと斉藤だけ残ってんだ」

小池さんはあの小柄なムキムキの人だ。

斉藤つてのは忘れてしまったが、あそこにいた背のでかいヤツのことだろうか。

「でさ、恭平が良かったら百貨店にはあたしが行こうかって」

「お？　おう、それは心強いな。是非頼むよ」

自衛隊員がいてくれれば女性たちの不安もなくなるだろうし、とてもありがたい。



マキシーンの情報聞きに来ただけなのに思わぬ副産物を得た。

「それで、聞きたいことがある。四ヶ月くらい前にここに来た外国人女性を探している」

「ん、名前は？」

「マキシーン・ブルックス。友人を助けたいと協力を求めに来たはずなんだ。その友人の居場所に一緒にいる可能性が高くてな」

「ここには既にもいないのか。わかった、聞いてみる。少し待っていてくれ」

そう言うのと菊間は部屋を出て行った。

時間がかかるかとも思ったが数分のうちに帰ってきた。

「わかったぞ。そのマキシーンってのが助けを求めた場所がアメリカ軍の基地だそう  
だ」

「アメリカ軍の基地？ それってアメリカ海軍があるあそこか？」

「ああ、あそこだ。命令も許可も無く敷地内に入れないからと断ったそうだ」

「なるほど。それだけわかれば十分だ。ありがとう。もう戻りたいんだが、良いか？

残してきた奴らが心配でな」

まだ百貨店を出て数時間しか経っていないが、どうにも落ち着かない。

もつと信じなければいけないのだろうが、それでも心配をしてしまうのは仕方ないだ

ろう。

「ああ、わかった。準備があるから少し待て。愛理と結愛はどうすんだ？ 恭平のコミュニティに参加するならそう伝えておくけど」

「行くに決まってるし！」

「置いてかないでよ！」

「じゃあ準備して来い。そっちのお嬢ちゃんは何？ ここに居たいなら受け入れるための手続きとかやっちゃまうけど」

「あ、私もお兄さんのところ行くッス。なんかここ怖い人多そうだし、お兄さん以外女性なら安心かなーって」

「わかりみが深いね。お兄さん、ゲロ紳士だし」

「マジ丑だけどねー。激おこお兄さんはやばたにえんだったよ」

「マジッスかー。意外と怖い人なんスかね？」

「それが優しみが深くてだねー」

良いから宇宙語話してないで準備して来いよ、お前ら。

部屋から出て行こうとする菊間にトートバッグを渡す。

「これさ、隊員の人らに配ってくんねえ？」

「おま、勿体ねえだろ。酒とか入ってたじゃん」

「缶詰も酒も俺の拠点には山ほどあるから良いんだよ」

「んじや、ありがたく。正直参ってきちまつてるヤツもいるからな。息抜きができるから助かるよ」

「そう言ってもらえるなら持つて来た甲斐があるよ」

日々頑張つてくれている自衛隊員たちがこれからも頑張つていけるのなら安いものだ。

しばらく待つと、菊間と双子の三人がやってきたので部屋を出た。

建物を出るときに隊員たちが、酒瓶やトートバッグを片手に持ち、一糸乱れぬ様子で俺に敬礼をしてきたときは思わず苦笑いが出してしまった。

ちゃんと皆で分けて食べてくださいね。

金網の道を出口へ向かつて歩いていけると、ふと視界の端に入ったそれに俺の目は釘付けになった。

美香が着ていたものと同じ、プロテクター付きのバイクジャケットを着た女性がいるた。

というよりもあれは美香のジャケットだ。

「おい、あんた……」

「恭平、行こう」

俺の視界を遮るさかするように菊間が前に立った。

「後で詳しく話す。今は押さええてくれないか」

「あ、ああ……」

呆然としたまま道を歩くと、やがて駐屯地入り口へと辿り着いた。

菊間が他の隊員となにやら話をしたあと、俺たちは外へ出た。

駐屯地近くにはゾンビはいないが、菊間はあたりを警戒し、双子はビクビクしながら歩いている。

「あー、大丈夫だ。俺たちはゾンビに襲われない。ほら逃げていくだろうか？」

「どうなってるんだ……?」

遠くの方にいたゾンビが更に遠くに逃げる様を見て菊間が首を傾げていた。

「それよりも教えてくれ。あの女はなんだ?」

「ああ、話すよ」

菊間と双子が詳しく話してくれた。

あの女は一週間くらい前に避難してきた。

ひどく男を怖がっていて、近づくだけで暴れて大変だったそうだ。

美香の服を着ているから問いたただしてみれば、自分を庇って囁まれたと言っていた。

涙をポロポロと流しながら話すその姿を見て、本当のことなのだと思えた。

「お兄さんも死んじやったと思つてたよ！」

「美香さんも生きてるの？ どこにいるの？」

どこにいる、か。

きつと今頃はマンションにいるんじゃないか。

俺が答えられないでいると双子が息を呑んで黙った。

「実はな、俺もゾンビに噛まれたんだよ」

「ああ、春から聞いた。春を庇つたんだつてな」

春？ ああ、山口の下の名は春だったか。

まだ氣に病んでいるかもしれない。

駐屯地に行ったときに無事だったと言えれば良かったんだが。

「そういえば山口の姿を見なかったがどこに？」

「五日前に脱走した」

「脱走つて」

「氣がついたらいなくなつてたんだよ。ご丁寧に書置きもあつたよ。『探さないでください』つて」

「なんだそりや。旅に出ますつて書かれてなかつたか？」

「はは、無かつたな。まああたしが恭平のそこに行くのは建前で本当は春を探すために」

出てきたんだ。上が『脱走したヤツに裂く人員は無い』って言うからさ。利用したみたいでごめん」

「別に良いさ。じゃあ俺も秘密をひとつ打ち明けようかな」

腕の包帯を外していく。

露わになった化け物の腕を、皆に見えるように掲げる。

「ゾンビに噛まれたらこうなった。なんでかは知らない」

「え、ええ……？」

菊間は困惑した顔でそれ以上の言葉が出てこなかった。

腕をしまおうかと思っいたらガシッと誰かの手に掴まれる。

目をきらきら輝かせた双子だった。

「なにこのかわたんなの！」

「モフリみがすごくてね！」

俺の腕を握ったり撫でたり、頬ずりをしたりしてくる。

詩織は離れたところでモジモジとしていた。

触りたいけど触れないといった様子だ。

「ああー！　これはやばたんだわー！」

「よきよき……。この腕すこだわー」

「お前ら、怖くないのか？」

「怖いわけないし！」

「お兄さん、かみつてるよ、これ……」

双子はしばらく腕を触ったり撫でたりしたあと満面の笑みで離れていった。

犬とかが好きなのか。

シロがいたら喜んだろうな。

残念ながら百貨店にはきなきしかない。

きなきでも良いのか。あれもフワフワモコモコだ。

左腕を詩織の前に出すとおずおずと握り「うわあ、感動ツス……」と言っていた。

菊間の前にも手を出すと、恐る恐る握ってきたので握り返す。

菊間はビクつとしたあとすぐに手を引つ込めた。意外とビビりなのかもしれない。

「まあこの腕について知ってそうなのがマキシーンって女性なんだ」

「はあ、なるほど……。なんだか世界は私が思ってるよりもヤバイ事になってんだな」

「百貨店ついたらもつと驚くぞ。体長六メートルを超える熊を仕留めてな。生首だけ置いてあんだ」

「どういうことなんだよ……」

菊間たち自衛隊は未だに巨大な獣には会っていないのか？

生息域などがあるのかもな。

俺の拠点としてゐる百貨店は駐屯地と比べて山が近いし、獣が出てきやすいのかもしれない。

「それで、百貨店についたらすぐにアメリカ軍の基地に行くのか？」

「いや、さすがに夕方から行く気にはならないな。明日の朝には出ようかと思っている」

「ええー！ 話したいこといっぱいあんのに！」

「そうだよー！ お話しようよー！」

「俺以外と話してくれ」

「冷てーし！」

「なうしか話せないじゃん！」

「かまちよかまちよかまちよ！」

「お兄さーん!!」

お前らと話すときれいなんだよ……。

この宇宙人たちと話して鈴鹿がキレイなけば良いが。

百貨店への道中、俺はそんな良くわからない心配をしていた。



## 第二十六話 共同体

百貨店には日が沈む前に到着した。

道中、ひたすら双子が話しかけてきて辟易へきえきとした。

宇宙語は本当に理解ができない。

しばらくすると双子は俺に飽きたのか、詩織と三人で話をしていた。

高校生同士、話が弾むようで終始明るい声が響いていた。

大声で騒いでいたときはさすがに菊間に怒られてはいたが。

百貨店に近づくにつれ、知らない人間の匂いがあることに気がついた。

この脳髓に突き刺さる芳しい匂いは、どこから漂っているのだろう。

ふらふらと匂いの元を探していると菊間たちに変な顔をされた。

たしかに百貨店を目前にして、どこかへふらふらと行ってしまつたら変な顔のひとつもするか。

言い訳じゃないが、ついて来る女性たちへと説明する。

「なんだか、人の気配というか、匂いがしてな」

「匂いって。恭平お前、犬じゃないんだからさ」

「でもかわたんな手してるし」

「モフリみ深いからワンチャン犬もあるっしょ」

「あー、わかるッスー」

あいかわらず若い子らが何を話しているのかがわからないが、とりあえずは納得してくれたと信じて匂いの元を探す。

だんだんと濃くなっていく匂いを辿っていくと、たくさんの放置車両がある場所へとついた。

そのうちのひとつのワゴン車から、匂いは発せられている。

スモークガラスで中の様子はわかりにくい。

運転席と助手席には何もいない。

後部座席はカーテンがかけられていて見えない。

「これだな。何が出てくるかわからない。少し離れていてくれ」

「あんたたち、私の後ろに来な」

俺から二メートルほど距離を開け菊間が立ち、高校生らをその背に庇ってくれた。

何があっても対処はしてくれるだろう。

スライドドアに手をかける。

鍵がかかっている。

車が揺れた。

話し声が聞こえる。

「……か来た……」

「どうし……開け……」

女の声だ。

人数は二人か。

「おい、俺たちに敵意は無い。後ろには自衛隊員もいる。お前たち、まだ朝にはいなかったな。どうしてここに来た？」

返事は無い。

窓をノックする。

中で人が動いたのか車が揺れた。

「なにこの手……」

「危ないよ。絶対出ちやダメ……」

「でも……」

腕を見る。

ノックをしたのは毛まみれの方の手だった。やらかしてしまった。

それにしても『危ない』か。まあ普通はそう思うのだろうか。

中の女たちは出てくる気配がなさそうだ。

「俺たちはその百貨店を拠点にしている。避難受け入れもしているから、気が変わったら出てくるといい」

「そう言い残し、踵かかとを返す。

五歩も歩かないうちにドアの開く音がした。

濃密で芳醇な匂いと共に、二人の年若い女性が車から降りてきた。

「あ、あの、助けてください……」

「ここにすれば助けてくれるって聞いて……」

誰に聞いたというんだ？

まさか奈津実たちをここへ導いた謎の女か？

「それは誰に聞いたんだ？」

「わ、わかりません」

「顔を見てなくて」

「全身黒い服を着ていてフルフェイスのヘルメットをかぶっている女か？」

「そうです……！ その人です！」

「キョーハイって人を頼りなさいつて言っていました」

謎の女は俺のことを知っているのか？

俺と面識のある女……。

まさか……いや、それはありえないだろう。

頭の中に浮かんだ考えを振り払い、二人の顔を見る。

怯えたように俯く二人は、まだ少女と言っても良いくらいに若かった。

双子より若いか、同じくらいに見える。

俺がジッと見ていると二人は可哀相になるくらいに震えだした。

「恭平は俺だ」

「あ、あの、えっと、助けてください……」

「お願いします」

「ああ、大丈夫だ。心配ない。詳しくは中で話そう。ついて来てくれ」

「は、はい！」

「わかりました」

こういったやり取りをしているときは、さすがの双子も空気を読んで静かだった。

だが、百貨店の入り口へ歩く僅かな間で、二人にペラペラと話しかけてはきやいきやいと騒いで菊間に怒られていた。

学習をしないのだろう。

ゾンビ避けとして置いてある熊の頭を見て、全員が息を呑んだのがわかった。

双子に「ほら、モフリてえんだろ。行けよ」と言ったらものすごい勢いで憤いきどおっていた。宇宙語で抗議してきたが半分程度しか理解できない。

「どうやら死体じゃダメだったようだ。」

まあ死体だろうが構わずに抱きついていたら正気を疑うところだったが。

百貨店入り口のシャッターは閉まっているが、呼び出しがあるので心配は無い。

壁に這わされたロープを軽く引つ張る。

すぐに八階の窓が開き、誰かが顔を出した。

あれは珠子か。

「恭平さーん、おかえりなさいい」

手を振る珠子に同じように手を振り返す。

「ただいまー」

「今、鈴鹿さんが行きましたのでー」

「わかったー」

声を張つてのやり取りとなる。

普通にインターホンがほしくなるな。

糸電話のようなものでできたりしないか？

昔、空飛ぶ城のアニメで見た、空賊船の連絡方法でも良いな。

あの色んなパイプで繋がっているやつ。

そんなことを考えていると入り口のシャッターが開き始めた。

シャッターが開ききると鈴鹿が立っていて、こちらをみて驚いた顔をした。

「また、ずいぶんと可愛らしい子ばっか集めてきたね」

「高校生だ。あまり怒らないでやってくれよ。皆に紹介もしたいし、一度レストランに集まろうか」

「なんで怒る前提なのかはわからないけど集まれば良いんだね。皆を呼んでくる」

「ありがとう、助かる」

百貨店内で思っている作業をしている皆の居場所を、鈴鹿は把握しているようだ。

エスカレーターで二階に上っていく鈴鹿を見送り、菊間たちを連れて九階を目指す。

「それじゃあこっちだ。ついて来てくれ」

エレベーターで九階へ行きレストランへ。

既に珠子が全員分の紅茶カップをテーブルに用意している。

上から見て人数を数えたのか。

こういう気配りができるのが珠子の良いところだ。

紅茶の他にもインスタントのコーヒーやココアも用意しているのが心憎い。

レストランのテーブルを四つ使って、ようやく全員が座ることができた。

俺を含めて総勢十五名。

俺以外全員女性だと、どうにも居心地が悪くなるのは仕方が無いことなのか。

ひとりずつ名前を言って自己紹介をしていく。

これだけ居ると覚えるのも大変そうだが、皆で暮らしていくうちに自然と覚えるだろう。

車の中で見つけた女性は、眼鏡をかけたのが遊佐涼子。

金髪がプリンのようなになっているのが原田千恵。

共に十六歳の高校一年生だそう。

自己紹介を終わらせると、皆が自然と歓談し始めた。

不和を生じさせないためにはコミュニケーションを多くとることが大事だ。

引っ込み思案な女性や人見知りをしているような女性へと積極的に話しかける双子の

存在が、とてもありがたく感じた。

双子のコミュニケーション能力の高さに少しだけ驚いていたりもする。

物怖じしないのは、こういったときに強みになるな。

自己紹介のときに年齢も言ったのだが、菊間が俺とタメで驚いた。

見た目も若く、敬語が苦手という言動的に二十歳かそこらだと思っていた。

菊間の年齢を聞いて、奈津実と明穂が仲間ができたと喜んでいた。



アラサーと呼ばれる年齢なのは俺たち四人しかいないからな。

奈津実たちと同じ運送屋で働いていた深冬みふゆは二十二歳、友里なんかは双子と同じ十八歳だ。

香織と直美は鈴鹿と同じ二十一歳。双子に話しかけられて挙動不審になるのは俺と同じ心境だからか。

俺と同じなら、宇宙語がわからないか双子の勢いに引いているかのどちらかだろう。もしくは両方の可能性もある。

「さて、詳しいルールなんかもあるから皆しつかり覚えてくれ。珠子か鈴鹿に聞けば教えてくれる」

俺に聞いても教えられない。

むしろ俺がルール違反をして怒られる側だ。

前にジャーキーを食べ過ぎたせいで珠子に怒られたのだ。

詳しいルールブックなんかも珠子が作ってくれている。

ほんと珠子には足を向けて寝られないな。

皆の様子を観察していると横から鈴鹿が「そういえば、恭平さ」と話しかけてきた。

「例の人の居場所はわかったの?」

「ああ、アメリカ軍の基地らしい」

「え、あの空母とかあるところ？」

「そこだ」

まあ鈴鹿の言う空母は、アメリカでゾンビパニックが起きてすぐに帰ったとニュースで報じられていたが。

「明日の朝に出発しようかと思っている」

「そっか。見つかるの良いね」

「そうだな」

「ていうか新しい子たち、恭平の腕見ても怖がらないね」

「京子と千恵は怖がっていたぞ」

「いきなりそれ見たら怖がるでしょ。今は平気そうじゃん」

たしかに既に二人は俺に怯えた様子もなく、普通に皆と話している。

「ちよつと、それ貸して」

「ん？ 手か？」

「うん。触りたい」

鈴鹿の突然の要望に驚きつつも、言われるがままにテーブルの下から左手を出す。

それを鈴鹿が両手で握ったり撫でたりしながら「私はこれ好きだけどね」と言った。

「ほら、ここ大きいけど肉球になってんの。わかる？ これ」

「ああ、やめてくれ。こそばゆい」

「毛もふわふわして気持ちいいし、沈んだ指があたたかいし。これ抱き枕として最高なんだよね」

「お前、だから俺のベッドに入ってくんのか」

「ま、それも理由のひとつかな」

いろいろとまづいから本当にやめてほしい。

撫でたり握ったりする鈴鹿に腕を預けていると、双子の片割れの「あー！」という声  
が聞こえた。

「鈴鹿さんずりーし！ あたしもモフリたいのにー！」

「あたしもー！ 独り占めダメっしょ！」

「あ？？」

「あ、なんでもないです」

「すんません」

ドスの効いた鈴鹿の声に、双子は一瞬で沈静化した。

これ、もう双子の面倒は全部鈴鹿に任せたいな。

菊間もそう思ったのか「おお、やるな」なんて言っている。

「さて、それじゃあ少しミーティングをしよう」

皆が静かになったタイミングで話を切り出す。

人が増えるにつれて必要となってくるもののリストアップや、優先的にやることなどを話し合う。

我が拠点の台所奉行である珠子が、食糧確保が急務だと述べた。

今あるものだけじゃ、いずれ食べ尽くしてしまう。

畑や田園での生産や、乳を出す牛か山羊、卵を産む鶏などの入手。

肥料や飼葉なども作らなければならぬらしい。

正直どこに行けば手に入るのかもわからない。

畑や田んぼをやるのなら、拠点を移すことも考えた方が良いのかもしれない。

必要そうなもの、それらが手に入りそうな場所をリストアップしてもらい、機会があれば探すということでは話は終わった。

この拠点での役割も決めておいた方が良さだろう。

皆の得意なこと、やりたいことをリストにまとめ、きちんと仕事を割り振るべきだ。そんなこんなでミーティングをしていると、割と良い時間になってしまった。

まずは夕飯を食べそれから続きを話そう。

新しい人たちの寝床も用意しないといけないな。

「さて、とりあえずはここまでにするか。腹も減っただろうし夕飯にしよう」

「そうだね。じゃあ料理が得意な人はたまちゃんの手伝いをしてあげて。あ、新しく来た人は寝室を作ろうか」

衝立ついたてで区切っただけのスペースだが、これがあるかないとじゃ全然違うとのことだ。

自分だけのプライベートスペースがあると、それだけで心に余裕ができるそうだ。

鈴鹿のわかりやすい指示に従い、皆が動き出した。

プライベートスペースは、十畳ほどの広さがガムテープを床に貼ることで区切られている。

女性たちがスケールで長さを計りながらきっちりやってくれた。

色が違うガムテープのところは通路になっていらく、そこには家具等は置いてはいけない決まりだ。

俺が何もしなくてもいろいろとやってくれる皆の存在が本当にありがたい。

家具をまとめて置いてある場所へ皆を案内する。

ここから棚やベッドなどの好きな家具を選び、自分のスペースへと運ぶのだ。運ぶのは主に俺だが。

スペースに入るのなら好きなだけ家具を選んでも良い。

ちなみに鈴鹿のスペースはベッドの他にソファとサイドテーブルのみだ。

そして俺のスペースとの間に衝立ついたては無い。

鈴鹿いわく「この方が広くて良いじゃん」だそうだ。

この八階のフロアを将棋盤として見た場合、俺の位置は『1-1 恭平』となるわけだ。そして『2-1 鈴鹿』となつて『1-2 珠子』となる。

「あ、このベッドかわたんなんだけど！ あたしこれー！」  
「とりまやばたん」

宇宙人二人がまつさきにベッドへと駆け出した。

この二人が率先して動くことにより、他の人が気後れしないのは良いことなのだろう。

うるさいのがなんだが。

「お兄さんの場所どこ？」

「あたし横がいー。秒で腕モフレっし」

双子が鈴鹿と珠子の居場所を狙ってきた。

「そこは私とたまちゃんが既に居んの。あんたらはうるさいからダメ。あつちで女子高生で固まりなよ」

「あはこ」

「おけまるです」

鈴鹿の言うことは素直に聞く。

これは良い双子ガードだ。

「うちの穴熊の囲いはかなり強固なようだ」

「穴熊？ なにそれ」

「熊なら外いたよねー」

「あれモフレとかねーわ」

将棋の陣形のひとつなんだが、まあ伝わるわけもないか。

若い女子らが将棋に興味を示すはずもない。

そう思っていたが横で聞いていた女子高生の涼子が「穴熊にはまだ足りていない……  
ならば四間飛車で……」と呟いたのが聞こえた。

将棋を知っているようだし、今度おじさんと手合わせしようか。

というか、意外と鈴鹿がキレずに双子の対応をしていることに軽く驚く。

有無を言わず平手打ちでもしそうなイメージだったが。

女子高生は総勢六名いる。

愛理と結愛の双子に、詩織と友里が高校三年生組。

車の中で見つけた千恵と涼子が高校一年生組だ。

仲良くしてくれれば良いが。

女性らの手伝いをしていて、それぞれ選ぶ家具に特色があつて面白かった。

本棚や机を置く人もいれば、テレビにブルーレイレコーダーと安楽椅子を選ぶ人もいた。

菊間は電動マツサージチェアを自分で運んでいたのを見かけた。

そんなに疲れているのか。

一時間ほどで皆の寝室は完成した。

夕飯はビーフシチューと、あさりのトマトピラフだった。

ビーフシチューの肉は柔らかかトロトロで、なんで短時間でこんなに美味しいものができるのか珠子に聞いてみた。

「本当は一晩くらい煮込みたかったんですけど。今日は圧力鍋を使ってしまいました」  
「使ってもいいんじゃないのか？　こんなに美味しいんだから」

「味がちよつと違うんですね。今度作りますので、違いを味わってみてください」  
珠子なりのこだわりがあるようだ。

俺がその味の違いに気がつくかどうかはわからないが、楽しみではある。

「やべーよ、恭平。これは美味すぎる」

「なんだ菊間。自衛隊の飯はまずいのか？」

「いや、普通に美味しいよ。ただこれ食ったらもう食えなくなるかも」



当たり前のように食べていたが、珠子の料理はそうとうなものようだ。見れば双子も女子高生たちも、黙々と一心不乱に料理を口に運んでいた。というか、全員がそうだった。

珠子は皆の様子を見てにこにこしていた。

美味しいということをこれだけ表現されたら笑顔にもなるか。

作った料理を美味しいと言ってもらうのは嬉しいものだよな。

珠子はきなこにも手作りの餌を与えていた。

ドッグフードで良いんじゃないかと提案したが、すげなく却下された。

栄養がどうか、バランスがどうか、犬にも必要なことなのかね？

俺にはわからない。

知らない人がいたからか隠れていたきなこだが、餌の匂いと珠子の呼びかけにより姿を現した。

「ぎゃあー！ モフリみ凄いのキター!!」

「やばたにえんじやね！ かわたん過ぎてつらたんなんだけどー！」

双子が叫びながら席を立つと、きなこが体をビクツと強張らせた。

そのまま双子がきなこの方へ行こうとすると、「お二人とも」と背筋がひゅつとする珠子の声が聞こえた。

珠子は目が笑っていない笑顔で双子を見ている。

「お行儀が、悪いですよ？」

「あ、は、はい」

「すみません……」

「座って、食べましょうね？」

「はい、座ります」

「ごめんなさい」

なんと。

鈴鹿以上に双子を押さえるのが上手いのか。

菊間が「やる……」と呟いたのを俺は聞き逃さなかった。

食後のデザートにバニラアイスと、ガトーショコラが出てくると、女性たちから歓声があがった。

冷凍ケーキは、人が増えたときやおめでたいときにしか出さないという謎ルールがあった。

なるほど、と思う。

こうやって美味しいものを皆で囲って食べれば、仲間意識も芽生えるというものなのだ

ろう。

俺も食べるべきなのだが甘いものは苦手なので、断つてからレストランを出た。

「うわー、きなこたん待つてつてば！」

「どこ!? どこ行つたの！」

レストランの外では双子がデザートも食べずにきなこを探し回っていた。

「お前ら、ケーキとアイスあんど。食わないのか？」

「ケーキ!? なにそれ！」

「アイスは何味? あたしマカダミアナッツがすこすこのすこなんだけど」

「知らねえよ。つうかきなこ追い掛け回すなつての。可哀相だろうが」

「だつてー、モフらせてくんないからー」

「ガンダで追いつかないとか」

「追い掛け回すから逃げんだよ。可愛がりたいなら怖がらせんじやねえよ」

「撫でたいんだもんよー！」

「モフリてー！」

「まあ程ほどにしてやれよ。つうかアイス溶けんぞ」

「うえー、やばたんじやん。愛理戻ろつか」

「でもケーキと混ぜつてワンチャン美味いんじやね?」

「それな」

宇宙人たちは大人しくレストランへと戻っていった。

酒の貯蔵庫となつている中華レストランへ行き、酒瓶ひとつとグラスを拝借する。

それから俺の寛ぎスペースである八階のベランダへと向かう。

今日も月は優しい光を注いでいる。

なんとも心地よい。

持ってきたタブレットの地図アプリを開きアメリカ軍の基地までの時間を調べる。

歩いて四時間ほどと出た。

往復八時間かかるとなると、日帰りはキツいか。

この基地には以前フレンドリーシップデーというイベントのときに一度入ったことがある。

俺と美香と義妹の花乃ちゃんの三人で、ひたすら肉を食いビールを飲んだ覚えがある。

ビールがもの凄く安く、どれだけ飲んだのか忘れるくらいには飲んだ。

さんざん飲み食いしたあとに、お土産で大量のトウインキーを買ったりアンソニーピザを買ったりした。

締めめのファンネルケーキは、美味そうに食べる二人を見ただけで胸焼けがした。

基地というより一つの街のようだったアメリカ軍基地。

その中からマキシーンを見つけることができるのだろうか。

死んでいるとは思わないが、広い基地の中から見つけだすのは至難しなんの業わざだろう。

そもそも友人がそこに取り残されていて、自衛隊に助けを求めるとはどのようなものか？

そこにマキシーンが一人で行ってなんとかなるのか？

アメリカ軍の空母は本国に帰ったが、残った人々もいるだろう。

自衛ができないほどに壊滅的なのか？

情報が不足すぎている。

行ってみなければ何もわからない。

それこそ、出会った人に腕を見られて、化け物と思われて銃で撃ち殺されてもおかしくないだろう。

どれだけ危険かはわからないが、必ずマキシーンを見つけ出してこの腕について聞き出さなければならぬ。

そう決意をして、グラスの中身を飲み干した。

## 第二十七話 米軍基地

俺が米軍基地へ行くことを皆と相談した結果「珠子の手作り弁当を持って行ってはどうか」となった。

もし物資が乏しくとほて飢えているときに珠子のご飯を食べたのなら、かなり友好的な態度になるだろう、ということらしい。

マキシーンは知り合いだがその友人は他人だ。

手っ取り早く友好関係になれるのならそれに越したことはない。

珠子の料理にはそのような力もあるのだ。

翌朝。早くから起きて弁当を作ってくれた珠子に礼を言いながらポストンバッグへと弁当箱を詰めて行く。

弁当箱というか筒状の保温ランチジャーが五個に、保温サンドイッチケースが三個。

保温ランチジャーにはシチュー、ピラフ、エビフライに帆立フライなどが詰め込まれている。

ハンバーガーやローストビーフサンドやトンカツサンドも温かいまま持って行ける。

きつとアメリカ人の二人なら気に入ってくれるだろう。

「恭平、私も行きたい。やっぱり一人で行くなんて無茶だよ」

「ダメだ。昨日も言ったが人探しにどれくらい時間がかかるかわからない。鈴鹿には菊間と二人で留守の間ここを守っていてほしいんだ」

「……わかった。でも絶対に無事に帰ってくるって約束してよね」

「ああ、約束する」

俺が動けない事態に陥ったら女性たちを守ることができなくなる。

それだけは避けなければならない。

下手したら長期間ここを離れることになる。

その間の守りの要が鈴鹿と菊間だ。

鈴鹿は女性たちのまとめ役で、菊間は銃を持っている。

「鈴鹿に頼りすぎなのはわかっているが、頼るしかないんだ。俺の留守の間はここを任せただから。頼むぞ」

「わかつてるよ」

鈴鹿は不承不承ながらも頷いてくれた。

いろいろと準備をしていたら、出立が朝の九時過ぎになってしまった。

正面入り口にて女性たちが勢揃いで見送りをしてくれた。

双子は相変わらずきまぐれを探しまわっていたが、そうやって追いかけるから逃げられ

るのだとなぜ気がつかないのか。

ここから米軍基地まで歩きで五時間ほどかかる。

昼過ぎについて、すぐにマキシーンを見つけて帰ってきたとしても夜になるだろう。

そもそも広い基地内ですぐに見つかる訳もない。

こここの拠点に何かが起きるかもしれないし、滞在期間は長くても四日だけと決めておこう。

せっかく弁当を用意してくれたが、これは俺が食べることになりそうだ。

歩き始めて二十分ほどが経った頃、後ろから聞きなれた犬の声が聞こえた。

振り向くと、遠くの方から白い毛玉がこちらへ走ってくるのが見えた。

「きなこ。なんで外にいるんだよ」

足を止めて待っていると、やがてよちよちときなこがやってきた。

「アン」（おおかみひと）

「おう。どうした？　なんで外に出てきたんだ？」

「プググ……」（はなしてくれないからいや……）

「ああ、双子か。もう戻るのも面倒だし一緒に行くか？」

「アン！」（いく！）



こうして、米軍基地までの旅の道連れは、白い毛玉と相成あいなった。  
きなこの歩みに合わせると、途端にペースが遅くなった。

いろいろなことに興味があるのか、あちこちへふらふらと歩いていくのも遅くなる原因のひとつか。

最終的にきなこは俺の持つポストンバッグの中に納まり、顔だけ出してご満悦の様子だった。

歩くこと数時間。

きなこはすっかりとポストンバッグの中で寝てしまい顔すら出さなくなつた頃。  
遠くから、何かが破裂するような、銃声のようなものが聞こえた。

その音は基地に近づくにつれ大きく、そして多くなつていく。

基地の入り口へつくと、銃声がまばらになった。

銃声が遠くまで響いていたからゾンビも大量に居るだろうと思つたが、そんなことはなかった。

入場門の横には頭を撃たれた死体が山を成している。

ゾンビの大量の死体の他には、燃え尽きた車両の残骸が何台もあった。  
道路には千切れた腕やらの体の一部も転がっている。

爆発物でも使つたのだろうか。

死体には蠅が<sup>たか</sup>集り、辺りの腐臭が凄まじい。

この死体をマキシーンがやったのなら全て燃やしているはずだ。基地内に居ない可能性が高まってしまった。

あまりここに長居はしたくない。

とりあえずは銃声のした方へ行ってみよう。

生存者の様子を見れば状況がわかるだろう。

きなこはすっかりビビッてしまい、ポストンバッグの中で震えていた。

通りを音のする方へ歩いていると、嫌なものを見つけた。

信号機や電柱に吊るされた首吊り死体だ。

死体の足元にあるコンクリート塀には、赤いペンキで『LOSER』と書かれていた。

ロセア？ ロセル？ ロサー？ よくわからないがろくでもないことだけはわかる。

この死体を見ただけで、大体の状況が把握できた。

他にも首を吊られた状態で暴れるゾンビや、低い位置で吊られ下半身をゾンビに食われて無くなっている死体などがあつた。

その死体も吊られた上半身だけで蠢<sup>うごめ</sup>いていたが。

大量のポウガンの矢で壁に縫い付けられているゾンビ、四肢と顔の下半分を切り取ら

れたゾンビなど、正気の沙汰とは思えないものばかりを目にした。

ゾンビは俺が近づくと暴れるので、狂気具合が増して精神的に参りそうだ。

銃声は連続して聞こえる。

辺りに注意を向けつつ通りを進む。

大量に乗用車——当然なのかもしれないが全部アメ車——が止まっている場所で、何人かが銃を撃ち合っている。

ここからはまだ数百メートルも離れているから安全だと思うが、念のため木の陰に身を隠し様子を窺う。

どうやら大柄な男一人を相手に、少年らしき小柄な二人が戦っているようだ。

少年の一人はマシンガンのような銃を連射し、もう一人が拳銃を撃っていた。

大柄な男もマシンガンで応戦しているが、撃たれてしまったのか車の陰に隠れて腕を押さえている。

それを好機と見たのか少年の一人が弾幕を張り、男が動けないうちにもう一人が回りこむ。

男は横から銃弾を浴びたらしく、その場に倒れ伏した。

腹を押さえて動いている男はまだ生きている。

少年の一人がハンマーを片手に男の体を滅多打ちにしだした。

そこにもう一人の少年も合流し、今度はナイフで腕や足を何回も刺している。男の叫び声と二人の笑い声が聞こえた。

やがて男は動かなくなった。

拳銃を持つ少年が男の頭部へと三発ほど撃つ。

ゾンビにしないためのなのか、確実な止めを刺すためのなのか。

少年らが男の死体を漁り始める。

ナイフやマシンガンなどを奪った少年の一人が突然、頭を破裂させて倒れた。

すぐに銃声が聞こえ、それが銃で撃たれたことによるものなのだと思いがついた。

少年も気がついたらしく、車の陰に隠れたが先程の少年と同じように頭を吹き飛ばして死んだ。

これは、いわゆる狙撃というやつなのだろうか。

辺りには人の匂いはしなく、物音もゾンビの暴れる音くらいしかない。

俺も迂闊に動いたら撃たれる可能性がある。

しばらく様子を見ることにしよう。

幸いにもボストンバッグの中のきなこは吠えることも無く震えているだけだった。

犬の吠え声なんてしたら居場所が知られてしまい、どうなったかわからないからな。しばらく待っていると、一人の白髪の老人が現れた。

でかくて長い銃を背負っている。あれが狙撃銃か。

老人は男の死体のもとまで行くと、なにやらチェーンのようなものを取った。ドツグタグというやつなのだろうか。

少年らの死体からも銃やナイフを集めバッグにしまうと、老人は去っていった。ここ米軍基地ではゾンビよりも人の方が脅威のようだ。

老人の後を着いて行こうと歩き出したところで、大きな爆発音が聞こえた。

ここはずっと戦争しているのか。

よく兵器類がなくならないものだ。

今度は銃声の数も多く、たくさんの方がいるのが予想できた。

老人を追うよりもそちらの様子を見に行くほうが良いかもしれない。

銃声は大きな病院の周りで発生していた。

先程と同じように、安全と思われる場所で目立たないようにしながら様子を窺う。

病院の周りには装甲車に隠れながらマシンガンを撃つ男が十人ほどいた。

全員が病院の上の方へと銃口を向けている。

そちらを見てみると、屋上に人らしきものが見えた。

屋上から銃を撃っているらしく、地上の男が時おり吹き飛んでは肉塊にくかひに変わり果て

る。

人は、銃で撃たれるとあのように肉片を飛び散らせながら吹っ飛んでいくものなのか。

上下半分に千切れた死体を見て、そう思った。

このままでは皆殺しにあうと思つたのだろう。

装甲車が病院の入り口へ突っ込んでいき、そして大爆発をした。

もはや何がおきているのかわからない。

病院の窓という窓には機関銃が取り付けられていて、それが一斉に火を吹くと、残つた男たちの何人かがバタバタと倒れていく。

病院の窓にある機関銃を良く見てみると、人はいなかった。

監視カメラのようなものと四角い箱が取り付けられており、三脚のようなものに置かれている。

残つた男の数は三人。

我先に逃げ出す男たちは、一人また一人と銃声と共に肉塊へ変わっていった。

あの屋上に居る奴に見つかつたら死ぬ。

そう思うとこの場から動けなくなつてしまった。

屋上の人間から目を離さないで居ると、ロープを使ってスルスルと滑り降りてい

た。

消火器で燃える車両の火を消すと、ここからはよく見えないがなにやら地面に細工をしている。

あの装甲車が爆発した仕掛けでも作っているのかもしれない。

人間をよく観察すると、線は細く痩せ型の男か女性のどちらかに見える。

顔は目出し帽で隠れていてわからない。

その人は仕掛けを一通り終わらせたのか、ロープの元まで行くと、なにやら道具を出してロープと自分の体に装着していく。

そして両手に機械のような道具を持ち、ロープへ触れると、スーツと登っていった。

五階建ての病院の屋上まで、わずか二十秒ほどで着いた。

人を肉塊に変える以外はそこまで残虐なことはしていないから、話が通じる可能性がある。  
ある。

用心深く辺りを警戒して病院へと歩き出した。

病院まで二百メートルほどのところまで来ると、突然「Hay」と声が聞こえた。

「stop. What do you want?」

「え、あー、なんだ。なんて言っているのかはわからないが、俺は敵じゃない」

マイクを通して聞こえてくるような女性の声だった。

どこか近くにスピーカーがあるのだろう。

残念ながらマキシーンの声ではなかった。

「貴方、日本人ね。止まってって言ったの。それ以上歩くと地雷原に入るわよ」

「地雷……」

流暢な日本語で話す女性の言う地雷とは、先程の装甲車を大爆発させたものことだろう。

俺の足は地面にくっついて離れなくなってしまった。

「それで、いったい何の用か教えてもらっても？」

「あ、ああ。実は人を探しているんだ」

「人を？　ここはアメリカ軍の基地だから、貴方の探し人がいるとは思えないわね」

「いや、その人は日本人じゃないんだ。マキシーン・ブルックスというんだが知らないか？」

ダメで元々で聞いてみる。

これで見つかれば御おんの字だ

「マキシーン？　貴方の名前は？」

「山下恭平だ。あ、恭平、山下だ」



「そう。ちなみにそのバッグの中には何が入っているのか見せてもらっても？」

「どこに見せれば良いんだ？」

「左方向を見てくれるとわかると思うのだけど、カメラがあるでしょ？」

「ああ、あれか」

地面からボールのようなものが立っていて、それにカメラが取り付けてあった。

カメラから見えやすい位置にバッグを置き、半分閉じていたジッパーを開ける。

きなこが「なんで開けた？」と言う様な顔で俺を見上げていた。

「うふふ、犬が居るのね。あとはお弁当箱？ 武器はないのかしら？」

「武器は……」

素直に左手を見せるべきか？

化け物だと思われて殺されないか？

そう思ったが、直感が大丈夫だと告げてきた。

声からも理知的な人となりが想像できるので、それを信じてみようと思えた。

そもそもあとでバレたときの方が怖いだらう。

なんで隠していた、こちらを騙して殺す気だったんじゃないか。

そう思われて銃で撃たれる未来が簡単に想像できた。

上着で隠していた左手を出し、カメラに向けて掲げる。

「これが俺の武器だ」

「……what the fuck？」

フアツクと聞こえた。

怒らせてしまったのか。

アメリカ人はすぐにフアツクフアツク言いやがる、なんてことを思いながらも逃げる準備をしていく。

「貴方、それ……。ちよつと待つて。絶対に動かないでよ。動いたら死ぬわよ」

「なんだと……？」

どういふことだ。

俺はもうあの銃で狙われているのか？

迂闊に近づいた俺はただのバカだ。

向こうは人を肉塊に変えるような銃を持っているのに。

なんで近づいた。

焦りすぎた。

自責の念に駆られていたが、女性からの反応がいつさい無くなったことに気がつく。

黙って待つていても何も起きない。

少しの間があいた。

しばらく待つと「お待たせ」とスピーカーから女性の声が聞こえた。

「今迎えに行かせたわ。少し待っていて」

「迎えて。俺は人探しをしていてゆっくりしている暇は無いんだ。情報さえ教えてくれればそれで良いんだが」

「いいから待ってて」

そう言ったつきり女性の声は聞こえなくなった。

周囲の警戒を強くする。

遠くの方からはまた銃声が聞こえた。

どこかで人間同士が争っているのだろう。

病院の方へ目を向けると、人がロープを滑り降りてくるのが見えた。

背中にはゴツくてでかい銃を背負っている。

至近距離で仕留めに来た？

屋上から降りてきた人は、右へ左へふらふらと蛇行しながらこちらへ近づいてきた。

手を振りながら近づくその人は、やはり女性のようだった。

「キョーヘイ、久しぶりデスネー。元気してるマス？」

特徴的な喋り方でそう言いながら目出し帽を脱いだ女性は、俺の探していたマキシーンだった。

「ああ、マキシーン。会えて嬉しいよ」

「ミカは一緒居らないデスね。別行動してるマス?」

「……ああ、まあ、そうだな」

「OK。じゃあついて来るマス。ワタシの『friend』が会いたがつてるマス」

「スピーカーで話していた人か?」

「そうネ」

腕を見せて好都合だったのかもしれない。

なんせ俺の腕がこうなった原因は、マキシーンの友人から貰った薬を打ったせいでもあるだろうからだ。

腕のことが何かわかるかもしれないし、もしかしたら治す薬をもらえるかもしれない。  
い。

期待を胸に秘め前を歩くマキシーンの後についていく。

「キョーハイ、ワタシの踏んだところじゃないところ踏むと死ぬマス」

「はあ? いや、無理だろ。待て。そんな早く歩くな。おい! 待てつて!」

「OH……仕方ないネ。この辺はクレイモアいっぱいだからキョーハイ失敗するとワタシも死ぬマス」

「クレイモアが何かはわからないが、そんな一歩間違えただけで死ぬようなところをす

「いすい歩くお前は頭おかしいからな」

「H A H A！ よく言われるマス」

「そうかよ……」

それからマキシーンの後ろを、それこそ必死の思いで行った。

## 第二十八話 奪取

マキシーンの後をついていくのはとてもスリリングだった。

有刺鉄線や地雷を超えた先にはアロートラップやセンサー式自動機銃などがあった。

それらはマキシーンの操作するタブレットでオンオフが切り替えられるらしく、地雷原を歩かされるよりは安心感があった。

「これ、豚肉を揚げたものね。とんかつというやつかしら。初めて食べるわ。ソースと、これは和がらし？ うん、美味しいわね」

「Oh! 鼻が! 美味しいけどネ!」

「マキシーンはローストビーフサンド? それはわさび醤油ね。肉のしつこさが無くなつて美味しくなるのよ」

「YES! これ好きデスネ」

マキシーンとその友人は病院の地下を拠点にしていた。

そこはよくわからないハイテクな空間となっていた。

こう、ドアがブシューと音を立てて自動で開くというか、ウィーンと電気の音がしなから開くというか。

白い壁に白い床といった作りに、なんとも無機質な印象を覚えた。

「温かい。染み渡るわね。ビーフシチューなんてもう二度と食べられないかと思つていたわ。これは帆立のフライね。うん、和がらしとソースがよく合うわ」

「Delicious!! I love it!」

「ちよつとマキシーン。貴方それお弁当二つ目よ。食べすぎたらダメよ」

「NO! もう『ration』は食べるしたくないデス。それよりこの『rice』が『seafood』たくさんで好きデス」

「ええ。このピラフも美味しいわね。イカ、エビ、貝はアサリかしら? トマトとニンニクで味付けされていて、あつさりの中にもコクがあつて、いくらでも食べられそうね」

「YES! そういえばミシエル、『Japanese』上手ね。ワタシ聞くの初めてデスけど、日本人の人みたいデス」

「その国にお邪魔するのだから、その国の言語で話すべきなのよ。マキシーンももう少し勉強しなさいね」

「Touche!」

研究室のようなところに、マキシーンの友人であるミシエル・オーマンはいた。

白金の髪を一つにまとめ白衣を着ている欧米系の美人だった。

歓迎してくれたミシエルはお互いの自己紹介が済むと、俺の左腕に飛びついてきて

「どうなっているのかしら？　不思議ね！」と揉んだりつねったり毛を抜いたりとしてきた。

とりあえず落ち着いたところでこの腕についても話がしたいと提案すれば、食堂のよ  
うな場所へ案内された。

そういえばお土産があるのだとポストンバッグの中から、きなこ弁当箱を取り出す  
と、きなこは初めての場所だから匂いを嗅ぎまわっていた。

二人は「Pretty puppy」と笑顔で見えていたので問題はなさそうだった。

弁当箱を開けて中身を出し、ほんの気持ちですが、と二人へ差し出すものすごい勢  
いで食べ始めた。

そんな二人に圧倒され、黙って弁当箱の中身が無くなっていくのを見ているしかな  
く、軽く過去を振り返っていた。

二人ともとても細身なのに、いったいどこにそんな量が入るんだと言いたくなる。

俺の持ってきた弁当はほぼ二人に平らげられてしまった。

俺が食べられたのは一切れのカツサンドだけだった。

「ふう、美味しかったわ。ご馳走さま。久しぶりに人間らしい食事ができたわ。軍の  
レーションは美味しいとは言えないものだから」

「Yeah！　これ好きデスネ。キョーヘイやるマス」



「あ、ああ。お口にあったようだなによりだよ」

「キョーヘイのところは『Everyday』がこれを食べるマス？」

「まあ、ここまでたくさんは食べないが、同じような料理が出てくるぞ」

「Oh……」

マキシーンは「Gununu……」と唸ると、ミシエルと早口の英語で何かを言い合  
い始めた。

時折「キョーヘイ」とか「ファック」とか聞こえて、何を話しているのが非常に気  
になる。

俺がファック野郎だと言っているわけではないと思うが……。

二人の会話はミシエルの「わかったわよ」という日本語で終わった。  
なにがわかったのだろうか。

「恭平、貴方の拠点に私たちも連れて行ってほしいのだけれど」

「ああ。別に構わないが」

「Hell yeah!!」

マキシーンが興奮気味に片腕を高く掲げた。

よほど嬉しかったらしい。

ミシエルが日本語で簡単に説明をしてくれた。

マキシーンが一番好きな料理はローストビーフサンドで、ミシエルが好きなのは帆立フライだそうだ。

凄くどうでも良かった。

「いや、まあ好きな料理とかは良いとして、俺の質問に答えてほしい」

「そういえば腕について聞きたいって言ってたわね。それに関してはわかることはないけれど、なにかしら？」

「わからないのか。実は……」

ミシエルに今まで俺に起きたことを説明した。

ゾンビに噛まれて感染したことや、薬を打ったこと。

四ヶ月ほど寝たきりになったことや、ゾンビに嫌われるようになったこと。

それから視覚や聴覚や嗅覚が、人間離れるようになったこと。

力も上がり、重いものも平気で持てるようになったことも告げる。

「マキシーンに渡した薬は確かに私が開発したものよ。でもそれはゾンビウイルスを一時的に不活性化させるもので治療薬じゃないの。二十四時間でゾンビ化するのを四十八時間に伸ばす程度の薬よ。恭平、貴方、存在しているだけで奇跡のようだよ」

「そうだったのか。じゃあなんで俺はゾンビになっっていないんだ？」

「わからないわ。腕のこともゾンビが寄ってこないこともゾンビにならないことも、全

部わからない。こんなの初めてね」

「そうか……。この腕を治す薬でも作ってくれないかと期待していたんだが、無理そうだな」

「薬がすぐに作れるわけじゃないでしょう。ま、それでも作るしかないんだけれどね。今、ゾンビ予防薬を作ろうとしてるの。治療薬は無理だけど予防薬なら作れそうだから」

「作れるのか？」

「一応不活性化させることができたから。そこを糸口にしてなんとか頑張ってみるしかないんだけれどね」

その予防薬が完成したら是非貰いたい。

うちの女性たちに打つことができれば、安心できる。

「つて拠点を移動したらその薬の研究ができなくなるんじゃないか？」

「マキシーンにもそれを言ったのよ。そしたら全部持つて行けば良いって聞かなくて」  
「持つていくつて、どうやって持つていくんだ？」

「ヨクゾ聞いてくれるマス！ ワタシの『Neck』が『Long long』ネ！」  
「そういうのは知ってるんだな」

首を長くして待つていたと言いたいようだ。

マキシーンの難解な日本語での説明は理解に苦しんだが、ミシエルが通訳をしてくれ

たおかげで、何とか理解することができた。

「つまり、敵対組織に研究機材の揃った車を奪われて、それが欲しければ出てこいと言われている。で、先程その組織の襲撃を返り討ちにしたから人数も減っているだろうし、もう奪取しにいけるんじゃないかということだな」

「その通りよ」

「でもそれって難しくないか？　ここは迎え撃つ準備ができているから勝てたのかもしれないけど、それは相手の陣地も一緒だろ」

「ええ、その通りね」

「だったら無理じゃないか？」

「NO！　キョーヘイ来たから余裕ネ。キョーヘイ囲するマス。ワタシ敵倒すマス」

「俺、危なくないか？」

「YES！　デスのでお願いするマス」

そんな危険なお願いは聞きたくないな。

銃で狙われている状態で地雷原を歩けてことだもんな。

普通に考えたら死ぬだろう。

「残念だが断る。俺は死ぬわけにはいかないんでな。機材を持っていけないなら仕方ない。悪いが拠点を移る話は無しだ」

「Oh……それは困るマス……。わかったネ。囹はなしにするマス。その代わり……」  
「その代わり？」

「『Operation NINJA』をするマス……」

「オペレーションニンジャだつて？」

いきなりふざけたことを言い出したマキシーンの顔を見るが、真剣そのものだった。

ミシエルも真面目な顔をしている。

オペレーションニンジャとはいったい？

「私が説明するわ。『Operation NINJA』とは……」

ミシエルの説明によると、要するに闇夜に乗じて隠れて奪おう、ということだった。

忍者のように隠密に動きましようということが言いたかつたらしい。

「それなら危険は少なそうだ。だが車の鍵も潜入して奪わなければいけないんじゃないか？」

「『Hacking device』があるからヘーキ。キョーヘイはワタシの『Guard』するマス」

「銃撃戦になんかなくなったら死んじまうんだから、マジで頼むぞ」

「マジで任されたネ」

作戦開始は深夜三時半となった。

それまでにこの拠点から持っていくものをまとめなければいけない。

「結構な量になりそうだし、もう一台車を持っていくしかないわね」

「そういえば俺の拠点までの道は放置車両で塞がっていたぞ？ 奪取できたとしても道  
を走らなければ無意味だ」

「アー、じゃあアレ持って行くマス。『Forklift』あるマス」

「フォークリフトか。それなら車をどかしながら進んでいけるな。それはどこにあるんだ？」

「敵のところね」

「本当に成功するのか？ この作戦」

「させるマス」

敵から何もかもを奪わなければ成功しない作戦なんて、作戦と呼べないんじゃないか。

行き当たりばつたりにしかな思えない。

拠点の女性らに予防薬を与えられるかもしれないとはいえ、死んでしまったら元も子もない。

最悪、俺だけでも生きて帰らなければいけないだろう。

マキシオンとミシエルを見捨てることになるが、俺に本当にできるのか？

答えを出せぬまま、作戦決行時間となった。

「それじゃあ、行くマス」

「ああ」

マキシーンの後ろを、俺とミシエルが離れないように歩く。

敵対組織の拠点はすぐ近くにある十階建てのマンションだった。

金網で囲まれたそのマンションには、いたるところに首吊り死体や、十字の木材へ張り付けにされた死体があった。

それらの中には子供のものもあり、なんとも胸糞が悪くなる。

暗闇の中、マキシーンとミシエルは暗視ゴーグルを装着して金網を切断する作業をしていた。

俺も周囲の音を聞き匂いを嗅ぐが、動いているものは何もいなかった。

拠点に閉じこもって寝ているのか？

金網を抜けて中へ入っていく。

駐車場に目当ての車はあった。

あれだ。

コンボイとか呼ばれてるめっちゃくちゃ大きいトラックだ。

これを車って言っちゃダメだと思う。

牽引しているコンテナの中に研究機材が入っているらしい。

つうか、これ運転できないぞ、俺。

誰が運転すんだよ。

そう思っているとミシエルがトラックのはしごを登っていった。

「それじゃあ私がこれを運転するわ。マキシーンのは……あそこにあるわね」

「行ってくるマス」

マキシーンの向かう先には大きな……なんだあれば、トラクターか？　トラクターのような大きな重機があった。

先端のアタッチメントがフォークリフトのようになっていたのでフォークリフトなのだろうが。

マキシーンとミシエルが揃って車のエンジンをかけると、夜のしじまに爆音が鳴り響いた。

「バカ野郎か！　こんなの忍者じゃねえよ！　ああ、気付かれた！　マンション内で人が動いてる！」

『バツバーー！』

「クラクション鳴らすなアホ！」



こいつらはバカなのか？

いや、こいつらはバカなのだろう。

バカのマキシーンが重機でフェンスに突っ込んで穴を開ける。

その後をミシエルの運転する馬鹿でかいトラックが悠々と通っていった。

俺は身を隠して敵に見つからないようにしている。

マンシヨンの上階から銃声が響く。

そりゃ撃つよな。

トラックも重機も銃など物ともせずに進んでいく。

敵は撃つのをやめ、車で追いかけるようだ。

ここからが、俺の出番だ。

今回の忍者作戦での俺の役割は、追跡者の排除だ。

敵に気付かれた場合、運転しているミシエルとマキシーンは抵抗ができないため、俺がやらなければならないのだと。

気付かれないように行動して、万が一気付かれた場合の備えかと思っていたが、あいつら最初からこうなるとわかっていてこの作戦をくみやがった。

あんな爆音のエンジン音がするってわかってたら、隠密行動なんて言うわけない。

クソ、まんまと騙された。

そんなことを考えていると、一台のジープ車が横を通り過ぎていった。

俺は日本人として、なぜか忍者の手本を見せてやろうという気持ちになり、そのジープへ駆け出し屋根へ飛び乗った。

布でできた天井を左腕の爪で切り裂き、まずは助手席にいた男を掴み外へ引きずり出してから放り投げる。

運転席の男がギョツとした顔で俺を見上げていたので、ニコリと笑いかけておく。

そして思い切り殴る。

化け物の腕で人を殴ったのは初めてだが、ポグという音と共に首がおかしな方を向いてしまった。

結構な威力があるようだ。

運転者がいなくなり壁に向かって走っていくジープから飛び降りる。

後続の車はまだまだいるようで、俺の一人ぼっちの忍者作戦はしばらく終わらないようだ。

俺の身体能力はとても上がっているようで、道を走る車と併走したり、車から車に飛び移ることなんかもできた。

車の天井に張り付いた際に銃を乱射され、体を庇った左腕に何発か食らうが、血はすぐに止まった。

化け物度が上がっていることに軽く戦慄を覚える。

しばらく車を潰している、天井に銃座のついた車がやってきた。

俺を見つけたらしく、減速しながら銃を撃ってきた。

当たったらさすがに死ぬだろう。

ジグザグに走りながら避けて、車の裏に隠れる。

だが弾が貫通したらしく車のこちら側に穴が開いた。

マジか。隠れ場所ないのか。

本当に死ぬぞ。

脇の歩道にある木の陰へと走る。

俺の姿を捉えているのか、着弾音が近くで聞こえる。

必死に木の間を走っていると、後方で爆発音がした。

見れば俺を撃っていた車が火の手をあげている。

道路へ戻って周囲を確認してみればその理由がわかった。

道の先にミシエルの運転していたトラックが止まっていて、そのコンテナの上にマキシーンが寝転がってこちらへ銃を向けていたのだ。

あの人間をボロ雑巾のようにして吹っ飛ばす銃なら、車の燃料タンクを撃てば爆発させることも可能なだろう。

敵の追っ手はことごとくがマキシシンの餌食になっており、俺の出番は終わったのだとわかった。

さすがに疲れたので、二人の元へはゆっくりと歩いて向かった。

## 第二十九話 決別

マキシーンの放つ弾丸が、空気を切り裂いて飛んで行く。

止まっているジープの窓ガラスに着弾したそれは、窓を吹き飛ばしその中身の肉をシエイクし爆散させた。

弾丸を放つ音が断続的に聞こえる中、二人の元へと歩く。

コンテナの元まで辿り着き、タイヤに足をかけて跳ぶと、難なくコンテナの上へと登ることができた。

「あら、恭平、お疲れ様。貴方のおかげで楽ができたわ」

「凄いデスネ。さすが『N I N J A』デス。ニンポーハツソートビのジツ」

コンテナの上に二人は寝そべっていた。

マキシーンは銃を構え、ミシエルはパソコンをいじっている。

マキシーンは俺を見ると笑顔でよくわからない印を組んだ。

「忍法じゃねえよ。お前ら、よくも謀はかってくれやがったな」

「謀はかる？ なんのことかしら。マキシーン、わかる？」

「NO. それよりキョーヘイ、他にどんなニンポー使えるマス？ ブーシンのジツは？」

「ブシン？ ああ、分身か。使えねえよ。はあ、ったく。まあ良い。おい、ミシエル。葉ができたら優先してウチのやつに回せよ」

「ええ、もちろん」

そもそも俺の拠点に二人を住ませる時点で、葉はウチに回ってくるんだろうけど。

マキシーンのではない銃声が響く。

道の向こうで車から降りた敵が何人かこちらへ銃を向けていた。

「Hey. 立ってる」と撃たれるマスよ」

「恭平も姿勢を低くした方が良いわ」

「ああ、わかった」

敵は車に乗った状態だと鴨撃ちにでもされると思ったのか、木の陰や車の陰に隠れたようだ。

このコンテナの上は結構な高さがあり、下から撃たれても角度的に中々当たらない。

伏せてしまえば当たるとはまずないと思えるので、俺もマキシーンの後方でうつ伏せになる。

うつ伏せになると図らずも眼前にマキシーンの大きなケツがあった。

アメリカ人は豊満な体を持っているイメージだが、やはりあっていたようだ。

ドガンと大きな銃声が鳴ると、マキシーンのケツがプルンと震えた。

銃の衝撃を体で吸収し、最終的にケツを揺らすことでエネルギーを放出しているのか。

何発も銃声が響き、その度にケツは揺れる。

それが面白くついつい夢中で見ていると、横からミシエルが「ちよつと恭平、どこ見てるのよ」と言ってきた。

「ああ、マキシーンのデカイケツが揺れててな」

「My hot ass, s the favorite?」

銃を撃ちながらケツをプルンと揺らしたマキシーンが、なにやら話しかけてきた。

「あ? なんて?」

「お尻が好きなの? って」

「まあ人並みにはな。男なんて皆そうだろう。それより、いつまでここにいるんだ?」

「もう少し。あいつらの力をできるだけ減らしておきたいの」

「そうか。俺は何をしたらいい? やれることならやるぞ。さつきみたいなことはごめんのだがな」

「本当に忍者みたいで素敵だったわよ。それじゃあ恭平には周囲の警戒をして欲しいわね」

「わかった」

マキシーンの撃つ銃声のせいで耳がバカになっているし、硝煙の臭いで鼻も利かない。

だったら目で動くものを探すしかないか。

片っ端から動くものをマキシーンに伝えていこう。

「マキシーン、右前方ジープ二台の後方にある木の裏に一人。顔少し出してこっち見える」

「OK」

銃声が響く。木の裏から肉塊が飛ぶ。

「次、たぶんあれマンシジョンの上の方からこっち狙ってる。八階ベランダ」

「Oh…… OK」

銃弾はマンシジョンのベランダ手すりに着弾する。

ここちらを狙っていた人間は下へ落ちていった。

「あ、左、草の中。一人這いずってきてる」

「どこデス？」

「ほら、信号機の左、今揺れてるだろ」

「OK」

草と土と血と肉片が飛んだ。



「恭平、貴方最高の観測手になれそうだよ」

「そうなのか。よくわからないが。とりあえず動くものはいなそうだよ」

「しばらく様子を見てから動きましようか」

十分ほど待つと、一台の車がマンションの方からこちらへと近づいてきた。

あれは……。

「おい、マキシーン、あれは撃つなよ」

「ワタシも見たネ。撃つないデス」

どうやらマキシーンも気がついたようだ。

ミシエルが不思議そうに「なんで撃たないの？」と聞いてきた。

「あれ、白旗掲げてるんだよ」

「暗くて見えにくいデシタけどネ」

「なるほどね」

車がゆっくりとした速度である程度の距離まで近づいてから停車した。

ドアが開くと一人の男が出てきた。

鋭い目つきに一文字に結ばれた口、ハリウッドの映画俳優でもしていたのかと思える

ほどの端正な顔立ち。

顔は二枚目だが獯猛な雰囲気をもとって、まるで野生の狼を思わせる。

胸から二の腕にかけての厚みははち切れんばかりで、まくった袖から見える腕は肌張り具合からも、岩のように硬いであろう筋肉が詰まっているのがわかる。

身長は二メートルない程度だろうが、その確かな体躯は男の体をより大きく見せている。

迷彩服を着たこの男は何者なのだろうか。

佇<sup>ただす</sup>まいや歩き方が訓練された軍人のそれに思える。

男は両手を上に掲げ敵意は無い様を表すが、こちらを睨むその眼差しには憤怒と憎悪がありありと見てとれた。

マキシオンが男に銃口を向けて引き金に指をかける。

左腕を見られないように、上着を巻きつけておく。

意外にも、男は単身で交渉に来たようだった。

余程腕に自信があるのか、軍人としての誇りがあるとも見える。

男はゆっくりとこちらへ歩いてきた。

「私が話しに行くわ。あの男とは知り合いなの。私を護衛していた兵士だったのよ」

「そうか。俺も行くのか？」

「ありがとう。お願いするわ」

男の元へ向かうべくコンテナから飛び降りると、ミシエルが「私も良いかしら？」と

訪ねてきた。

「俺が受け止めれば良いのか？」

「そう。お願いしても？」

「ああ、構わないが。ケツから落ちる感じで来れば受け止めやすい」

「わかったわ」

意外と思いい切り良くミシエルが落ちてきたので柔らかく受け止める。

怪物のような力を得たおかげで、ミシエルにも俺にも衝撃を少なくして受け止めることができた。

「うふふ。怖かった。腰が抜けちゃったかも。このまま連れていってもらえる？」

「いや、絶対嘘だろ、それ。あの男となんの話をするかは知らないが、少なくともこのまま行くのはマズいだろ」

「構わないわよ。話す前に降ろしてくればそれで良いから。このまま行って」

よくわからないミシエルのお願いを聞いて、右腕に乗つけるように抱えたまま歩いて行く。

近づくにつれ男の眉間には青筋が浮かび、そうとう苛立っているのがわかる。

ミシエルを下ろすと「ありがとう」と頬にキスをくれた。

男の表情が更に険しくなった。

ミシエルは男と早口の英語でなにやら話を始めた。

まくしたてるように言う男に対し、ミシエルはゾツとするほど冷たい声で返す。

男は時折俺を指差してはなにやらを喚いている。

段々と二人の口論は激しくなっていく。

ふと、男から漂う匂いに変化した。

「Fuckin', jap」

男が左足に取り付けられた拳銃のホルスターへと手を伸ばす。

瞬時に右手でその腕を掴み、動かないように押さえつける。

驚く男の顔に化け物の左手でアイアンクローを食らわす。

「ファツキンジャツプくらいわかるんだよ、この野郎。このまま頭潰してやろうか？」

「恭平、やめて。殺しちやダメよ」

「そうか。手を離すのは構わないが、こいつに銃を抜いたら殺すって伝えてくれないか？」

「ええ。わかったわ」

ミシエルが男に英語で話しかけると、短く返事をした男の腕から力が抜けたのがわかった。

また動いたら掴んでやればいいかと、顔と腕から手を離す。

俺の左腕を凝視した男とミシエルがなにやら話をしたあと、男は車の方へと歩いていった。

「どうやら話は終わりらしい。」

英語がわからないと終始なにを話しているのか理解できず、なんとも蚊帳の外な感じだった。

帰ろうとする男の背中に「Get lost dick head!」とマキシーンが何やら大声を浴びせた。

男も振り返りマキシーンに向かって中指を立て「Don't talk to me you stupid dirty bitch!」と声を張り上げて返す。

マキシーンは肩をすくめる動作をして「Loser's whining make me laugh.」と言った。

男は地面に唾を吐くと、再度中指を立てて車に乗り込んで去っていった。

「あれはなんて言ってたんだ?」

「バカとかマヌケとか、まあ悪口合戦よ」

「なるほど……」

男が去ったあと周囲の確認をするが動くものはいない。

匂いでも音でも安全だと判断できた。

「それで、結局あの男は何の用だったんだ？」

「私を引き止めたかったみたい。前からずっと自分のところへ来いと言われてたけど断り続けてたの」

「それはなんで？」

「彼自身は悪人ではないのだけれど、彼がリーダーを務めるグループは人が増えすぎて統制が取れなくなっているの」

「ああ、酷い殺され方をした人をたくさん見かけたよ」

電柱や信号機に吊るされた死体や、弄ぶように損壊されたゾンビの姿が思い出されて嫌な気分になる。

「基地内にくくつもあるグループ同士で殺し合いが度々発生していたの。そのうち残酷な処刑をするようになってしまったのよ」

「人が増えるとろくでもないことになるのはわかる」

市役所での一連の騒ぎを思い出す。

「そんなときにマキシーンがやってきて銃を乱射するものだから、完全に敵対してしまっただけ」

「汚物は消毒だーデスネ」

「それってマキシーンのせいで死体が増えたんじゃないか？」

「でもマキシーンのおかげで、あの場所で研究が続けることができたのも事実なのよ」  
「ミシエル危ないデシタからね。あれくらいやらないとヤツラ帰らなかつたデスネ」

ドヤ顔をするマキシーンは、意外ときちんと考えているようだ。

てつきり人やゾンビを撃つのが好きな危ないヤツかと思っていた。

「さつき彼と話して、予防薬ができたら提供すると提案したら、これ以上追わないと約束してくれたの」

「マキシーンの銃の前に一人でやって来るような男だ。信用はできそうだな」

その男は信用できるかもしれないが、人間に対しての警戒は強めておいた方が良いでしょう。

話を終わらせ、百貨店までの移動を開始する。

病院前に止めてある荷物満載のバンに俺が乗り込み、マキシーンの運転するフォークリフトへ追従する。

助手席ではきなこが丸くなって寝ており、時折くうくうと寝息が聞こえた。

「お待たせ、きなこ。これから拠点に戻るからな」

「……プフウ」

何やらため息のようなものを吐くきなこをひと撫でし、運転に集中する。

米軍基地内は放置車両が無くスムーズに車が通ったが、基地外に出てしばらくすると

道が狭くなっていき、やがて停車した。

時刻は朝の五時を過ぎた頃。

日の出まではもう少しありそうだ。

夜になるとゾンビはあまり活発的ではなくなるらしいが、万が一があるかもしれない。

車から降り、マキシシンの運転するフォークリフトへ飛び乗る。

「マキシシン、ご苦労さん。どうよ、調子は」

「OH・キョーヘイ、もうちよとかかるマスネ」

フォークリフトは乗用車を二台まとめてすくい上げると、歩道の上に積み重ねていく。

順調に進む作業だが、ある程度進んだら俺がバンを運転しに戻らなければならず、とても面倒くさい。

そのことをマキシシンに伝えると「これ使うマス」とよくわからない機械を渡された。

「これは？」

「ソレを車にあるUSBに挿すマス。それからコレ前の車につけるマス」

「そうなるかどうかなんだ？」

「前の車追っかけるマス」



「自動運転機能ってやつか」

仕組みはわからないが、マキシンの言うとおりに機械を取り付けると、バンは自動でミシエルの運転するコンボイのあとを追いかけ始めた。

最初からこれで良かったんじゃないかと伝えれば「忘れてたデスネ」と舌をペロリと出される。

そういうのはよく知っているんだよな。

すっかり日も昇り、時計の針は十時を指していた。

ようやく俺の拠点である百貨店が見えてくる。

あと数台もどかせば百貨店までの道で邪魔なものはない。

「よしよし、良いぞマキシーン。もうすぐで到着だ」

「お腹空いたデスネー」

「腹いっぱい食べて良いから、あと少し頑張れ」

「OK」

ふと百貨店を見れば、さすがに重機の音やエンジン音がうるさかったのか、百貨店の八階から珠子が顔を出してこちらを見ていた。

向こうから見えるかはわからないが、フォークリフトの天井に立ち、大きくて白い目

立つ左腕を振る。

どうやら見えたらしく、珠子も両手を振って返してきた。

なんだか少しほっとした。

トラックと重機を百貨店前の広場に止めて入り口へと向かう。

「全然バリケードなつてないデスネ。簡単に破れるマス」

「ああ、ゾンビが寄つてこないからいじつてなかつたな」

「NO. 人間がいるマス。危ないこと減らすのは『survival』の基本ネ」

「じゃあその辺はマキシーンに任せた」

「YES!! やるがいあるマス」

「やりがいな」

そんな話をしながら正面玄関の前に行くと、自動でシャツターが開いていった。

誰かが待機していたようだ。

シャツターが開いていくと、そこには女性陣がずらりと並んでいた。

「お、おお。皆勢ぞろいじゃないか」

「うん、おかえり、恭平」

「ああ、ただいま、鈴鹿」

鈴鹿が腕を広げて近寄ってくる。

困惑しているとそのままギユウと抱きしめられた。

「心配していたんだからね」

「あ、ああ。すまん」

「ううん。無事でいてくれたから良いよ」

そう言つて離れていく鈴鹿の代わりに、今度は珠子が飛びついてきた。

「お、おお？」

「おかえりなさい！ 無事でなによりでしゅ！」

言葉を噛んでしまったせいで顔が真っ赤になった珠子が離れると、今度は双子が挟むように体当たりをかましてきた。

「ふっ、ぐう……」

「お兄さん！」

「お帰り！」

「きなこ見なかった?」

「いないんだけど！」

そうやってすぐに構おうとするからきなこはいなくなるんだぞ。

さつきまでミシエルの腕に抱かれていたのに、今はもうどつか行つちやつてるからな。

「早くモフらないとやばたんなんだけど！」

「お腹に顔うずめるのすこすこのすこ」

ほんと、そういうところだぞ。

その後も女性らが代わる代わる俺を抱きしめては一言二言残して離れていく。

あの菊間でさえ優しく抱きしめてきて、なんだかドギマギしてしまった。

俺がいない一日で、いったい何を話して何を決めたんだか。

女性らのハグが終わると、ようやくマキシーンとミシエルの二人を紹介することができた。

ミシエルが薬を開発していることと、マキシーンがゾンビ本の作者だということを伝えると、女性らは「おおー」と感嘆かんたんの声を上げた。

マキシーンが女性陣を興味深そうに見た後、首を傾げて「h m m……」と唸った。

「どうした？」

「ミカいないデス。話すしたかったネ。どこいるマス？」

「……ああ、いや、ここには、いない」

「別行動してるマス？」

「そう、だな」

「ミカはどこにいるマス？」

「……………ここでは、ないな」

「h m m……………」

「マキシーン、それよりも拠点の状況を見て改造計画を練るんじゃないの?」

「OH、そうだったネ。ワタシちよと見てくるマス」

マキシーンはミシエルに言われると、すぐにどこかへ去って行ってしまった。

「じゃあ恭平。荷物とか運びいれたいんだけど、皆に手伝ってもらえば良いのかしら?」

「ああ、そう、だな」

「運び終えちゃえばゆつくりできるのだから、もう少し頑張つて、恭平」

「ああ、わかった」

ミシエルの荷物はバンの中にある物だけだった。

コンテナの中にもあるのかと思つたら、あれは一つの部屋になっているらしく、移動式研究室のなそういうものなのだと言われた。

だから百貨店からすぐにコンテナへ行けるように、マキシーンがいろいろと改造をすすららしい。

荷物を運び終え、マキシーンとミシエルの寢室を準備したあとは各々の自由時間となった。

何をするか、と考えていると鈴鹿に「ちよつとついてきて」と言われ屋上までやって来た。

そこにはなぜか珠子もおり、テーブルの一つへと案内されたので言われるがまま席につく。

「どうした、二人とも。何かあったか？」

「うん。少し話があつてさ」

「話？」

女性陣内で問題でも発生したか？

あまり力になれそうにもないが、聞くだけ聞いてみよう。

「あのさ」

「ああ」

「美香さん、探しに行こうよ」

「……は？」

頭に衝撃が走った。

予想だにしない言葉に脳が軽く混乱している。

「な、何を言っている？ それよりも、なんで、美香の名前を」

「双子と菊間さんから聞いたよ。死んじゃった、奥さんのこと」

「あいつら、勝手に喋りやがって……」

「私が無理を言っただけだ。三人とも話したくなかったみたいだけど」

「……そうか。で、探しに行くってのはどういうことだ？」

「この間のこと覚えてる？ お酒飲んだ日のこと」

「いや、あまり覚えてないな」

何かを話していたのは覚えているが、内容は思い出せない。

「あのとき、恭平は守りたい、守りたかったって言ったの。だから私たちを守るのはさ、

美香さんを守れなかった償いとしてってことなんだよね」

「そんな、ことは、ない」

「ううん。体の関係を築こうとしないのもそう。美香さんの幻影に囚われ続けているから、だから他の女と寝れないんだよ」

「……ち、違う、そんなんじゃない。俺は……」

「美香さんと決別しよう。美香さんがゾンビになってしまよっている限り、恭平は新たな関係を築けない」

違う。違う。

美香はゾンビになんて、俺の腕の中で、俺に生きろって……。

「ちゃんと吊ってあげようよ、恭平」

「い、嫌だ。美香は、俺の手の中で、眠って、それで……」

「ゾンビになったんだよ。恭平、もう美香さんは美香さんじゃなくなったの」  
「違う、違う！ 美香だ！」

勢い良く立ち上がったせいで、椅子が後ろに倒れる。

気がつけば頬を涙が伝っていた。

くそ、なんで、なんでだ。

俺は強い……強くなきゃいけないのに！

「美香は、俺を避けてはいたけど、ちゃんと立って歩いてきた！ 俺とは一緒にいられなかったが、美香は……！」 美香なんだ……！」

世界が回るような感覚に襲われ、地面へと膝をつく。

力が入らない。

「恭平、あなた……！ 美香さんがゾンビになったこと、死んでしまったこと、受け入れられてないじゃない!!」

俺の隣へ膝をついた鈴鹿に、頬を両手で叩かれるようにして挟まれた。

顔を上げられ、鈴鹿が俺の目を見て口を開く。

「恭平、ちゃんと聞いて。それじゃダメだよ。死んだの。死んだ人は立って歩かない。人を食べたりもしないの」



鈴鹿の目が潤み、涙が零れ落ちた。

「私も……つらかった。お母さんがゾンビになつて私に襲い掛かつてきて……。でもお母さんは確かに死んでいたから、だから、安らかに眠らせてあげなきゃいけないんだつて、それで……。うう……。うう……」

大粒の涙がポロポロと零れる。

しやくりあげるように泣く鈴鹿は、しかし強い眼差しで俺のことを見据えていた。

「だから、私は……。お母さんの、首を……！」

「もういい……。ごめん、鈴鹿、ごめん……」

鈴鹿の頭を引き寄せ胸に抱く。

肩を震わせて泣く鈴鹿を抱きしめる。

強い女性だと思っていた鈴鹿の背中中は、とても小さく華奢だった。

しかし同時に普段の鈴鹿の強さの理由がわかった。

「う、うう……」

「すまん。つらかったよな」

鈴鹿の涙が、俺の胸に広がっていく。

「私も、お兄ちゃんを、眠らせてあげたいです……」

珠子が涙に濡れた顔で、そうポツリとこぼした。

握り締められた手が、膝の上で震えている。

珠子も、また悲しんでいたのだ。

「それは、俺がやる。珠子の決意だけで充分だ。だが、本当に良いんだな？」

「はい、お願いします……」

「必ず見つけ出して、安らかに眠らせると誓うよ」

「ありがとう、ごさいます……」

顔をくしゃくしゃにして泣く珠子を見て、決意した。

ゾンビは、見つけ次第殺してあげよう、と。

それがゾンビになった人への、せめてもの手向けだ。

俺は、美香に会いに行き、そして、決別する。

## 第三十話 美香を探して

翌朝、俺は鈴鹿とマキシーンと一緒にマンションへ向かった。

鈴鹿は俺を心配してくれたのか「私も一緒に行く」と言ってくれたので、それに甘える形となってしまった。

マキシーンは、マンションの鍵を開ける機械を持っていたので貸してくれないかと言ったところ「ワタシじやなきや使えないデスネ。ワタシも行くマス」と半ば無理矢理ついてきた。

時刻は朝の七時。マンションには昼くらいにつくだろうか。

マキシーンが珠子へ熱くローストビーフサンドについて語ったらしく、珠子が持たせてくれた弁当はいろいろな味のローストビーフサンドとなった。

「キョーハイ、話聞いたヨ。ミカは残念デス」

「……ああ、そうだな。だが激しい自己嫌悪と後悔で泣きそうになるから、その話はもうやめてくれ」

たぶん一人でマンションに行っていたら、美香を眠らせたあとに自殺をしていたと思う。

二人がいるからそんなことはしないとと思うが、今でも衝動的に死にたくなるときがある。

そういえば、俺は美香に噛まれてゾンビになろうとしてたんだったな。

あのときの気持ち思い出し、目が潤みそうになる。

そんな俺の右手を、隣を歩いていた鈴鹿がぎゅつと握ってくれた。

「ありがとう、鈴鹿。大丈夫だから」

「そう？　辛くなったら言ってね」

「ああ」

「キョーヘイ、泣きたいならワタシの胸を貸すマスヨ」

その豊富なバストを揺らすマキシーンにはやんわりと断りをいれる。

死にたいか思ってるのに下の方へ思考が行くのはなんでなんだろうか。

そういう思考ができる限りは自殺はしないのだろうと、少しだけ安心した。

マキシーンと鈴鹿は気があうのか、道中飽きることなく話を続けていた。

その内容は銃や弓などの遠距離武器の取り扱いから、対人戦闘で気をつけること、ゾンビ相手の立ち回りかた、サバイバルの基本など多岐にわたる。

とても為になる話で、俺も「なるほど」と思うことが何度もあった。

今度うちの女性たちにレクチャーしてもらうのも良いかもしれない。

途中で一回の休憩を挟み、昼前にマンションへ到着した。

「へえ、このタワマンで暮らしてたんだ」

「俺は少しの間避難していただけだな。マキシーンは長く住んでいたんじゃないか？」

「YES. ここ、ミシエルの家デスネ。ワタシがお願いして借りてくれるマシタ」

「そうなんだ。ていうか二人は何者なの？ 本の作者と研究員ってことしか聞いてないんだけど」

「そうデスネ……」

マキシーンの拙い日本語での説明によると、マキシーンは元海兵隊員で軍を辞めて民間軍事会社に勤めていたそうだ。

ミシエルはアメリカのとある大学に所属するウイルス学者だったが、ゾンビパニックが発生したことで国に保護され、そこでワクチンの研究をしていたらしい。

感染がアメリカ全土へ広がり、略奪や暴動が其処彼処で発生し、そのどさくさに紛れて他国のテロや工作が相次いだことで、まだウイルス感染が起きていない日本へ避難をしてきたとのことだ。

「それでワタシもミシエルに言われて一緒に来たデスネ。一年前のことデス。日本平和デシタから、備えるしながら観光してたデス」

「二年前か。日本にゾンビが現れたのは半年前くらいだったな」

「日本、銃無いデスけどいろいろあつて良い国デシタ」

「過去形なのが悲しいね」

「つうかマキシーン、なんですぐにミシエルのところに行かなかつたんだ？」

「それはデスネ……」

米軍基地に駐屯していた兵士たちは、日本でゾンビパニックが発生してすぐに本国へ帰って行ったそうさ。

この基地に残った少数の兵士たちは見捨てられたと思い暴走を開始。

略奪、陵辱、残虐な殺し合いが至るところで発生し、その銃声に誘われて近隣のゾンビが一斉に集まって、たちまち阿鼻叫喚の地獄絵図となった。

ミシエルは病院の地下に籠り外出しなかつたおかげで無事だったが、食べるものが底をつきそうになりマキシーンに救援を要請したそうさ。

「銃も何も無くて近づくの無謀デシタから、ジエータイに help しましたけど断られたネ。その時キョーハイとミカに会ったデス」

「そうだったんだ。縁があつたってことなんだね」

縁か。

不思議な縁もあつたものだ。

「さて、長く立ち話をしてしまったな。そろそろ行こうか」

「そうだね。大丈夫、恭平？」

「ん？ ああ、大丈夫だ。落ち着いているよ。二人のおかげかな」

「なら良いんだけど」

「ミカもゆつくり眠れるマス。これが一番良いことデスネ。キョーヘイ、頑張るマス」

「そうだな。皆誰かしら大切な人を亡くしているんだ。俺一人だけ悲劇のヒーローを演じる訳にもいかないよ」

「これからは喜劇のヒーローを演じると良いかもね。まだまだ人生は長いんだから。美香さんの分も幸せにならないと」

「はは、上手いことを言う。まあ俺は大丈夫だから、気にしないでくれ」

「OK. じゃあ行くマス」

マキシーンはマンシヨンの正面玄関へと歩いて行く。

以前は梯子車から五階へ入り、そこから迷路のような順路を通ってマキシーンの部屋まで行ったが、今回はエレベーターを使う。

俺というゾンビ避けや、大口径の銃を持つマキシーンがいれば、危険と思われるものは少ない。

まずはマキシーンの部屋に行き、必要なものを集めて行く。

正直まだ覚悟が決まっていなかったので、これはありがたい。

通路のバリケードは俺が破壊したままだったので、少し狭いが通ることはできた。

ただ物資を持つては通れなさそうなので、マキシーンの指示に従い手早く解体していく。

さすがバリケードを作った本人がいると、どこを壊せば良いのかがわかって解体もはかどる。

力任せに壊そうとすると逆に強度が増すバリケードなんて良く考えつくものだ。

マキシーンの部屋につき昼休憩を取る。

ベランダの手すりが無くなっていたことに気がついたマキシーンが説明を求めてきたので、上から飛び降りて侵入したことを伝え、「フアンタスティック！」と褒めてくれた。

珠子の作ってくれた弁当を広げ、食事を始める。

二人は多種多様なローストビーフサンドをとても美味しそうに食べていた。

だが俺はもしかしたらいろいろとシヨックを受けて吐いてしまうかもしれないし、食欲もそこまで無かったので遠慮をしておいた。

「それじゃお腹いっぱいデスので集めるマス。このカバン使うヨ」

「何を集めればいいんだ？」

「ボウガンの部品デスネ。人たくさんデスので武器多いデスとそれだけで強いネ」



うちの拠点の女性陣に使わせるのなら、取り扱いの簡単そうなクロスボウは良い武器なのかもしれない。

銃なんて撃つことがない人間が狙っても当たらないと聞く。

クロスボウなら的を狙って練習を重ねればそのうち上達するだろうし、矢もなくならないから気兼ねなく練習できる。

この部屋には完成された五台のクロスボウと、もう何台か作れそうなくらいの部品がある。

これを全て持って帰るのは二人にはつらいだろうから、俺が持つようにしよう。マキシーンの荷物を回収し終え、いよいよ美香のところへ向かうことになった。

早く眠らせてあげたいと思う気持ちと、ゾンビになった美香を見たくない、行きたくないという気持ちとがせめぎあう。

このままじゃ良くないのはわかっている。

わかっているが、それでも行きたくないと思う俺がいる。

美香のいる階へやってきた。

エレベーターホールに出てすぐに、強烈な不安感に襲われた。

心臓が早鐘を打ち、頭から血の気が引き、背中に冷や汗が流れる。

はっはっと呼吸が早まり、息の仕方を忘れてしまったのかと思うほど苦しくなる。

手足が勝手に震え、ふわふわとした浮遊感の中を歩く足はおぼつかない。

「恭平、大丈夫？」

「あ、……ああ」

右手を温かいものに包まれる。

見れば、鈴鹿が手を握っていてくれた。

そこからじんわりと全身へ温かいものが広がっていくと、狭くなっていた視界が広がっていくのを感じた。

「軽いパニックになっていたみたい。落ち着いた？」

「ああ、いや、まいったな。すまん、ありがとう」

「いいよ。つらいのはわかるから」

「ワタシも『daddy』と『sister』眠らせてあげたネ。『headshot』で苦しむないデシタヨ」

「首を落とすか頭を破壊するしかないんだよな……」

はたして、俺にできるのだろうか。

俺はこの左手で、美香の首を断とうと思う。

一息に苦しませず、綺麗な姿で眠らせてやるんだ。

チャラ男の部屋の前までやってきた。

「ここで、美香はあの男と……。」

「……きつと、止むに止まれぬ事情があったんだ。」

美香が、本気で俺を裏切るわけがない。

なにか弱みでも握られていたのか。……弱み？

あのとき、俺は寝たきりで動けなかった。

美香にとつての俺は、まさにその弱みだったのでは？

……なんてことだ。

俺か。

俺が美香に最悪な選択をさせたのか。

「うっ、ぐ、うう……！」

「ちよ、どうしたの!? 大丈夫、恭平?」

「ああ、大丈夫、ではないかもしれないが、平気だ。軽く自己嫌悪で死にたくなっただけだ」

「ジコケンオー? どうしたデス?」

俺は、ここで起きたことを二人に話した。

美香が俺に嘘をついていたこと、男とここで浮気をしていたらしいこと。

そして、それが俺を守るためだったんじゃないかってことを。

「美香は必死にやってくれてたんだ。それを俺が、勝手に勘違いして、裏切ったなんて思っつて、見返してやるなんて考えて……。とんだクソ野郎だよ、俺は」

「……恭平」

「そんなこと少し考えるすればわかるマス。キョーヘー、ダメダメね」

「そうさ、俺はダメダメのクソ野郎なんだよ。だからちやんとケジメをつけて美香を眠らせてやる」

きちんと叩うんだ。

それが俺に唯一できる美香への恩返しだ。

「それじゃあマキシーン開けてくれ」

「OK」

マキシーンがタブレットを操作すると、電子音と共に鍵の開く音がした。

ドアノブを掴む手が震えている。

震えて、怖気つく資格は俺には無い。

無理やり手の震えを止めドアを開く。

「ウ、ウアア……」

「お前は……」

チャラ男が下半身と片腕の無くなった体で這いずっていた。

飛び出し、その頭へ踏みつけるようにして踵かかとを叩き込む。

威力が強すぎたのか、男の頭は爆発四散し、天井や壁にその肉片をこびりつかせた。廊下の床板も穴が開き、その下のコンクリートが見えてしまった。

「すまん。汚した。注意してくれ」

「Wow」

「う、うん。ていいうかなんでこのゾンビバラバラになってるの?」

「美香がやったのかもしれないな……」

廊下に男の手足や体の一部が散乱していた。

リビングへ続くドアは開いている。

この先に、美香がいるのか。

ゆっくりとリビングへ歩いていく。

「……美香? どこだ?」

「いないデスネ。本当にここであつてるマス?」

「ああ、あつてる。リビング以外の部屋かもしれない。探してみる」

ダイニングキッチン、トイレ、風呂、洋室二つ、どこを探しても美香の姿はなかった。

どうしてないんだ?

呆然として立っていると、なにやらマキシーンがノートパソコンを持ってやってき

た。

「キョーハイ、これにミカいたヨ」

「どういうことだ？」

「なんかこの男が撮ってた映像が入ってるっぽい。部屋の一つに三脚とカメラがあったでしょ？　そこで見つけたんだって」

つまり、男と絡む美香の姿がそこに？

「や、やめてくれ。なんてものを俺に見せようと……」

「でもキョーヘーも見たほうが良いデスネ。ほら、見るマス」

「やめろよ！」

「そうだよ、マキシーン。さすがにそれはダメだと思う。傷口に塩を塗りこむレベルを超えてるよ」

「デスが、見たほうが良いヨ。キョーヘー救われるネ」

「いや、見ない。見るならマキシーンと鈴鹿で見てくれ。俺は自分の部屋に行く」

「Hey!! キョーヘー、待つネ！」

待つわけが無い。

マキシーンは俺に死んで欲しいのだろうか。

さすがにそんな映像を見せられたら自殺も止む無しだ。

俺と美香が使っていた部屋へやってくる。

マキシーンと鈴鹿も映像は見ずに俺のあとを追いかけてきていた。この部屋はU字ロックを倒したままなので、鍵がなくても入れる。きつと美香がいるに決まっている。

ドアを開けて中へ入る。

リビングには俺が飲んだ大量のビールの空き缶が転がっているだけで他にはなにもなかった。

ここに美香の姿はない。

寝室へ向かう。

汚れて丸められたシーツが部屋の隅にあり、他には何もなかった。

「ここにもいない……。美香……。どこにいる……。」

「恭平……。」

姿が見たい。

声が聞きたい。

たとえどんな姿になっても。

ちゃんと、弔ってやりたい……。

「キョーヘー、一回帰るマス。天気も悪いデス」

「そうだね。一度ゆっくり考えてみて、それからまた探しに来ようよ」  
「……ああ。わかった」

拠点までの帰り道、マキシーンや鈴鹿がなにやら話しかけてきていたが、まったく内容を理解できなかった。

頭の中が美香のことではいっばいだった。

会いたい。

美香に会いたい。

どこだ。

どこにいる。

「おかえりなさい。恭平さん。大丈夫ですか？」

「ああ、珠子か。あれ？ いつの間に着いたんだ？」

目の前には珠子が心配そうにこちらを見て立っていた。

ここは、百貨店の一階？

マキシーンと鈴鹿は……、いた。

俺の後ろでリュックの中身をどこに置くかの話をしている。

良かった。二人を置いてきてしまったのかと思った。

というか、帰り道の記憶がほぼないのだが。



「あ、恭平。正気に戻った？ 何を話しかけても「美香」しか言わなくなっちゃったから、壊れたのかと思つて心配したよ」

「そ、そうか。それはすまん。精神的に限界だったみたいだ。今は平気だから」

「わかった。今日はゆつくりして、また明日から美香さん探しをしようね」

「助かる。ありがとう」

「たまちゃんがご飯を作つてくれるから食べよう？ 恭平朝しか食べてないし」

「そうだな」

「美味しいポトフを作りましたよ。雨も降つてきて寒くなりましたし、食べて温まりましょう？」

二人の優しさがありがたい。

それに比べてマキシーンは何度も「キョーヘー、見るネ」と俺に映像を見せようとしてくる。

本気で怒るぞ。こいつ。

「マキシーン、しつこいぞ、やめろ。それ以上やったら戦争だ」

「ワタシはキョーヘーのこと思つてデスネ」

「やめろつて言つてんだ。俺や美香を侮辱するのはやめろ」

「Listen to me！」

「うるせえ！」

思わず怒鳴るとマキシーンは顔を真っ赤にして俺を睨んできた。

「Ok. Have it your way. You damned fool  
!」

思い切り顔を歪ませて中指を立ててくるマキシーン。

彼女はそのまま百貨店の外のミシエルのコンテナ研究室へ行ってしまった。

「なんか、凄く怒ってましたけど、大丈夫なんですか？」

「ああ、放っておけばいい」

「あとで私がフォローいれといてあげるから、恭平も落ち着きなね」

「……すまん」

頭に血が上っていても良いことなんて一つもない。

冷静にならなければ。

あとでマキシーンには謝っておこう。

温かい食事を皆で囲んで食べたが、マキシーンは終始無言で少々気まずい。

俺を見ようともせず、黙々と食べたあとはまたミシエルの研究室へと引っ込んでしまった。

「ごめんなさいね。マキシーンは少し子供っぽいところがあって、一度拗ねると長いの。

何があつたのかは知らないけれど、すぐにまた元通りになるから心配いらないわよ」

ミシエルにそう言われ、少しだけ安心した。

その後ミシエルに「研究で使いたいのだけれど」と少量の血を抜かれた。

俺の腕を変化させた原因を調べたいそうだ。

寝る前の自由時間になつたので、酒でも飲むと中華レストランへ向かう。

ここで酒を飲むのは俺と鈴鹿くらいだが、鈴鹿はマキシーンの元へ行つているので俺一人だ。

適当な酒瓶を掴むがどうにも飲む気がしないので元に戻す。

冷蔵庫にしまつてある缶ビールを取り出す。

今日はこれを飲みたい気分だつた。

蓋を開け一口飲む。

なんだか、久しぶりに飲んだせいとか、とても染み渡る味に思えた。

ビールを飲んでみると、いろいろと美香との思い出が浮かんでくる。

俺も美香もビールが好きで、毎日の晩酌が欠かせなかつた。

二人ともロング缶を毎日三本は飲んでいたせいで、酒代がとんでもない金額になつていたつけ。

ビール代だけで月に五万くらいはしていた気がする。

自宅避難の指示が出てからがつかかった。

大量に備蓄があるから安心だと思っていたビールはあつという間に底をつき、外にはゾンビがうようよと歩いていて買いたくもない。もちろん買いに行くのは店ではなく酒の自動販売機だ。

美香と一緒に住んでいたアパートには、歩いて数分のところに酒の自動販売機があったのだ。

あのアパートはコンビニも近く、とても住みやす……アパート……？

「そうか、アパートだ……！ 美香は、アパートにいるんだ」

ここで酒を飲んでいる場合じゃない。

今すぐアパートに行かなければ。

しかし勝手にいなくなつては皆が心配するだろう。

誰かに伝えておこう。

中華レストランを出てすぐに、きなこを抱いた菊間に出くわした。

「菊間か。きなこなんて抱いてどうした？」

「いや、あんまり双子に追い掛け回されて不憫ふびんだよ。たまに逃げてくるからかくまって

やっつてんだよ」

「アン！」（こいつ、いいやつ）

「はは、きなこが菊間のこと良いやつだとさ」

「あ？ ああ、犬の言葉がわかるんだっけか。お前も大変だなあ」

菊間が腕の中にいるきなこを撫でると、撫でられたきなこは嬉しそうに耳をぺたんと倒した。

撫で方も優しいし、双子もこれを見習えばきなこに嫌われることもないだろうに。

「あ、それはそうと、ちよつと出てくる。明日には帰るから皆にもそう言っておいてくれ」

「は？ 今からか？ どこに行くんだよ」

「俺の住んでたアパートだ。美香が待っているんだよ」

「……そうか。外は雨だから、濡れないようにして行けよ。ここには医者がないんだから体調崩すだけで命取りだぞ」

「ご忠告感謝するよ。じゃあな」

「ああ、気をつけてな」

「アン」（おおかみのひと、またね）

「行つてくる」

きなこの頭を一撫でし、レインコートへ着替えて外へ。

しとしとと霧雨が降っている。

時刻は夜の八時、走ればすぐにつくだろう。  
幸い、俺の目は良い。

暗くても走ることはできる。

最短距離を走れば二時間程度でつきそうだ。

「待っている、美香」

きつとアパートで待っているであろう美香の元へ走り出した。

道など使わずに直線で走るのが一番早い。

今の俺ならそれが可能だった。

車に飛び乗り塀へ移って家の屋根に飛ぶ。

屋根から屋根へ飛んで走ると時間が短縮される。

雨と苔のせいで足が滑り屋根から落ちるが、地面に難なく着地し走り続ける。

障害物を飛び越え、目に付くゾンビは通りがけに首を刎はねながら走る。

やがて見知った景色が見えてくる。

酒の自販機だ。

もう、すぐそこにアパートがある。

雨の勢いは強く、土砂降りになっていた。

着ていたレインコートは走っている最中に引っ掛けて破れてしまったのでびしょ濡れだ。

アパートの階段を駆け上がり、自室の前へ。

ドアノブをひねると鍵がかかっていた。

玄関横にある給湯器の入った扉を開ける。

ここに合鍵があるのだ。

合鍵を使い玄関ドアを開ける。

ふわっと懐かしい匂いがした。

美香に似た匂い。

ここに住んでいたから匂いがして当然ではあるが、この匂いは新しい。

脳髓を刺激する芳しい匂いに誘われるように寝室へ。

いた。

ベッドに潜って寝ている。

「美香、おかえり。探したよ」

「……ううん」

匂いで頭がくらくらしてきた。

懐かしい匂いだ。

「美香、起きてくれ。美香」

「う、ん……。ううん？ えっ、誰!？」

「は？ え？」

ベッドの中にいた人物が慌てたように飛び起きたおかげで、その顔をはつきりと見る  
ことができた。

美香に似ている顔。

だが、少しだけ違っている顔。

俺はこの顔に見覚えがある。

「なんで、花乃かのちゃんが……。？」

「え！ その声、もしかしてお義兄さん!？」

俺の義妹で、美香の妹の、花乃ちゃんがそこにいた。



## 第三十一話 義妹

俺と美香の住んでいたアパートの部屋は、出て行ったときと様変わりしていた。

窓という窓にはダンボールとガムテープで目張りされていて、明かりを漏らさないようにしている。

歩く音を出さないためか、床には大量のタオルや服が置かれていた。

部屋の隅には大量の缶詰の空き缶が入った袋が詰まれ、その缶詰の入っていたであろう畳まれたダンボールが折り重なっている。

美香の妹の花乃ちゃんがなぜ俺のアパートで寝ていたのかを問いただそうとしたが、まずはびしょ濡れの体を拭いたほうが良いと言われ、それに従って脱衣所で体を拭き服を着替えた。

明かりの点いた部屋でテーブルを挟んで花乃ちゃんと対面して座る。

花乃ちゃんの姿をまじまじと見る。

以前に会ったときは俺よりも短かった髪が、今は肩ほどまで伸びて後ろで一つにくくられていた。

美香と違い高身長でボーイツシユなイメージだった花乃ちゃんの髪が長いと、なんと

も違和感がある。

「はい、お義兄にいさん、まずはお茶をどうぞ」

「あ、ああ、ありがとう。いただきませう」

花乃ちゃんの入れてくれた熱い緑茶を飲む。

冷えていた体がじんわりとあたたまっっていく。

「さて、じゃあいろいろ聞きたいんだけどさ、まずその腕どうしたの？」

「え、ああ、ゾンビに噛まれたらこうなってる」

「噛まれたの!? いつよ!」

「いや、ちよ、待ってくれ」

立ち上がり空手の構えを取る花乃ちゃんは、いつでも殴るか蹴るかができる臨戦態勢を取っていた。

慌てて腕のことなどについて弁解をすると、怪訝な顔をしつつも構えは解いてくれた。

「ゾンビにならない、ねえ。にわかには信じがたいけど」

「俺も信じられないけど事実なんだよ」

「ふーん。なんでそんなことになったの? ていうか今までどうしてたの?」

座って話を聞く姿勢をとってくれた花乃ちゃんに、今まで起きたことをいろいろと話

す。

市役所、マキシーン、薬、駐屯地、米軍基地、百貨店、赤カブト、犬。

話すことは山ほどあったが、美香についてはついぞ言うことができなかった

「ふーん、そんなことがおきてたんだ。なんか壮絶だね」

「ああ、壮絶か。そうだな。何度も死にかけたしなあ……」

「なんにせよ生きてて良かったよ。ところでお姉ちゃんは？ 百貨店にいんの？」

「……それが、だな」

「あ、うん、そっか、わかった。死んだんだ、お姉ちゃん。そっか」

花乃ちゃんは俺が言いよんだ様子から、美香のことを察してしまった。

そのなんともあつさりした反応に、俺がなにも返せずにいると、花乃ちゃんが「実はね」と話を切り出した。

「お母さんとお父さんもゾンビになっちゃってさ。私が殺したんだ」

「そんな、お義母さんとお義父さんが……？」

「うん。だからお姉ちゃんも私が殺してあげる。眠らせてあげるんだ」

「いや、それは俺がやる。俺がやらないといけないんだよ」

「そっか、でもお義兄さん、お姉ちゃんのことすごく好きだったから無理だと思うよ？」

「それでも、やるよ。甘えてばかりはいられないからな」

「うん、まあそのときになったら考えようね。それで、お姉ちゃんはどこにいるの？」  
花乃ちゃんへ美香に起きたことをかいつまんで説明する。

チャラ男の件は、言うのがつらかったが伝えた。

眉間に皺を寄せて「お姉ちゃんが？　ありえないね」と否定する花乃ちゃんに、俺のせいだと伝えるも険しい顔のままだった。

「あのお姉ちゃんが、お義兄さん以外の人に体を許す？　ないない。お姉ちゃん男嫌いな  
の知ってるでしょ？」

「ああ、だが、俺という弱みがあったから……」

「それはそうかも知れどさ。ていうかそしたらそれ浮気じゃなくない？」

「だから俺は死にたくなるくらい後悔しているんだよ……。マジで、もう昔の俺を殺してやりたい」

「まあまあ。ていうかお姉ちゃんが大人しくやられるわけないし、その動画つてのを見ないとほんととも言えないなあ」

「俺は絶対に見たくない」

衝動的に左手の爪で首を搔つ切って自殺をする可能性がある。

「まあ、その話は置いておくとして、美香を探して、それでこのアパートにいるかと思つてやってきたら花乃ちゃんがいたんだよ」

「そっか。タイミング良かったね。私ももう食料ないし明日にはどこかへ移動しようか  
なって思ってたんだ。勝手にいろいろ食べちゃってごめんね。もうなにも残ってない  
よ」

「それは構わない。ていうかいつからいたんだ？」

「一ヶ月前くらいかな。ここまで来るのに一週間もかかってさ。わりと死にそうだった」

「そりやそうだろうよ……。ゾンビがうようよいただらうによく無事だったな」

「うん、マウンテンバイクを全力で漕いでたら意外となんとかなった。気がつく前に走り去る感じで」

「それなのに死にそうだったのか？」

「うん。餓死寸前だったよ」

「ああ、そういう……。明日には俺の拠点に向かうか。食いもんいっぱいあるぞ」

「やった。今日なんか『ジュールフレンド』二箱しか食べてないからお腹ペコペコだよ」

あれは一箱で四百キロカロリー近くある。

二箱食べても一日の消費カロリーには足りない。

お腹も空くことだろう。

「拠点にはいろいろあるぞ。ビーフシチューとか、ローストビーフとか。あとサバの味

「増煮も食える」

「ちよ、やめてよ。今それ聞いたらお腹減りすぎて耐えらんないよ」

「ああ、悪い。ただ、料理を作ってくれる人の腕が良いから、今まで生きてきたなかで一番美味いと思えるものが食えるぞ」

「あー、お腹減った！ くそー！ お腹減ったよ！ お義兄さんさあ！」

「悪い悪い。あ、ちよつと今その辺で食えるもん持つてきてやるよ。このアパートのどこかにあるだろ」

「え、危なくない？」

「だから俺はゾンビに襲われないんだって。ちよつと行つてくる」

「うん、だけど気をつけてね」

「ああ」

玄関を開けると外は土砂降りの雨だった。

雨避けの庇ひさしのついたアパートの二階通路が、横殴りの雨のせいでびしょ濡れになっている。いる。

せつかく着替えたのにまた濡れることになりそうだが、急げばそれほど濡れないだろう。

アパートには八部屋あり、俺と美香の住んでいた部屋は二階の一番奥の角部屋だっ

た。

とりあえずお隣さんから探っていこう。

インターホンを押すも反応はない。

俺と美香が自宅待機の避難生活をしているときにお隣さんからは物音がしていなかったの、おそらくパニック初期のうちに違うところへ避難したと推測できる。

玄関に取り付けられたポストを開け中に声をかけるべく口を寄せる。

「おい、隣の山下だけど。いないならドア破るぞ。いるなら何かしら反応してくれ。

あと五秒、四、三、二、一」

物音はまったくしない。

これはドアを破ってもいいな。

まず、ドアについているポストの開く場所を左手で掴み、思い切り下へ引つ張る。

バキリと音がして腕が入るくらい広くなったので左腕を突つ込む。

邪魔な手紙受けは壊して内側に落とす。

そしてサムターンを捻り開錠。

「さて、お邪魔しますよ」

お隣さんは三十代のサラリーマンが一人で住んでいた。

あまり食料には期待ができないか？

男の一人暮らしの荒れた部屋を想像していたが、意外と綺麗に片ついていた。冷蔵庫を開ける。

変色したなにかが入った皿やタッパーがいくつかと、瓶に入ったカピタなにか。調味料がいくつかと栄養ドリンクが二本。

賞味期限は、一月前。まあ、いけるだろう。

冷凍庫には、未開封のパックシユウマイ、五玉入りの冷凍うどん、冷凍チャーハンがあつた。

キッチンの棚を漁れば缶詰がいくつかとカレー粉がでてきた。

よし、これだけあればいいだろ。

冷蔵庫に磁石で取り付けられていたスーパ一の袋に戦利品を入れて部屋に戻る。

「はい、ただいま」

「おかえり、早かったね」

「お隣さんにしか行つてないからな。ほら、これだけあつたぞ」

「うわ、お義兄さん、やるじゃん。はやく食べよ食べよ」

「まあ待てつて。俺が美味しいもん作つてやるから」

「ええ、待てないよ」

「わかつた。じゃあチャーハン食つてて良いから」



「やった。お義兄さん、ありがとう」

電子レンジでチャーハンを温める花乃ちゃんを横に、料理を開始する。といつても全部混ぜて煮るだけなんだけどな。

カレー粉は万能なのだ。

シウマイを冷凍のままサイコロサイズに切って鍋に入れる。

そこにコーン缶、グリーンピース缶を入れる。

オリーブオイルで軽く炒め、我が家に残っていたスパイスのガーリックとターメリック、コリアンダー、ガラムマサラをたっぷり入れる。

「ふわあ、良い匂い！」

「そうだろう、つてもう食ったのか。あと少し待っててくれ。あ、うどんはなん玉食う？」

「あ、カレーうどんなの、これ？　じゃあ三玉食べる」

「食いすぎだろ。食えんのか？」

「余裕だね」

「そうかい。じゃあレンチンしといてくれ」

「はい」

水を入れて煮込んだあと、火を止めてカレー粉を入れてかき混ぜればほぼ完成だ。

そばつゆを入れれば完成だが、さすがに封を開けてから何ヶ月も放置していたものはやばそうだったので、粉末の和風出汁と醤油で味付けする。

「はい、完成。なんでもぶっこみカレーうどんだ」

「すてきー」

テンションの高い花乃ちゃんが持つ、うどんが入った大皿へ汁をたつぷりと入れてやる。

「自分用の皿にも取り分け「いただきます」と食事を開始。

ああ、これ、美味しいな。

シウウマイの肉や玉ねぎから良い出汁が出ている。

いろいろな味がひとつにまとまり調和がとれている。

やはりカレー粉は万能だ。

「これは、面白い味だね。たまに食べるシウウマイの欠片が謎肉感があって好き」

「わかる。ただコーンを入れたのは失敗だな」

「そう？ この甘いのも美味しいよ」

「そうか、ならいいけど」

花乃ちゃんはその身のどこに収めたのかと思うほどの量を平らげ（スープまで飲み干していた！）満足そうにしていた。

その場でコロンと転がりパンパンに膨れたお腹をさする花乃ちゃんへ、明日の朝一にここを出ることを伝える。

花乃ちゃんは「じゃあもう寝ないとね。十時過ぎてるし」とソファへ向かうが、そこは俺の寝る場所だからベッドに行ってくれと頼んだ。

「でもお義兄さんの家だし」

「いやいや、一月もそのベッドで花乃ちゃんが寝てたんだから俺のほうが気まずいよ」そんな押し問答の末に、なんとかソファで寝る権利を勝ち取った。

花乃ちゃんを寝室に見送ったあと、ソファで横になるがまったく眠くならなかった。壁にかけられた時計の秒針の動く音に意識を集中し、眠る努力をする。

窓の外は雨が降り続けていて、時おり強く風が吹いて雨戸がカタカタと鳴った。寝室とはふすま一枚で仕切られている。

花乃ちゃんはもう寝ただろうか。

意識をそちらへ集中すると、鼻をすする音とくぐもった嗚咽が聞こえた。

……やっぱり、美香は絶対に俺の手で眠らせてあげよう。

これだけは花乃ちゃんにやらせてはダメだ。

そう決意をして目を閉じると、だんだん意識がまどろんでいった。

翌朝、雨はやまずにその勢いを増していた。

窓を少し開けると外の冷えた空気が入り込み、思わず体がぶるりと震える。押入れにしまわれていた冬服を引っ張り出し、防寒対策をしつかりとする。

俺の左腕は元の腕の二倍くらいまで太くなっており、長袖はまず入らない。

泣く泣くお気に入りのシャツの左腕部分を肩から切り落とした。

ジャケットは切り落としたくなかったので左腕だけ袖を通さずに羽織る感じを着る。

腕には包帯を巻き、万が一見られても骨折しているといいわけができるようにしておく。

「さて、花乃ちゃん準備できた？」

「うーん、ちよつと待つて。お姉ちゃんのダウンじゃやつば小さいや」

「二人とも姉妹なのに全然身長違うからなあ」

美香は一五五センチだが、花乃ちゃんは一七〇センチほどある。

小柄なお義母さんに似たのが美香で、俺よりも身長が高いお義父さんに似たのが花乃ちゃんだ。

「あ、お義兄さんのコート貸してよ。緑のやつ」

「ああ、前に欲しがってたもんな。良いよ、あげるよ」

「え、良いの？ やった」

美香と花乃ちゃんと三人で米軍基地に行ったときに、近くにある店で米軍払い下げのモッズコートを買ったのだ。

夏なのにコート買うなんて馬鹿じゃない？　と言う美香だったが、花乃ちゃんは羨ましそうに見ていた。

その後、冬になり美香の実家へそれを着ていくと、花乃ちゃんが「私も買えば良かった！　ちょうだい！」と言っていた覚えがある。

この腕になってしまったしもう俺は着れなさそうだから、いつそのこと花乃ちゃんにあげてしまうのも良いだろう。

上背もあるからきつと着こなしてくれる。

玄関を開けると雨がしとしとと降っていた。

土砂降りじゃないだけマシだが、それでも雨が降っているだけで気分が滅入ってくる。

カッパは来るときにボロボロになってしまったので傘を使うことにした。

美香が帰ってくるかもしれないので、玄関の鍵は開けっ放しにしておく。

傘を差し拠点を目指し歩き出す。

家を飛び越えて直線で行けば早く着くが、今は花乃ちゃんを連れてあるので道を歩く。

途中で会ったゾンビはぼんやりとこちらを見ていたが、俺に気がつくど慌ててどこかへ逃げ出していく。

雨だと俺を認知するのに時間がかかるようだ。

花乃ちゃんは逃げていくゾンビを見て「すごい……」と呟いていた。

今は花乃ちゃんがいるからやらないが、いずれあのゾンビたちも眠らせてあげなければならぬ。

拠点までの道すがら、花乃ちゃんからいろいろと話を聞いた。

美香の実家で花乃ちゃんが住む家は、ここからとても遠い、富士山のある県の奥のほうにある。

花乃ちゃんは実家近くの大学に通っていて、たまに実家の農業の仕事などを手伝って暮らしていた。

美香たちの家は農家で、その辺りに住む人の数も少なく、ゾンビの心配もそこまでなかった。

花乃ちゃんを含む三家族十人で助け合いながら今まで暮らしていたが、大量のゾンビがやってきたことで崩壊を迎えた。

お義父さんとお義母さんが改造トラクターや改造農業機械で奮闘するも、ゾンビの物量に飲み込まれてしまう。

お義父さんとお義母さんがゾンビを減らしてくれたおかげで、残りの人数で殲滅をすることができた。

その時に花乃ちゃんはお義父さんとお義母さんを手で眠らせ、そして俺と美香に会うために一五〇キロも離れたあのアパートへやってきたそうだ。

SNSやメールで俺や美香に呼びかけていたが返信がなく、直接出向くしかないと思っただけらしい。

そういえばスマホはどこかにいつてしまった。

というよりまだネットが生きていることに驚いた。

「俺も美香も花乃ちゃんにメッセージ送ったんだけどな。返事がなかったからさ」

「あー、うん。気付くのが遅れちゃって、返信したんだけど既読にならなかったからさ。うちと違ってこっちはゾンビがウヨウヨしてると思ったから、返信しまくって音出すとマズいかなって思ってたさ」

「そっか。確かに音を出さないようにマナーモードにしてたし、バイブもマズいと思って電源切って持ち歩いてたよ」

「うん。こんな状況だからね。仕方ないよ」

いろいろバタバタと続いてそのまま忘れてしまっていた。

花乃ちゃんには悪いことをした。

「それで、お姉ちゃんの行きそうなところってわかるの？」

「わからない、……ゾンビになった人がどういいう行動をするのかなんて、わかるはずもない」

もしかしたらアパートが懐かしいと思って帰ってきているかもしれないと思ったが、ゾンビがそんなことを考えるわけもない。

……あまり美香をゾンビとは言いたくないが、俺の目の前で確実にゾンビになってしまったのだ。

鈴鹿にも言われたが、いいかげん現実を見なければ。

「お姉ちゃんの行きそうなところどこかないかなあ。あ、仕事先は？」

「いや、美香は仕事してなかったよ。友達もそっちの県にしかないようだったし」

「なんだよ、お姉ちゃん。私に実家の農家継げとか偉そうに言っ出てったくせに。自分分はグータラしてたのかよ」

「いや、美香は俺のために家事をいろいろとしてくれてたぞ。洗濯、掃除、料理に買い物。ゴミ出しなんかもしてくれていた」

「それくらい普通でしょ。私だって養ってもらってたらやるよ」

「そ、そうか？ 俺はやってもらえるだけでありがたかったけどな。美香が楽しく暮らせるならそれが一番だって、そう思っていたよ」



「そうやっておねえちゃんを甘やかすのはお義兄さんの悪いところだね。世間一般の奥様が聞いたら羨ましすぎて血を吐くよ」

「そうなのか」

「そうなの」

美香の友達が遊びに来たときも似たようなことを言っていた。

「お義兄さん、どこかないの？ お姉ちゃんが行きそうなところ。会いたい人とかいないのかな」

「会いたい人か……。もしかしたら……」

美香と一緒に市役所へ避難したことを思い出す。

その時に会った小学生の姉妹、優子ちゃんと恵理奈ちゃん。

美香は二人のことをずっと気にしていたから、もしかしたら会いに行ったのかもしれない。

「市役所にいる可能性があるかもしれない」

「市役所って避難所になってるって言ってたやつ？」

「あれ？ なんで知ってたんだ？」

「メッセージでそう言ってたじゃん。市役所に避難するって。だからアパートに行く前に一回行ってみたけどゾンビでいっぱいだったからさ。諦めてこっち来ちゃった」

「そうか。中に人は？」

「いるっぽいよ。しつかりバリケードでふさがれてたし」

「そうか。良かった」

どうやら佐藤くんたちは無事にゾンビを撃退できたようだ。

自衛隊も援軍で駆けつけただろうし、優子ちゃんたちも安心して暮らせていることだろう。

両親とは再会できただろうか？

そうだ、俺のこのゾンビに嫌われる能力で市役所からゾンビを追い払ってしまおう。

もしかしたらそのゾンビの中に美香もいるかもしれないし、これは市役所に行くべきだろう。

「花乃ちゃん、ちよつと拠点に行く前に市役所に寄っても良いかな？」

「あー、お姉ちゃんがいるかもなら全然良いよ」

「あとは知人にも会いたいつてもあるんだけどな。それと、俺が行けばゾンビがいなくなるだろうし」

「逃げてったもんね。でもさ、あれだけ大量のゾンビが違うところに行くと、そこで知らない人が襲われちゃうんじゃない？」

「そっか。そんなこと考えたこともなかった」

たしかにゾンビはこの世から消えるわけではなく違うところへ行くだけだ。

俺のせいどころかの誰かが襲われる可能性もあるのだ。

今までなんとか暮らしていた人々が俺のせいで死ぬかもしれないのか。

「ま、今は他の人の事なんて考える余裕は無いけどね。仕方ないでしょ。行こうよ、市役所」

そう言つて笑う花乃ちゃんは、少しだけ美香に似ていた。

## 第三十二話　ラ・ミスティカ

シトシトと降っていた雨はやみ、どんよりと曇った空だけが残った。

市役所の周りには、いつか見たときと同じくらいのゾンビが群がっていた。

数千人規模だ。

強固なバリケードのおかげで侵入は許していないが、その大量のゾンビのプレッシャーで中にいる人が精神をやられてもおかしくない。

実際に前回はそのせいで中からバリケードが崩れたのだ。

早くこのゾンビたちを散らしてしまおう。

ある程度の距離まで近づき、ゾンビに気づかれない所で止まる。

ゾンビを散らす前に美香がいるかの確認をしなければならぬ。

美香の服装はレザーのジャケットとパンツだった。

一目でわかるわかりやすい格好なので、花乃ちゃんにも協力してもらおうとしたが「この距離からじゃ見えない」と言われた。

これ以上近づくとゾンビに気づかれて逃げられてしまう可能性があるのです、一人で探すことにした。

視力を含め、俺の五感が怪物化の影響で強化されていたことを失念していた。市役所の周りをぐるりとまわる。

大量のゾンビがバリケードへ寄りかかったり、突き出たパイプを掴んで引つ張ったり、延々と叩き続けたりとよくわからない動きをしていた。

バリケードを叩くゾンビの手からは肉が削げおちて骨が丸見えになっている。

何日間、何週間叩き続けたらそうなるのだろう。

ゾンビは疲れも痛みも知らない上に根気があるから困りものだ。

労働力としては最高の人材なんじゃないか？

人を食う仕事にしか興味がなく知能も低いので、就職先はないだろうけど。

俺がゾンビを追い込んで敵対するコミュニティに大量に送りつけたら、とても良い働きをしそうではあるが。

一周してみたが美香の姿はなかった。

そこまで期待していたわけでもないので落胆はしない。

さっさと散らしてしまおう。

「花乃ちゃん。これからゾンビを散らすから、俺から離れないでね」

「うん。わかった。でもあれだけ大量にいるゾンビにその力みたいなのは効くの？」

「あー、たぶん余裕だと思う。それにダメだったらダメだったでこの左腕で戦えばいい

話だから」

ジャケツトの内側から左腕を振りアピールする。

その様子を花乃ちゃんがじつと見てから「不思議だね」と言った。

たしかに人の体からこのような腕が生えていたら不思議だろう。

不思議で済む話ではないが。

ゾンビを散らすべく足を向けると、一人のゾンビが怪訝そうにこちらを伺い「グゲ……」と呟くと、俺から離れるべく歩き出した。

そのゾンビの様子を見た他のゾンビが俺に気がつく、そいつも「グゲエ……」と呟き離れていく。

一人から五人、五人から十人へとその呻き声は広がっていき、やがてゾンビの大合唱が周囲に木霊こだました。

数千からなるゾンビの声はまるで地響きのようで、以前にもここで聞いたことのある音だった。

『オオオオオ……』

「なにこれ、すごいね」

「よくわからないけど情報伝達をしているっぽいんだよな。ほら、全体が移動し始めた」

「ほんとだ」

俺のことを確認できないような位置にいるゾンビも、俺から離れるべく移動を開始した。

蜘蛛の子を散らすようにして離れていくゾンビは、街のあちこちへとその姿を消していった。

その先で誰かが襲われる可能性はあるが、全てのことには責任は負えない。

どうか頑張つて生きてくれ、と願つておいた。

「あ、見て見て。トラック動いてるよ」

「あそこが入り口だったっけな」

市役所の正面に止めてあるトラックがゆっくりと動いていた。

以前、市役所から逃げ出す際に、あんなトラックが入り口をこじ開けていたのを思い出す。

それが入り口代わりに使われているということは、復旧もすっかりできてくるよう少しホツとした。

トラックがわずかばかりの隙間を作ると、迷彩服を着た二人とニツカにドカジャンという職人らしい格好の人が出てきた。

あれは、佐藤さんと小池さんか。生きていて良かった。あとの背の高い自衛隊員の名前は覚えていない。話した記憶は無い気がする。

佐藤くんが周囲をうかがいゾンビがいないことを確認すると、小走りでこちらへとやってきた。

「山下さん、久しぶりじゃん！ 無事だったみたいで良かったよ」

「佐藤くん、久しぶり。そっちも元気そうだね」

「駐屯地から物資も届いたしね、まあまあ良好だよ。ていうか、あれ？ 美香さんは？」

そっちの人は美香さんに似てるね。お姉さん？」

「美香は、ちよつと、違うところに行っている」

「どもー、妹の花乃ですー。姉がお世話になったみたいで」

「あ、妹さんだったか。どもども、美香さんにも山下さんにもお世話になってる佐藤っス」

花乃ちゃんが気を利かして佐藤くんと話をしてきている。

正直ありがたい。美香のことを誰かに伝えるには抵抗がある。

はつきり死んだと言うには、まだ心の整理ができていない。

必ず、確実に吊ってあげなければならない。

「山下さん、ご無事でなによりです」

「いえ、そちらも無事なようで良かったです。小池さんですよね？」

「はい、小池です。そういえば前回お会いした時には顔をお見せしていませんでしたね」



「そうですね。自衛隊員の皆さん全員が目出し帽かぶってましたから」

「はは、そうでした」

小池さんは沖縄にいそうな顔の彫りが深い人だった。お酒をめっちゃ飲みそうである。

そんな小池さんから少しだけ不穏なおいが漂ってきた。

「ところで山下さん、つかぬ事をお伺いしますが、この周りに大勢いた元国民の方々になにをしました？」

ここで本当のことを話したらどうなる？

俺を利用するべく拘束するか、研究所にでも送られて監禁されるだろう。

それはごめんだ。

俺にはやることがある。

拠点の女性らを守らなければいけないし、美香を探さなければいけない。

だから嘘をつく。

だが嘘をつくにしてもどういった嘘をつく？

自衛隊員が手を出せなくすれば良いのだから、手を出しにくい組織に属してるとも

言えば良い。

「実はですね、米軍関係の方と知り合い、そこで開発している薬の試験をやることになり

まして」

「薬、ですか」

「はい。時間は短いですが、ゾンビが寄り付かなくなる効果があります。その実験を兼ねてここに来た次第ですね」

「なるほど。ちなみにその効果時間はどれくらいなのでしょう？」

「人の体質にもよりますね。薬が効く人は十人に一人くらいで、その時間も一時間から一週間と様々です」

「そうですか……」

「こういうもつともらしい嘘をつくのは得意だ。」

あとは守秘義務を課せられたとでも言えば追求は免れられそうだ。

「すげえな、山下さん。ちなみにさ、今ゾンビいないけど戻って来ないの？」

「ああ、そうだね。たぶん俺がここにいる間は大丈夫だと思うよ」

「そっか。じゃあちよつと俺、今のうちに作りたいもんあつからさ。山下さんとはここでお別れかな」

「大丈夫だとは思うけど一応気をつけてくれ」

「わかつてるって。ちゃんと見張つたりしなからやるよ。じゃ」

佐藤くんはそう言うのと、市庁舎とは別の方向へ行ってしまった。

バリケードの強化でもしにいくのだろう。

「それでは我々は市庁舎へ向かいましょう」

「はっ」

何かを考え込むようにして黙ってしまった小池さんの代わりに、背の高い自衛隊員に先導されて歩きだした。

市庁舎までの道中で、今の避難所の様子を聞いた。（ちなみにこの人の名前は斉藤さんだった）

あのゾンビ侵入時の犠牲者は四十八人ほどだったそうだ。

一階を封鎖して二階で耐えていたところに自衛隊の応援が来てバリケードを封鎖し、内部のゾンビを鎮圧したらしい。

撤収していく自衛隊員についていく人たちが大勢いて、市役所には佐藤くんの仕事仲間とその家族、外から避難してきた数人くらいしか残らなかった。

百二十人近くいたのが今ではたったの四十人ほどになってしまったのだとか。

まあ大勢いてもヒステリックやパニックになったり、犯罪を犯そうとする輩が出てくるから身内で固まっているのは良いことなのだろう。

市庁舎内部に入ると一階の生活スペースは取っ払われており、代わりに何重にも設置されたバリケードが置かれていた。

もし外のバリケードが突破されても大丈夫なように作られたのだろう。

言うなれば最終防衛ラインといったところか。

二階へと続く階段にもしつかりとした本格的なバリケードが設置されていて、役人らしき見張りの男性が二人、さすまたを手に立っている。

彼らは小池さんが敬礼をすると会釈をしてから重そうな鉄の扉を開けてくれた。

これくらいやればゾンビも人間も簡単には入れなさそうだ。

二階に着くとたくさんの人がいた。

ゾンビ がいなくなつたことが気になるのか、外の様子を伺っている人も多かった。

階段から上がってきた俺たちに自然と視線が集まる。

「あー！ 恭平おにいちゃん！」

「ん？ おお、恵理奈ちゃん」

恵理奈ちゃんが駆け寄つてきたので抱きとめる。

太ももにぎゅーつと抱きついたまま離れない恵理奈ちゃんの頭を軽く撫でる。

こんな全身で再会の喜びを表してくれると心がほっこりしてくる。撫でる手も止まらないというものだ。

「お兄さん、ご無事でなによりです」

「優子ちゃん、ありがとう。久しぶりだね」

「はい、私、待つてたのに、お兄さん遅くて、本当に心配、しちやいました」

そう言いながらその目からポロポロと涙が溢れていく。

「ああ、ごめん。ほら、おいで」

少し遠慮気味に抱きついてくる優子ちゃんの頭も撫でる。

知り合いが死ぬという状況は、まだ幼い二人にはキツイだろう。

これで少しでも安心してくれれば良いけど。

「もう、お兄さん遅かったから、ベーコン全部食べちゃったんだから」

「ベーコン？ ああ、ベーコンか。美味しかった？」

「美味しかったですよ！」

少しキレ気味に答える優子ちゃん。

ここから脱出する時に交わした、約束とも言えないやり取りを覚えてくれたことに少しだけ嬉しく思う反面、瞬時に思い出せないことに不甲斐ない気持ちになった。

「そういえばご両親には会えた？」

「はい、おかげさまで。でもお父さんたちまた駐屯地に戻っちゃって」

「それはなんで？」

「パパもママもおいしやさんだから！」

「ああ、お医者さんか。それなら駐屯地でも引つ張りだこだろうね。なら二人はなんで

「いーん？」

「お兄さんが来るかもだから！ 待ってたんですよ！」

「ああ、ごめんごめん」

優子ちゃんにポコポコとお腹を叩かれた。

「あれ？ そういえば美香おねえちゃんは？」

恵理奈ちゃんが無邪気にしたその質問に、俺は答えに詰まってしまった。

「美香お姉ちゃんは今はちよつと違うところに行っているんだよー」

「おねえちゃんはだれ？」

「私？ 私は美香お姉ちゃんの妹で花乃お姉ちゃんだよー」

「いもうと？ 恵理奈とおなじだね！」

「そうだねー」

花乃ちゃんがフオローをしてくれたおかげでボコを出さずに済んだ。

いつか言わなきゃいけない日が来るのだが、それは今日ではなくてもいいんじゃないか、と思つてしまった。

弱い男だと自覚はしているが、乗り越えるまでもう少し時間が欲しい。

「お兄さん、この間も美香さんと別行動していたんですか？」

「ん？ この間って？」

「一週間くらい前に美香さんだけここに来たじゃないですか。まだ外にあれがいたので中には入れなかったですけど」

「優子ちゃん。その話詳しく聞かせてくれるかな」

「どういふことだ。」

「一週間前というと、赤カブトと死闘を繰り広げていたころか。」

「えっ？ えーと、佐藤さんが外に美香さんがいるって教えてくれて、私と恵理奈で手を振ったら振り返してくれただけなんですけど」

「それは本当に美香だった？」

「うん！ あのネコちゃんのつけてたよ、お耳のついてるやつ。こわいのキックでたおしてたもん」

「……そうか。二人のことが心配で見にきたのかな」

「そうなのかなー？」

「きつとそうだよー。お姉ちゃんが二人を安心させるために怖いのがつつけて見せてくれたんだからー」

「すごかったんだよー！ 走ってからジャンプしてね、キックしたらこわいのピョーンってとんでったの！」

「私も見たかったなー」

花乃ちゃんが二人の相手をしてくれているので、今まで黙って立っていた自衛隊員の  
小池さんへ、小さな声で話しかける。

「すみません。子供たちには言えないのですが、実は妻の美香とはぐれてしまいました」  
「なんと。それはどう言っているのか。ご無事だといいですね」

「はい、ありがとうございます。それで、来て早々で申し訳ないんですけど、すぐにお暇  
しようと思います」

「そうですか……。無理を承知で申し上げますが、もうしばらく居ていただく訳には？」  
「本当に申し訳ない。無理です」

「そうですよね。奥様も探しに行きたいでしょうし……」

小池さんは眉間に皺を寄せて黙りこんでしまった。

まどつているにおいが変わる。

へえ、なるほど。

「俺にも守らなきゃいけないものがあるので。ご理解いただければ」  
「重々承知しております」

小池さんとの会話を終える。

斉藤さんはずっと無言でこちらを観察するように見ていた。

「さて花乃ちゃん、もう行くのか」



「え、お兄さんもう行っちゃうんですか？　せつかくまた会えたのに……」

「うん、ごめんね、優子ちゃん。ただ俺たちもやらなきゃいけないことがあつてさ。必ずまた戻ってくるから」

「こんどは美香おねえちゃんもいつしょ？」

「……そうだね」

「安心して。私がちゃーんと連れてくるから」

「うん！」

嬉しそうに笑う恵理奈ちゃんの笑顔を直視できなかつた。

恵理奈ちゃんの問いにすぐに答えることができなかつた俺とは違い、花乃ちゃんはずいぶんとしつかりしている。

「ちゃんと、俺も見習わなければ。」

「また来てくださいね」

「うん。また来るよ」

最後に涙を浮かべる優子ちゃんと軽いハグを交わし、二人に手をふられながら市役所の二階を後にした。

「入り口まで送りますよ」

「はは、それじゃあお願いします」

小池さん先導で階段を降りていく。

その足はひどく遅かった。

「私は、自衛隊員です」

「そうですね。存じておりますよ」

「私の仕事は国を、そして国民を守ることです」

「尊い仕事ですよ。尊敬します」

「……あなたのその力があれば、よりたくさんの方が救われます」

「まあ、そうですね」

階段を降りきり、一階のホールを進む。

横にいる花乃ちゃんに小声で離れているように伝える。

俺のすぐ後ろにはぴったりと張り付くように斉藤が歩いている。

こいつからも、前にいる小池からも危険なおいが漂ってくる。

前を歩いていた小池が足を止め、こちらに振り向く。

「山下さん。どうしてもご協力いただけませんか？」

「そうですね。俺にはやらなければいけないことがあるので」

「あなたが協力してくだされば大勢の人が救われますよ？」

「すまないがこのご時勢だ。他人よりも身内を大事にするよ、俺は。あんたにも家族は

いるだろう？ 駐屯地にいるのか？ 離れて暮らすのはつらいだろう」

俺の言葉に小池は黙り込んだ。

「俺の気持ちもわかってくれるだろう？」

「はい、わかります。では実力行使にて力づくでも連れて行きます。斉藤「すみませんね」

後ろから斉藤に両腕ごと抱きしめられるように持ち上げられる。

いわゆるベアハッグとか鯖折りとかいうやつだ。

ギリギリと締め上げられるせいで身動きが取れない上に息がしにくい。

「良いんだな。お前ら。敵になるんだな？」

「斉藤。拘束を緩めるな」

「思ったより力が強くてですな。おっと」

両腕を外側へ弾いて腕の拘束から抜け出す。

二人から距離を取りジャケツトを脱ぎ捨てる。

「まさか振りほどかれるとはね」

斉藤が両手を広げた構えを取り、じりじりと迫ってくる。

「痛かつたらすみません」

「そつちこそ痛くても恨むなよ」

こいつ、ただでさえでかいのに構えられると余計にでかく見える。

牽制の左ジャブを放つも手首をつかまれ、気がついたら床に叩きつけられていた。顔をしたらたかに打ちつけ、視界に星が飛ぶ。

「ぐ、ぐううう!」

「暴れないでください。折れますよ」

左腕が極められていて、思うように動けない。

普通の腕ならこのまま為す術もないのだろうけど、あいにく俺の腕は普通じゃない。

「山下さん、ダメですって。折れちゃいますよ」

「うううるせええ!!」

全力の力で斉藤を振り払い、飛び起きる。

包帯が外れて異形の腕が丸見えになってしまった。

だからどうした。

「その腕は?」

「おめえをぶつ飛ばす腕だよ!!」

大きく振りがぶつたテレフォンパンチだが、この腕の振りの速さは並じやない。

腕をクロスしてガードした斉藤の、ガード越しに顔面をぶん殴ってやった。

鼻血を出して驚いた顔をしてやる。

ぞまーみやがれ。

「はい、そこまで」

「はなせ、よー!」

横合いから小池に首を抱え込まれてしまう。

このままじゃ投げられるか極められるかだ。

「少し眠りましょうか」

「く、っそ」

なんとか振りほどかないと、意識を落とされる。

小池の胴に腕を回しがっちり掴む。

「無駄ですよ」

「そう、かよー!」

両足に力を込め、思い切り跳ぶ。

三メートルはある市役所の天井に、俺と小池はめり込み、そして落ちる。

受身を取るべく俺を離れた小池の胸倉を掴み、振り回しつつ顔面を床へと叩きつける。

ドンと重い音がすると、小池はピクリとも動かなくなった。

「小池さん!」

「次はてめえだコラ！」

四つん這いになり、左手をコンクリートの床に食い込ませて力を込める。

両足と腕の力を使った突進はもの凄い勢いだったが、斉藤にひらりとかわされてしまった。

「はやっ！ なんですか、それ？」

「うるせえよ」

「その腕で殴らないんですか？」

「本気で殴ると死んじゃうからな。お前」

「死んじゃうとか物騒ですよ？」

「うるせえな、時間稼ぎはやめろ」

「あ、バレてました？」

小池が復活するのを待つてるんだらうけど、そうはいかない。

再度力を込めて突撃。

かわされるが、その後ろの柱に両手両足で着地し、全身のバネを使って再突撃。

「う、わあ！」

「あ、よけんなよ！」

かがんでかわそうとした斉藤の上を通り過ぎる際に、両足で頭を挟む。

斉藤の頭を支点に勢いのまま回転し、俺の体を掴もうとした左腕を取りそのまま極めつつ床へ押しつぶす。

倒れこんだ斉藤の腕を脇固めの要領で極めると、さすがに痛かったのか床をタツプしていた。

「どうだ！ わかったか！ お前じゃ俺に勝てねえんだよ！」

「いたたた！ すみません！ 負けです！ 離して！ ごめんなさい！」

「うるせえええ！ どうだおらあ!! まいったかコラア!! スツゾオラアアア!! ウオオオオン！」

「いたたたたたつ!! まいりました！ まいりましたつてば！」

アドレナリンがドバドバ出ているせいか、斉藤の痛がる姿を見ていると気分が高揚としてきた。

「山下さん、すみません。私たちの負けです。斉藤を離してやつてはくれませんか」

鼻と口から血を流した小池さんが、パンパンとほこりを払いながら立ち上がった。

顔から固い床に落ちたのに、凄いタフネスだ。

顔面血まみれなのに満面の笑みの小池さんに少し引く。

おかげで冷静になれた。

「いやあ、まさか実戦でラ・ミステイカを使う人がいるとは。感激です」

「は、はあ。ラ・ミステイカですか」

「ええ。ご存知ありませんか ルチャリブレというかプロレスの技なんですけど。和名だと竜巻式脇固めとでも言いましようか」

「ちよつとわからないです」

WWEとか好きだった美香ならわかるんだろうけど、俺はわからなかった。

離れていた花乃ちゃんに「知ってる？」と目で訴えると、めちやくちや良い笑顔で親指を立ててきた。

知っついそうだ。

「あの！ そろそろ離してくれと！ 助かります！」

「あ、ああ、ごめんね」

腕を離してやると斉藤さんは肩を押しえながら床を転がっていた。

「じゃ、じゃあ、もう行ってもいいですかね」

「はい。お手間を取らせてしまい申し訳ないです。奥様と無事に再会できることを願っております」

「ありがとうございます。花乃ちゃん行こうか」

「えー、もうちよつと見てたかったなあ。いい動きしてたよ」

「いやいや。ケンカはよくないよ」



ほんと、なんでこんなことになっちゃったんだか。

まあ売られたケンカは買うけどさ。

自衛隊員とケンカとか、負けなくてよかったよ、マジで。

「山下さん、ひとつお伺いしたいのですが、その腕になってからなにか体の不調などはありませんか？」

「いや、特にはないですね」

「そうですか。どういった経緯でそのような腕になったのかはわかりませんが、困ったことがあつたら遠慮せずにご相談ください」

「あ、はい。ありがとうございます」

血まみれの笑顔で敬礼する小池さんは、少し怖かった。

しばらく床でもんどりうっていた斉藤さんが起き上がり、握手を求めてきた。

一瞬警戒したが危険なおいもなかったので握手に応じる。

「山下さん、小池さんを許してあげてくださいいね。本当は安否不明の奥さんと娘さんを探しに行きたくてしようがないはずなんですけど、『任務が優先だ』って聞かなくて」

「斉藤、余計なことは言うな」

「ははは、すみません。山下さんには知ってほしいかなーって思っています」

「それが余計なんだ。すみません、山下さん。忘れてください」

この人たちも自衛隊員である前に一人の人間だということを失念していた。

俺ばかりが悲劇の主人公みたいな心境になっていたが、このような世界ではそんな悲劇は掃いて捨てるほどあると知った。

敬礼をして微動だにしない二人に深く頭を下げ、市庁舎から出た。

外に出ると空が再びぐずりだしたのか、霧雨になっていた。

火照った体が外気に晒され冷えたせいでぶるりと震える。

二月の雨は芯まで冷えるが、毛に覆われた左腕だけは熱をもっていた。

## 第三十三話 集合

「そういえばさ、さっきの自衛隊の人たち全然本気じゃなかったね」

「ええ？ マジで？ 俺、けっこう頑張ってたんだけど」

「うん、マジマジ。本気に見せて戦ってるというか、わざと負けにいつてたよ」

「マジかあ。まあ案外あっさり勝てちゃったから違和感はあつたけどさ」

美香より長い年月、空手や総合格闘技をやっていた花乃ちゃんが言うのだから間違いはないのだろう。

そういえば、前に菊間が言っていたな。

『小池さんは拳法の達人で斉藤をよくぶつ飛ばしている』って。

あの人が打撃を使ってこなかっただけで、相当手加減されていたのか。

「彼らなりの矜持というか、はじめみたいなのがあつたのかもね。ほら、お義兄さんゾンビ寄つてこないし、ほんとに救世主になれる感じじゃん。そんな人をなにもしないで手放すつてのはできなかつたんじゃない？」

「難儀な人たちだな。でも、好感は持てるね」

「うん、持てる」

今度美味しい酒でも差し入れに来よう。

「ねえねえ、今度私とも戦つてよ」

「ええ？ 嫌だよ。花乃ちゃんめちやくちや強いじゃん」

「いい勝負できそうなんだけどなあ」

そんなことを話しながら、工事の音がする方へと歩いていく。

佐藤くんはいるだろうか。

「ゆずるさーん！ こっちどうすんのー!？」

「あー、イツケンのステージでいいだろー」

「おいゆずるー！ ナンケンくらいトバすんだー?」

「カイコービームあつからナンケン余裕でいけるっしょ。途中アンチ抜いときや下落ちるんじゃない」

「あー、じゃあサンケンのサンケンありやいけつか?」

「そつスね。真ん中は板入れたステージにしてナナケン分スね。それを北と南に二箇所作る感じで」

「うーっス」

佐藤くんや職人の皆さんが、鉄パイプにポコポコと出っ張りがついたものや鉄の網の板を担いで行ったり来たりと忙しそうにしている。

ダボつとした雨がっぱを着て、指が分かれている不思議な長靴を履いている。雨対策はぼつちりのようだ。

なにやら専門用語で指示を出している佐藤さんの元へ邪魔にならないように向かう。

「佐藤くん、頑張ってるね」

「あ、山下さん。あれ、もう行っちゃうんだ?」

「いや、今作ってるのが完成するまではいるつもりだよ。俺がいなくなるとゾンビがまた寄ってくるかもしれないから」

「マジか、助かるよ。ていうかどうしてゾンビ来ないの?」

「んー、よくわからないけどゾンビに嫌われるっぽいんだよね」

「嫌われるって、なんだそりゃ、マジかよ」

楽しそうに笑う佐藤さんに、ジャケツトの下に隠していた左腕を見せる。

「これ見てみて。ゾンビに噛まれたらこうなっちゃってさ」

「うわ、なにこれ。やべえやつじゃん。てかなんで噛まれたのに無事なの?」

「なんか米軍で研究してる薬をたまたま持つてるやつがいてね。それを打ったらこうなったんだ」

「怪しすぎんだろそいつとその薬。まあゾンビにならなかつたから良かったんだらうけどさ。山下さん、無事でなによりだよ」

「うん、ありがとう。俺も怪しいとは思ってたけどね。背に腹は変えられないというか、一縷いちるの望みにかけたというか」

「山下さんと美味しいビール一緒に飲みたいからさ、まだまだ死なないでよね。あ、じゃあ俺作業戻るわ。山下さん待たせちゃってるし」

「ああ、急がなくてもいいよ」

俺も手伝おうと思ったが、素人が下手に手を出してもかえって邪魔になりそうだったのでやめておいた。

佐藤くんたちは十五人ほどでチャカチャカと効率よく作業を進めていく。

やがて、バリケードの中と外を繋ぐ足場の橋のようなものが完成された。

「おー。すごい。まさに職人技だ」

「まあパズルみたいなもんだよ。これで外との出入りが簡単になったから物資漁るのはかどるわ」

仮設足場の階段は三階くらいの高さまで伸びている。

足場全体の横幅は六メートルくらいで、長さは十メートルくらいか。

ひとつの四角い枠の中に板が四枚入るようだったが、真ん中の一枚以外は入っていない。  
い。

あの上を歩くのはバランスを崩して落ちてしまいそうで怖いな。

あのままではゾンビの侵入を許してしまうのでは？ と聞くと「外に行かない時はア  
ンチ外しておけばゾンビ落ちるっしょ」と山下くんが答えてくれた。

落とし穴付きの橋と考えれば、なるほど、理にかなっている。

同じものを市役所の反対側にも作ったが、慣れたからなのか先ほどの半分程度の時間  
で完成してしまった。

職人さんは効率よく動くから見ていて気持ちがいい。

雨が土砂降りになってきたので職人さんたちは撤収していった。

玄関ロビーで佐藤くんとの別れを惜しむ。

「山下さん、また来てよ。本当はもつと話してたいんだけど、なんか忙しそうだもんね」

「そうだね、申し訳ない。あ、今度は双子も連れてくるよ」

「双子？ ああ、あのうるさいJKか。懐かしいなあ。山下さんまだ一緒にいんだ？」

「縁があつてね。最近また一緒に暮らしてるんだよ。駅ところに百貨店あつたら？ そ  
れの東部の方」

「あそこか。結構距離あんね。無茶しなくていいからさ、元気に過ごしてよね」

「ああ。佐藤くんも」

差し出された手が左手だったため、思わずそのまま握手してしまった。

毛に覆われた大きな手で握られたせいかな、佐藤くんの手がびくりと震えた。

「う、うおおおー！ なにこれ、やべえ！ カッコいいな！ 肉球あんじゃん！ かわいいね、山下さん！」

「ちよ、落ち着いてくれ」

両手でにぎにぎとしてくる佐藤くんしばらく好きにさせる。

とてもいい笑顔だった。

「それじゃ、またな」

「うん、絶対また会おうよ。今度は美香さんも連れてきてちょうだいよ」

「あ、ああ。そうだな」

佐藤くんには伝えるべきだったのかもしれないが、勇気が持てなかった。

土砂降りの雨の中、傘をさして進む。

花乃ちゃんの分の傘を佐藤くんがくれたのはありがたかった。

ところどころ陥没した道路に水たまりができていたので気をつけて歩く。

ふと後ろから声が聞こえた。

「……………て……………！ ……お兄さん！ 待ってー！」

「優子ちゃん？」

大きなリュックを背負った優子ちゃんと恵理奈ちゃんが、こちらへ走ってきていた。

傘をさしているのに走っているせいでびしょ濡れだ。



二人はこちらまで走ってくる、肩で息をしていた。

「ちよつと二人だけで出てきたらダメじゃない。危ないでしょ？」

「ごめんなさい！ でも！」

花乃ちゃんが諭すように言うが、優子ちゃんはそれどころではないようだった。

「私たちも連れてってください！」

「恵理奈もいくー！」

「連れてつてと言つてもねえ。お父さんとお母さんから許可はもらったの？」

「お父さんたちは自衛隊のところにあります！ 一ヶ月は帰らないって言つてたので大丈夫です！」

「大丈夫とかの問題じゃないよ？ 二人があそこになかったらお父さんたち心配しちゃうかもしれないじゃない。危ないこともして、ダメだよ？」

花乃ちゃんがあえて悪役を買ってくれているので、この流れに乗る。

「うん、せめて一言相談して欲しかったかな。二人が追いつく前に悪い奴に襲われたら悲しいし。花乃ちゃんも二人が嫌いだからじゃなくて心配だから言ってるんだよ。わかつてくれるかな？」

「それは……はい。ごめんなさい……、でも、また会えなくなっちゃうのかって思ったら、我慢できなくて……」

「うん、反省してくれたらそれでいいんだ。大丈夫だよ。花乃ちゃんもいいかな？」

「私は構わないよ。でも今度から外に出る時は大人の人と一緒に約束してね」

「わかった！ 恵理奈、やくそくするよ！」

「いいこだね」

二人の持つてきたリュックからタオルを取り出し、よく拭いてやる。

どこか屋内で乾かしてあげたいけど、百貨店に帰ってお風呂に入れてあげた方がいい気もする。

「そういえば百貨店のほうが市役所より駐屯地に近いし、少ししたら駐屯地に行こうか」

「えー、やだー！ 恵理奈、恭平おにいちやんのところがいいー！」

「私もまだお兄さんと話したいこといっぱいあるし、しばらく一緒にいたいです」

「そう？ じゃあそうしようか。百貨店にも自衛隊員いるし、その人に連絡してもらおうかな」

「ははは、お義兄さんモテモテだねー」

「いやいや、茶化さないでくれよ。小さい子なんだからそんなんじゃないって」

「わかつてないねえ、お義兄さん。女の子はその年頃から女なんだってば」

「バカ言っていないで。ね、優子ちゃんも困るよね」

返事をせずにそっぽを向いてリスみたいに頬を膨らませる優子ちゃん。

少し怒らせちゃったかな。

花乃ちゃんにも困ったものだ。

ふと手を握られた感覚があり視線を下げる。

目をキラキラとさせた恵理奈ちゃんと目が合った。

「おにいちちゃんの手どうなってるの!?!」

「すぐくモフモフしてますよね。ずっと気になってました」

「さわってもいい!?!」

「あ、ああ。いいよ」

「わああ! すごい!!」

「中の毛は柔らかいんだ……気持ちいい」

腕に顔をうずめる優子ちゃんと、小さな手で指をニギニギとしてくる恵理奈ちゃん。

雨降ってるから毛、湿ってない?

大丈夫?

大丈夫ならいいけどさ。

恵理奈ちゃんの頭より大きい手の平でポンポンと撫でてやると、キャツキャと喜んで  
いた。

優子ちゃんもやってほしそうに頭を出してきたので撫でておく。

たまに自分でも触るけど、この手の肉球はやわらかくて気持ちがいい。

二人も頭を饅頭程度のやわらかさの物でポンポンされたから嬉しいことだろう。

「おにいちゃん、ウルフマンみたいだね！」

「ウ、ウルフマン？　なんだ、それ？」

「しらないの？　アグリイハートにでてるウルフマン！」

「あの、恵理奈の好きなアニメです。日曜の朝にやっていた」

「ああー、あのワイルドイケメンのウルフマンか。私も見てたよー。必殺『絶・天狼抜刀拳』！」

「あー！　すごいすごい！」

花乃ちゃんが空手の型とは違う独特な動きのパンチを見せると、恵理奈ちゃんが大はしゃぎになった。

日曜の朝の女兒向けのアニメを見ている花乃ちゃんに、思うところがないわけではないが、まあ気にしないようにしましょう。

優子ちゃんも混ざり、女子三人は話が盛り上がっていく。

このまま二人の相手を花乃ちゃんに任せてしまおう。

百貨店までは市役所から大人の足で二時間ほどかかる。

この距離を恵理奈ちゃんに歩かせるのはかわいそうなので途中から肩車をしてあげた。

優子ちゃんのリュックを背負い、そこに恵理奈ちゃんが座り、傘を持つ、といった具合に。

「優子ちゃんよく頑張ったね。ほらもうそこだよ」

「あ、ここ来たことあります。北海道物産展の時に一度だけですけど」

「北海道、良いねえ。あー、お腹空いてきちゃったよ、お義兄さんさあー。美味しいご飯いっぱいあるんでしょー?」

「いや、待って。もう少しなんだから」

昨夜のことをまだ言っているのか。

食い物の恨みは恐ろしい。

マキシーンが来てすぐに一階の窓という窓を補強してくれたので、安全度は上がっている。

入り口の防火シャッター前に、いつの間にかインターホンの呼び出しボタンが付いていたので押してみる。

上を見れば防犯カメラまで付いている。

たぶんマキシーンの仕事なんだろうけど、一日かそこらでよくここまでやってくれ

た。

『あ、恭平さんお帰りなさい。今開けに行きますねー』

「珠子か、ただいま。頼んだ」

インターホンの先には珠子が居たようで、応答をしてくれた。

「あ、今のが珠子つつつて、めちやくちや料理の上手い神さまのような人だ」

「オーケー、神さま仏さま珠子さまだね？ 二人ともわかった？ 美味しいご飯を食べるには珠子さまの機嫌を損ねちゃダメだよ」

「はい、わかりました。珠子さまですね」

「たまごさまー」

「うん、ヨシ！」

「全然良くないけどな。あまり困らせるなよ」

そんな話をしていると、シャッターが音を上げながら開いた。

出迎えはきなこを抱いた菊間と鈴鹿だった。

「おかえり、恭平」

「ただいま、鈴鹿」

「またたくさん可愛い子連れて来たね？」

「はは、そうだな」

「私にもマキシーンにも黙って出て行っちゃってさ。フォロー大変だったよ?」

「ごめん。それは本当にごめん」

「うん。まあ私は怒ってないけどね。マキシーンにはちゃんと謝んなよ?」

「ああ、そうする……」

そういうえば昨日、マキシーンと大喧嘩していたのを忘れていた。

鈴鹿にフォローを頼んでいただけか。

マキシーンに会うのが少しだけ怖い。

「お義兄さん、この人は?」

「ん、ああ。とりあえず紹介するか。鈴鹿、こっちは俺の義理の妹で花乃ちゃんだ。花乃ちゃん、この人は鈴鹿。頼りになる仲間の一人だ」

「どうもー。いつも義兄あにがお世話になっております?」

「あ、ええと、とんでもないです?」

なんで疑問系なのかはわからないが、とりあえず仲良くやってくれそうで一安心だ。

「アン!」(おおかみのひと!)

「おお、きなこ。出迎えてくれたのか。よしよし」

「おかえり恭平。こいつちよつと前からそわそわしっぱなしだよ。帰ってくるのがわかったのかね」

「ああ、ただいま菊間。犬の本能とかか？」

「どうなんだろうな。つうか飯塚姉妹も連れてきたのかよ」

「まあ、成り行きでな」

菊間と優子ちゃんたちは面識があつたようだ。

あれか、二人の親が自衛隊駐屯地で医者をしているから、それ関係でかな。

「ほら、きなこがそつち行きたいつてよ」

「おつと」

菊間からきなこを受け取ると、腕の中で暴れて顔や手をめちやくちや舐めてくる。

可愛いけど、少し気持ち悪い。

あまり舐めるな。

「わああ！　かわいいー！！」

「もふもふだね！！　おなまえは？　きなこちゃん？」

「ねえお兄さん！　撫でてもいい？」

「恵理奈もなでてみたい！」

「はいよ、ほら抱っこしてみ」

「かわいいいいい！」

「こんなに元気な優子ちゃん、初めて見る。」



この明るい姿が本来の優子ちゃんなんだろう。

改めてゾンビパニックのせいで小さな子たちがしなくていい怖い思いや苦勞をして  
いるのだと思い知らされた。

「あー、葉子いたー」

「ちよいきなこ見なかったー?」

「すぐ逃げちゃうんだよねー」

「あ、お兄さんじゃん。おかー」

「トツポギしちやったの?」

「ウケる」

宇宙人が来た。

宇宙人の双子は優子ちゃんの手を抱かれたきなこを見て、それから優子ちゃんと恵理  
奈ちゃんを見て驚いた顔をした。

「優子ちゃんと恵理奈ちゃんじゃん!」

「久しぶりじゃね? バイブス上がるわ」

「ばいぶすあがるー」

「あつはは、ウケる」

「それなー」

恵理奈ちゃんと双子の会話が成立しているのがすごい。  
俺には無理だ。

「あ、恵理奈たん、優子たん、お腹ぺこっしょ？ 今ちようどたまちゃんがお昼つくつてっからさ〜」

「そうそう。とりまおいでよー」

とりあえず全員を紹介したいから一度レストランに集まるか。

「鈴鹿、作業してる人とかいたら呼んできてくれないか？ 全員レストランに集まるよ うにつて」

「ん、わかった」

鈴鹿はこの百貨店で、誰がどこでなんの作業をしているかを把握している。

本当に頼りになる。

「じゃあ花乃ちゃん、腹も減ってるだろうし行くか」

「もうお腹と背中くつついちゃったからね、私。ほら、細いでしょ」

「わかったから、お腹冷やすぞ」

わざわざ服をめくらなくていい。

レストランの中はちよつとした混雑具合となった。

総勢二十名。あまりにもな団体客で珠子も困惑気味だ。

今日の昼食はシーフードカレー。

ご飯とナンが用意されていて、ナンは珠子お手製の美味しいやつだ。

とりあえず簡単な自己紹介を済ませ、まずは昼飯だと皆でガツガツ食べた。

花乃ちゃんは昨夜に引き続きカレーだが、珠子特製カレーは格別らしく、何回もおかわりをしていた。

「さて、腹も落ち着いてきたところで改めて自己紹介と行こうか」

皆が談笑していたのをやめ、こちらを見してきた。

まずは新規にやってきた三人を紹介してしまおう。

「えー、こっちが俺の義理の妹の湯浅花乃ちゃんだ」

「どうもー。いつも義兄がお世話になってます。空手とか格闘技が得意な二十三歳です。力仕事なら任せてね」

皆から拍手が返ってきた。

笑顔であたたかく迎え入れてくれたような反応をしてくれてホツとする。

「続いてこの二人は飯塚優子ちゃんと恵理奈ちゃん」

「飯塚優子です、よろしくお願いします。十一歳です」

「飯塚恵理奈です！ 八歳です！」

拍手が返ってきて優子ちゃんが少し照れくさそうにしていた。

というかなぜか名前と年齢を言う流れになってしまったようだ。

花乃ちゃんのせいだな。

「えーと、じゃあ次は三人に皆を紹介して行くぞ。人が多いから覚えきれないかもだがゆっくり覚えていってくれ」

「わかった」

「はい」

「うん」

よし、気合入れて紹介していくぞ。

俺が名前間違ったりしたら大顰蹙だいひんしやくだな。

「まずはこの拠点の副リーダーを務めてくれている鈴鹿だ」

「いのうえずか井上鈴鹿です。二十一歳。困ったことがあつたら言つてね」

女性たちのまとめ役でもある鈴鹿は、この拠点になくはならない人だ。

「次、料理を担当してくれている珠子。さっきのカレーやナンは珠子の作ったものだ」

「ほぞかわたまこ細川珠子と言います。好きなものや苦手なものがあれば極力配慮しますのでお気軽に

ご相談くださいね」

「珠子さまだ」

「珠子さまですわね」

「たまこさまー」

「えっ!？」

「困らせるなつつうの」

入り口で話していたのをそのまんま言いやがった。

珠子は真面目というか堅物だから、あんまりからかうのはやめてあげろ。

「はい、次。えーと、元運送屋の奈津実と明穂と深冬だ」

「どうも、菱木奈津実、二十八歳。力仕事とトラックの運転くらいしかできないけどよろしくな」

「大塚明穂おおつかあきほでーす。年は二十七。屋上で畑やつてるから手伝ってくれと助かるよー」

「ウチは西村深冬にしむらみふゆ。二十二。あー、よろしく」

奈津実は皆の頼れる姉御という感じで、明穂は家庭菜園の知識とは思えないくらい畑に詳しい。

深冬は元ヤンで人見知りなせいでああいう態度になつてしまいうらしい。

「次、獣医の香織、狩猟系女子の直美」

「獣医っていうか獣医学科に行つてただけだつて。森田香織もりたかおり、二十一歳です。きなこの

検診とかしてます」

「二応、第一種銃猟免許と罾猟免許持つてるよ。あ、長谷川直美はせがわなおみです。同じく二十一歳です」

かたや獣を助け、かたや獣を殺す。

同じ二十一歳でこうも真逆だと面白い。

あ、同い年の鈴鹿はばりばり男を殺してたな。

まあ十人十色、皆違うから面白いんだ。

「えー、次。高校生組だな。双子の結愛と愛理。友里に詩織。あと涼子と千恵だ」

「ちよりーっす！ 三咲結愛みさきゆあ、十八歳。とりまお兄さんの腕のモフリみ、かみってるよね」

「うえーい。三咲愛理みさきあいり。お兄さんときなこがやばたんすぎてつらたん」

女性連中の何人かが頷いていた。

まさか宇宙人語が通じているだど？

これがマンジマンジというやつか。

「どもツス。田中詩織たなかしおり、十八ツス。えー、陸上やってたから体力には自信ありツスね。よ

ろしくツス」

「えっと、小松友里こまつゆりです。十八歳です。私は皆みたいに体力がないので、迷惑をかけちゃうかもしれませんが、よろしくお願いします」

「そんなことないツスよ、友里ちゃん。あ、友里ちゃんは裁縫が得意でぬいぐるみとか作ってくれるツスよ」

「ぬいぐるみ！ 恵理奈もほしいなー」

「あ、あの、じゃああとでね？ 作るから、待ってて……」

「やったー！」

照れくさそうに笑う友里と、嬉しそうに優子ちゃんに抱きつき頭を撫でられる恵理奈ちゃん。

子供たちが笑顔なのは良いことだ。

「遊佐涼子ゆさりょうこと申します。十六歳です。私も特に役には立ちませんが、将棋、囲碁、オセロ

など、めちやくちや強いので気晴らしの相手にはもってこいだと思います」

「こいつ、初心者とか関係なしに潰してくるから、お嬢ちゃんたち二人は相手しないほう

が良いぜ。あたしは原田千恵はらだちえ、十六。えーと肉体労働とかならできます」

涼子とは一度将棋で勝負がしてみたい。

俺も中々強いからな。絶対に負ける気はしない。

千恵は金髪がプリンのようになっていて、どうにもヤンキーくさい。

元外道チンピラの俺はそういうにおいを嗅ぎ分けるのが得意なんだ。

においがするのは深冬と千恵と、あと菊間だな。

「えー次、自衛隊から派遣されてきた菊間」

「菊間きくま葉子二等陸尉だ。恭平とタメの二十六、よろしくな」

フランクな菊間には優子ちゃんも恵理奈ちゃんもよく懐きそうだ。

「えー、最後に、マキシーンとミシエル」

「マキシーン・ブルックスいうマース。んー、ニジュー？ キュー？ デスね。よろしく

おねがしまース」

「ミシエル・オーマンよ。三十一歳。マキシーンは元海兵隊員で私はウイルス学者をしているの。よろしくね？」

なんと、ミシエルがこの中で一番年上だった。

俺より年下かと思ってた。

それくらい可愛らしくてきれいな人だから。

「えーと、以上かな？ 皆、仲良くしてくれよ」

俺がその声をかけると、女性連中から『はい』とまばらに返事が来た。

「あ、そうだ。今日も歓迎会をするだろ？ ちよつと優子ちゃんと恵理奈ちゃんを連れてケーキを取ってきてくれないか？ あー、鈴鹿、頼めるか？」

「私？ べつに良いけど」

「優子ちゃん、恵理奈ちゃん、隣の中華レストランの冷蔵庫にケーキがあるから好きなの



とっておいで」

「ケーキ食べられるんですか!？」

「やったー、ケーキ好きぴー」

「ウケる」

双子のせいで恵理奈ちゃんに悪影響が出ていた。

「あ、ちよつと、待ちなさい」

鈴鹿がレストランを出て行く二人の後を追おうと立ち上がる。

その鈴鹿の耳元へ口を寄せ、万が一にも優子ちゃんたちに聞こえないように小声で話す。

「鈴鹿、二人は美香に懐いていた。美香が死んだことは言っていない。まだしばらくは言うつもりはない。だから頼む」

「そういうのは先送りさせないで早く言ったほうがいいと思うけど。まあ恭平に任せるわ」

鈴鹿が手をヒラヒラとさせさせてレストランから出て行ったのを見送り、女性全員へ向き直る。

「皆、あの二人には俺の妻である美香が死んだことは言わないでくれ。頼む」

皆に頭を下げる。

幼い子供には、悲しい思いなんてしてほしくない。

いつかは言わなくちゃいけないが、今じゃなくても良いと思う。

「恭平……」

「お兄さん……」

憐れみが含んだような視線が突き刺さる。

そんな目で見られたくて言っただけではない。

まあ言われた方も困るというものだが。

場の空気が微妙なものになってしまったので、ケーキを嬉しそうに運んできた優子ちゃんと恵理奈ちゃんに甘いものが苦手だと伝え退散した。

「ハイハイ、キョーハイ待つマース」

「マキシーン……」

自分のスペースに戻ろうと通路を歩いていたところ、マキシーンに呼び止められた。まだ怒っているのだろうか。

腕を組み、不敵な笑みを浮かべこちらを見るマキシーン。

その後ろから鈴鹿と花乃ちゃんが現れた。

「ん、二人とも、どうした？」

「恭平、ごめんね？」

「お義兄さん、覚悟決めなね」

そう言つて二人が両腕に抱きついてきた。

「おい？」

「恭平を逃がすなつてマキシオンに言われちゃつてさ」

「いい加減ヘタレてないでさー、一緒にお姉ちゃんの動画見ようよ」

「Huhuhu……。こつち来るマス……」

悪い笑顔をしたマキシオンに先導され、両側をガツチリと固められたままミシエルのトレーラーハウスへと連行された。

トレーラーハウスは百貨店に横付けされていて、窓のひとつからそのままコンテナ内に入れるようにマキシオンが工事をしたようだ。

ミシエルのトレーラーハウスには、もの凄く大きなテレビが置いてあつた。

何インチあるんだこれ。

裏にある型番を見ると80インチと書かれていた。

マキシオンはテレビの前にあるソファに座り、テレビと繋がったノートパソコンをいじっている。

まさか、このテレビで見えるのか？

なんかでかいスピーカーが横に立っているし絶対音質も良いよね。

臨場感たっぷりだよね。

「あの、なにもこんな大きなテレビで見なくても……」

「うるさいデース。早くそこ座るマース」

「ほらほら、恭平座って」

「お義兄さん、早く覚悟決めなれば」

鈴鹿と花乃ちゃんに引きずり込まれるようにソファへと座らされた。

もう逃げないから手を離してほしい。

ていうか鈴鹿がずっと左手の肉球を触ってきてくすぐったい。

俺の緊張をほぐそうとしてくれるのだろうか。

「じゃあスタートするマス」

「あ、ちよ」

俺の覚悟が決まる前に、動画が再生される。

大きなテレビ画面には、スポーツブラとボクサーパンツだけという半裸状態の美香と、パンツにテントを張ったチャラ男が映っていた。

## 第三十四話 事の真相

『ハア……ハア……』

『ウツ、グウ……』

広い部屋の中で、その二人は激しく肉をぶつけあっていた。

美香の肌がじつとりと濡れ、大きく動くチャラ男は玉の汗をかいている。

汗に光る素肌は、テレビ画面越しでも鮮明だ。

5. 1 c h s ピーカーからはまるでその場に二人がいるかのような臨場感で、荒い息遣いと苦しそうに喘ぐ声が聞こえる。

パン、と二人の肉がぶつかる音を聞き、思わず顔が歪む。

チャラ男が突き出したそれを受けて、美香が浅く息を吐いた。

顔を歪ませるのは、快感からなのか、苦痛からなのか。

激しく動く二人から目が離せない。

痛くなるほど握り締めた拳を、隣に座っている鈴鹿に軽く叩かれた。

「恭平、この人が美香さんなんだね」

「実にお姉ちゃんっぽいことしてるよね〜」

画面の中で、手足にグローブとプロテクターを着けたチャラ男を、美香が一方的に痛めつけていた。

美香はチャラ男を冷たく睨み、その目の中には侮蔑の色が浮かんでいた。

肩で息をするチャラ男はそれでも下卑た笑いを顔に張り付け、美香と対峙している。

チャラ男が苦し紛れに突き出したパンチを、美香が鋭い一撃で打ち落とす。

痛みに顔を歪ませているチャラ男の懐へ潜り、腰の入った重い正拳突きを鳩尾みぞおちへめり込ませた。

込ませた。

アレは痛い。

「良いね。そのまま臍物ぞうもつを抉り出しちゃえ」

「鈴鹿、発想が怖い」

マキシーンも花乃ちゃんも鈴鹿もこの映像を見ながら、いつの間にか用意したビール

を飲みつまみを食べていた。

完全にテレビでやっていった格闘技の観賞をしている感覚だこれ。

『チクシヨウ！』

腹を押さえてうずくまっていたチャラ男が美香を睨みつけながら立ち上がる。

組み付こうと飛びかかるが、美香にすげなく払われカウンターの拳を顔に受けた。

美香は前蹴りでチャラ男との距離を空ける。

『あと少しなのに！ クソツ！』

『甘いのよ』

どうやらチャラ男の目的は美香に組み付くことのようにだが、そんなにはわかりやすい動きじゃ美香に迎撃されて終わりだろう。

「こいつ、殴られてんのに股間大きいままだね」

「うわ、これがマゾ？ キモいね」

『私に汚いもん見せんじゃないわよ』

「Haha. ミカも同じこと考えるマス」

美香が一瞬で踏み込みチャラ男の顔へ拳を突きだす。

チャラ男が腕でガードしようと思いが上へ行った所で、かち上げるような金的が炸裂。

「うわ……」

想像するだけでひゅつとしてしまい、思わず内股になる。

チャラ男も白目をむき口から泡を吹いて前のめりに倒れる。

そのまま倒れるのかと思いきや、伸ばした腕が美香の肩付近を触りそれから倒れた。床に倒れ伏したチャラ男が股間を押さえながら『やった！』と喚く。

『今触った！ 触ったっしょ！』

『触ってないわよ』

『嘘だよ！ 卑怯だろ美香さん！ 俺約束破ってないのにさ！』

『……チツ。うっさいわね。わかったわよ』

『ひゅう！ やったぜ！』

美香がチャラ男に背を向けスポブラを脱ぎ捨て、片腕で胸を隠した。

どうやら触られた場所の服を脱ぐというルールで対戦をしていたようだ。

『あとはパンツだけだ！ これでやっと美香さんを食えるぜ！』

「殺す………！」

『殺すわ………』

動画内の美香と意見があつた。

こいつは殺してもいい。

「ちよつとお義兄さん、落ち着きなつて」

「そうだよ、恭平。こいつにとどめ刺したの恭平でしょ？」

「キョーハイ、ミカ関わるすると頭イカれるネ」

「そ、そんなことないだろ……」

酷い言われように少しだけ傷つく。

イカれてはいない、はずだ。



動画内ではチャラ男が起き上がり美香と再び対峙している。

重心を低く構え、明らかに美香の履いているパンツを狙う構えだ。

バカめ。そんなわかりやすい構えじゃ美香にカウンターをいれてくださいと言って  
いるようなものだ。

チャラ男は案の定タックルを仕掛けようと飛び出すのが、美香の体は既に横回転を始めて  
いる。

そのまま合わせるようにチャラ男の顔に、美香の硬い踵かかとが突き刺さった。

美香が得意とする後ろ回し蹴りだ。

床に倒れ伏したチャラ男の頭付近に赤い染みが広がっていく。

チャラ男はピクリともせず、完全に意識を失っているのが見てわかった。

鼻でも折れたか、歯でも飛んだか。

そんな血の量だ。

「わ、やばいよお姉ちゃん。ほんとに殺しちゃったんじゃない？ これ」

「いや、もう死んでるから良いんじゃないの？」

この動画を撮ったあとのチャラ男と俺が会っているし、この時点では死んでいない。

そのことを花乃ちゃんへ伝えると、安堵の息を吐いた。

画面から消えていた美香が服を着て戻ってきた。

その手には大量の袋やバッグがある。

『貰ってくわよ』

動かないチャラ男に再度金的をかまし、ボールでも蹴るかのように頭を蹴ってから美香はカメラの外へ歩いていった。

容赦のない追撃に、思わず口角ががり上がる。

しばらくチャラ男が倒れているだけの映像になったので、マキシーンがパソコンを操作し動画を止めた。

「わかったデスカ、キョーヘイ。他もいっぱい同じのあるマス」

「うん。ごめん、マキシーン。お前が正しかったわ」

「ソーデス。ミカがキョーヘイじゃない男選ぶ無いデス」

「お姉ちゃんが浮気するわけないじゃん。お義兄さん、疑っちゃダメだって」

「わかってるよ。確実に俺が悪い。後悔しかしてないよ……」

「でもこれで美香さんに対する誤解は解けたんだから。一步前進したってことでしょ、恭平」

「そうかもな……」

動画を見て浮気疑惑は晴れたが、弱味だった俺のせいで美香に苦勞をかけていたと知り、別の後悔をしたが見ないよりかはマシだった。

浮気疑惑は晴れたとか、いったい何様のつもりなんだ俺は。

ハーレムを作るとか意気込んでいた俺のほうがよく。ほど浮気者のクソ野郎じゃないか。

いくら体の関係を持っていないからと言って他の女に気持ちがいっていったんだし、浮ついた気持ちで浮気ならやっぱ俺は最低のゴミクス野郎だ。

「はあ……」

「ん、どうしたの恭平？」

「いや、まあ、自己嫌悪だな……」

鈴鹿に面と向かって「昔の俺がお前をハーレム要員にしようとしていたことに後悔している」とは言えない。

これは墓場まで持っていくこう……。

動画とはいえ久しぶりに動く美香を見て声が聞けたことだけはチャラ男に感謝しておこう。

「あら、お客さんなんて珍しい。皆、いらっしやい」

「ああ、ミシエル。お邪魔しているよ」

このトレーラーハウスの主であるミシエルが帰ってきた。

「じゃあ私はもう行くね。花乃にも拠点案内しないとだし、生活スペースも作らないと」

「お、どんな感じか気になってるんだ。お風呂もあるんでしょ？」

「あるよ。他にもいろいろあるし、細かいルールとかもあるから覚えてね」

「はい。じゃあマキシーンさん、ミシエルさん、お邪魔しました」

「またデスね」

「お構いできなくてごめんなさいね。また今度ゆっくり遊びに来るといいわ」

「お邪魔しましたー」

鈴鹿と花乃ちゃんに続いて俺も退散することにした。

去る際にミシエルに再び腕の血を抜かれた。

俺の血でゾンビが人に戻る薬を作る事ができたりしないだろうか？

抗体とかありそうだし。

そうミシエルに伝えると「たぶん無理ね」と却下された。

ゾンビウイルスは体の遺伝子を組みかえてしまうようなので、元に戻るのは無理とのことだ。

よくわからないが専門家がそう言っているのなら信じるしかない。

自分の寛ぎスペースである八階のベランダでコーヒーを飲む。

花乃ちゃんたちが拠点に来てから一週間の日が経過した。

その間、美香を探しに外へ行くことはしていない。

拠点内の防衛設備、生活環境の向上、物資の把握、とやることがたくさんあったからだ。

女性たちを無責任に集めて「じゃああとよろしく」と外をほつつき歩くのは間違っているように思う。

拠点のリーダーと名乗っているんだから、せめてそれらしいことをしなくては。

この一週間でいろいろなことが起きた。

鈴鹿がマキシーンから銃の扱いを教わり、ハンドガンとマシンガンのふたつを受け取っていた。

グロツク19Mというハンドガンと、4M1Aカービン？ M4A1カービン？ とかいうマシンガンと説明されたがよくわからない。

もし暴発などをして事故が起きたら危ないんじゃないかと反対したが、マキシーン、ミシエル、菊間、鈴鹿の四人に銃の利点について懇々と説明されて俺が折れた。

銃があれば身の安全は増すだろうが、事故だけには本当に気をつけてほしい。

それから花乃ちゃんと菊間に名前で呼べと言われた。

それはもうしつこく言われた。

俺の中で花乃ちゃんは花乃ちゃんだし、菊間は菊間なのだが、ちゃん付けや苗字呼び

は公平じゃないからと言われて俺が折れた。

すぐに呼び方を変えるのは難しいかもしれないが、名前を呼び捨てするように気をつけるようにしている。

それと念願の風呂を増設することができた。

さすがにこの拠点に住んでいる人数が二十人を超えてきた今では、風呂がひとつでは足りない。

マキシーンが使っていないレストランから給湯器を移設し、いろいろとやってくれた。

ガス管やら水道管やらをテキパキと繋げていくのは、見ていて気持ち良かった。

俺も手に職をつけて器用になにかをやってみたいが、不器用なので諦めた。

それとなぜか俺用の風呂は満場一致で却下された。なぜだ。

あと主な原因の犯人は花乃ちゃんなのだが、俺に対してラツキースケベと言われるようなことが多発するようになった。

お風呂空いたよと言われ脱衣所に入ると着替え中の優子ちゃんが入ったり、浴槽に浸かっていると全裸のマキシーンが突入してきたり。

風呂からあがり脱衣所で体を乾かしていると、鈴鹿や花乃ちゃんが入ってきて「あー恭平いたんだー(棒)」とかのたまうのだ。

プスプスと笑う明らかに怪しい花乃ちゃんになにをしたと問い詰めると、「恭平誘惑組合」なる組織が結成されていた。

組合員の人数は全部で八人で、その中に優子ちゃんも含まれていると言われたので、割とガチトーンで諭すように叱った。

小学生に何を吹き込んでいるんだ、と。

倫理観はないのか、と。

流石に大人としてそれはダメだろう、と。

主犯格の花乃ちゃんは正座をしような垂れていたが、鈴鹿やマキシーンはどこ吹く風で「自由にさせてあげなよ」とか「小さくてもレディデース」とアホなことを言っていた。

コーヒーを一口飲んだため息を吐く。

女性らの奔放さにはほとほと困ったものだが、俺を励ますためにやっているのもわかる。

だから強くは言えないのだが、やり過ぎには注意して欲しい。

「あ、恭平さん居た。珠子さんが呼んでいましたよ。レストランで」

「ああ、涼子か。ありがとう」

オセロ盤を持った涼子はこれから恵理奈ちゃんと対戦をしに行くのだろう。

恵理奈ちゃんは涼子とオセロをするのが大好きらしく、飽きずに一日中やっている。俺も涼子と将棋で勝負をしたが、戦績は十五勝二十敗と負け越していて悔しい。

涼子は自分で言うだけのことはあつて、この拠点の誰よりもボードゲームが強かった。

曰くミシエルとのチェスは白熱したらしいが、俺にはチェスのルールがわからないので曖昧な返事しかできなかった。

レストランの厨房に行くとき深冬と千恵がいた。

「お、二人をここで見るのは初めてだな」

「うん。ウチら役に立たないしこれくらいしなないとなーって思つて」

深冬はどうにも自分を卑下する傾向にある。

そんな深冬に珠子が「そんなことないです！」と憤っていた。

「お二人とも凄く筋がいいし、とても助かっているんですよ？」

「そ、そうかな？ たまちちゃん先生の教えが良いからだと思うけど」

「ウチ包丁使つたことなかったし、珠子ちゃんのおかげだよね」

千恵も深冬も珠子に良く懐いているようだ。

胃袋をがつつりと握られてしまっているし、気持ちにはわかる。

この拠点内に珠子のことを好きじゃないやつなんているわけないだろう。



それでも自発的に手伝おうとしてくれたこの二人は偉いと思う。

それぞれがそれぞれのできることを探そうとする姿勢は、理想的なコミュニケーションの姿だと思う。

「二人とも、ありがとう。でも無理はしなくて良いからな」

「ウ、ウン」

「頑張るよ」

少し照れくさそうに笑う二人を見て頷いておく。

ニコニコとこちらを見ていた珠子に「それで、なにかおきたか？」と言うと、「あ、そうでした！」と手を打ち鳴らした。

「ええとですね、すぐにじゃないんですけど、このままじゃ備蓄がなくなっちゃいそうです。一月ひとつきくらいは持ちそうなんですけど、どうにかしないとと思って」

「あー、そうだな。今夜の夕食後にミーティングをするか。俺一人じゃ良い考えが浮かばないし」

「そうですね。でしたら今足りないものをリストアップしてもらおうように言った方が良いかもありませんね」

「あ、じゃああたし伝えてくるよ。夜にミーティングするから拠点に足りないものがないか調べといてって言えば良い？」

「ああ、それで頼む。ありがとうな」

千恵が率先して伝令役を買って出てくれたので礼を言う。

円滑なコミュニケーションをとるには、誠実な態度で真摯しんしんに向き合うことが大事だ。不和が生じコミュニケーションの内側から崩壊などあつてはならない。

夕食後、皆へと足りないものと欲しいものを聞いていく。

書記は珠子がしてくれている。

ちなみに高校生組を含む子供らは参加させていない。

話を聞いていて無駄に不安に感じるかもしれないし、こういったことをするのは大人の役目だからだ。

「食料が足りないんだよね？ だったら屋上の畑を拡張するべきだと思うんだけど」

家庭菜園のスペシャリストの明穂が案を述べた。

「重機とトラックがあるならさ、外の畑から土持ってきて欲しいんだよね」

「土？ 種とかじゃなくてか？」

「うん、種もいるけどまずは土かな。畑の土はできあがつてるからさ。もちろん肥料と  
かもいるけどね」

明穂曰く屋上にある池で田んぼもできるらしい。

秋ごろには収穫ができるのか。

たくさんの米があれば食料事情が一気に解決するな。

日本人の俺たちは、とりあえずご飯があれば生きていける。

「でも今二月なんだけど野菜つて冬でも育つの？」

「はあ？ 育つに決まってんじゃん。冬野菜つて言うでしょ。春に食べる野菜のほとん

どは冬に植えられてんの」

奈津実が明穂にぼつさりと切られていた。

言われて見れば確かにそうか。

冬野菜……。白菜とかか？

「今植えたいのは、ジャガイモキャベツ人参レタスピーマン大根ナスシシトウつて感じ。

たまちゃんメモ取れた？」

「はい、大丈夫です」

めちやくちや早口だったのに珠子は完璧に書記としての役割を務めていた。

任せて正解だった。

「まあ寒いのが苦手な野菜もあるし、屋上に出るとこのさ、あのサンルームみたいなどこの中にも畑作りたいかな。もちろんビニールハウス作つても良いよ、材料あればだけど」

「たしかにあの中あつたかいもんな。とりあえず畑の土と種を持つてくるつてことで良

いか」

「あればビニールハウスの材料もですね」

珠子が手早くノートへ記していくのを尻目に「他にないか？」と皆へ問いかける。

直美がおずおずとした様子で手を上げていたので、視線を送り続きを促す。

「あ、えつと窓から見えたんだけど、大きな鹿が群れているみたいなんだよね。異様に大きいけど銃があれば狩れそうだなーって」

「銃あるマスよ。私も『Hunting』得意ネ」

「あの、基本的に銃の貸し借りはダメなので、私の銃を取りに行けたらなーって」

「それは法律的に？」

「はい、所持許可が出ている銃以外で狩りしちやダメなんです」

「そっか……。どうなんだ、菊間？　ちなみに法律違反を気にするんだったら俺はもう人を殺してるぞ」

「私もゴミは殺したよ」

俺と鈴鹿が質問を投げかけると、菊間は大げさにやれやれといった仕草をして口を開いた。

「ま、咎める人もいないしべつに良いんじゃないか？　命の危機があつたんだろ？」

「まあな。銃の貸し借りは？」

「良いだろ。そもそも私は元国民と呼ばれているゾンビ共に対して発砲許可が出ていないのがおかしいと思ってるしな。銃の貸し借りも広義で自衛だろ。餓死するかもつて  
キ」

「自衛官がこう言っているけど、どうだ？」

「あ、じゃあそれで……」

俺たちのゴリ押し理論で直美は納得してくれたようだ。

マキシーンと直美、それと銃の訓練をしていた鈴鹿と、獲物の運搬役として深冬が狩りに行くことに決まった。

大きい獲物はユニック車のクレーンで吊って持ち上げないと運べないそうだ。

直美に一人のときに狩猟した際にどうしていたのか聞くと、小さければ血抜きをして引きずり、大きければ解体して部分に分けて引きずるのだと。

だから狩りに行くときは山の上の方に登りながら獲物を探していたらしい。

たしかに下りなら引きずるのも楽だし、とても理に適った答えだった。

「でも俺も付いて行かないとゾンビが寄って来るかもしれないな」

「それは大丈夫よ。恭平から貰った血でゾンビ避けができたから。マキシーンに実験してもらって効果は確認済みよ」

ミシエルがなんてことのない感じでサラッと云ったが、なんてものを作るんだ。

俺の最大のアドバンテージである『ゾンビから嫌われる』が誰でも手に入ってしまうんだぞ。

世紀の大発明と言っても過言ではない。

「ミシエル、その効果つてどれくらい持ちそうなんだ？」

「ひとつき二月くらいが限度ね。恭平の血の培養が上手くいけばもつと長く持ちそうだけど。まだ三個しかできてないけどね」

「三個か。ミシエル、その量産をお願いしても良いか？ 自衛隊や市役所の人にも渡

してあげたい」

「良いわよ。じゃあまたあとで血をちようだいね」

「わかった」

小池さんや自衛隊の人たちに渡せれば、人命救助やインフラ整備に役立つことだろう。

水道や電気が止まると困るのは俺たちだ。

協力できることはやっつていこう。

もし独占しようとして武力で脅してきたら全力で抗つてやる。

まあ小池さんにお願しておけば良くしてくれるだろう。

ゾンビ避けがあるなら物資の調達班が別けられる。

皆もそう思ったのか誰と誰でどこどこに、と話し合っていた。

そんな中「そういえばさ」と香織が言う。

「百貨店もうひとつあったよな。西部百貨店」

「ああ、あったな。たしかゾンビに占拠されているんだっけか？」

「前に私が見に行ったときはね」

鈴鹿が行ったときは一階にぎちぎちにゾンビが詰まっていたそうだ。

「ゾンビ避けもあるしその物資ごとそりいただいちゃわない？」

「お、良いね。マキシーンが持ってきたフォークリフトもあるし、トラックで運搬できるな。やっと活躍できるわ」

「うん、いけるな。いろいろ足りないものもあるし行ってみるか。まずは道を作って、百貨店の安全を確認してから皆で行くか」

俺の意見に皆が賛成してくれた。

道作り兼百貨店の安全確認班は俺と菊間、あと運搬役の意見も聞きたいので奈津実と明穂となった。

鈴鹿と直美は狩りのために使う銃の訓練を、マキシーンに教わりながらするそうだ。

花乃ちゃんは空手教室を開いているからしばらくは外に出ないらしい。

子供たちや女性の皆が自衛の手段を覚えることができるのは良いことだ。

襲われても抵抗する手段があるとないとじや大違いだ。

花乃ちゃんには重点的に目潰しや金的を教えるように言っておいた。

放置車両をどかしながら道を進む。

トラックを運転するのは奈津実。

菊間はその荷台の上に乗る周囲の警戒をしている。

明穂がフォークリフトを運転し、俺が歩きでゾンビを散らす役だ。

しかし俺が近くに住んでいるせいかこの辺りにはゾンビが全然いない。

こうなってくるとゾンビじゃなくて生存者に気をつけなくてはいけない。

ゾンビがいなければ住みやすいに決まっている。

耳をすませにおいを嗅ぐも、人っ子一人いないように思うが、油断はしないでおう。

朝から作業を開始し、西部百貨店には昼過ぎに着いた。

「あれ、このゾンビもいないな」

「恭平の力がこの辺まで届いたってことか？」

「流石に十キロ以上離れているから違うと思うけど」

耳をそばだててみるも中からゾンビ特有の音は聞こえなかった。

「散らす手間が省けたと思えばいいのかな」



「前に恭平が言っていた大きな獣にゾンビがやられたのか？」

「それならもつと肉片とか落ちていそうだけどな。ここはきれい過ぎる」

もし中にナニカがいるのならば、それは人か獣かゾンビか。

中に入るのは俺だけで皆には外で待っていてもらおう。

トラック内で待機してもらい、危なくなったらすぐに逃げ出すように言っておく。

「んじゃ、なにかあつたらすぐに知らせてくれ。菊……葉子も銃を使うのに躊躇するなよ」

「わかったよ。気をつけてな」

「いってらっしゃい」

「すぐ戻ってきてね」

三人に手を振り百貨店の中へ向かう。

中に入つてすぐに、かすかに嗅いだことのある匂いがした。

忘れるわけ無い、このにおいは、美香のにおいだ。

まさか、ここにいるのか？

気配を探るようにジツとして音を聞くと、上の方の階から小さな音が聞こえた。

「美香……」

走り出し階段を駆け上る。

階段を登っていけばにおいもどんどん強くなる。

二階は、違う。もつと上だ。

三階じゃない。四階、五階、六階、違う。

七階。

「……だ……！」

食料や着替えなど、人の暮らしている痕跡がある。

美香はここにいたんだ。

「どこだ、美香……」

声を上げると奥で何かを倒すような音がした。そつちか。

物音のした方へ走る。

そこには黒革のジャケットとパンツに身を包み、ネコ耳のついたヘルメットをかぶつ

た美香がいた。

「美香……。やつと、会えた……」

美香は微動だにせずこちらをジッと眺めているだけだった。

スモークのかかったバイザーのせいで、どんな顔をしているのかわからない。

「美香……？」

美香はくるりと踵きびすを返し走りだしてしまった。

「どこに行くんだ!？」

慌てて追いかけるも追いつかない。

美香は全力疾走で逃げていく。

向かう先はベランダへ続く大きく開け放たれたドア。

まさか、飛び降りる気か？

足に力を入れ速度を上げていく。

もう少しで手が届く。

しかし出した左手は、虚しく空を切った。

「クソ!!」

美香は走った勢いのまま、水泳の飛び込み選手のようにきれいなフォームでベランダを越えて落ちていく。

地面に背中を向け、こちらをジツと見る美香と目が合った気がした。

瞬間的に飛び上がり、ベランダの天井に手足を付けて力を込める。

全身の力を解放し、美香目掛けて自らを射出する。

空気抵抗を最小にするようにして美香へ迫る。

伸ばした手は今度はしっかりと美香をつかまえることができた。

腕の中で身じろぎをする美香を抱え込む。

下を見ればバスがある。

あの上なら衝撃を吸収するだろう。

美香の体を強く抱きしめると共に、背中へ衝撃が来た。

息ができない。

頭の奥が痛み目がちかちかする。

だが、生きている。

腕の中の美香はぐったりとしていて気絶しているようだった。

胸が動いているから生きているとわかる。

良かった。ほんとうに。良かった。

美香を抱いたまま、大きく破壊されたバスから出ると、菊間たちが走ってくるのが見

えた。

「恭平!? なにが起きたんだ!」

「ああ、ちよつと、落ちた」

「落ちた!?! どこからだ!」

「えつと、七階? でもバスがクッションになってくれたからケガは無いぞ」

「七階から落ちて無事なわけないだろ! このバカが!」

菊間が心配をして怒ってくれているが本当にケガがないのだ。

「菊……葉子、本当に大丈夫なんだ。俺の体は化け物染みたものになってるから。心配してくれてありがとうな」

「化け物って、お前……」

今は俺のことよりも美香だ。

腕に抱いたままの美香を地面に寝かせてやる。

気絶しているときにヘルメットをかぶったままじや苦しいだろう。

脱がしてやろうとヘルメットに手をかける。

角度が難しいが、なんとかいけるか？

少しだけヘルメットがずれると、美香がビクンと震えた。

「ああああ!!」

「美香!?!」

大声で叫びながら暴れ、百貨店の中に走っていく。

すぐに追いかけると、美香は四つん這いになり肩で息をしていた。

「美香、どうしたんだ」

美香は答えることなく、立ち上がるとこちらを見るだけだった。

美香のはずだけどこか違和感がある。

「答えてくれ、美香。お前は、俺と同じなのか?」

俺が問いかけても、黙ったまま答えない。

しばらく出方を窺っていると、美香はおもむろにヘルメットを手をかけた。

「お前は……」

美香じゃない。

どこかで見たことのある顔だ。

「春！　なんでお前が!?!」

菊間が叫ぶ。

青白い顔をした、自衛隊員の山口春やまぐちはるが、そこにいた。

## 第三十五話 再会

「春、お前どこでなにしてたんだ！ 心配したんだぞ！」

美香じゃなかった衝撃で呆然としてしていると菊間が吠えた。

山口は口を一文字に結んだまま黙り込んでいる。

「答えろ、春！」

菊間の問いに、山口は苦虫を嘔み潰したような顔で地面を睨んだ。

こいつは、美香について知っている。

においもしたんだ。

確実に美香はここにいる。

では何故こいつは俺から逃げた？

なにか、後ろめたいことがあるから、か？

「……おい、お前」

山口がびくりと肩を震わせた。

思いもよらず低く冷たい声が出た。

「お前……、美香について知っているな？ 答えろ。美香はどこだ」

山口の怯えたような目と視線が合わさる。

「何故黙っている……。おい、答えろ……。美香はどこにいる!!」

山口が一步後ずさる。

逃がすかよ。

化け物染みた脚力をフルに使い三メートルほどの距離を一步で詰め、山口の細い首を左手で掴む。

「ぐ、く」

「美香の手がかりだ。逃がすわけないだろ」

両手で左手を解こうと暴れるが、そんなもの効くわけではない。

何故抵抗する？

まさか美香を害したのか、こいつは。

首を握る手に力が入っていく。

「おい、恭平やめろ！ 殺す気か！」

「うるせえよ……。黙ってろ……」

喚く菊間を一蹴する。

目を見開く山口の顔には恐怖の色しかない。

「教えろ、美香はどこだ。痛めつけないと情報は吐かないのか？ 傷付けられないとで



も思っているのか？ おい、殺すぞ、お前

「う、く、うう……」

「恭平!! 手を離せ!!」

菊間が銃口をこちらへ向けてくる。

向ける相手を間違えていないか？

こいつは、美香を、美香の、あ？ なんだ？

なんだったか。

殺すんだったか。

怒りで思考がまとまらない。

ギリギリと首を絞めていくと、山口は抵抗をやめ、諦めたような妙な笑みを俺へ向けた。

「お前、なんだよ、その顔は」

思わず手の力が緩むと、空気を切る音と共に顔面に衝撃を受けた。

たたらを踏み後ろへ下がる。

手を離してしまった山口が逃げていないかと目を向けると、庇うようにして一人の女が立っていた。

山口と揃いの服に、同じヘルメット。

こいつも、美香を真似ているのか。

「お前、お前からよ、あんまり、なあ、あんまりさ、美香のことをさ、侮辱、するんじゃないよ、おい……！」

ぶち切れそうだ。

怒りで声も震えている。

その女は、あろうことか美香と同じ空手の構えを取った。

頭の中で、ブチブチと何かが切れる音が聞こえた。

「死ね!!」

上から潰すように左手で殴りかかる。

女は両手を使い、俺の手を払う。

カウンターの気味に下段蹴りを太ももに食らった。

「効くかよコリア……! んなカスみてえな威力で俺に効くわけねえだろうが……!」

避けにくい胴へ向けて突き上げるようにパンチを叩き込むも手ごたえが無い。

手を振り上げた状態で、頭に重い衝撃を食らう。

視界に星が散り、一瞬だけ前後がわからなくなった。

女を見ればまるでどこぞのアクシオン映画俳優のように、足を高く上げたまま体の向

きを変え、こちらへ手を向けクイクイと二度折り曲げた。

なめてやがる。

「上等だよ、テメエこのやろう……!!」

美香と同じ格好で、美香と同じような動きをするんじゃないやねえ。

足を下ろした女は、再び構えをとった。

この女は強い。

どうしたら勝てる？

俺のアドバンテージはなんだ？

この化け物になった体だ。

姿勢を低くし左手の爪をコンクリートにめり込ませる。

斉藤にやったように全身の力で突進すれば体勢が崩れるはずだ。

そこを馬乗りになり、あとはひたすらボコるだけだ。

簡単なことだ。

構えをとったまま動かない女を睨み、全身に力を入れていく。

跳ね上がるように一直線に女へ向けて跳ぶ。

体のどこかに当たればいいと左手を振りかぶると同時に、女の体が消えた。

視線を下に向けると、女が倒れこむようにして回転している。

これは、まずい。

咄嗟に右腕で側頭部を庇うも、ボグ、と嫌な音が響いた。

胴回し回転蹴り、これも美香の得意とする技だった。

突進の軌道を逸らされ、女の奥にある柵へ突っ込む。

柵板の木がへし折れ顔や腕に突き刺さる。

突進は広いところでやらないと危ないな。

あれは美香の技だ。

完璧なフォームだった。

目が熱い。

倒れている一瞬でいろいろな考えが頭に浮かんだ。

女は追撃をする気はないようなので、ゆっくりと立ち上がらせてもらう。

「ははっ、まいったな。お前、強えじゃん。まるで美香だ」

指を指そうとしたが、右手が手首付近からぐにやりと垂れ下がっていた。

さっきので折れたか。

顔から床へポタポタと血が垂れている。

どこか傷ついたかと左手で顔を触ると、右目付近に割と大きな木の破片が刺さっていた。

どうりで目が見えないわけだ。

破片を引き抜くと、血の量が増した。

女を見れば、構えを解いていた。

「あ？　なんだお前。怖気付いたのかよ。おら、かかってこい。とことんやんぞ、コラ」

女はただ突っ立っている。

こちらに手を伸ばしては引つ込めて、いったいなにをしたいのかわからない。

逡巡しゅんじゆんした動きを見せていた女は、やがて決心がついたのかこちらへ歩みを進めた。

「お、良いぜ。再開か」

「恭平」

この声。

思考が止まる。

今、俺の名前を呼んだのは。

女がヘルメットに手をかける。

その下から、俺が世界で一番会いたかった女の顔が出てきた。

「美、香……？」

「うん、ごめんね、恭平……。まさかこんなケガさせちゃうとは思わなくて……」

「え？　あ、うん。大丈夫」

「これ、失明しちゃってるかも……。ちよつと見せて」

「あ……」

傷を見ようと近づいてきた美香のにおいを嗅ぎ、胸がいつぱいになる。

今度こそ、本物の美香だ。

その体を抱きしめようと腕を伸ばすと、スツとかわされてしまった。

「美香？」

「ごめんね、恭平」

「どうしたんだ、美香」

俺が一步近づけば、美香も一步下がる。

美香にこんなことをされたのは、初めて出会ったとき以来だ。

「ごめん」

「なんでだ。理由を言ってくれ。やっと会えたのに、どうして」

「ごめんね。ちゃんと説明すれば恭平もわかってくれると思うから」

美香と俺とで温度差が生じているように思う。

俺は美香が生きていて嬉しいのに、会えて嬉しいのに、どうしてこんなに余所余所しい態度をとるんだ。

呆然と、美香を見る。

「恭平……」

美香の悲しそうな声を聞いた瞬間、心臓がドクンと大きく跳ねた。

「う、痛つ！ うああ！」

「恭平!？」

突然、右目と右腕が燃えるように熱くなった。

右肘の先が脈動し、肉が蠢き、骨がゴキゴキと音を立てる。

白い毛が驚異的な速度で伸び、右腕を覆っていく。

顔の右側は上へ引っぱられるような感覚がする。

目の奥に異物が押し込まれるような違和感。

「これは……熊のときのこと？」

美香が怪訝そうな目で俺を見ている。

先程まであった燃えるような痛みは鳴りを潜め、鈍痛程度に落ち着いた。

右腕は肘の先から左手と同じような化け物の腕となり、右目は見えるようになった。

顔を手で触ってみると、どうにも毛がたくさん生えているように思う。

こちらを見ている美香の目をしっかりと見て、俺の意思を伝える。

「美香、ちゃんと話そう」

「いや、恭平、まず自分の体に起きた変化について考えたほうが良いわよ」

「俺のことはいい。美香のことが知りたいんだ」

「いいわけないでしょ。まずは恭平に起きたことを調べるほうが優先よ」

「それを言ったら美香だって同じだろ。拠点にウイルス学者がいるんだ。一緒に行つて調べてもらおう」

「はいはい、わかつたわよ。どうせ恭平は折れなさそうだし、一緒に行きましようか。でも先に調べてもらうのは恭平の方よ」

「いや、美香からだ」

「まずは恭平よ」

美香は一度言い出したら聞かない、意外と頑固な一面がある。

どうにかしてすぐに検査をしてもらわないと。

「おい、お前ら。夫婦喧嘩はもうそこまでにしろ。きなこだつて食いやしねえぞ。恭平もなんかヤバいことになってるけど本当に大丈夫か？」

菊間が俺と美香の間に割つて入ってきた。

心配をかけたようなので「平気だ」と返しておく。

「そうね。ここで言い合いをしても埒が明かないし、一度あなたたちの拠点に行きましよう」

「美香から調べてもらうように俺が伝えるから」

「私からも恭平を先につて言うわ。あとはミシエルが判断するでしょう」



美香が何故ミシエルのことを知っているのかはわからないが、一緒に拠点に戻るのならなんともななりそうだ。

たぶん花乃ちゃんなら、俺の味方になってくれるだろうし。

「春も来るよな。ほら、立てるか」

「助かる」

「あ、春、ケガしてるぞ」

「む」

菊間に抱えられるようにして立ち上がった山口は、首に血が付着していた。

怒りに任せて傷を負わせてしまった。

申し訳な気持ちでその様子を見る。

「春、首の止血をしなさい。菊間さんにうつるかもしれないわ」

「そうだった」

山口が首をハンカチで拭うと傷口は見当たらなかった。

傷は無かったが皮膚は赤く変色している。

「私たち、太陽の光で皮膚が爛れちゃうの」

「だからヘルメットをかぶっている」

フルフェイスヘルメットのバイザー部分はU Vカット仕様らしい。

普段はその下にインナーマスクを着けていて、首までしつかり隠していることだ。

俺が突然来たことにより慌てていたため、着け忘れたそうだ。

「太陽光アレルギーとか、そういうやつか？」

「それも拠点に着いたら説明するわ」

二人は少し準備があると上階に行ってしまった。

一緒に着いて行きたかったが、美香に嫌な顔をされたのでやめておいた。

もし逃げ出してもすぐに追えるように、全神経を耳に集中させて二人の音を聞いておく。

硬いブーツの足音が上階で響いている。

なにやらフロアを行ったり来たりしているように思う。

エレベーターの作動音があったのでもう降りてくるか。

「お待たせ」

美香と山口は小さめのリュックを一つ手に持っていた。

揃いのヘルメットをかぶり同じ服を着た二人は、身長も同じくらいなのでとてもよく似ているが、よく見たら決定的に違うところがあった。

「どこかを見ている」

「いや、違う。見てない」

山口の少し怒気がこもった声をかわし、百貨店を出た。

帰り道、俺は明穂の運転するフォークリフトの後ろ部分に相乗りさせてもらった。

フォークリフトの速度は時速二十キロほどだろうか。意外と早い。

「あの人が奥さんなんだね。可愛い人じゃん」

「まあな」

明穂が美香を褒めると誇らしい気持ちでいっぱいになる。

美香はきれいというよりも可愛い系だからな。

それでいて強いんだ。

「私たちのことを助けてくれたあの二人だったよ。皆もお礼したがっていたから会えたらきつと喜ぶよ」

「ああ、明穂たちはヘルメットの女に助けられたって言ってたな。美香と山口の二人だったか」

あの二人なら男二十人程度、簡単にのしてしまっただろう。

運送屋で四肢を破壊されていたゾンビたちを思い出す。

手足を切ったり折ったりして動けなくしてからゾンビに嘯ませて殺すくらい、あの二人なら平気な顔でやりそうだ。

人外な領域まで行っている俺の力でも美香にはかなわなかった。

その美香の力とカラテが合わされば、その辺の一般人など爆発四散間違いなしだ。

「なんかちよつと様子おかしかつたみたいだけどき、きつと事情があるんだよ」

「そうだな。よく話してみるつもりだ」

「それがいいよ。それにしても目と手がかっこよくなったね。狼みたいじゃん」

フオークリフトのサイドミラーに映る俺の姿は、更に人外度を増していた。

右目を中心に、顔の半分近くが白い毛におおわれていて、髪の毛もほほほ白髪になってしまっている。

左眉すら白くなっていて、一気に老けたように思う。

「怖くないのか?」

「全然。金の瞳に黒くて小さい瞳孔とかかっこいいじゃん。アニメのあれっばい」

「ああ、ウルフマンってやつか。意外と大人もアニメ見てるんだな」

「うん、まあ娘が見てたよ。もう死んじやったけどね」

「……そうか」

「うん。あ、そつか。あれだよ? ゾンビ騒ぎの前の話ね。もう二年も前かな。心臓に

障害があつてさ」

「それでも、子を亡くすのは辛いだろう。冥福を祈らせてくれ」

「あはは、ありがとう。あの子も喜ぶかな」

なんてことないように言う明穂の横顔を見て、どうにもやるせない気持ちになった。

拠点に着きインターホンを鳴らす。

『はい。つて恭平さん!? その顔どうしたんですか!?!』

「ああ、ちよつとな。開けてもらえるか?」

『えつと下にミシエルさんがいると思うのでお願いしてみますけど……。体に異常とかは無いんですか?』

「大丈夫、無いよ。心配してくれてありがとうな」

『それならいいんですけど……』

渋々納得しましたという感じの声を出す珠子が、内線通話でミシエルのことを呼んでくれた。

シャッターが開き、白衣を着た欧米美人が俺たちを出迎える。

「あら? 恭平、顔と手を……えーと、〔new look〕は日本語で、あ、イメチェンしたのね?」

「ああ、気分を変えてみたくてな。こっちが妻の美香だ。実はミシエルに頼みが、つと」話している途中で俺を押しつけて美香が前に出る。

「おい、美香」

「ミシエルさん、お願いがあります」

「あら、なにかしら？」

「いろいろと説明もしたので、どこか落ち着ける場所があれば」

「じゃあトレーラーに行きましようか。恭平もそれで良いわね？」

「ああ」

美香はどうせ俺の検査を先にしろとか言うのだろう。

俺もミシエルに美香のことを先に調べてくれるように言うつもりだ。

ミシエルは俺の味方をしてくれるはずだ。

俺の血は既に調べてあるはずだからな。

「じゃあつもる話もあるだろうし、あたしらは行くよ」

「えー、私は話聞きたいんだけど」

「いいから行くんだよ」

奈津実が気を利かせてくれたのか、明穂をつれて離れていった。

ミシエルのトレーラーハウスには美香と俺、それと菊間と山口の四人でお邪魔をする

ことになった。

トレーラーハウス内を確認すると、窓の類も無いので日の光が入ることはない。

これで安心して話ができる。

美香たちはヘルメットを脱ぎ、フェイスマスクを外した。

以前に美香の動画を見たときに座ったソファを勧められ、なんとも微妙な気持ちになる。

「それで、話つてなにかしら？ どうぞ。熱いから気をつけてね」

「ありがとう」

ミシエルが全員分のコーヒーを用意してくれたので礼を言う。

出された角砂糖とコーヒーミルクは、山口以外の全員が使わなかった。

あたたかいコーヒーはブラックで飲むのが好きだ。

コーヒーを一口飲むと、美香が「実は」と口を開いた。

「私の血には、人を死者に変えるウイルスがいます。今までに二人感染させたわ」

「その二人つてのは誰だ？」

「とある男と、そこにいる春よ」

皆が一斉に山口の方へ目を向ける。

山口は肩をびくりと震わせ、持っていた角砂糖を手から落とす。

コーヒーカップの中に角砂糖の山ができています。

お前、何個入れてんだ、それ。

見れば用意されていたコーヒーマルクもすべて空になっていた。

「でも死者に変えるって言っても春は生きてるぞ？」

「菓子、私は一度死んだ」

砂糖とミルクを入れすぎてもはやコーヒーマルクの味がしないだろう白く濁ったナニカを飲んだ山口が、満足気にひとつ頷いた。

「血の摂取以外で感染しないのは実験したから知っているわ。でも万が一感染して、本人が望まないにも関わらず私や春のようになってしまうのはダメだと思う。なにかしらの予防策が欲しいの」

「なるほどね。予防策を講じるために、貴方たちの体や血液を調べてみましょうか」

「そうしていただけると助かります。ですがまずは恭平の身に起きたことを調べて欲しいです」

ミシエルは顎に手を当ててなにやら考えている。

「んー、ちなみに美香さんと春さんに起きた体の変化はどんな感じなのかしら？」

美香曰く、どうやら俺と同じように筋力が上がり夜目が効き五感が鋭くなったらしい。

ただ一つ違うところは、美香たちの心臓は止まっていた。

「ほぼ恭平と一緒にのようね。心停止か。脈を診てみましょう」



「あ、はい」

ミシエルは真剣な顔で美香の首と手首に指を置き、しばらく動かないでいた。数分すると「やっぱりね」と美香から指を離した。

「不整脈ね」

「ふ、不整脈……?」

「そう。原因はそのウイルスだろうけど、心臓の動きがひどくゆっくりだったわ。常人なら死んでいるわね。一分に五、六回しか動いていないんだもの」

普通の人間の心拍数が六十から百回だったはずだ。

しかし美香の異常を不整脈で片付けて良いのだろうか。

「ちなみに恭平も不整脈よ。前に調べたけどあなたも一分に十回前後だったんだから」  
「俺もだったか」

「ええ。それと恭平の血の中にも未知のウイルスがいたわ。経口感染はしないみたいだけど、血を媒介にした交差感染は起きるかもしれないわね」

「つまりどういうことなんだ?」

「キスは良いけどセックスはダメよってこと。コンドームを使えば大丈夫かもしれないけど百パーセント安全とは言えないわね」

ミシエル曰く、俺の中にいるウイルスはゾンビのものとも違うようだった。

俺も美香も共通しているのはゾンビに噛まれたことだ。

「じゃあ美香も俺と同じウイルスに感染しているってことか？」

「どうかしら。美香さん、その体になってから大きなケガをしたことは？」

「えっと、両足とたぶん背骨を折りました。すぐ治っちゃったんですけど……」

「それも恭平と同じね。傷の治りが驚異的に早い。ただ、恭平の場合は異形のものになるみたいだけれど」

「美香がケガしたところも毛まみれなのか？」

「ちよっと。言い方に気をつけてよ、恭平。それじゃ私が無駄毛まみれの女みたいじゃない」

「あ、ああ、すまん」

「でもよ、このご時勢に無駄毛の処理なんかするか？」

「葉子は普段からしてなかった」

「し、してたっつーの！」

菊間が山口の肩を軽く小突いていた。

「そうだ、あと太陽の光に当たると肉が爛れて溶けていったわ」

「ポルフィリン症かしら。光線過敏症とも言っただけけれど。肉が溶けるといっなのは今までに聞いたことがないわね」

「水ぶくれができてそこから肉がグズグズになるの。すぐ治っちゃうんだけどね」  
「難儀ね」

山口の首の傷も、俺がヘルメットを外そうとして太陽光に当たったせいでは  
ない。

もう傷は跡形も無く消えているが、痛みはそうとうあったのだろう。

あの場でヘルメットを脱がしきらなくて本当によかった。

「それと満月の夜は気性が荒くなるわね。残虐性が増すというか、容赦がなくなる  
うか」

「わかる」

「それは俺もだな。ソワソワするんだよ」

美香の発言に俺と山口が賛同する。

満月かどうかはわからないが、月の光に当たっていると体を動かしたくて仕方がなく  
なる。

「そこも似ているのね。それで、恭平がそんな風になったのはやっぱりケガが原因かし  
らっ？」

「ああ、目が潰れて腕が折れた。すぐにこの化け物の腕と目になったけどな」

「あら、かつこいいわよ?」

「そいつはどうも」

ミシエルが俺の横に移動し、腕や目元を触る。

「感触は左腕と同じものね。恭平、少し腕を切ってもいいかしら？　治るときに毛が生えるのか検証してみたいわ」

「ああ、痛くないのなら。あと血の扱いには気をつけてくれよ。感染するかもだから」私を誰だと思ってるの。まあ気をつけはするけれどね」

ミシエルがメスを持ってきて右腕の人部分である二の腕を薄く切る。

痛みに身構えていたが、それほど痛くなかったので拍子抜けする。

血が垂れるので軽くティッシュで押さえようとすると、思いきり美香に腕を掴まれた。

「ちよ、おい、どうした、美香」

「フーツ！　フーツ！」

「美香？」

息を荒くして、傷口を血走った目で見る美香。

掴む手にも相当力が入っているようで、腕から骨が軋む音が聞こえてきた。

「おい、美香、落ち着け」

「フーツ、フー……。ごめん、ごめんなさい」

「いいけど、どうしたんだいったい」

美香が手を離したのでティツシユで血を拭きとると、既に傷口はふさがっていた。毛も生えておらず、軽いケガ程度では化け物に変身しないということがわかった。

美香は気まずそうにしていたが、どんな形であれ美香に強く求められることを俺は嬉しく思っていた。

「そーいや春はなんで美香さんに同行してんだ？　どんな経緯で感染したんだよ」

「私のせいで山下夫婦が離れることになった。だから」

山口は俺がゾンビに噛まれたのも、美香がゾンビに噛まれたのも、全て自分のせいだと言う。

曰く、自分の不注意で俺が巨大な犬に噛まれたせいでゾンビに噛まれることになった。

そのせいで俺が寝込むことになり、美香が外で噛まれることになった。

自分が不注意をしていなければ、二人は一緒に居られたはずだ、とそう言った。

「例えそうだとしてもそれは結果論だろ。俺はあんたを恨んだことはないぞ」

「それでも私は私の責任を取るべき。だから美香から協力の要請を受けて、それを承諾した」

「そんな責任は無いと思うけどな、俺は。というか美香からの協力ってなんだ？」

「それについては私から話すわ」

美香が「まず私の身に起きたことから聞いて欲しいの」と口重そうに切り出した。

## 第三十六話 山下美香はかく語りき

私は恭平が眠っている間、ある男と取引をしていたの。最初は取引と言うよりも脅しに近かったけど。

マキシーンがミシエルさんを助けに行つてしばらくしてから、私たちの部屋に四人の男がやってきた。

武装した男たちは私に襲いかかってきたけど、全員返り討ちにしてやったわ。強姦するつもりだったのだろうけど。

うん、大丈夫よ。落ち着いて恭平。そいつらはもう死んでるから。

力の差を思い知らせるために、リーダー格の男以外の一人を見せしめに殺したわ。

泣いて懇願してきたけど容赦なく痛めつけて、体を少しずつ破壊してやった。

恭平を守るためにはそうするしかなかった。

ううん、平気よ。恭平以外の男が死んだところでなんとも思わないし。

それからリーダー格の男へ、私たちに手を出すなど脅したわ。

男たちはそれ以降ちよっかいをかけてこなかったんだけど、恭平を一人残して行くと襲われるかもしれないと思つて、探索に行けなかった。

どんどん恭平が痩せ細っていつちやって、どうしようって思っていたときにリーダー格の男が来て取引を持ちかけて来たの。

そいつは『俺と勝負しようぜ。勝つたらなんでもあげるから、かわりに負けたら奴隷な』と言ってきた。

私の実力を知っているはずなのにずいぶんバカなやつだって思ったわ。

だから私は勝負を受けた。そのときにルールを決められたんだけど『男が触った服を脱ぐ』というルールにされちゃって。

もちろん最初は渋ったわよ。でも命がけで外に探索に行ってるんだからそれくらい認めろと言われたし、負けなきゃいい話だし、恭平も死んじやうかもだし、仕方なくそのルールで受けたわ。

ふふ、そういうこと。先に潰しちやえば手を出されることもないって思ってたわ。

え？ 動画にも残ってた？ 毎回念入りに蹴り上げてたからね。

いつの間にかコツカケを修得してたのかも。

何って、タマを体内に収納する技よ。漫画じゃないってば、本当にあるの。

それで、男たちが集めた点滴とかの物資を使って、恭平をなんとか死なせずに済んだわ。

恭平の顔色が良くなってきて安心した頃に、リーダー格の男の妹が男たちの性奴隷に



なっていると知ったの。

リーダー格の男の言うことを男たちに聞かせるには、そういった犠牲が必要なんだって自分に言い聞かせて、私はその子を見捨てた。

それから少しして恭平が目覚めたわ。

私は罪悪感から、拠点を移動する前にリーダー格の男の妹を助けようと思った。

男たちに連れられていくその子を、自衛隊の駐屯地まで送り届けることにしたの。

それがゾンビに噛まれる前の日のこと。

うん、嘘をついててごめんさい。心配をかけたくなって……。

ありがとう。

私と女の子は面識が無かったから、助けると言っても信じてもらえないまで時間がかつちやって。

それでもなんとかあのマンションから連れ出すことに成功した。

でも途中で男たちに見つかって、逃げた末に殺し合いになったわ。

男たちと戦っていると物音を聞きつけたゾンビに囲まれた。

突破口を開こうとゾンビに突っ込んだら男の一人に邪魔されて、そのときに首を噛まれたの。

男たちはその場で気絶させてゾンビに食わせてやったわ。当然よ。

気絶してても痛みで覚醒するのね。ざまあみろとしか思わなかったけど。

それで、駐屯地まですぐ近くのところに来ていたから女の子を送り届けて、すぐに恭平のところに戻ったの。

あ、女の子に会った？ そう、ジャケットを貸してたの。ゾンビに噛まれないように。違う違う、あの子のせいじゃないわ。

噛まれたあとにジャケットを貸したの。もう私は噛まれちゃったから、せめてこの子はって。

だから次に会っても脅さないですよ。あの子、男が近づくだけでパニックになっちゃってたから。

マキシーンの薬、ああ、ミシエルさんのか。ミシエルさんの薬があれば私もゾンビにならなくて済むって思った。

だけどダメだった。

次に気がついたとき、私の体は勝手に動いていたわ。

恭平がなにか話しかけてきたけど、言葉も理解できないし返事をすることもできなくて悲しかった。

薬が間に合わなくてゾンビになったって理解したとき、激しい怒りを覚えた。

あの男のせいで、私と恭平は離れなくちゃならない。

ぶつ殺してやるって思ったなら、体がそれ通りに動いたわ。

ただあの男を目の前にしたとき、殺意のほかに、美味しそうとも思った……。それから男を襲ってその肉を食べた。

吐き出したくて、気持ち悪くて、でも美味しくて、気が狂いそうだった。もう狂ってたのかもしれない。

男が喚くのをやめて少しして、不意に口の中に腐肉を詰め込まれたかのように感じた。

激しい嫌悪感を覚えて、口に残っていた肉を吐き出したわ。

胃の中にあるものを全て吐いて、ようやく私は自分の意思で体を動かせるようになった。

男を見れば目を見開いて死んでいたわ。

それから茫然と座っていたんだけど、死んだと思っていた男が動き出したの。ゾンビみたいな動きだった。

だけどすぐに意識があるような動きに変わったわ。

少ししたら男が私に罵詈雑言を浴びせてきた。

やれ「クソアマ」だの「ぶち殺してやる」だの。

え？ ああ、たぶんそうじゃないかしら。男も私と同じになってたんだと思う。

でもゾンビになるまでの時間が、私から感染するのと、他のゾンビから感染するので違うのよね。

うん、そう。実験した。クソみたいな男がこの世界にはいっぱいいるからね。材料に事欠かないわ。

で、私から感染したゾンビは一時間もしないうちに意識を取り戻すの。

あの男もそうだったし、春もそうだったわね。

男の話に戻るけど、力が強くなったからか生意気にも私に食って掛かってきたわ。ムカついたから体をバラバラにして舌を引っこ抜いてやったけど。

腕を千切っても近くに置いてあるとくっついちゃうから外に投げ捨てた。

目をつぶして歯を折って、痛めつけてやるとまたゾンビみたいに呻き声をあげるだけになったわ。

なんだか虚しくなったので死のうとペランダから飛び降りた。

だけど死ねなくて、お腹や足から飛び出た骨が逆再生みたいにとんどん治っていつて。

死ねないのならこの力で恭平を助けてあげようって思った。

恭平と一緒に生きようとは思えなかった。

人ではなくなつてあの男の肉を食べた私は、恭平と一緒にいる資格はないって。

そう思っていたら恭平がマンションからフラフラと出て来たの。

ゾンビに襲われるんじゃないかってハラハラしたわ。

だけどゾンビは恭平を襲わないで逃げていった。

そのあと恭平が言ったの。

「美香、俺を捨てたこと裏切ったこと、後悔してもしらねえからな」って。

「俺の気に入った女を集めて好き放題してやる」って。

ううん。そういう風に思われても仕方ないことを私はしていた。

だから私は、恭平の望む通りのことをしてあげようって思った。

それくらいしか私にはできなかつたから。

恭平が鈴鹿さんと合流して百貨店に向かったところも見守つたのよ。

あの規格外に大きな猪がいたのを見て、銃を持つている春に協力してもらおうって

思った。

べつに無理強いはしてないわよ。

私の体の説明をして、おそらく感染すると同じになるって教えたの。

垂直跳びで四メートル飛んで見せたらすぐに信じてくれたわ。

春本人も強い体を手に入れることに前向きだったわ。

私が前に言ったことをずっと気にしてて、その罪滅ぼししたいって言うてきて。

え？ 恭平も一緒にいたんだけど覚えてないか。あのときの恭平はそれどころじゃなかったもんね。

ああ、私が春に「あんたのせいで恭平がケガをした」って言ったのよ。

そのときのケガで恭平と私がこんなことになっちゃったって聞かなくて。

そうそう、恭平の言うとおりよ。私たちは春を恨んでもいないし、もう気に病むことはないわ。

それで、春を私と同じ体にさせてから初めて太陽の光を浴びたとき、とても酷いことになった。

ずっと曇りだったから、このときに初めて太陽の光を浴びたのよ。

なにか対策をしないと考えて、市役所前のバイクショップに服を取りに行ったの。ヘルメットとあの服が予備で何着かあったの知ってたからね。

久しぶりに見た市役所はゾンビが多少減っていただけで何も変わってなくて安心した。

そのとき優子ちゃんと恵理奈ちゃんが建物の中からこつちを見ているのに気がついて。

適当なゾンビを蹴り飛ばして手を振ったら笑顔で喜んでいたわ。

子供って可愛いわよね。

ここに合流していたよね。あとで会いたいわ。

それから他の避難所というかコミユニティを見に行っただけど、これがまた酷くてね。

本人たちから聞いたと思うけど、女性たちをなぶっていた男を皆殺しにしてやったわ。

そのあと恭平がああ熊と戦うのも見てた。

春も私にも手が入っちゃってさ。

いつ助けに飛び出そうかとヒヤヒヤしてたけど、皆で協力して倒したときは大声で歓声をあげるところだった。

たまにここに忍び込んだりもしてたんだけど、恭平、意外と気がつかなかったね。

私が春が恭平のことを見張るようにしてたのよ。

いつ危ない目にあうかわからなかったから。

まあ恭平には私の助けなんて必要なかったけどね。

それで二人の女子高生を助けたときなんだけど、あ、ここに行くように言っておいたけど合流した？ そう、良かった。

そのときにクソみたいな男がいてね、そいつで感染の実験をしたんだけど、最終的に血以外の体液じゃ感染しないってわかったわ。

その男？　そのまま太陽の光の下に置いておいたら溶けて液体になって死んだわ。くさかった。

マキシーンのところにもついて行つたわよ。

ただ恭平も五感が強化されてるでしょ？

だから五キロくらい離れて様子を見てた。

この体の視力10・0くらいあるんじゃないかしら。

五キロ先でも恭平の顔がしっかり見れたわ。

マンションから帰ってきてマキシーンと喧嘩しちゃったのは私のせいよね。ごめんなさい。謝るわ。

花乃や優子ちゃんたちと合流したのも見守つてたわ。

恭平を見守るかたわらで物資の目処もつけてたのよ。

私と春は恭平みたいにゾンビに逃げられるんじゃないくて、ゾンビから興味を持たれないらしいの。

ゾンビたちは襲ってくることも逃げることもしないわ。仲間だと思われてるのかも。

で、物資調達の後補として駅ビルの方に行つただけど、そのゾンビは私たちに襲い掛かってくるのよ。

こっちの体も強くなってるから蹴散らすのは容易いんだけど、いかんせん量が多く



て。

しかも腕とか足が変異しているヤツとか、牙が凄いことになっているヤツとかがたくさんいてね。

三日ほど戦ってたけど諦めて逃げたわ。

だから恭平も駆ビル方面には注意をしておいて。

西部百貨店のゾンビは普通のヤツらだったんだけど、数が多くて散らすのに時間がかかりそうだったの。

だから恭平のにおいのついたものを持ってきて、それで散らしてやったわ。

え？ うん。そう。そのパンツ。洗濯籠にあつたから貰ってったわよ。

大丈夫、春には持たせてないから。私しか触ってないわ。

どつから侵入したかって、ここいくらでも入るとこあるわよ？

三階までは全部の窓やドアが塞がっているけど、それ以上の階は窓の鍵閉めてないじゃない。

五階まで外から登って男子トイレの窓から入るのが多かったかしら。

恭平が使うのは七階のトイレだけでもね。

うん。なんでも知ってるわよ、私。

西部百貨店の中はゾンビの糞尿とか血でひどいことになってたから掃除することに

したの。拠点も欲しかったしね。

恭平を見守るのはやめて、二人で掃除して丸三日もかかったわ。

三徹目でなんとか生活基板を作って、それから泥のように寝てたところに恭平たちが来たの。

もうパニックで、どうしたらいいかわからなくて、とりあえず逃げることにしたわ。

だけど春が寝惚けてたのかヘルメットを落としちゃって、そしたら恭平が下からものすごい勢いで登ってくるじゃない。

最悪、春なら見つかってもいいかなと思って私だけ先に逃げたわ。

どこについて六階のベランダの下に大量にマットレス重なってたでしょ。あそこに飛んだの。

春もそこに飛び降りようとしてたのよ。うん、そう、緊急避難用に用意してた。

まさか恭平が春を捕まえて落ちるとは思わなくて、本当に焦ったわ。

隣のバスの上だったからまだ良かったけど、コンクリに叩きつけられてたら本当に痛かったわよ。

そのあと恭平が春のこと殺そうとしてたから、仕方なく手を離させようとしたんだけど。

恭平、全身から殺気漏れ出てたでしょ。春も怯えちゃってたじゃない。

私も『あ、このままじゃ殺されるかも、本気だぞ』って思つてさ。戦うつもりはなかったのよ、本当に。

え？ いや、それは……うん、ごめん。

ちよつと戦いたいつて思つちやつた。だから挑発した。ごめんね。

でも、そもそも私、恭平の前に姿を現すつもりはなかったんだから。

なんでつて、だから言つたじゃない、私にはその資格がないの。

いくら恭平を守るためとは言え体を売るような真似をして、恭平に嘘もついて……。

いいえ、違うわ。恭平に見放されないように、私の保身のために嘘をついたの。それ

だけでじゆうぶん裏切り行為よ。

恭平を悲しませて、させなくてもいい決心をさせた。

それに、私じゃもう……。

ううん、なんでもない。なんでもないわよ。

これはもう私が決めたことなの。

勝手な女つて思つてくれて構わないわ。

でも、もう私じゃ恭平を幸せにすることはできない……。

恭平のためでもあるの。

お願い、わかつて恭平。

※ ※ ※ ※ ※

最後に「本当にごめんなさい」と話を終えた美香は、ひどく暗い顔をしていた。俺も似たような顔をしているのだろうか。

一緒に居たいと思う二人が一緒に居られない理由とはいつたいなんなのか。考えてみたがまったくわからなかった。

理由はどうあれ、美香は一度こうと決めたらテコでも考えを変えない。時間が経てば考えを変えるかもしれないから、気長に待つしかない。

美香が生きてそばにいてくれるだけで、俺は満足なんだ。

「あとでこの女の子たちを全員集めることはできる?」

「ああ、それはできるけど」

「皆に大事な話があるの。恭平抜きで、女だけの大事な話が」

それがいつたいなんなのかは気になるが、さすがに女同士の話に聞き耳を立てるのはデリカシーに欠ける。

美香が俺抜きだと言っているのだから、俺が聞かなくていい話ということだ。

「わかった。皆には俺からも言っておく」

「お願いね」

「さて、話は終わりかしらね。気になるところがいくつかあったから、もう少し詳しく美香さんに聞きたいのだけれどかまわないかしら？」

「はい。それでなにかがわかるのなら」

「ありがとう。それじゃあ美香さんと山口さん、恭平は採血しちやいましょう。試したいことがたくさんあるの」

ミシエルは少しワクワクした様子で、それでも手早く俺たちの採血を終わらせた。

美香と山口の採血管は三本で俺は二本だった。

俺の血は結構な量を保管してあるので、今回は実験に使うためのものだけ採血したらしい。

採血が終わるとミシエルが美香に質問を開始した。

俺や美香が嘔まれたときの日付と時間、俺が起きるまでの日数。

いろいろなことを聞いてはメモ帳に書き記していた。

美香の話を聞いて、そうだったのかと思うこともいくつもあった。

ミシエルの質問はまだ続いているが少し疲れてきたのでコーヒを一口飲む。

「感染の疑いがあるとかでお前もう駐屯地に戻れないぞ」

「構わない」

一息ついていると山口と菊間がなにやら話しているのが聞こえたので耳を傾ける。

「小池さんにどう伝えんだよ」

「本当のことを言う。もしこの力を欲したら美香を説得する」

「説得してどうすんだ？ お前みたいな体になれんのか？」

「なれる。でも人の体には戻れなくなる」

「人じゃなくなるかわりにゾンビに狙われなくなつて怪力と超回復が手に入るか……」

あの人なら絶対求めてくるだろ」

「たぶん」

小池さんか。

きつと美香や山口みたいにゾンビに狙われなくなつても、奥さんと娘さんを探しに行かずに国民を救出するとかやつてるんだらうな。

「なあ春。あたしもお前らみたいになりたいって言ったたらなれんのか？」

「なれる。でもおすすめはしない。葉子は人でいるべき」

「はっ、んだよそれ。小池さんは良くつて私はダメだつてか？ あれだ。斉藤も誘つて

皆でなればいい。あいつも乗つてくんだろ」

「斉藤はヘタレだから乗らない」

「小池さん慕つてたから平気だろ。日の光がダメなら夜に活動すりゃいいんだよな。宵

闇に暗中飛躍するヤタガラス。かつこいいいじゃねえか」

「いや、恥ずかしい」

「俺もそれはどうかと思う」

「おい恭平、聞いてんじやねえよ！」

「でもそれは無いっていうか」

「うるせえよ。つたく、ロマンのねえやつらだな」

発想が中学生のそれなんだよな。

それか時代劇的なあれだ。

ミシエルと美香の話が終わったので退散することにした。

コーヒーのお礼をしてトレーラーハウスを出るときには、既にミシエルは実験器具を取り出してなにやらやっていた。既にミシエルは実験器具を

すぐくワクワクしていたからな。

どうか無理せず頑張ってほしい。

菊間と山口は小池さんと連絡を取るとかで、別行動となった。

美香が「花乃と話したい」と言うので、花乃ちゃんのやつっている空手教室まで移動する。

四階の空手教室へと移動している最中、前方から双子が現れた。

「おー、お兄さんおかー」

「え、ちよつと待ってちよつと待って。お兄さんやばみざわじゃね?」

「待って、ほんと待って、美香さんもいるし」

「え、あ、え? やばくね?」

「二人とも久しぶりね」

「美香さんだ……」

「み、美香さああん!!」

双子は美香へ駆け寄り、ぎゅうぎゅうと抱きついた。

「うおおお! 美香さんだあああ!」

「あげぼよピーナッツなんだけど!」

「はいはい、わかったから。あいかわらずね」

双子が宇宙人語を織り交ぜながら美香に抱きつきながらなにかを喚いている。

断片的に拾えて理解できたのは「死んだと思ってた」と「生きて嬉しい」だった。

ひとしきり美香に宇宙人語を浴びせていた双子がこつちをジツと見ているのに気が

つく。

「お兄さんがガチめのやばたんなの?」



「マジでエグいよね。あ、ピツカンきた。ちよつとお兄さんその手で顔挟んで」

「あ、それベエわ。あたしもやって！」

「ん？ なに？ 手で顔を挟むのか？」

「そつ！ とりま挟んで！」

「ほらよ」

言うとおりに両手で顔を挟んでやると、双子の愛理のほうが「ふううう！」と奇声を発した。

うるさいので手を離し結愛のほうも挟むと、同じように「ほおおお!!」と奇声を発する。

ほんとうるせえ。

「肉球のエモさほんと神」

「はげど。お兄さん神対応あざす」

「あ、ああ」

とりあえず俺は神じゃないが、なにを言っているのかわからない二人はほうっておくことにした。

こいつらと付き合っていく上で大事なことは、まともに取り合わない、だ。ちゃんと伝えたいことがあるなら俺にわかりやすく伝えるだろう。

宇宙人語を話している間は、適当に返しておけばいい。

一通り騒いだ宇宙人の双子はきなこを探すのだと去っていった。

あいつら、ほんときなこのこと追い掛け回してんな。

空手教室に着くと意外と人が多いことに驚いた。

指導役の花乃ちゃんの他に生徒が五人ほどいた。

恵理奈ちゃん優子ちゃん姉妹と、高校生組の友里と涼子と詩織。

俺と美香が姿を現すと、全員が練習をやめて集まってきた。

「おねえちゃん、ひさしぶり！」

「美香さん、お久しぶりです」

「二人とも久しぶり。元気だった？」

「うん！」

「美香さんも元気そうで良かったです」

優子ちゃんと恵理奈ちゃんは嬉しそうに美香にくつつき頭を撫でられている。

二人に懐かれている美香もとても嬉しそうだ。

「お兄さんヤバくないツスカそれ」

「プロモーションしましたか。流石です」

「あ、あの、痛くないですか？」

高校生組は俺の手や目を見て一応心配をしてくれているようだ。

いや、心配しているのは友里だけだな。涼子はなにを言っているのかわからないし詩織は双子の反応と一緒にだな。

「お姉ちゃん、やつぱり生きてたか」

「花乃」

花乃ちゃんが安心したかのような笑顔を美香へ向けていた。

美香が死んだと話した夜は嗚咽を漏らしていた花乃ちゃんだ、再会の喜びもひとしおだろう。

「ごめんね、心配かけて」

「ううん、大丈夫。お父さんとお母さんがアレになっちゃったから、眠らせといたよ」

「うん、そっか。ありがとう。辛い役やらせちゃったね」

「平気。ん、あれ?」

花乃ちゃんの目から涙がこぼれ落ちた。

本人も自分がなんで泣いているか理解していないような顔をしている。

両親をその手にかけたのだから平気なわけではない。

美香という存在に会えたことで、今までの辛さや悲しみが堰<sup>せき</sup>を切ったように溢れてしまったのだろう。

「ほら、おいで花乃」

「う、うう、お姉ちゃん……」

美香にすがりつくようにして泣く花乃ちゃん。

その背を美香は幼子をあやすように優しく撫でていた。

「あの人がお兄さんの奥さんツスか。優しそうな人ツスね」

「ああ、そうだろ」

「これでキングとクイーンが揃いましたね」

「お前はなにを言っているのかわからないんだよ。チエスか？」

「もしかしたら、私あの人に助けられたかもしれない」

「そうだった。友里とあと涼子もか。二人を助けたのは美香ともう一人いる山口つてや

つだ」

「そうだったんですね」

「お礼を言わないとですね」

「喜ぶだろうけど、今はそつとしておいてやってくれ」

目を真っ赤にして泣く花乃ちゃんと、その頭を撫でる美香を見て、俺の胸は喜悦と充足感に満たされていた。

空手教室をあとにし、皆をレストランに集める。

美香から皆へと大事な話があるらしいが、それがいったいなんなのか気がなる。

ミシエルは俺や美香たちの血で実験をするのに忙しそうだったが、それでも集まってくれた。

あとは屋上で銃の訓練している鈴鹿たちだが、呼びに行く前にタイミングよくやってきた。

「恭平、どうしたのそれ。大丈夫なの？」

「ああ、心配は要らない」

「そんなこと言われても心配するに決まってるでしょ」

鈴鹿がこちらに駆け寄って、目の周辺を撫でてきた。

まあたしかに化け物の手と目になっていなかったら普通に大怪我だったしな。

ひとしきり目元や手を触った鈴鹿は、俺の隣にいる美香を見て呆れたような視線を俺に向けた。

「また可愛らしい人を連れてきたね？」

「ああ、紹介するよ。俺の」

「OH！ ミカ！ 久しぶりデスネー。生きてるしてるマスたか」

「マキシーン、久しぶり」

マキシーンと美香はかなり力強いハグをしていた。

マキシーンも美香が生きていて嬉しそうだ。

その様子を見てみると自然と俺も笑顔になってしまう。

「美香さんって……。え、恭平の奥さん？」

「ああ、そうだ。生きてくれていてな。西部百貨店で合流したんだよ」

「そう、なんだ。うん、良かったね恭平。ほんと、良かった」

「あなたが鈴鹿さんね。初めまして、山下美香です。恭平がお世話になったみたいで」

「いえ、私はべつに、特になにもしてませんけど……」

「それでもお礼を言わせてね。ありがとう」

鈴鹿が人見知りをしているのか、どうにもぎこちない。

そんな鈴鹿を美香が真剣な目で見ている。

「鈴鹿さん、突然で申し訳ないんだけど、今から大事な話があるの」

「大事な話ですか……？」

「そう。女だけで話したいから、恭平はどつかで時間を潰しててくれるかしら？」

「ああ、わかった」

「え、恭平……」

「こちらを見ている鈴鹿と目が合った。

なんだろう、美香が怖いのか？

「大丈夫だ鈴鹿。美香は滅多なことじゃ女に暴力は振るわない。安心しろ」

「ちよつと、人を暴力女みたいに言わないでよ」

「ああ、すまん。じゃ、全員揃ったし話を始めるだろ。俺は自分のとこで酒でも飲んでから、終わったら教えてくれ」

「耳も良くなってるんだから音楽とか流しといてよね」

「わかったよ」

美香たちに軽く手を振り、中華レストランへと行く。

酒をいくつか持ち、自分の寛ぎスペースに向かう。

寛ぎスペースに、家電ショップからCDプレーヤーとポータブルスピーカーを集めておいたのは正解だった。

『CLASSIC ROCK GREAT HITS 80s & amp; 90s』は俺のここ数日の晩酌のお供となっていた。

『U2』や『ACDC』を聞きながら飲む酒は美味い。

『Guns N' Roses』も好きだし『Bon Jovi』も名曲揃いだ。

今、俺以外の住人は全てレストランに集まっている。

誰も気にせず爆音で流すROCKは最高だ。

シャウトしたら流石に聞こえそうだから口ずさむ程度にしておこう。

ソファをリクライニングにして月を見上げながら『Living, On A Prayer』を口ずさむ。

今日の酒はダークラム。つまみはサラミとチーズ。

ロックで飲みながらロックを聴く。最高だな。

「こんな寒いのによく外に居られる」

「うお、びっくりした。山口か」

気がつけば山口が対面のソファへ座っていた。

誰かと飲みたいから用意したが、二月の夜にわざわざ外で飲むアホはいないと誰も晩酌に付き合ってくれず、一度も使われていなかったソファだ。

「話は終わったのか？ ずいぶん早いな」

「いや、私は貴方の監視だ」

「なんだそりや、べつに聞き耳立ててねえだろ」

「私は話を聞く必要がない。だから一応の監視だ。暇だったのもある」

「暇なのか。ならちようどいいや。付き合ってくれよ」

「いただく」

いつ誰が来てもいいようにグラス入れを用意しておいて正解だったな。



グラスにロックアイスを入れてラム酒を注いでやる。

「ほら」

「ありがとう」

グラスを受け取った山口は一口飲むと眉間に皺を寄せた。

「ん、苦手か？」

「いや、初めての味だ。クセが強い」

「それが美味しいんだよ」

グラスの中身を半分ほど流し込む。

ほんのりとした甘みが口いっぱいに広がり、ドライフルーツを食べたかのような香りが鼻腔を抜けていく。

あまりラム酒を飲んだことはなかったが、一度はまってしまおうとやめられない美味さだ。

「貴方には、本当に申し訳ないことをした。改めて謝罪をさせて欲しい。すまなかつた」  
「まだ言ってるのか。俺も美香もお前を恨んじやいねえよ。むしろこの体を手に入れるきっかけをくれて感謝すらしてる」

山口はしかめっ面のまま黙って酒を口に運んだ。

「お前はやりたいたいことをやってくれ。美香への協力はもういらないんだろう？ さつき

言つてたけど小池さんのところに行きたいんじゃないのか？」

「そう。美香からも自由にしたいと言われた。できれば小池さんのところに向かいたい」

「いいんじゃないの？ あ、じゃあ俺からの頼みだ。小池さんの家族を探してやつてくれないか？」

「もちろんだ。それは菊間と話して欲しいの場所の見当はついている」

「そっか。流石だな。じゃあ明日にでも行動したらどうだ？」

「感謝する」

俺ほどじゃないが人外の体になつてまで人命救助をしようとする山口に尊敬の念を抱いた。

小一時間ほど酒を飲んでいると、上階から誰かが叫ぶ声が聞こえた。

プレーヤーを止めて耳を澄ます。

どうやら叫んでいるのは鈴鹿のようだ。

なにかあつたのかと慌てて席を立つと、山口に手を掴まれた。

「揉めるのは予測していた」

「予測してたからなんだつてんだよ。鈴鹿があんなに声を荒げてんだぞ」

山口の手を振り払い、階段へ向かう。

「ふざけないで！」

「……………よ。……………が一番……………なの」

階段を登っている最中も叫び声は続く。

鈴鹿と、会話しているのは美香か。

レストラン前には美香と対峙するように立つ鈴鹿がいた。

肩を怒らせ睨むようにして美香を見ている。

「おい、どうしたんだ。なにがあつた？」

「恭平は関係ないわ。私たちの問題よ」

「関係ない？ 関係あるに決まってるでしょ！ どんだけ自分勝手なのよ、あんた！」

「おい鈴鹿落ち着け。どうしたんだ？」

「……………なんでもない」

鈴鹿は唇を血が出そうなほど噛み締め、俺を見ずに床を睨んでいる。

こんな鈴鹿を見るのは初めてだ。

いったいなにがあつたんだ。

「美香さん、あんたのその考えは間違ってる。私は認めないから」

「絶対に認めさせるわ」

鈴鹿は美香を睨むと踵を返し歩き出した。

「おい、鈴鹿」

「ごめん恭平。今はほうっておいて」

呆気にとられたまま鈴鹿の背を見送るしかできなかつた。

「おい、なにを言ったんだよ美香」

「女同士の話よ」

「うん、まあこればかりはお義兄さんも口出しちゃダメだね。私はお姉ちゃんの見解に賛成だし」

「どういふことだよ……」

なんの話かは知らないが、調和を乱す真似だけはやめてほしい。

「大丈夫。上手くいから。安心して」

自信満々に言う美香を見て、なんだか嫌な予感がした。

## 第三十七話 邂逅

グラスの中身を飲み干し、ため息をひとつつくと鼻からフルーティな香りが抜けていく。

寛ぎスペースでひとり酒を飲みながら、膝の上で寝ているきなこを撫でる。

どうやらこの毛玉は化け物の腕で撫でられるのが好きなようだ。

あごの下や腹を撫でてやるとプスプス言いながら寝返りをうつ。

ズレたブランケットを掛け直してやり撫でるのをやめると、ふうふうと文句のような寝息が聞こえた。

ブランケットは規則正しく上下しているので、膝の上で寝られるのならそれで満足らしい。

先ほどの美香と鈴鹿の一件のあと、美香は山口を連れて探索に行き、鈴鹿は俺を避けるかのようにミシエルのトレーラーハウスに行ってしまった。

美香が探索に行くのは、日の光が出ていない夜の方が自由に動けるといいう理由かららしい。

俺やおそらく変異した美香は、夜目がきくので昼よりも夜のほうが安全度は高い。

日中に他の生存者に見つかった場合に襲われぬ保障はないのだ。

こちらだけが一方的に発見できるアドバンテージはやはり夜の方が大きい。

まあそもそも普通の人間がわざわざ暗くて危険度の増した夜に外へ行くことはないだろうけど。

寝るに寝れないので晩酌の続きをしているが、先ほどと違って一人で飲む酒はどうしてか少しだけ物寂しさを覚える。

膝上で寝ている一匹の毛玉は、晩酌に付き合ってくれるわけでもなく、むしろそのあたたかい体温で睡眠へと誘<sup>いよび</sup>っているかのようだ。

ぼんやりとした頭で、なにをしなくてはいけないのかを考える。

美香が鈴鹿になにかを言ったせいで二人の間に不和が生じてしまっている。

これをこのまま放置しておいたら時間経過と共に悪化していき、きつとろくなことはならないだろう。

解決策を考えるには、やはり美香がなにを言ったかを知らなければならぬか。

女同士の話に首を突っ込まないのは大事だとは思いますが、それでコミュニケーション全体に不和が広がり内部崩壊をするなど、リーダーとして絶対に阻止しなくてはいけない。

俺としてはせつかく美香と再会できたのだから前のように夫婦生活を送りたい。

全く同じようにできるとは思わないが、それでも美香と一緒に生きて行きたい。

鈴鹿は俺のことを支えてきてくれた大切な仲間だ。

だがそれ以上に俺は美香のことが大事なんだ。

もし、美香か鈴鹿かを選ばなきゃいけないときが来たら、俺は鈴鹿を捨てる選択をするのだろうか。

考えてみたが、その時にならないと答えは出そうになかった。

気がつけば空が白みはじめていた。

どうやらうたた寝をしていたようだ。

膝上で丸くなっていたきなこがおすわりをして、つぶらな瞳でこちらを見つめていた。

「アン」（おなかすいた）

「ああ、朝食にはまだ早い気もするけどレストランに行ってみるか……」

きなこを床におろして立ち上がり、ソファで寝て凝り固まってしまった体を思い切り伸びをしてほぐす。

どこかの骨がばきばきとなるのが気持ちいい。

髭を剃って顔を洗って、朝の準備をやってしまおう。

最近ではきなこも階段を上り下りできるようになったので、ほうっておけば勝手にレ

ストランに向かうだろう。

七階の男子トイレが俺専用の洗面所代わりとなっている。

ここには歯ブラシ、コップ、髭剃り、シェービングクリーム、タオルが置いてある。タオルの補充は誰かがやってくれているようだ。

そういえば洗濯物も誰かがいつの間にかやってくれている。

あとで感謝を伝えておこう。

化物の手は朝の支度をするのにとても不便だ。

肉級の間ですら毛が生えていて、水に濡らすと乾くまでにとても時間がかかる。

おまけに歯ブラシシヤ髭剃りなど小さな物を持つのがとても苦手だ。

今までは右手が使えていたから良かったが、両手が化物の腕になってしまつてはもうどうしようもない。

タオルを多く使つてしまふが許してもらおう。

顔を洗い鏡を見ると、化物と目があった。

金の虹彩こうさいに小さな瞳孔どうこう、顔の半分が白い毛で覆われている化物だ。

その無機質な目を見つめながら「お前は誰だ」と尋ねる。

鏡の中の俺は、見透かしたような目で俺を見てくれるだけで答えることはなかった。

朝の支度を終わらせ時計を見ると、六時過ぎになつていたのでレストランへ向かう。



ここでの生活のルールで、食事の時間は毎日決まっている。

六時、十二時、十八時の三回だ。

なので今日の俺は遅刻をしたということになる。

急いで行こう。珠子は食事関係になるととても怖くなる。

レストランに着くとほぼ全員が揃っていた。

昨日の一悶着ひしもんぢやくがあつたが、美香も鈴鹿もレストラン内にいた。

一晩経つて冷静になつてくれていればいいけど。

今朝のご飯はポトフとクロワッサン、ミートボールとウインナーというものだった。

珠子お手製のミートボールは本当に美味しい。

ミートボール自体は好きでも嫌いでもなかったが、これを食べてからは一気に俺の好物へと躍り出た。

厨房のフライパンと鍋から自分で皿へとよそつていく。

これも最初は全員分を珠子がよそつて配膳していたが、起きてくる時間もまちまちなので各自でやることになった。

ただあまり遅くに来ると、せっかくの出来たての料理が冷めてしまうと珠子が怒ったことから、みな自主的に早く起きてくるようになった。

クロワッサンも珠子の手作りだ。

卵がないから完璧ではないとは言っていたが、俺にはなにが不満なのかかわからないくらいに美味しい。

卵は鶏を捕まえてくれば産んでくれるか？

どこか養鶏場を探しに行ってみるか……。

餌をくれる人がいなくなっても、運がよければ野生化して生き延びているだろうか。

シロたちや赤カブトのように巨大化していれば生き残っていたりするか？

もしそれを捕まえたとしても、卵を回収するのは命がけになりそうだが。

席につき「いただきます」と食事を開始する。

美香のいる席に行きたかったが、花乃ちゃんと優子ちゃん、恵理奈ちゃんが座っていたので狭くなるから遠慮しておいた。

鈴鹿の席はマキシーンと直美、深冬の狩猟メンバーが話をしていたので邪魔をしないでおいた。

双子のいる高校生組とは朝から疲れるので一緒に食事をしたくない。

奈津実、明穂、香織、珠子のいる席は既に食事を終えているようなので座りにくい。

ということではポッチ飯である。

ポッチでも美味しいものは美味しいのだ。

毎日食べても飽きない珠子の料理に舌鼓を打つ。

ポトフとクロワッサンをおかわりしに行く、ちょうど美香と山口もおかわりをしていた。

「おはよう」

「おはよう恭平」

「ああ、おはよう」

「この体になつてからお腹すつごい空くよね」

「ああ、だから俺はプロテインを飲んで腹を膨らませてるよ」

「なるほど。その手があつたか」

「スポーツシヨップがあつたからそこに行く」

「そうね。私たちは大飯食らだから、ちゃんと自分たちの分くらいは集めてこないかね」

「そうだな」

食べようと思えば米を十五合は食べられる。

この拠点の食糧事情が危ういのは、まず間違いなく人の十倍以上食べるようになってしまった俺のせいだろう。

早急になんとかしなくては。

食事を終わらせて朝のミーティングを始める。

この一週間で慣例化かんれいかしたこのミーティングは、それぞれが一日の予定を決めて発表する場となっている。

普段あまり話さない人の声や意見を聞くことはとても大事だとミシエルに言われ、それで皆の関係が良好になるのならば、と始めたものだ。

毎朝のミーティングには子供たちも参加しそれぞれ気がついたことや要望などを言っている。

ミーティングには毎回、珠子が書記を務めてくれる。

ホワイトボードに誰がどこでなにをしているかなども書いてくれており、目に見えることで拠点内の整理等の進捗状況もわかりやすくなっている。

ありがたいことだ。

「ええと、じゃあまとめるぞ。引き続き珠子は子供たちと拠点内の整理整頓だな」  
使えるものを種類ごとにまとめて片付けるのは、思った以上に骨だ。

ダンボールに中の物の名前を書き隙間なく詰め種類別に並べる。

これに参加する子供たちを所詮しよせん子供と侮るなかれ、彼女らは立派な戦力なのだ。

戦いは数だよ、兄貴。と昔の偉人は言ったとか言わないとか。

「美香と花乃ちゃ……花乃は奈津実のトラックで西部から物資の運搬。これに千恵と友里、香織も参加するってことでいいな？」

「いいわよ。向こうの物資をまとめるのにも時間がかかるし人手は多ければ多いほうがいいわね。ちよつと量が多すぎてトラックでなん往復もすることになるかもだけど」

「ああ、それは俺が明穂と深冬と一緒にトラックを確保してくるから問題ない。運送会社に大型のトラックをとりに行つてそのままそちに合流する」

「オーケーよ」

とりあえずは西部百貨店から食料だけでも運んでしまおう。

美香曰く冷凍物が大量に手付かずで残っているそうなので、これを持ち帰れば当面の間は俺がたくさん食べてもなんとかなりそうだ。

いやお前が食わなきゃいいだけじゃんとか言われそうだが、食わないと頭がクラクラしてくるんだ。

燃費の悪すぎる体に少しだけ嫌気がさしてはいる。

でも食べれば食べるだけ体に力が蓄えられるというか、筋肉が増すというか、そんな感じが凄くする。

なので俺は誰になにを言われようと、これからも大量に食べ続ける。

なんせ腹筋が六つに割れて胸筋を動かせるようになったからな。

一日に二十杯プロテインを飲み続けた甲斐があった。

あれは味も美味しいしお腹も膨れるからいいものだ。

「えーと、鈴鹿はマキシーンと直美と猫の下見をするってことでもいいか？」

「うん、それでいいよ。鹿の群れがどこを餌場に行っているか見たいからね」

「近くの公園の雑草とか食べに来てみるみたいだから、食べつくされる前に仕留めない  
とって感じかなー」

「そうデスねー。おウチに生えるしてる木とか食べてるマス」

「普通の大きさの鹿でさえ食害が深刻だったのに、あんな大きい鹿じゃどれだけ被害が  
出るかわからないよねー」

直美がスマホで撮影した写真を見せてくれたが、隣に写っているハイエースよりも大  
きい馬鹿げた大きさの鹿だった。

世界最大のシカであるヘラジカを優に超える大きさの鹿が、一日にどれほどの量の餌  
を食べるのか。

あつという間にこの辺りの植物を食べ尽くしてどこかへ移動してしまいそうだ。

写真には少なくとも十頭の鹿が写っていた。

これを狩れば毎日もみじ鍋が食べられるな。

どうにもこの化物の体になってから、肉が大好物になってしまった。

鹿肉のロースト、しゃぶしゃぶ、ジンギスカン、すき焼き。

想像するだけでヨダレが垂れそうだ。

「山口は菊……葉子と一緒に市役所に行く、と」

「そう」

「ちよつと小池さんに会いにな」

「ああ、それがいいだろ。ミシエルのゾンビ避けも一つだけだが忘れずに持っていつてくれよ」

「任せて」

ミシエルの作り出した、俺の血を使ったゾンビ避けは血の培養が上手くいけば量産ができるとのことだった。

俺の血液内のウイルスを希釈して芳香剤に入っているジェルのようなものに吸わせ、ゾンビの嫌がるにおいを揮発させるという仕組みのようだ。

まだ六つほどしかできていない内の一つを小池さんに渡せば、きっと喜んでくれること間違いなしだな。

欲を出してここに奪いに来たのなら、そのときは全力で叩き潰すまでだ。

……本気で殺す気で戦わないと、あの人には勝てそうにないな。

「よし、じゃあそんなもんか。皆、くれぐれも安全にだけは気をつけてくれよ。ゾンビ避けは服から出してつけるように。絶対に一人では行動しないように。よろしく頼む」

まるでタイムリングを計ったかのように、異口同音で「はい」と返事がきた。

出きることなら美香と共に行動しいろいろと話をしたかったが、美香が俺を避けると宣言した以上、俺は美香とできるだけ接触を図らない方がよさそうだ。

もし無理に話をしようとしたり近づこうとしたりしたら、きつと美香は俺の元から離れてどこかへと行ってしまおうだろう。

落ち着いて話せるようになるまで、もう少しだけ時間を置こう。

俺と明穂と深冬は、二人がいた運送会社までの道を歩いている。

目的の物はダンブと箱型のトラックだ。

「ダンブなら畑の土も運べそうだよな。あとあれがあるといいな。 Yunbo」

「んー、それは置いてないかな。ただの運送屋だからあってもフォークリフトだけだよ」

「あと Yunbo は商品名。正しくはバックホウ」

「あ、そうなのか。バックホウってあのシャベルがついてるシャベルカーだろ？ Yunbo と一緒？」

「バケットがついてるよ。ちなみにシヨベルカーと Yunbo とかのバックホウじゃ作動する方向が違う」

「へえ。深冬詳しいじゃん。うちに入る前にオペでもやってたの？」

「いや、実家が農家だった。絶対に手伝いたくないから中学卒業してすぐ家出てきたけ



ど。で、バケットを前に動かすのがシヨベルカーとか油圧シヨベル。バックしながら動かすのがバックホウ。バックしながら、ホウ、鍬くわを動かすからこの名前」

「めっちゃ詳しいじゃん」

明穂が感心した声を漏らす。

俺もこんなに喋る深冬を見るのは初めてなので驚いた。

建設機械とか好きなのかね。

「すごいや深冬、スコップとシャベルの違い知ってる？」

「大きさとか？」

「あー、すごいやなにが違うんだろうな。気にしたことなかった」

「建設現場で使うのがシャベル。園芸用がスコップとか？」

「正解正解。やるねえ、深冬。あの両手で穴掘るのがスコップで、片手で使える小さいやつがシャベルなんだって」

「え。ウチら呼び方逆なんだけど」

「呼び方とか全然気にしたことなかったな。でもたしかに小さいのはシャベルか？」

「は？ ウチらは小さい方をスコップって呼んでたけど」

「あー、なんか西日本と東日本じゃ呼び方逆になってるんだってさ。深冬、たしか実家三重だったっしょ」

「うん」

「へえ、面白いな」

明穂はいろいろな豆知識を持っているようで、運送屋までの長い道中の話題に事欠かない。

俺が深冬と自然と話せるのも、明穂のおかげなんだろう。

こういうムードメーカー的な人物は、本当にありがたい。

俺と深冬の二人だけだったら、きつと今頃重苦しい沈黙で嫌な空気になっていたことだろう。

「そーいやさ、うちの奥さん昨日レストランで皆が集まったときになんて言ってたんだ？」

「ん？ 美香さんのこと？ あー、恭平には言うなって言われてんだよね」

「でも知つといた方がいいと思うよ、ウチは」

「うーん、でもなあ、わりとシビアな問題だと思うよ？ あの話をしてたとき的美香さんの顔見りや相当な覚悟で言っただってわかんたら」

「それでもおかしし」

「おかしいつて思う気持ちはわかるけど、きつと事情があるんだよ」

「おい、二人だけで話してないで俺にもわかるように説明してくれ。もうそこまで言っ

ておいて俺に言えないとか言うなよ？」

「えー？ うーん……」

明穂は眉をひそめて口をすぼめて言いたくなくさそうにしている。

ここまで言われて気にするなという方が無理がある。

絶対に聞き出してやると意気込んでいると、深冬が「あんたの奥さんさ」と切り出した。

「なんか、ウチらにあんたの子を孕めって言ってきたんだけど」

「……はあ？ どういうことだよ」

「知らないよ」

「あーあ、言っちゃった」

深冬の言ったことが理解できない。

美香が他の女に俺の子を孕めと言った？

いったいなにが目的なんだ、美香。

「あー、恭平。全員に強制とかそういうんじゃないよ？ 希望する人だけみたいなの」

「あんたのことを好きなら、自分のことは気にしなくていいから積極的にアプローチしろって」

「なんだそりゃ。おかしいだろ、それは」

「なんか私らを百貨店に行くように仕向けたのも、恭平の女にさせるためだったんで」

「言っちゃ悪いけどさ、あんたの奥さんどつかおかしいよ。人っぽくないって言うか、考え方が普通じゃない」

「ちよつと深冬。やめなつてば」

「いや、いい。それは俺もおかしいと感じていた」

人の話を聞かなくなったというか、我が強くなつたというか。

前はあんなに独善的ではなかった。

今の美香は自分の考えに妄信していて、心に余裕がないように見える。

俺が他の女を孕ませなければいけないと美香が妄信する理由か……。

考えてみたが全くわからなかった。

美香も俺が他の女と寝るわけがないとわかりきっているのに、本当になにを考えているのかわからない。

「もつとさ、ちゃんと奥さんと話した方がいいんじゃない？」

「ああ、それはそうなんだけどな。難しいんだよ」

「そんなのは恭平が一番わかっていることですよ。深冬がわざわざ言うことないって」

「そうだけだよ」

「あー、恭平のこと心配したからかなー？ あ、ちなみに恭平。こいつこんなこと言うてるけど恭平の子を孕む気あるってよ」

「はあ!? んなこと言ってるじゃないし!」

「あれー? 恭平なら的なこと言ってるなかつたっけー?」

「ちがッ! あれは他の男にマワされるくらいなら恭平さんの子を産んで守ってもらいたいって意味で」

「ほら恭平、深冬が守って欲しいってよ」

「ちよ、やめろッ! ぶっ飛ばすぞ teme!!」

「ほーん、上等だよ。ほらほらかかってこい」

「おいやめろ。やーめーろ。明穂も深冬のことからかいすぎだ。一回やめろって。やめろっつー!」

取っ組み合いをする二人の体をはがすも、深冬が明穂に突つかかっていって止まらな  
い。

「おい、ほら、やめろって。こいつ……オラ!」

「きやつ」

「ぶっふー。抱っこされてやんの」

「明穂は煽んな!」

肩に担ぐようにして深冬を抱き上げると、途端に借りてきた猫のように大人しくなった。

深冬は美香より小柄だから、俺の肩の上程度でも高く感じてしまうのかもしれない。

「明穂、もう煽らないか」

「はい、もう言わないって」

「よし。深冬は。もう手を出さないか」

「ウ、ウン……」

「ぶぶ、こいつ顔赤くなってるけど」

「明穂！」

「あーはいはい。ごめんって」

地面に下ろしてやると、顔を赤くした深冬がこちらを睨んできた。

深冬はわなわなと震えた拳を作ると、俺へと叩きつけてくる。

「いてっ。抱えて悪かったよ。いたっ」

深冬は無言で三発ほど俺を叩くと、気が済んだのかふいと顔を背けてしまった。

「恭平これね、こいつの照れ隠しだから。本当は嬉しいんだよ」

「お前ええッ!!」

「ああ？ やんのか？」

「やめろってんだよお前らー」

再び取っ組み合い始めた二人を引き剥がす。

初めて会ったときよりも元気なのはいいことだが、少し落ち着いてほしい。

喧嘩するほど仲がいいとは言うけれど、鼻血が出るまで取っ組み合いをするのはやりすぎじゃないか。

二人が落ち着いたところで歩き出す。

百貨店から運送会社まで行く道は、以前に車を片付けたおかげで見通しも良く歩きやすい。

道の両脇にあるビルからなにが飛び出してきてもいいように、道の真ん中を歩いていく。

前方数百メートル先に珍しくゾンビの姿を見つけた。

この辺のゾンビは皆、俺のことを嫌ってどこかに行ってしまったはずなのに、群れからハグレてしまったのだろうか。

赤黒い肌をしたそのゾンビは、他のゾンビの一回りは大きいように見える。

体長は自動販売機より大きく、体格も筋肉質だ。

上半身に服をまとっていないのでその筋肉の発達具合もよくわかる。

ゾンビになる前はボディビルダーでもやっていたのだろうか。

「どうしたの恭平。立ち止まって」

「いや、珍しくゾンビがいてな」

「え、どこ？」

「ほら、あそこだよ。十字路んところ。薬局あるだろ、その前」

「あーいたいた。でもなんかでかくない？」

「こつち気付いたよ。えっ。うわっ」

「なんか走ってきてない？　ゾンビって走るんだっけ」

「いや、初めて見たな」

陸上選手もかくやとばかりのフォームで、ゾンビがこちらへと走ってきた。

いや、俺を見ても逃げなかったり、普通に走ったりしている時点でこいつはただのゾンビじゃない。

運送会社は百貨店よりも駅ビルに近いから、美香の言っていた変異したゾンビとやらと出会ってしまったのか。

明穂と深冬の近くで戦っては二人に危害が及びかねない。

彼<sup>ひが</sup>我が距離はもうわずかだ。

「お前ら、ここを動くなよ」

両足に力を込めて駆け出す。



左手の指先に力を込めると、鋭利な爪が飛び出した。

自身の化物具合に自嘲じちようの笑いが浮かぶ。

ゾンビは俺が迫っても眼中にないのか、フォームを崩さずに走ってくる。

それならそのまま死ね。

「くたばれ」

首を狙って振るった左腕の一撃を、ゾンビは倒れこむようにしてかわした。

走った勢いを殺し振り返ると、ゾンビが起き上がり明穂と深冬の元へ走り出そうとするところだった。

すぐさま駆ける。

こいつ、女を食うことを優先してやがる。

ゾンビに知恵があるのか？

まずいぞ、追いつくか。

明穂と深冬の怯えた顔が目に入る。

ゾンビがフォームを崩し腕を前に突き出す。

深冬を庇おうと前に出た明穂に掴みかかろうとしている。

その背中へタツクルをかますも、なんの手ごたえもない。

頭部に衝撃を受け、走った勢いのまま地面の上をすべる。

腕を振り切った体勢のゾンビがちらりと見えた。誘われたのか。

起き上がろうとしたところに再び衝撃。

道路脇に止めてあつた車に叩きつけられた。

頭を掴まれ持ち上げられる。

急加速、再び衝撃。車のボンネットに顔が埋まる。

頭を掴んでいる腕を両手で掴み、思い切り爪を食い込ませる。

浮遊感のあと、背中に衝撃を受ける。

ぶん投げられたが解放はされた。

追撃が来るかと体勢を整えるが、ゾンビは千切れかけた腕を押さえ、憎憎しげにこちらを睨んでいるだけだった。

「お前、ゾンビじゃねえな。なんなんだよ、お前」

「グアア……」

「喋れはしないのか」

よく見ればゾンビ特有の腐った皮膚はなく、筋繊維が剥き出しになっている。

千切れかけていた腕は肉が蠢き既に繋がっていた。

鼻にしわを寄せこちらを警戒するようになっている。

「こんなのが駆ビル方面にいつばいいんのかよ。美香、よく三日も戦えたな……」  
俺じゃこいつ一匹で手一杯だ。

視界が赤く染まる。

頭を触れば血が出ていた。

女たちを攻撃すると見せかけて俺に隙を作らせるといふ知恵がこいつにはある。

普通に戦ったんじゃ負ける可能性があるが、どうする。

こいつになくて俺にあるものは、やっぱりこの爪か。

さっきの一撃でこいつは俺の爪に警戒している。

なんとかしてこの爪で首を掻き切らねば。

もつと鋭く伸びたりしないものかと手に力を込めると、三十センチほどまで爪が伸びた。

やはりどう考えても俺も化物の仲間だ。

「おら、行くぞ」

「ガアア！」

伸びた爪を横に振るうと、わかりやすいくらいにゾンビが避けようとする。

振るう腕を止めて潜るようにして踏み込む。

下を見たゾンビの顔を目掛けて右手を手刀状態にして突き出す。

人差し指と中指がゾンビの両目に突き刺さった。

「グウアア！」

「離、せよ!!」

右腕をゾンビに掴まれると骨が軋む音がした。

左手の爪を振り下ろすと、熱したナイフでバターを切るかのように、なんの抵抗もなくゾンビの腕を切り落とすことができた。

右腕についたままのゾンビの腕を外し、それで頭を思い切り殴る。

よろめいて体勢が崩れたゾンビの首が手ごろな高さに来てきた。

左手を斜めに振り上げると首がずるりとズレ落ち、噴水のように血が噴き出して俺を濡らした。

「おい、この血には触んなよ。離れとけ」

「ウ、ウン」

ミシエルの言うことが間違っていないければ、ゾンビの血が粘膜に入ったりしたただけで感染するはずだ。

細かい飛沫ひまつが空気中を漂って感染しないとも言切れない。

ウイルスが空気中でどれくらい生きられるかわからないので、安全マージンをしっかりとって距離をあけておこう。

「なんか布で口を隠せるか。ここを離れるぞ」

「わかった」

万が一は起こってはいけない。

すぐ横にあったビルの二階にある小さな美容室へ行き、店内の様子をうかがってから中へと入る。

安全を確認し、二人から離れる。

「俺に近づくなよ。ゾンビの血を浴びたから流す。目と口を布で塞いでおけ」

「恭平は大丈夫なの？」

「ああ、俺は感染してるからな。今更ゾンビの血が入ろうが問題はないはずだ」

一度感染したあとなら抗体ができてははずだ。

頭の傷口にもろにゾンビの血を浴びたが、たぶん俺は感染しないと思う。

それよりも他のヤバい病気とかになりそうで、そっちの方が嫌だった。

店の一番奥の洗髪台まで行き、シャワーを伸ばして頭から水をかぶる。

寒くて死にそうだが、お湯で洗ったりしてウイルスの含まれた湯気で二人が感染したら最悪だ。

我慢して水で洗うしかない。

頭の傷は塞がったらしく、流れる水から赤色が消えた。

着ている服はジャケットとジーンズが血まみれだが、幸いにもシャツとパンツは無事だった。

頭と腕、それと毛みれの顔をシャンプーで入念に洗い、ゾンビの血を流していく。そういえばいつの間にか伸ばしていた爪が元に戻っている。

念のために再度爪を伸ばし、石鹸で爪の間などを洗っておいた。

爪の伸縮が自在なのは、自分でやっていてもなんだか不思議だった。

指の延長線上と言えはいいのだろうか。

指全体を反らしつつ第一関節だけ内側に折るような力の入れ方をすると、爪がニユツツと出てくる。

これは尖っていると日常生活をする上で危ないので、先端をヤスリなどで削って丸くしておいたほうがいいのかもしれない。

でもさつきのようなゾンビを相手するには、尖っている方が切れ味があつていい気もする。

誰かに相談してみるか。

シャツが濡れるとまずいので脱ぐと、パンイチのおっさんが鏡に映った。

左腕を覆った白い毛は、左半身のほとんどを覆うようになってしまっている。

肌が見えている部分は右胸、右肩、腰から下といったところか。

せつかく割れた腹筋が短い毛に隠れてしまっているのが、なんだかもったいない気がした。

血がきれいに流せたのでタオルを使って水をふき取っていく。

美容院のタオルはなんだか水の吸いがいいように感じる。

はさみなどの道具が乗っている台からドライヤーを数台見つけたので、それを持ち二人の元へ行く。

二人に手伝ってもらえば乾くのも早いだろう。

「う、わ、すごい」

「おお……」

二人の視線が俺の全身を舐めまわすように動いていた。

パンイチおっさんの裸なんて見て楽しいか？

「ちよつと二人とも手伝ってくれ。ドライヤー五台でやればすぐ乾くと思うんだ」

「わ、わかった」

「おっけー。てか恭平、こんな筋肉あったんだね。すごいじゃん」

「毎日プロテイン飲んでるからな」

適当な椅子に座り、ドライヤーの電源をオンにして温風を髪や毛に当てていく。

明穂と深冬の二人もドライヤーをそれぞれふたつ持ち、腕や胸、肩、腹などに温風を

当ててきた。

「でき、さっきのやつなんだっただの？」

「いや、わからん。ゾンビだと思っただけで、俺から逃げなかつたり動きが俊敏だつたりしてたからな。もしかしたら別種のなにかかもしれない」

「なにかつてなんだろうね？」

「なんだろうな。俺や美香みたいな変異した人間とかか？」

「腐つてなかつた」

「ああ。知恵もあるように見えたな。死体をミシエルのところに運ぶべきか……？ いや、やめておこう」

もし方が一それで二人が感染することになったら目も当てられない。

俺一人で運ぶ機会があればそのときに運ぼう。

二人の協力を得て、俺の毛はふわふわな状態に戻った。

なんだか誇らしい気分になった。

毛を乾かす度に誇らしい気持ちになるのはなんでなのか。

「よし、じゃあ行くぞ」

「え、ちよ、恭平？」

「本気？」



「仕方ないだろ。ほら行くぞ」

「あ、待ってよ」

二月の寒空の下、Tシャツにボクサーパンツにブーツ姿のおっさんが現れた。仕方ないんだよ。

ジャケットと長袖とジーンズはゾンビの血で汚れちゃってるんだからさ。

捨てるしかなかったんだ。

そんな目で俺を見るなよ。

「とりあえず、そうだな、とりあえず寒いから服屋探してくれ」

「そりやそうでしょ！」

「あんた、バカなの？」

お前らを守るためなんだよ、と言ってもわかってもらえそうになかったので黙っておく。

こんな姿のときにさっきのゾンビが現れて戦闘になったら酷い絵面になりそうだ。

どうかなにも出て来ませんようにと願いながら服屋を探して歩き出した。

## 第三十八話 うさぎさん

通りを歩いて少ししたところで、『古着買取』の看板がかかっている一軒の建物を見つけた。

一階はシャッターが閉まっているがインドカレーの店なので問題ない。

狭い階段を上り、二階の古着屋の入り口の前までやってきた。

先ほどの美容院はドアがガラスだったので侵入は容易だったが、この古着屋のドアは木製のもので少し手間取りそうだ。

まあこの古びたタイプのドアなら簡単に蹴破れそうだけど。

アンティーク感を出そうとしたのが裏目に出たな。服をいただくぞ。いい加減寒いんだ。

鍵付近目掛けて足の裏全部が当たるように蹴りをかますと、バキヤと板が砕け足が突き抜けた。

ドアがバーンと開くイメージをしていたが、俺の力が上がっていたせいで思わぬ事態となった。

足を引き抜き中からサムターンを回し、なんとか店内に侵入することができた。

さつさと服を着よう。

「おー、いいところだねここ。ゾンビ騒ぎが起きる前に来てみたかったな」

明穂は服が好きなのか、いろいろと手にとつて見ている。

気に入ったのがあれば持ち帰ってしまえばいい。

服たちもここでただ朽ちていくよりも、誰かに着られた方がいいだろうし。

「これ、あんたに似合いそう」

「ん？ 革ジャンか。ただ左袖と右の先端を切り取らないと入りそうにないな」

「そっか。違うの探してみろ」

いや、別に似合うとか似合わないとかじゃなく、ただ着ることが出来ればそれでいい

んだけどな。

なんなら伸縮力抜群のスウェットでいい。

まあ上下スウェットで拠点を歩いていたら女連中がぶうぶう文句を言い出したのである程度はまともな格好をしなくてはいけないんだけれど。

ジャージとか楽でいいよ、マジで。動きやすいし。

「恭平、これ着てみて」

「ん？ いや、これはないだろ」

「えー、恭平身長あるから絶対似合うと思うんだけど」

「いや、日本人がトレンチコート着こなすのは難しいんだよ。まあ最近筋肉ついてきたからいけるかもだけどさ」

「じゃあ着てみてよ」

「羽織るだけな」

鏡に映るのは、パンイチにトレンチコートを羽織るおっさんの姿。

完全に変態である。

「これは却下だ」

「なんでよー。てか先に下を履きなよ」

「いや、中々いいジーンズ多くて迷うんだよな」

「えー、これ？ リー・ヴァイ・スー、ゴーマルイチ、エックスエックス……。え!? これ四十万もするの!？」

「憧れてたんだよな、ヴィンテージ。昔は百万とか平気で超えてたっけ」

「こんな穴が空いて色落ちした古いジーンズに百万？ はあー、男ってバカだねー」

「このワイルドさがわからないかな。まあロマンだよ、ロマン」

「恭平、私のトラックにステッカー張つてあつただけどさ、なんて書いてあつたと思う？」

「いや、わからんけど」

『男の浪漫は女の不満』

「ははっ、座布団一枚だな。まあ男の浪漫なんて言葉を作った旧世代の男たちに男尊女卑の考えが浸透していたんだから、女が不満を感じもするだろうさ」

「なんか頭良さそうなこと言うじゃん？」

「まあな」

女は大人しく清楚で慎ましくあるべき、なんて考えがまかり通っている時代にできた言葉を、現代に使っているから違和感が生じるのだ。

他にも『男は度胸、女は愛嬌』とかな。

度胸がないやつは男じゃないとか、愛嬌がないのは女じゃないとか、今の世代に受け入れられるとはとても思えない。

あれ、ということとは時代と共に言葉が変化するのは当たり前なんだから、双子の喋る宇宙人語が現代の正しい言葉になるのか？

双子を拒否する俺はいつの間にか前時代的な人間になっていた？

……これから宇宙人語をもっと取り入れていくべきなのか。

なんだったか。マンジマンジだったか。

「これどう？ 結構あんたに似合いそうだけど」

「ん、ああ。つてレザーボトムか。 ー、合皮ならゾンビの血を流すのが簡単だから

こっちの方がいいのかもしれないな」

「最初に会ったとき着てたじゃん。あれカッコよかったよ」

「ああ、そうだったっけ」

今は着ることがなくなったプロテクターがたくさんついたバイクスーツか。懐かしいな。

俺としてはコスプレにしか見えないと思っていたが、格好いいと言われるとそれはそれで嬉しいものだ。

「よし、じゃあ下はこれにしよう。サイズは、筋肉ついてきてサイズアップしてんだよな。履けるの履くか」

「履けそうなサイズ持つてきてあるよ。ブーツは？ これ、そのパンツにあいそうなんだけど」

「おお、履いてみるか」

深冬が持つてきたのはいわゆるジャングルブーツというミリタリー系のゴツイブーツだ。

ブーツはスネまで高さがあったが、ボトムにブーツカットがなされているので足元に違和感なく着ることができた。

いいセンスだ。

明穂より深冬の方が服選びのセンスがありそうだし、上着は深冬の持ってきたものでいいな。

「ほら恭平、これいいよ」

「モッズコートはジーンズの方があいそうだけどな。またロング丈だし」

「いいじゃん、ロングコート」

「明穂が着た方が似合うんじゃないか？ 女子の間で男もの着るの流行ってんだろ」

「えー？ ほんとー？ じゃあ着よ。女子だからね、私。女子だから」

俺よりひとつ年上の明穂がはしゃいでいるのを見て、なんとも微妙な気持ちになった。

女性は女子と言われるのが好きなようだ。

美香にも言ってみるべきか。

「あんたは黒で統一した方がカッコいいかな。これ着てみて。タートルネックニット、伸びるから切らなくても腕が入ると思うよ」

深冬から渡された服を着る。

左腕はぴちぴちになっているが、それでも着ることができた。

「ああ、いいなこれ。あたたかい」

「うん。シャープな感じになったね。ジャケットはだぼつかせない方がいいからこれ。」

丈は短い方がよりスマートに見えると思う。色と質を統一させれば武骨さとスタイリッシュな感じがしていいと思うよ」

「お、おう？」

深冬は意外とファッションに詳しい人だったようで、言われるがままに服を着て鏡を見ると、なかなか見れるようになった俺がいた。

パンイチ変態おじさんはいなくなつたようで一安心だ。

目的も果たしたことだしそろそろ運送会社へ向かおう。だいぶ時間を食つてしまつた。

深冬と明穂が気に入つた服を何着かバッグに詰めてから古着屋をあとにした。

運送会社は百貨店から歩いて三十分ほどの距離にあるが、変異したゾンビと戦つていたせいで既に三十分以上経過している。

西部に合流することを考えたら少し急いだ方がいいかもしれない。

二月の気温で冷凍食品がすぐに溶けるとは思わないが、急ぐに越したことはなさそう  
だ。

先程よりも警戒を強め道を歩く。

無駄話をせず、静かに息を潜め、においや音からも情報を探りながら慎重に進む。



変異体が一匹だけだったから最悪なことにはならなかったが、あれが同時に二匹も三匹も出てきていたら、明穂と深冬の命はなくなっていたはずだ。

俺のアドバンテージのひとつである、ゾンビが離れていく、が効かない相手が現れたのだ。

もつと気を引き締めて、意識を変えていこう。

運送会社に着くと、二人がコンクリート塀の一角を見て顔をしかめた。

そこには堆く積み上げられた焼死体があつた。

この運送会社を拠点にし、明穂、深冬をはじめとした女性らを凌辱りようじやくしていた男たちの成れの果てだ。

その男たちは生きてままだゾンビに食わせるという制裁を美香と山口の二人が加え、そのあと俺がまとめて焼いてやったが。

「わ、すごい。鍵つけっぱなのにダンプ残ってたよ」

「わざわざ音のうるさいダンプを乗り回すやつはいないんだろうよ。他の生存者やゾンビに自分の居場所を教えるようなもんだ」

音に惹かれて変異体がやってくるかもしれないが、既にミシエルのコンボイトラックやバカみたいにうるさいフォークリフトで走っている。

生存者や変異体が来るなら既に来ているはずだが、拠点の周りに特筆すべき異変は起

きていない。

マキシーンのおかげで監視カメラやら警報装置やらで警備も充分強化されている。滅多なことが起きない限りは、拠点がどうこうなるとは思えない。

思えないが、誰かしらの防衛戦力が拠点内に常に一人はいる状態が好ましい。

これも帰ったら話し合うか。今後の課題だ。

まあ美香や山口といった俺と同じような存在が増えたことや、銃を使えるようになった鈴鹿やマキシーンのおかげで戦力は充分と言えよう。

同じく銃を使える直美は、おそらく人を撃つことはできないので戦力には数えないでおく。

菊間も銃をバカスカ撃つとは思えないが、自衛隊員というだけで抑止力にはなりそう  
だ。

「ねえ、箱車の鍵もあつたよ。いける」

「お、じゃあ西部に向かうか」

「うん。あ、でも待って。ガソリン少ない」

「オーケー。まずはガソリンスタンドだな」

車は深冬が箱型のトラック、明穂がダンプを運転するようだ。

「近くのスタンドわかるか？」

「いつも入れてたところなら。あそこがこの辺じゃ一番安かったんだよね」

「そうか。じゃあそこに向かうか。深冬、明穂の順番で走ってくれ。俺はトラックの上でまわりを警戒してるから、速度は少しゆっくり目で頼むぞ」

「わかった」

「明穂もいいな」

「いいよー!」

トラックとダンプのエンジンがかかると、静まり返った街にうるさく響いた。

俺達以外には誰もいないんじゃないかと思えるこの街にも、ちらほらと生存者の姿が確認できている。

彼ら彼女らはこちらと接触する気が全く無いようなので、こちらに害をなさない限りは不干渉でいこうと思う。

今も建物の窓のひとつから一人のお爺さんがこちらを見ていた。

ゾンビがいなくて過ごしやすくなっているからなのか、最近ではこの街で生存者を見る数も増えてきている。

きつと市役所や駐屯地といった集団生活に馴染めなかった人がひっそりと暮らしているのだろう。

それでも万が一があるので、今度、美香や山口と手分けして生存者の様子をこっそり

うかがい、危険か危険じゃないかの確認だけしておこう。

危険なら消えてもらうだけだ。

トラックが無人の街をゆつくりと進む。

においを嗅ぎ音を聞き最大限に警戒をする。

変異体ゾンビとはもう戦いたくない。

どうか出てくるなよと祈りながら、ゆつくりと進むトラックの上で街の景色を見渡した。

ガソリンスタンドまでの道中、幾人かの生存者と目が合った。

小さい子を抱いた父親、怯えた顔の女、疲れきった顔の老婆。

俺と目が合うと、皆等しくカーテンを閉めて部屋の中に隠れてしまった。

そりや顔の半分と両腕が化物の男に目をつけられたらたまったものじゃないだろう。

きつと怯えているだろうが、俺にできることはなにもない。

ガソリンスタンド内には乗り捨てられた車がたくさん放置されていた。

二人には車内にいてもらい、スタンド内の安全確認をやっていく。

普通のゾンビだったら俺が近づいた時点で逃げ出すだろうが、もし変異体があった場合はその限りではない。

車の下、店内、スタンドの周囲を確認するも、変異体どころか普通のゾンビ一匹いな

かった。

「よし、大丈夫だ。二人とも給油してくれ」

「りようかい」

明穂が給油機の前行き「あつ」と声をあげた。

なんだろう。

「恭平、お金ないや。これセルフだから先にお金入れないと給油できないよ」

「ああ、金か。久しぶりに聞くな、その単語」

「たしかに。なんか変な感じ」

生きる上で絶対に必要だった金。

それが今やただの紙くずだ。

十円の駄菓子と百万円の束だったら駄菓子の方が選ばれる世界に変わってしまうとは思わなかった。

金は給油機脇にある釣銭機にいくらでもあるはずだ。

給油機には万札があるだろうけど、破壊した衝撃で火災が起きても対処しようがない。

この街を燃やし尽くしたいわけではないから、迂闊なことはいしなないでおこう。というこゝで釣銭機を破壊する。

いろいろな機械があるが、とりあえずレジっぽい形のものを選ぶ。

適当な出っ張りを掴み引つ張ったり、弱そうなところを殴ったりすれば簡単に壊れた。

どうやら当たりのようで、たくさんの紙幣を発見することができた。

その中から五千円札を数枚取り出し二人へ渡す。

「はいよ」

「ありがとー」

「あのさ、中に行つて給油許可のボタン押してきて」

「給油許可？ そんなのあるのか」

「うん。カメラに映つてるとこのボタン。液晶にあるよ」

「オーケー。行つてくる」

セルフのガソリンスタンドなんて、美香と旅行するときに借りたレンタカーに給油するときにしか使つたことがない。

車がなくても生きていける生活だったし、仕方ないとはいえわからないことだらけだ。

深冬の言つたとおり、店内のレジのような機械の液晶にタッチするところがいくつかあつた。

その中の二つがピカピカ光っていたので、それを押してみる。

外を見ると二人が給油を開始したので正解だったのだろう。

給油を終わらせて西部百貨店を目指す。

先ほどと同じようにゆっくりと道を走る。

一時間もしないうちに西部へと着くことだろう。

道中にいた生存者の顔と場所は全て覚えておいた。

今夜から、確認作業をしていこう。

目に見えて悪人だとわかったなら消えてもらい、無害そうな人なら物資を置いていくか。

二ヶ月遅れのサンタクロースからのプレゼントだ。

西部百貨店の入り口には、大量のカゴ台車が並んでいた。

その全てにダンボールが目いっぱい積まれている。

これ、下手したら東部にあった食料品の倍はありそうだ。

「恭平やつと来たわね。遅かったじゃない。かつこいい服着ちゃって、買い物デートでもしてきたの？」

「ああ、ちよつといろいろあったんだよ」

フルフェイスをかぶった完全防備の美香が、ダンボールで満載のカゴ台車を四台ほど引つ張りながら店内から出てきた。

まだ増えるのか。

「凄い量だな、これ」

「ええ、こつちは向こうと違ってフードコートもあるし、建物自体も大きいしね。そもそも店の数とかバックヤードの容量が違うのよ」

「たしかに。向こうの方が古いしな」

東部百貨店は昭和六十年頃に開店したのに対し、西部百貨店は平成十年に開店した。規模も建物も西部の方が大きく、若者に人気のテナントがいくつも入っていた。

フードコートには有名なハンバーガーチェーン店を筆頭に十店舗も入っていて、平日休日問わず賑わっていたそうだ。

俺も美香も混んでいるところは苦手だったので来たことはなかったが、噂には聞いていた。

「もう奈津実に二回は運んでもらってるんだけどね。数が多くて全然間に合っていない。恭平も手伝ってくれる？」

「オーケー。とりあえずトラックに積むか」

「とりあえず箱の方いっぱいにしちやおう」



明穂の指示に従い箱車のトラックの荷台へと台車を入れていく。

俺が台車を持ち上げ、中で深冬が受け取る。

見れば明穂と美香もダンプへと台車を積んでいた。

「これさ、こっちはゲートついてるから荷物下ろせるけどさ、ダンプはあんたか美香さんがいないと無理だよ」

「ゲート？　なんだそれ」

「ゲートはこれ。ほら、上下に動くんだよ」

「なるほど」

トラックの後ろに昇降機というか、電動で動く板が取り付けられていて、それで荷物の上げ下げが可能のようだった。

ただ安全対策のためか動きがとてもゆっくりなので、これなら俺がやった方が数倍早いだろう。

「奈津実が戻ってきたら一緒に東部まで行くか。道中安全とも言えないしな」

「そうだね」

箱車の中にカゴ台車をびっしり詰めたが、まだまだ余裕がある。

もう外には置いてないので、俺たちも台車を回収するべく店内に入った。

店の中では花乃ちゃん、香織、千恵、友里、詩織の五人が一生懸命箱詰めしてくれて

いた。

東部と違って一階がフードコートと食料品売り場というかたちなので、カゴ台車をスムーズに運べる。

俺と明穂と深冬は、手分けをして箱詰め作業を手伝うことにした。

魚売り場の裏にあるヤードに来ると、詩織がダンボールに冷凍された魚介を詰めているところだった。

「よう。お疲れ」

「わっ、お兄さんじゃないツスカ。いつ来たんスカ？」

「さつきだよ。手伝いに来たぞ」

「助かるっスー。もうほんと手が冷たくて参ってたんスよ」

「ああ、冷凍物だもんな」

軍手をしているとはいえ、延々と冷凍物を箱詰めするのはさすがにつらそうだ。

「冷凍物は俺がやつとくから、詩織は海苔とかわかめとかの乾燥物やつてくれ」

「了解ッスー」

冷凍庫の中にはいろいろな魚の切り身が入っている。

俺の大好きなサバから、鮭や太刀魚、タラなど様々だ。

冷凍のブラックタイガーや帆立の貝柱などもあって、テンションが上がる。

海鮮物は見ているだけでワクワクするのは何故なのだろうか。

詩織と手分けしてどんだんボールに詰めて行くと、いつの間にか山ができていた。

鮮魚売り場の物はあらかた詰めることができただろう。

「あー、お兄さん適当に置いてちやダメツスよ。中になに入ってるか書かないとなんだし」

「そうか。すまん。余計な手間かけちやったか」

「んー平気ツスけど。あ、お兄さん漢字書ける人ツスか？ 私サバとか書けないんスよね」

「全部カタカナでいいだろ」

「それもそツスね」

箱の中身を確認しマジックペンでダンボールに『キリミ・サケ・サバ』や『フライ・アジ・カキ』や『カンモノ・ノリ・コンブ』などを書いていく。

きつとこういう地道な仕分けが、台所奉行の珠子の役に立つのだろう。

神さま仏さま珠子さまの精神で、奉仕の心で作業をしていこう。

「あとは種類ごとに台車に乗っければ完了ツスね」

「おし、ちやつちやと終わらせよう」

カゴ台車にダンボールを乗せるのを詩織に任せ、満載になった四台を引つ張つて店を出ると、またもやカゴ台車の列ができていた。

ちようど深冬がいたので二人でトラックに積むも、中々数が減らない。

「これ積みきれるかな」

「最悪冷凍物だけでも運んじやおうか」

「そうだね」

箱車の荷台がいっぱいになったころ、遠くから破裂音がひとつ聞こえた。

マキシーンを探しに行った際に米軍基地でよく聞いた音だった。

「聞こえたか？」

「うん。今のとて銃声？」

「たぶんな。でも一回しか聞こえなかったから戦闘をしているわけではなさそうだ」

「鹿狩ったのかな」

「どうだろう。奈津実が来て荷物積んだら、一回皆で戻るか」

「そうだね」

万が一非常事態だった場合、人員や戦力を分散していいことはない。

安全第一を心がけて行動しよう。

箱車に続きダンブにも積荷を目いっぱい乗つけ終わると、ちようど美香が台車を引つ

張りながら現れたので相談を持ちかける。

「美香。今日は一回引き上げよう。さつき銃声が聞こえたんだ」

「賛成ね。銃声は私も聞こえたわ」

「あの変異したゾンビが銃声で寄ってこないとも限らないし、警戒をするに越したことはないと思うんだ」

「そうね。ていうか恭平、変異ゾンビ見たの？」

「ああ、ここに来る前に会ってそのまま戦った。返り血で服がダメになつてな」

「それでかつこいい服着てんのね」

「深冬が選んでくれたんだ。合皮だから血や水を弾くし軽くて動きやすいんだよ」

「へえ、そうなんだ。ふうん？」

美香が深冬の方へ顔を向けるも、フルフェイスのせいでどんな顔をしているのかわからなかった。

「な、なに？ 別に悪いことしてないし」

「ん？ あー、違うわよ。責めなんかしないわ。その調子で頑張つてね」

「は、はあ!? 訳わかんないんだけど！」

「ふふ、まあいいわ」

憤慨する深冬に、美香は手をヒラヒラと振つて話を終わらせた。

美香がなにを話していたかを聞いたせいで、深冬の行動を見て変な想像をしてしま  
う。

まるで深冬が俺に気があるかのような、そんな言動に見えて仕方がない。

自意識過剰やら自惚れうぬぼかもしれないけど、そんな気がしてしまうのだ。

もちろん思いを伝えられても断るつもりだ。

俺は美香以外の女とどうこうする気はない。

ただそういう男女間のあれこれは、いろいろと気まづくなるから勘弁して欲しい。

普通に美香と夫婦生活をするわけにはいかないのだろうか。

どうしたら解決するのかもわからず、大きなため息がひとつ出た。

奈津実のトラックが戻ってきたので皆でカゴ台車を乗せ、美香と俺で見張りをしつつ  
拠点まで帰ってきた。

店内に珠子がいたので銃声について聞くと、どうやら直美がナニカを仕留めたよう  
で、マキシーンが運搬するためにフォークリフトを取りに来たようだ。

万が一があつては大変なので、美香に護衛としてマキシーンたちがいる場所へ向かっ  
てもらった。

あのバカみたいにうるさいフォークリフトのエンジン音は、耳を澄ませばよく聞こえ

るから迷うことはなさそうだ。

ということとで溶けて悪くなってしまいう前に冷凍食品を下ろしていく。

荷台の上には深冬にいてもらい、カゴ台車をどんどん手前まで持ってきてもらう。

それを俺が受け取って下ろし、拠点内へ運ぶ人へと渡していく。

「ほら、重いぞ」

「りよ」

拠点内の整頓を手伝っていた結愛に台車を渡す。

結愛は特になにかを言うでもなくそのまま店内に台車を押していった。

「よつと、気をつけろよ」

「うい」

愛理にも渡す。

最初は今どきの子で苦手だったが、ちゃんと言われたことはやるし手伝いも率先して

やっているのを見て考えを改めた。

言葉遣いはアレだが根は真面目なのだ。

いや、違う。

こいつらの話す宇宙人語は今の時代の正しい言葉遣いになる。

俺も取り入れないといけないんだった。

なんだったか、マンジマンジか。

「おい、愛理」

「ん？ なにー？」

「あー、マ、マン……」

「どしたのお兄さん？」

「あー、満目まんもくしやうじやう蕭条しょうじやうという言葉がある。見渡す限り寂しい景色のことだ。百貨店の周りの景色がそう見えないか？」

「んー、そう言われてみれば？」

つい恥ずかしくて違う言葉を言ってしまった。

言えないだろ、マンジなんて。

でも愛理は真面目に俺の話を聞いてくれている。

少しの罪悪感が胸に広がった。

「いつかまたここが賑わうようになるといいよな。その為にもこの先も頑張っていこうな」

「あーね。励ましあげーす」

素直にお礼を言われてしまった。

ここは勇気を振り絞るとき。



「マンジだな」

「ちよ、お兄さんそれ草だわ。いきなりやめてよ」

「草……？」

愛理は「ウケる」と笑いながら台車を押して去っていった。

俺は、なにかを間違えてしまったようだ……。

気を取り直してカゴ台車を下ろして渡すマシーンに戻る。

「はいどうぞ」

「ありがとう！」

「お手伝いできて偉いな」

「うん！」

「優子ちゃんもいつもいろんなこと手伝ってくれてありがとうな」

「い、いえ、当然のことです」

恵理奈ちゃんと優子ちゃんは二人で台車を押していった。

優子ちゃんも一人でも台車を押せるけど、恵理奈ちゃん一人じゃ押せないの二人で協力して押している。

こうやって恵理奈ちゃんにも手伝いをさせることで、一体感や達成感を味わわせてあげているのだろう。

ちゃんとお姉さんをしていて偉いと思った。

「ほら」

「うッス。あ、二個いいッスよ」

「お、やるな」

「鍛えてるッスからね」

詩織は台車二台を軽快に押していく。

さすがに俺や美香のように四台は無理だが、それでも効率はある。

「私は一個でお願いします。自慢じゃありませんが非力ですの」

「はいよ」

ボードゲームじゃ無類の強さを誇る涼子は、動くのが苦手だ。

花乃ちゃんやんがやっている空手教室でちらりと見たが、涼子よりも幼い優子ちゃんや恵理奈ちゃんやんが練習できているのに一人だけへばって床に転がっていた。

体力がなさ過ぎるのはさすがに問題だが、本人も頑張つて改善しようとしているから応援するべきだな。

こんどプロテインでもプレゼントするか。

しばらく荷物を下ろしていると、遠くからバカみたいにうるさいエンジン音が聞こえてきた。

音のする方へ視線を向けるとフォークリフトに茶色いナニカが乗せられていた。あれが噂の鹿だろうか。

台車を運んでいた皆も、マキシンの運転するフォークリフトの様子が気になるのか足を止めて見ていた。

近づいてくるにつれ、狩りの獲物の異様さに気がつく。

フォークリフトのツメ部分に、足をロープで固定されて宙吊りになっている、巨大なうさぎだった。

大きさは軽自動車くらいだろうか。

首からポタポタと水が垂れている。

「う、わ……。でかくない？」

「うさぎさんかわいそう……」

「そうだね。でも恵理奈の好きなお肉もああいふ動物のものなんだよ？」

「ラパンですね。ステーキや鍋が美味しいそうです。楽しみですね」

「いやー、きついツスね、これ」

「やばたにえんじやん」

「それな」

「美味しそう……」

皆の反応は様々だった。

子供には刺激が強すぎる気もしたが、恵理奈ちゃんは優子ちゃんになにかを言われ、幼いながらも決心したような顔でうさぎを見ていた。

美味しそうと言ったのは涼子と友里。

意外とこの二人は肝が太いようだ。

皆が見守る中、フォークリフトとうさぎが拠点前までやってきた。

「What's up? 皆いばいでナニしてるマス?」

「お前の運んできたものに興味あるんだよ」

「Oh. That's an awesome rabbit. すごく、デカイ」

「鹿だけじゃなくてうさぎまででかいんだな」

「そうなんだよね。なにか居るなって見てたら長い耳が出てきてさ」

「おお、直美お疲れ。鈴鹿もおかえり」

「うん。ただいま、恭平」

疲れた様子の直美と、不機嫌そうな鈴鹿が帰ってきた。

美香は離れたところにいるが、こちらには寄ってこず入り口付近にいた花乃ちゃんの方へと歩いていった。

鈴鹿と美香は言い争いをしていたから、鈴鹿が機嫌悪くならないようにと気を利かせ

てくれたんだろう。

「今から解体するからさ、刺激的なのが見たくないならあつちに来ないでね」

「あ、手伝うよ」

「ありがと、助かる。香織の腕なら安心だよ。私こんな大きいの解体したことないもん。しかもうさぎとか。こんなでかいうさぎいないよ」

「H a h a ! . 安心するマス、ナオミ。私もやるマス」

「じゃあメス持つてくるよ私。あれじゃないと解体できない」

獣医の香織は動物の体の構造を知っているからか、さばくのが上手いらしい。

「鈴鹿も参加するのか？」

「私はパス。お肉食べられなくなりそうだし」

「まあ気持ちにはわかるけどな。ゆっくり慣れていくしかないか」

解体作業を見ているだけで、動物を殺して命をいただくということを、きつとダイレクトに感じるかどうかだろう。

でももう家畜を屠殺して解体して、店頭に並べる仕事をしてくれる人はいないのだ。

解体ができる直美や香織、マキシーンに頼りきりというわけにはいかないだろう。

俺も参加するべきなのか。

でもこの手、包丁とか持ちにくいんだよな。

箸もぼろぼろ落としちゃうからめちやくちや練習必要だったし。

かえって邪魔になつたりしないだろうか？

「惠理奈もいくー！」

「ちよつと、惠理奈。ダメだよ。邪魔になつちゃうよ」

「でも、ちゃんとみないとだめだよ。うさぎさんにありがとうつていわないと」

「惠理奈……」

わずか八歳の子供がこんなことを考えられるのだろうか？

驚いてなにも言えずにいると、他の子供たちも感化されたのか「じゃあ私も……」と解体の見学を希望しました。

「オーケー、皆で来るするマス」

「そうだね。いずれは皆にもやってもらうことになるかもね」

「生き物に感謝して食べるご飯は美味しいと思うよ。あなたの命を無駄にしないためにも頑張つて生きるって思えるから」

なんともタフな女性たちだ。

「あー、でも無理はしなくていいぞ。それで肉が食べられなくなつたんじゃ本末転倒だからな。残るやつは俺と荷運びの続きだ」

うさぎの解体は俺がいなくても大丈夫だろう。

決して俺が解体を見たくないかじやない。

むしろ見たいくらいだが、冷凍物がダメになるから泣く泣く行かない選択をしたんだよ。

解体を見に行く子供は恵理奈ちゃん、優子ちゃん、双子、友里、涼子の六人。

詩織は「ちよつとキツイツス」と俺の手伝いをする事になった。

荷運びメンバーは、俺、美香、深冬、明穂、花乃ちゃん、詩織の六人。

鈴鹿は中で珠子の手伝いをするそう。

奈津実と千恵も中で整理しているから、人手が足りないということはない。

「よし、それじゃ遅くならないうちに全部終わらせちゃうか」

俺の合図で皆が一斉に動き出した。

俺と美香はとりあえず全てのカゴ台車をトラックから下ろそうと、五台ずつ抱えてトラックを上り下りしている。

「なあ、美香。さっきのうさぎ美味そうだったよな。正直言うところヨダレが止まらなかったんだが」

「わかるわ。私も血抜きと内臓処理してるところを見てお腹空いちやつたもの」

「うさぎ肉のローストにかじりついてビールで流し込んだら最高だろ」

「それいいわね。うさぎは煮込んでも美味しいって聞いたことがあるわ。スジ煮込みと

かどうかしら？」

「いいね。日本酒でキュツといきたいね。あ、ワイン煮込みとかも美味そうだな」

「それを言ったらやっぱりビール煮ね。柔らかくて美味しそうじゃない」

「それはビール様に失礼な使い方だろう。やっぱりビールは飲んでこそだ」

「わかつてないわね恭平。ビールを使ったものは全てを愛さないとでしょ」

「こうやって普通に話していると、昔に戻れたみたいで幸せを感じてしまう。」

「このまま今まで通りに夫婦としてやっていけないのだろうか？」

美香はなにを考えているんだろう。

カゴを全て下ろし終わり、店内へと運んでいく。

横で同じようにカゴを運ぶ美香に、疑問に思っていることを投げかける。

「あのさ、美香はなんで俺と他の女をくっつけようとすんの？」

「誰から聞いたの？ 恭平には言うなって言ったのに」

美香のこの反応で深冬たちの言っていることが本当だったんだと確信が持ててしまった。

「俺が無理言つて聞き出したんだから怒らないでやってくれよ。つうか、半信半疑だったけど本当なんだな」

「うん。ごめん」



「いや、謝ってほしいわけじゃなくて、理由が知りたいんだ」

「……理由は、聞かないでほしい」

ヘルメットのせいで顔は見えないが、声を聞くだけでどんな顔をしているか容易に想像できてしまった。

震えた声の美香は「ごめんね……」と続けた。

「理由は、まだ言えない……。でも、いつか、言える日が来たら、そのときに言う、じゃダメかな」

「美香……」

歩くのをやめてうな垂れてしまった美香に手を伸ばす。

拒まれるんじゃないかと少し躊躇したが、構わず抱きしめる。

美香は一瞬体を硬くしたが、それでも俺の腰へと手をまわしてきた。

「美香がなにを抱えているかわからない。けど俺はどんなことでも受け止めて支えるつもりだ。美香が言いたくなかったときに伝えてくれたらそれでいい」

「恭平……」

「だから、納得できる理由じゃなきゃ俺は他の女を孕ませるなんてことはしない。そこはわかってくれ」

「……………ごめん」

美香が俺から離れる。

やっぱりどうしても譲る気はないようだ。

だがそれは俺も一緒だ。

おそらくどんな理由でも他の女と寝ることはないの、美香が折れるまでこの問題は続きそうだ。

黙ったままカゴの運搬を始める美香のあとに続き歩いていく。

エレベーター前までカゴを運ぶと、誰かがいた。

鈴鹿だ。だがどうにもおかしい。

においを変だ。

少しの敵意、怒り、焦り、それと悲しみの混じったにおいがする。

「あ、恭平、美香さん。ちょうど良かった。話があるんだ」

「……ええ、いいわ」

「うん、じゃ、ちよつと人が来ないとこ行こつか」

「そうね」

感情が抜け落ちたような、今までに一度も見ることが無い鈴鹿の顔を見て、俺は恐怖を感じていた。

## 第三十九話 感染拡大

どこか人のいないところと言われ俺が思い浮かべたのはミシエルのトレーラーハウスだった。

ミシエルは日中、トレーラーハウスの最奥にある無菌室という小部屋から出てこない。

誰にも邪魔されずに話すには最適の場所と言えた。

ミシエルには自由にここを使ってもいいと言われているので、今が使い時と思い二人をトレーラーハウスまで連れて行く。

黙ったままの鈴鹿と美香に、俺の背に冷や汗が流れた。

ソファに対面するように座った美香と鈴鹿。

俺はどこに座るか迷い、上座の一人がけソファに座ることにした。

美香がヘルメットを外すのを合図に、鈴鹿が口を開く。

「……美香さん。あんた、言ってることとやってることが違うよね」

「……そうね。そんなつもりはなかったんだけど、って言い訳にしかないわね、ごめんなさい」

「いや、違う、そうじゃない、ああ、もう……。私はそれが一番だと思ってる。けど、やっぱり見ているとつらい」

「わかるわよ、その気持ち」

「あんたにわかるわけ……。ってそうか」

なにやらわかりあった様子 of 二人。

なにが原因で始まったかわからないこの話し合いは終了でいいのか。

俺にはなにがなにやらわからないが、ここで下手に口を出したら矛先が俺へ向くのは火を見るより明らかだ。

黙って成り行きを見守ろう。

「ああ、やっぱりダメだ。恭平、ごめん。私、ここを出てくね。今までありがとう」

「は？ いったいなにを言い出すんだよ、鈴鹿」

「じっくり考えたけど、やっぱり私には無理だった。ごめん」

「待って鈴鹿さん。それなら私が出てくわ。こうなるってわかってたのに……。本当にごめんささい」

「ちよつと待て、二人とも待て、落ち着け。俺にもわかるように説明してくれ。わけがわからない」

何故二人がここを出て行く必要がある？

俺に不満があるのか？

言ってくれば改善するのに、なにも言わないでいきなり出て行くというのはあんまりじゃあないか。

「俺に治すべきところがあるなら努力して改善する。どうしたらいいんだ？ 教えてくれ」

「恭平は悪くない、悪いのは私なんだよ」

「なにかしたのか？ 他の女と喧嘩でもしたか？ 俺と一緒に謝るから、思いつめるのはよせ」

俯いた鈴鹿から、羞恥、焦り、怒りといった負の感情の混じったにおいがする。

「そういうんじゃないのよ、恭平。あなたの鈍さは本当に昔から変わらないわね」

「じゃあどういふんだよ？ 言われなきやわからないだろ」

美香も鈴鹿もジツと俺のことを睨んでいる。

これはやらかしてしまったのか。

「もういいよ。じゃあ恭平にわかりやすいように説明してあげる。私は恭平が好き。美香さんとイチヤイチャしているの見たくない。だからここを出てく。以上。わかった？」

「え、いや、ああ、そうか。え、本当に？」

「本当だよ。恭平さ、いい加減自覚持った方がいいよ。頼れて強くて紳士で安全を提供してくれる恭平をさ、狙わない女がいる？」

「ま、まあそれだけ聞けば優良物件だな」

「そう。だから私も狙ってたの。私はずるいからさ、死んだ奥さんを忘れさせるように協力して、踏ん切りをつけさせようと思ってた。美香さんの存在を忘れさせようと思ってた。でもまさかね、美香さんが生きてるなんて思うわけないじゃん。ほんとバカみたい」

「それでも恭平を支えてくれてたじゃない。あなたがいなかったらきつと恭平はダメになってたわ」

「それは恭平のためじゃない、私のためだよ。私に依存してくれればなんて考えてた。汚い女なんだよ、私は」

鈴鹿は下唇を噛み締め、虚空を睨みつけていた。

「美香さんの提案もさ、いいなって思っちゃったんだ。どこまで行っても自分のことしか考えていない、恭平のことなんてなにも考えていない自分がほんと嫌になった」

「鈴鹿……」

「だから、ごめん恭平。私はここを出てくね。まあ最後に思い出のひとつでもくれたら嬉しいけど」

「思い出？」

「うん、思い出。ていうか子供。出切るかどうかはわかんないけど、一度だけ子作りした  
いなって」

「いや、それはちよつとダメだろ……」

「そつか……。まあそうだよな。それが恭平だもんね。そこで頷くんだったら好きに  
なつてないよ」

一瞬、鈴鹿の目元に光るものを見た。

なんとさえばいいかわからず黙っていると、突然バンと美香が机を叩いた。

「恭平、あなたのせいで女の子が泣いているわよ。私と前に約束したこと覚えてる？」

「……『女の子を泣かせない』」

「そう、わかっているじゃない。そういうことよ」

「いや、待て。どう考えてもおかしいだろ。妻の目の前で浮気の約束をする？ 完全  
イカれている」

「なに言ってるの？ 鈴鹿さんは貴方の意思で連れてきたんでしょ。『俺の気に入った  
女を集めて好き放題してやる』って言ってすぐに鈴鹿さんを保護してたじゃない」

「いや、あれは勢いというか、言葉の綾あやというか。ていうか美香やつぱりそれ気にして  
るじゃないか」

「気にもなるでしょ。本当はそれが望みだったんじゃないかって不安にならないとでも？」

「あーやめてやめて私の前で夫婦喧嘩しないで。惨めになる」

「ごめんなさい。ほら恭平、男を見せて。責任を取るのよ」

「いや責任つたつて……」

鈴鹿は大事な仲間だ。

今まで何度か鈴鹿に心を救われた。

そんな鈴鹿を抱かないから外に出てけと追いやつてもいいのかわか？

本人も望んでいるし、美香も抱けと言う。

なら抱くべきなのかわか？

抱いた方がいい気がしてきた……。

いや、待て。俺はクズなのかわか？

そんな気持ちで抱くのは失礼だし、俺は浮気なんてしたくない。

どうしたらいいんだ……？

「話は聞かせてもらったわ」

「ミシエル！」

どうしたらいいのかわからずにいると、奥の無菌室からミシエルが出てきた。



この状況を打破してくれる女神のように思えた。

「ごめんなさいね？ 盗み聞きをするつもりはなかったの。だけど声が響くのよ」

ミシエルは困ったような笑顔をしてソファのひとつへと座った。

「お困りのようだからひとつ提案させていただくわね」

「ホンと可愛らしい咳払いをひとつしてからミシエルが「まずこれまでの話をまとめるわね」と切り出した。

「鈴鹿さんは妊娠したい。美香さんは恭平の子を誰かに産んで欲しい、恭平は美香さん以外の女性と性交したくない。こういうことよね？」

「そうね。それであつてるわ」

「まあ簡潔に言うとそうだよね」

「間違つてはいないが……」

改めてまとめられると酷い話だった。

「ということは、性交せずに鈴鹿さんに子供ができればいいわけよね。だったら体外受精すればいいのよ。安心して。私、産婦人科専門医の資格もあるのよ。アメリカのただだね」

「いや、そういうことじゃ……」

「それじゃ思い出にならないわ、ダメよ」

「ううん、私それでいい」

「ちよ、鈴鹿……?」

「どうせ恭平は私のことを抱いてくれないってわかってたから。だったらせめて子供だけでもほしいもん」

「それしかないのかしら……。でも妊娠したら外には行かせないわよ。私も一緒に恭平の子を育てたいもの」

「おい、美香……」

「美香さん……ごめん。ほんとはすごく嫌でしょ。わがまま言つてごめん」

「いいのよ。私が望んだことですもの」

「オーケー、決まりね。それじゃ必要なものをまとめてしましましょう。善は急げよね」

「わかったわ。この辺の産婦人科の病院を探してみしましょう」

「体外受精ができる設備がある病院だね」

まさかのミシエルのせいで美香と鈴鹿が結託してしまった。

俺の意見などまるつきり無視で話がどんどんと進んでいってしまう。

「他に希望している子にもこの方法を提案してみましようか」

「そうだね。あ、そういえば花乃が既に希望メンバー集めてるよ」

「さすがね。今夜にでも一度集まって話をしましょう」

美香と鈴鹿が結託したときの物事の進行スピードが、俺の理解の範疇を超えている。

「ていうか俺の人権とかそういうのは無視なのかよ……?」

「あら、なに言ってるの恭平? 女の子にモテモテでいいじゃない」

「そういう話じゃないだろ、これ」

「仕方がないわよ。いい男というのはモテるものなんだから」

そう言つてウインクをするミシエルに、大きなため息を吐いて答えた。

美香と鈴鹿が結託をした日から十日が過ぎた。

この十日間は、本当にいろいろなことがおきた。

まず、俺の子を産むことを希望した女性たちが全部で六人。

鈴鹿、珠子、友里、深冬、マキシーン、花乃ちゃん。

正直、花乃ちゃんとかマジで勘弁願いたい。義妹だろ、お前は。

というよりも俺をそんな目で見ている女性が思いのほか多くて少し引いている。

鈴鹿と珠子と友里はそんな雰囲気というかにおいがしていたから、なんとなく俺に気があるのではと思つていた。

自意識過剰じゃねえの、とセルフ突込みを入れて忘れていたが、まさか本当だとは思わなかった。

深冬も明穂経由で聞いていたけど、実際に希望するとは思わず驚いた。マキシーンと花乃ちゃんも本当に理解に苦しむ。

まあ確かに風呂場に全裸で突撃されたりもしたけど、そんな目で見られてるとは思わないだろ。

本当に、未だに納得はできていないけど、それが女性らの総意だと言われたら、不和が生じないように俺が折れなきやいけないんだよなあ。

俺は美香と夫婦生活がしたいんだよ。というか美香との子供が欲しいんだよ、俺は。そのことを美香に言ったらもの凄く悲しそうな顔で、悲痛な声で「ごめん」と言われてしまった。

しかも山口やミシエル、鈴鹿にまで「美香に謝れ」と言われてしまった。わけがわからなかったが、もの凄い剣幕で詰め寄られたから謝りはしたが……。あれは謎だった。

それから俺の感染したウイルスがどんなものか判明した。俺が最初に感染したウイルスは、きなこやシロなどの巨大動物が持っているものだった。

黒い狼に噛まれたときに感染したのではと言われた。

そのウイルスは人間が噛まれると狂犬病と同じく致死率百パーセントで、決して俺が

助かることは無いはずだった。

ちなみにそのウイルスは中国が食糧危機対策として開発していたものとミシエルが言っていた。

なぜ日本に入ってきているのかはわからないが、おそらくテロだったのではないかと推測されている。

これは暫定的に『Chinaウイルス』略してCウイルスと呼ぼう。

それでCウイルスに感染した俺は死ぬはずだったところをゾンビに噛まれて感染し  
てしまう。

これはアメリカで研究していた企業から漏れたらしいけど、わかりやすく『Zomb  
ieウイルス』略してZウイルスと名づけよう。

Zウイルスは俺の体にいるCウイルスごと俺を殺しにかかった。

そこにミシエルの作り出した『Zウイルスを低活性化させるワクチン』これは略さず  
にワクチンと呼ぶけど、それを打つことによりZウイルスが低活性化。

ここぞとばかりにCウイルスがZウイルスを取り込み力をつけだした。

Zウイルスもただ食われるだけではなく、長い時間をかけて食いつ食われつの殺し合  
いが発生した。

それが俺の寝ていた四ヶ月の間に体内で起きていたことではないか、というのがミ

シエルの推測だった。

ちなみに今の俺の体の中にはZウイルスもCウイルスもいなくなっており、新しいウイルスに変異したものが居座っているらしい。

これは『Kyouheiウイルス』略してKウイルスと呼ぶとのことだ。

そして美香に起きた変化だが、美香はKウイルスを持つ俺とのセックスにより既にKウイルスに感染していた。

Kウイルスはゾンビに噛まれるまでの数時間では美香の全身に回っておらず、Zウイルスとの戦いも五分五分だった。

Zウイルスが混入し、ワクチンを打たれKもZも不活性化し、またもやウイルスが変異。

『Micaウイルス』略してMウイルスになったとのこと。

これはミシエルの仮説だが、おそらくあっているんじゃないかと俺は思う。

Zウイルスは元々、『進化の止まった生物を進化させる』ことを目的としていたらしい。

だがそれは失敗に終わり、アメリカ本土は人と動物が凶暴化したモンスターに占拠されてしまったとのことだ。

空をセスナ機並みの鷹や梟が飛び、海を軍艦サイズのシャチや鮫が泳ぐ魔境へとアメ

リカ大陸は変化した。

陸上には車と同サイズのサソリやクモなどの昆虫や、バスと同じ長さの蛇が闊歩かつぽする。

人々は化物にとつてのただの餌になったことだろう。

まあ日本にも三階建てくらいあるヒグマとか、乗用車サイズの犬とかいるけど。

世界は本格的に終わりを迎えているらしい。

で、Mウイルスは美香からしか感染しないということもわかった。

市役所から山口が小池さんと斉藤を連れてきて、山口の血から感染させようとしたけどダメだった。

なんでも感染力が弱く、一度しか感染させられないとか。

詳しいことを説明されたが、専門用語だらけで頭のよくない俺にはちんぷんかんぷんだった。

美香の血にいるウイルスを培養したものをミシエルが小池さんと斉藤の二人に打つと、血反吐を撒き散らしながら絶命したときは本当に肝が冷えた。

すぐに二人の心臓が動き出したからよかつたものの、優良な自衛官を殺したとあつては罪悪感がとんでもないことになっていた。

小池さんと斉藤は上官には報告をせず、二人で市役所を拠点としながら人助けをして

まわると行つてしまつた。

菊間もこのときMウイルスに感染したが、小池さんたちの活動には参加せず変わらずこの拠点で暮らすと言つてくれた。

そして俺との間に子供を希望する女性たちは、俺と同じKウイルスに感染した。

ミシエル曰く、俺の精子で受精卵を感染させてしまつた場合、産まれてくる子供がどのような姿になるかわからない。

なので先に母体を感染させてしまい、Kウイルスにより変異をさせ適応させてしまえばいい、らしい。

そんな暴力的な解決手段でいいのかと思つたが、女性たちは全員乗り気だつた。

俺のような化物の姿になつてもいいのか、よく考えろと説得しても『よく考えた上の結論だ』と言われ、黙るしかなかつた。

さらにミシエルが悪乗りをし、いろいろな動物の遺伝子を取り込んでみようといふことになつた。

俺のウイルスはベースが狼だが、鹿やウサギ、猪や熊などの遺伝子を、Kウイルスのベース部分にしてみよう、となつてしまつた。

俺と美香、ミシエルとマキシオンで、わざと略奪者がいそうな場所を歩き、襲い掛かつてきた男などを捕らえて実験の材料にした。



材料は探せばいくらでもいる。

においや音で街の中を探せば、女を閉じ込めて集団で弄なぶっている奴らや、家族を人質に取り物資を探させる奴らなど、クズをわんさかで見つけることができた。

百貨店近くに住む生存者のうち、半数はクズかカスだったので実験に協力してもらうことに。

マンションの高層階に住む生存者達は、窓の外に俺たちが張り付いているとは思いいしないらしく、本性を見ることができていろいろと捗捗った。

材料が足りず米軍基地まで出向けば、これ幸いとばかりに男だけでなく女までもが襲い掛かってきた。

男女平等に材料になってもらい、実験はとても順調に進んだ。

実験材料は全部で三十八人。

材料たちの苦悶の叫び声を聞いても、特になにも感じなかった。

Kウイルスに適應する者は総じて健康状態がよく、たくさんの栄養を摂取できる環境にいた者たちだった。

栄養失調に陥る手前くらいに痩せていた男が二人、Kウイルスのアンブルを注射する際に絶命したことから間違いないだろう。

俺と同じように手足を切ったり折ったりしてみたが、変異した者が二十人中四人程度

だった理由は傷の具合だろうか。

千切れるほどに切り裂いても死んだし、骨を粉々に粉砕しても死んでいた。

指を折った程度じゃ変異は起きず、回復速度が速まるだけだった。

実験していく上で、全身を獣のように変異させた者がいた。

慎重に具合を見ながら体中を引き裂くと、二足歩行をする鹿が出来上がった。

実験が上手くいって適応した者は、生かしておいてもいいことは無いと全て処理した。

それでも心は動かず、自分はやはり化物に変わってしまったのだと実感した。

俺や美香と違って、変異していないミシエルとマキシーンが平然と材料の手足を破壊していたのは異常に感じた。

マッドとかサイコパスとか、そういった類の人間だったのだろうか？

それとなく見張っておこう。

女性たちを体外受精させるための設備は、産婦人科の病院で設備が整っているところを制圧し、そこを利用することになった。

百貨店から車で十五分の位置にその病院はある。

採卵、採精を行い、受精させたあとは培養液で三日ほど培養されたあと、子宮内の胚へと移植された。

現在、俺の子を腹に宿すのは、鈴鹿、深冬、友里、マキシーンの四人。

花乃ちゃんも珠子は既に受精を終わらせ培養中で、あとは胚に移植するだけのことだ。

正直、実感なんて無い。

俺は精子バンクに提供するドナーのようなものだ。

だが、それでも嬉しそうに笑う女性たちを見て、なにも思わないわけではない。

自責の念、罪悪感、良心の呵責、言い方は様々だが、俺は女性たちに対して、美香に対しても、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

美香には裏切ってしまったということ、女性たちには真摯しんしに向き合えていないということ、この二つがここ最近の俺の頭の中でずっとぐるぐると渦巻いている。

これが正解だったのか、俺はとんでもない過ちを犯したんじゃないのか、いくら考えても答えは出なかった。

鹿狩りをする予定だった内の三人が妊娠したため、急遽直美には明穂と二人で狩りをしてもらうことになった。

鈴鹿、マキシーン、深冬の三人は大丈夫だと言っていたが、美香とミシエルに反対され拠点で大人しくしている。

鹿の狩りにはシロに手伝ってもらっている。

仕留めた獲物の内臓と肉の一部を渡すことで、鹿の追い込みをやってくれたのだ。おかげでこの十日で既に三頭の鹿を仕留めることに成功している。

さらに、あのときのリベンジとばかりに猪も一頭仕留めている。

味のほうは、珠子の調理技術により臭みも消え肉質も柔らかくなり、まさに絶品と言えた。

ここ数日は腹いっぱい肉を食べて、とても満ち足りた気分だ。

たんぱく質をたくさん摂取しているおかげか、体つきがよりゴツゴツとして、一回りくらい筋肉が大きくなった。

化物の腕も太さを増しており、洋服選びがとても大変である。

直美たちの護衛には俺か美香か菊間がついていくようにしている。

いくら直美が銃を持っていても、明穂と二人だけで行かせるわけにはいかない。

拠点内の女性たちの安全を保障するのが、俺の役目なのだ。

「さて、行くか……」

武器庫から得物を持ち出し、正面玄関へと向かう。

今夜も変異体の狩りに出向く。

最近では百貨店のそばにまで現れるようになり、まったく気が抜けない。

少しでも数を減らそうと毎晩、俺と美香と山口と菊間の四人で手分けして変異体狩りをしている。

「それじゃあ皆、気をつけてね。危なくなったら逃げるか合図を送ること。いいわね？」

「オーケーだ」

「わかった」

「あいよ」

それぞれが得物を持ち上げ、軽く打ち合わず。

変異体は強力だが、皮膚や肉は通常のゾンビよりも少し硬い程度だ。

であるならば、銃や刃物が有効だと結論付いた。

銃は音が出てしまうので他の変異体を呼び寄せかねないと、それぞれが刃物を持ち歩くことになった。

俺の得物は刃渡り九四センチ、全長二一〇センチの鯨包丁<sup>くじら</sup>。

まるで薙刀だが、実際に鯨を解体しているのに使われているものだ。

以前、鯨の解体を美香と見に行ったことを思い出して港まで探索しに行くと、倉庫の一室に置いてあったので拝借した。

その港では他にも鮪包丁<sup>まぐろ</sup>があったので、そちらも拝借している。

刃渡り七八センチ、全長一〇三センチのその鮪包丁は、剣道五段の実力を持つ山口が

使うことになった。

俺には山口のようなスムーズな太刀筋など土台無理な話なので、化物じみた膂力で押し切るようにして使っている。

美香は、刃物などいらぬ拳さえあれば充分だ、みたいなことを言っていたが誰も反対しなかった。

美香の手足には鋼鉄で補強されているグローブとブーツが装着されている。

普通なら武器ではないが美香が使うと途端に凶器と化す。

あのバイク屋で手に入れたものを余程気に入ったのか、大事に修繕しながら使い続けている。

菊間は自前のゴツイサバイバルナイフを使っている。

なんでも近接格闘術というものに長けているらしく、長い得物だと逆に戦いにくいのだとか。

実際に組み手をして見たが、気がついたら床に転がされ首にナイフを当てられていた。

これが実戦ならなにも気がつかずに死んでいたことだろう。

自衛隊員に人外の膂力を与えてしまったら、とんでもないことになるということがわかった。

たぶん、今の小池さんとガチで殺し合いをしたところで文字通り秒殺される。

山口とも木刀と棒で試合を試合してみたが、少し動いたなと思った瞬間、頭がかち割れる強打を食らった。

おかげで頭が変異し、右耳が消えて頭から犬耳イヌミミが生えた。

音はよく聞こえるようになった。

双子など一部の女性連中は俺の耳を見て発狂していたが、怒りに燃えた美香が山口の繰り出す木刀を拳で叩き折り、マウント状態でしばらくボコボコにしていた。

自衛隊員の戦闘能力は恐ろしいが、それ以上に美香が怖かった。

俺以外の三人はなんらかの戦闘技術を持っているから変異体との近接戦闘が可能かもしれないが、俺には無理だ。

そのため俺の武器は鯨包丁のほかに、DIY投げ槍を数本用意してある。

投げ槍は水道管やガス管に使われる鉄管の先端を斜めに切り落としたものを使っている。

以前作った包丁をメタルラックの支柱の先端に取り付けたものは、包丁の刃が欠けたり折れたりしてしまうせいで使い物にならなかった。

ある程度折れたり曲がったりしてもいいような丈夫なものじゃないと、俺の人外の力じゃ使えないようだ。

ビルの屋上からおいを嗅ぎつつ、街を見渡す。

変異体ゾンビのにおいは独特で、普通のゾンビのように腐ったにおいはず、なんとなく香ばしいにおいがする。

肉の焦げるにおいと蒸発した汗のにおいを混ぜたようなにおいだ。

いいにおいではないが、変異体を探すのは楽だった。

どこかで変異体が食事らしく、香ばしいにおいと血のにおいが風に乗って漂ってきた。

そちらへ視線を向け目を凝らすと、マンションのベランダに生存者一人と、室内に変異体を一匹発見した。

ベランダの男は隠れているつもりのようなだが、変異体は既にその男に気がついているように見える。

室内の食事を終わらせたらゆっくり男を食う気なのだろう。

変異体は女型で、手足に鋭い突起をいくつも生やしており、折りたたまれた足が異様に長い。

まるでカエルかバツタのようだ。

ああいう機動性がありそうなタイプは、狭い室内で食事をしている今が狙い目だ。ビルの屋上を跳んで渡り、投げ槍で狙いやすい位置まで移動する。



鉄パイプで作った投げ槍は、俺が投げると一五〇メートルは飛ぶ。

一五〇メートルと言っても水平には飛ばないので、ある程度まで近づかなければならない。

変異体のいるマンションは四階なので、同じくらいの高さのビルの屋上へと降り立つ。

距離は40メートルほどで、これなら真っ直ぐ当てられそう。

持っていた鯨包丁を置き、投げ槍を持つ。

投げ槍の本数は五本。

命中率はそれほど高くないが、五本もあれば一発くらいは当たりそう。

ビルの端まで行き助走距離を稼ぐ。

投げ槍の石突部分を左手で持ち、中指の爪に鉄パイプの穴を引っ掛ける。

この投げ方をすると、普通に柄を掴んで投げるよりも速く遠くへ飛ばすことができるのだ。

変異体に気付かれた様子はない。

この距離での命中率は八〇パーセントといったところか。

毎日練習しているから自信はあるが、絶対外さないとはいえないのが俺らしい。

槍を頭の横まで持ち上げて構える。

ゆっくりと駆け出して助走をつけ、勢いに乗ったところで全身をしならせるようにして射出する。

鉄パイプの投げ槍は、『ヒュオオ』と甲高い音を鳴らしながら変異体へと一直線に飛んでいく。

変異体が体を起こし、音の発生源を確認しようとしたところで、胸に深々と突き刺さった。

……体を起こさないと外れていた可能性が高いが、まあ結果オーライといこう。

鯨包丁を持ち、ビルの上を跳んで渡り、ベランダに着地する。

ベランダに隠れていた男が俺を見て、「ぎゃあ」と叫び声を上げたが無視をする。

まだ変異体は死んではいないのだ。

胸に突き刺さったパイプからトクトクと血が溢れている。

心臓に刺さったか。

床を激しく転げまわっているので止めを刺すべく鯨包丁を振り上げる。

変異体が顔を上げて大きく裂けた口を威嚇をするかのように開くが、構わずにそのまま首を刎ね飛ばす。

返り血を浴びないように距離をとり、再びベランダへ戻る。

男は腰が抜けたのか、尻餅をついたまま逃げようと後ずさっている。

歳は四十代前半と行ったところか。

「おい」

「ひつ、な、な、なんですか……?」

「お前、どうしてここにいます? 集団生活が嫌になって逃げてきた口か?」

「え、あ、いえ、違います……」

「じゃあ市役所か駐屯地に送り届けてやろうか?」

「いえ……いえ、それには及びません……」

「そうか。じゃあちよつとどいててくれ」

「え、あ、はい」

変異体の血の勢いが弱くなったので室内へ入る。

そのまま変異体の足を持ち、ベランダへと引きずっていく。

「うぎゃあ!」

「どいてくれって」

「す、すみません!」

変異体をベランダの外へ投げ捨てる。

切り取った首も忘れずに放り投げる。

ついでに変異体の食い残しも一緒に放る。

「な、なにをしているのですか?」

「ん? ああ、このまま放置したら悪い病気が広がりそうだろう? 死体は全部燃やすことにしてんだ」

人でも化物でも死体は全て焼却だ。

大量の血は放置して凝固させるしかない。

「ここ、おたくの家?」

「いえ、たまたま逃げ込んだところですが……」

「そうか、じゃあ遠慮なく」

室内にあるマットレス、タンス、テーブルやイスや棚などを全て外へ放り投げる。

死体を燃やすには燃料が思ったよりも必要だ。

プラスチックなどの石油製品や木材で作られた家具などはいいい燃料である。

これだけじゃ足りないのです、室内の壁のボードを剥がして間柱まばしらをへし折ったり、フローリングを剥がしたり、ドアとドア枠を壊したりして外へと投げていく。

「火をつけたらしばらく離れられないけど、迷惑か?」

「いえ……。僕はここにいってもいいですか?」

「構わないが」

ベランダから飛び降りて燃やす場所を整えていく。

近くに燃えるものがなく上に電線が走っていない場所じゃないと、街全体が大火事になつてしまう。

道路の交差点の真ん中にマットレスを敷き、変異体を引きずっていきその上へ置く。あとは残骸などもマットレスの上に置き、キャンプファイアのごとく木を積み重ねて、ペットボトルに入れてあるガソリンを撒けば準備完了。

ライターで火をつけた新聞紙を投げ入れれば、ボウつと気化したガソリンへと引火した。

あとはじつくりと焼いていけばいい。

火事にならないように注意しつつ、バケツに水などを用意していると男がマンションから降りてきた。

「あの、ここに座つてもいいかな？」

「ああ、好きにしたらいいい」

俺の近くに腰を下ろした男が、轟々（ごうごう）と燃える悪趣味なキャンプファイアを見つめながら口を開いた。

「君は……理性があるんだね？」

「ん？ 理性？ ああ、化物に見えるよな。こんな見た目でも一応人間やつてるよ」

「いや、不躰なぶじけこと言ったね。助けてくれた人に言うことじゃなかった。申し訳ない」

「いいよ。そう思うのが普通だ」

男は少し困ったような顔で笑うと手を差し出してきた。

「吉岡俊一だよ。君は？」

「どうも。山下恭平だ」

俺の化物の手に触れると一瞬ビクリと体を揺らす。吉岡さんはしつかりと俺の手を握ってきた。

「今までいろいろと変化したゾンビを見てきたけど、君みたいな変化は見たことが無いよ。ああ、君がゾンビだってことじゃないからね。気を悪くしたのなら謝る」

「大丈夫だ、気にしてない。というかそんなにいろいろ見る機会があつて、よく今まで生きてこれたな」

「うん、まあそうだね。あんなに近くで見るのは今回が初めてだったんだ」

「食われてたやつは？ 仲間か？」

「違うよ。あれは敵だ。僕を捕まえに来たやつだよ」

吉岡さんの顔が憎悪に染まっていた。

少し気になるので話を聞いてみよう。

「あんた、こんなところでなにしてたんだ？ たまたま逃げ込んだって言ってたけど、ど

こから逃げてきたんだよ」

「……駅にコミュニティがあるのはわかるかい？」

「ああ、駅ビルか。宗教的なコミュニティができてるとは聞いていたけど」

「うん、僕はそこから逃げてきたんだ。僕はそこで、とてもおぞましいことをさせられていた」

「おぞましいこと？」

「うん、とてもおぞましいことさ……」

吉岡さんは顔を伏せ、なにかに耐えるように歯を食いしばっていた。

口に出すのも憚はばかられるようなことをしていたのか。

いったいなにをさせられていたのだろう。

「……都合がいいことを言っている自覚はあるけど、君にひとつ頼みがあるんだ。どうか聞いてくれないだろうか？」

「内容によるけどな」

「実は……」

吉岡さんの口からは、駅ビルの惨憺さんたんたる内情が飛び出した。